

博士論文

遠藤周作研究―「歴史小説」を視座として―

長濱拓磨

目次

序論

五

第一部

「歴史小説」への序章―「トポス」をめぐる「手記」―

一九

第一章

遠藤周作初期作品のエクリチュール―「手記」をめぐって―

二一

第二章

遠藤周作論―〈劇〉を生成するトポス―

四一

第三章

『黄色い人』論―逆説的な「恩寵の世界」の提示―

五九

第四章

『海と毒薬』論―「トポス」をめぐる「手記」―

七五

第二部

「歴史小説」―「切支丹物」の世界―

九七

第一章

「弱者」の形象―二つの系譜―

九九

第二章

遠藤文学における〈ペドロ岐部〉(二)―『留学』『沈黙』を中心として―

一一九

第三章

『沈黙』論―引用の織物―

一四八

第三部

「歴史小説」―「評伝」の世界―

一六三

第一章

遠藤文学における〈ペドロ岐部〉(二)―『メナム河の日本人』から『王国への道』まで―

一六五

第二章

『侍』論―フィクションの内実―

一九五

第三章

『侍』論―ベラスコの視点を中心として―

二一三

第四部	「歴史小説」―「歴史群像」の世界―	二二三
第一章	『女の一生』論―多層的な二項対立の世界―	二二五
第二章	「人間」を追求する歴史小説―『赤ひげ診療譚』と『王の挽歌』―	二五一
第三章	『王の挽歌』論―キリシタン文学の可能性―	二六九
第四章	遠藤文学におけるヘペドロ岐部(三)―『女』を中心として―	二八三
結論		三〇一
初出一覧		三三一
主要参考文献一覧		三三三

序論

一

遠藤周作は、一九二三（大正十二）年三月二十七日に東京で生れ、一九九六（平成八）年九月二十九日に亡くなった。戦争で青春を奪われた「戦中派」世代であり、戦争体験が反映された作品も多い。文学者としては一九四七（昭和二十二）年十二月に評論「神々と神と」（「四季」）を発表したところから始まり、一九九六（平成八）年に亡くなるまで小説・戯曲・随筆など様々な分野で幅広く活躍した。約五十年にわたる文学活動は戦後派文学の作家、椎名麟三、梅崎春生、武田泰淳、大岡昇平らが活躍した時代や「第三の新人」の作家、安岡章太郎、吉行淳之介、小島信夫、三浦朱門らが活躍した時代と重なる。文学史では「第三の新人」に数えられるが、戦後派作家とも密接な関係があり、「遅れて来た戦後派」と呼ばれることもある。遠藤文学は日本と西洋、日本人とキリスト教、深層心理、「第三のディメンション」としての魂の問題などを主題としており、思想性、宗教性の濃さから戦後派文学に共通するものがある。一方で「第三の新人」の作家たちから学んだという日常性と弱者の問題も孕んでおり、両方の文学の要素を持った作家だと言える。また、主題の多様さと同様、作品のジャンルも多種多様である。小説だけを取り上げてみても『沈黙』のような深刻な主題を持つ「純文学」から、『おバカさん』のような「軽小説」、「女の決闘」（初出…「オール読物」、一九六七・昭和四十二年八月号）のような「ユーモア小説」、「最後の殉教者」（初出…「別冊文芸春秋」、一九五九・昭和三十四年二月）のような「歴史小説」、「黒ん坊」（「サンデー毎日」、一九七〇・昭和四十五年六月二十一日〜翌年三月二十八日号）のような「時代小説」①まで実に多彩である。そのため先行研究では「純文学」と「軽小説」の二つに分けて論じられてきた。これはほぼ定説と言えよう。遠藤研究に大きな足跡を残した武田友寿も『沈黙』以後―遠藤周作の世界』（女子パウロ会、一

九八五・昭和六十年六月)の中で「純文学」と「軽小説」を中心にして(小説の分類・位置)、「作品の立体関係」と遠藤作品の詳細な分類を行い遠藤研究の土台を構築しているが、分類の柱となるのは「純文学」と「軽小説」であった。ただし、武田友寿が一九九一(平成三)年二月に亡くなったため、『深い河』(講談社、一九九三・平成五年六月)や『女』(講談社、一九九五・平成七年五月)などの作品を読む機会がなかったこと。同様に『遠藤周作歴史小説集』全七巻(講談社、一九九五・平成七年五月)一九九六・平成八年七月)を見る機会もなく「歴史小説」への視点が欠けていたこと。亡くなる前にエンターテイメント系の見直し②をはかられていたがこれも未完で終わったことなどいくつか課題が残されている。

そこで本稿では武田友寿の分類を踏まえつつ「歴史小説」という視点を導入することによって遠藤文学の見直しをはかりたい。つまり、これまで「純文学」と「軽小説」の二つの枠組みしかなかった遠藤文学を「歴史小説」という第三の枠組みを設定することで「純文学」作品の「歴史小説」としての側面や「軽小説」作品の文学的価値を再考する試みであるのだ。また、遠藤文学を「歴史小説」から見直すことによって文学史における遠藤周作の位置づけや近代文学における「キリシタン文学」の可能性などが明らかにすることも予想される。

二

最初に本稿で対象とする遠藤周作の「歴史小説」について考えたい。主な対象となるのは、「最後の殉教者」から『女』に至るまでの「歴史小説」である。遠藤の作家人生の大半を占める約三十六年に及ぶ長期間、様々な「歴史小説」が書き続けられていった。これらは拙稿③で論じたように、「切支丹物」「評伝」「歴史群像」の三つの時期に区分される。すなわち、「切支丹物」が「最後の殉教者」から「学生」(「新潮」、一九六九・昭和四十四年

十月号)まで、「評伝」が『黒ん坊』から「日本の聖女」(「新潮」、一九八〇・昭和五十五年二月号)まで、そして「歴史群像」が『女の一生(一部・キクの場合)』(「朝日新聞」、一九八〇・昭和五十五年十一月一日)から『女』までとなる。三つの時期は、それぞれ第一期(一九五九・昭和三十四年)一九六九・昭和四十四年)、第二期(一九七〇・昭和四十五年)一九八〇・昭和五十五年)、第三期(一九八〇・昭和五十五年)一九九四・平成六年)というように、おおよそ十年周期で区分される。遠藤の小説全体とも関わる一定の創作意識に基づく変化であったと言える。さらに、本稿では「歴史小説」への序章として初期作品における「手記」と「トポス」の問題も扱うこととする。第一に「手記」の問題がある。「手記」形式とは、書簡体、日記体、手記体という文体だけではなく、作品中に引用された手紙、日記、ノートも全て含むものとしてここでは考える。遠藤の初期作品では、例えば、最初に発表された「フランス・カトリック文学展望―ベルナノスと悪魔―」(「望樓」、一九四七・昭和二十二年七月・八月合併号)、「神々と神と」(「四季」、一九四七・昭和二十二年十二月号)やフランス留学中のエッセイである『フランスの大学生』などの評論が書簡体や日記体で描かれており、小説においても「アデンまで」、「白い人」、「黄色い人」における書簡体、『海と毒薬』『留学』『わたし』が「棄てた・女」における日記体、手記体などほとんどの作品が「手記」形式として分類される。このように初期作品で「手記」形式が重要な役割を担っていることは確かである。これらの作品群の「手記」には苛酷な現実や忘れ難い出来事を書き残しておきたいという強い願望が込められていて、歴史の中に埋もれていくことへの懸念も見られる。いわば、そうした歴史の風化作用への対抗意識こそ遠藤が「歴史小説」を生み出す原動力であったと考えられる。つまり、遠藤が「歴史小説」で目指した所は単なる歴史の再現ではなく歴史の中に埋もれていた人物に光を当て復活させることであつたのである。初期作品にはその手がかりとして「手記」形式が用いられた。

また、第二に「トポス」の問題がある。作品舞台への強いこだわりである。遠藤文学の主要な作品舞台を挙げ

ると次のようになる。

『アデンまで』のアデン（アラビア半島）、『白い人』『留学』『青い小さな葡萄』のリヨン（フランス）、『黄色い人』の仁川（兵庫県西宮市）、『海と毒薬』の世田谷と九州のF市（福岡市・九大医学部）、『わたしが・棄てた・女』の復活病院（静岡県御殿場市・神山復生病院）、『火山』の赤岳（鹿児島県・桜島）、『沈黙』のトモギ村（長崎市外海町など）と江戸切支丹屋敷（東京都文京区小日向）、『イエスの生涯』『キリストの誕生』『死海のほとり』のエルサレム（イスラエル）、『死海のほとり』『女の一生』第二部サチ子の場合』のアウシュビッツ収容所（ポーランド）、『メナム河の日本人』『王国への道―山田長政』のアユタヤ（タイ）、『ユリアとよぶ女』『鉄の首枷―小西行長伝』の朝鮮半島、『侍』の仙台・支倉村・ベルクルス（メキシコ）・スペイン・ローマ、『最後の殉教者』『女の一生』の浦上（長崎市）、『銃と十字架』『王の挽歌』の国東半島、白杵（大分県）と無鹿（宮崎県）、『男の一生』の長良川、『深い河』のクルトルハイム（上智大学）、リヨン（フランス）、ヴァーラーナーシイ（インド）。

以上である。これらの作品舞台は、登場人物が活躍する単なる舞台装置だけではなく、小説家の想像力を刺激して様々な人間の（劇）が生成されるトポスでもあるのだ。こうしたトポスの問題は、フランス留学や「第三の新人」たちとの交流によってより深められていくことになる。

このように初期作品がはらむ「手記」形式やトポスの問題は「歴史小説」だけではなく、遠藤文学全体に関わる重要な文学的課題を含んでいる。しかも、初期作品を「歴史小説」の序章として扱うことによって「歴史小説」は遠藤の作家生活全期間が対象となり、「歴史小説」を視座として遠藤文学全体の見直しが可能となるのだ。

対象となる「歴史小説」が確定した所で次に「歴史小説」の前提を考えたい。すなわち、遠藤周作が〈歴史〉と〈小説〉をどのように捉えていたのかということである。

まずは前者の〈歴史〉についてである。ただ単に〈歴史〉と言っても様々なレベルがあるので、便宜上体験、関心、趣味の三つのレベルに分けて考えていきたい。

第一に体験としての〈歴史〉。試みに遠藤周作の履歴に社会的な出来事を重ねていくと、天災や戦争が大きく関わっている。天災では遠藤が生まれた一九二三（大正十二）年九月に東京で発生した関東大震災、灘中の学生だった時の一九三八（昭和十三）年七月に発生した阪神大水害、そして同じ阪神間では遠藤が亡くなる前年の一九四五（平成七）年には阪神淡路大震災が発生して大きな被害が出た。いずれも簡単には見過ごせない体験であった。また、戦争と関わるのは、遠藤が三歳から十歳まで過ごした大連である。大連は日本が植民地経営を行った場所であり、隣接する地域には一九三二（昭和七）年満州国が建国されており、日中戦争の引き金となっていく。一九四一（昭和十六）年十二月には太平洋戦争が始まり、戦時体制が作られていく。遠藤が慶應義塾大学文学部予科に入学した一九四三（昭和十八）年には授業がほとんど行われず勤労動員や空襲の日々を過ごしている。一九四五（昭和二十）年八月、日本は終戦を迎えるが、戦争の傷跡は根深く残っていて、遠藤が戦後初の留学生としてフランスへ向った一九五〇（昭和二十五）年の時点でも、遠藤は途中のフィリピンなどで日本人に対する憎悪を目の当たりにしたり、フランス留学中も敗戦国の人間として差別待遇を受けたりもした。こうした戦争体験は『アデンまで』『白い人』『黄色い人』『海と毒薬』など初期の作品に色濃く反映している。

第二に関心としての〈歴史〉。遠藤の「歴史小説」が背景とするのは、一五四九年フランススコ・ザビエルのキリスト教伝来に始まり、一六三七年の島原の乱を経て明治初期の「浦上四番崩れ」に至るまでのいわゆるキリシタン時代に集中しており、遠藤の強い関心が窺える。キリシタン時代について遠藤は「最初に日本と西洋の文化が衝突した」きわめて激動の時代と見ていて、そこに遠藤文学の主題である日本と西洋、日本人とキリスト教の間

題を描き出すのに最適な時代としている。

そもそも遠藤がキリシタン時代に関心を持つようになったきっかけは、フランス留学時代にある。遠藤のフランス留学は日本宣教に関心を持ったフランスのカトリック教会の支援によって実現したのだが、そうしたフランスの教会側の大きな期待は遠藤にとって負担を感じるものであった。そこで自分と同じようにヨーロッパに留学した日本人を調べていく中で、ザビエルが派遣した最初の留学生ベルナルドや、天正遣欧使節、トマス荒木、ペドロ岐部などを知っていく。これらの留学生の中には、ヨーロッパで病に倒れた者や、日本へ戻り「華々しい殉教者」となった者、反対に信仰を棄てて背教者となった者もいた。中でも遠藤に関心を持ったのは、後者の信仰を棄てた弱者であった。彼等は背教者として教会の歴史から抹殺され、存在すら否定されている。遠藤はそうした弱者たちに自分の姿を重ね親近感を抱いたので。

第三に興味としての「歴史」。遠藤は最後の歴史小説『女』で繰り返し「歴史小説」への愛着を語っている④。そこには同時に「歴史」に対する深い愛着の気持ちも込められている。遠藤がそこまで「歴史」にこだわるようになったのは、『埋もれた古城』によると、家の近所に世田谷城があり、何気なく調べてみると、吉良上野介と関わる城であり、身近な所に意外な歴史が隠れていることに驚いたことからであるという。そもそも遠藤は「廃墟」に対する異常な関心を持っており、それが趣味としての「歴史」への関心と合致したのである。というのも、エッセイ「廃墟の眼」⑤の中に描かれているように、「廃墟」は黙々と存在し、その「眼」で多くの人間の人生を見つめて来たのであり、遠藤は実際に「廃墟」を訪れ、そこにたたずむことで多くの人が生きた痕跡を「廃墟の眼」を通じて感じることに喜びを覚えたからである。つまり、遠藤が「廃墟の眼」を通して見つめていたのはあくまでも人間の人生であったのである。すなわち、「歴史」への関心は、作家として人間の人生に深い関心を寄せていた証でもある。

次に後者の〈小説〉について考えたい。前述のように、遠藤の文学的出発はフランスのカトリック文学とりわけ『テレーズ・デスケルー』を知ったことにある。フランスのカトリック文学を学ぶために、大学の専攻も独文科から仏文科へ変更した。フランス留学の当初の目的もフランスのカトリック文学を研究することにあつた。そんな遠藤が持つ〈小説〉観がフランスのカトリック文学の圧倒的な影響を受けていることは想像に難くない。初期の評論では、カトリック文学について「神と悪魔、人間と社会、肉欲と霊の血みどろな闘い」⑥が繰り広げられる人間の〈劇〉であると定義づけている。これは遠藤の〈小説〉観そのものと呼ぶことが出来る。初期作品のみならず全ての小説は、この〈小説〉観にもとづき描かれたものであるからだ。

さらに、遠藤は日本でカトリック文学を追求する中で、「距離感」の問題に突き当たる。カトリックという伝統のない日本の風土の中で、カトリック文学を受容していくことの困難さである。例えば、堀辰雄は『テレーズ・デスケルー』の影響を受けて『菜穂子』という小説を書いているが、「失敗作」となっている。『テレーズ・デスケルー』の背景となっているカトリック文学の問題を理解できていないからである。このように、日本と西洋、日本人とキリスト教との間には大きな「距離感」の問題があり、遠藤は生涯この問題に取り組んでいたのである。ただそこにはいくつかの変遷が見られる。順に追っていくと前述の「歴史小説」の区分と重なる。

第一に、「歴史小説」への序章としての初期作品群は、カトリック文学にもとづく「神と悪魔、人間と社会、肉欲と霊の血みどろな闘い」が繰り広げられる人間の〈劇〉をいかに描くかが〈小説〉観の根本となっている。

第二に、「歴史小説」の第一期は、フランス留学がきっかけとなった日本人留学生への関心から、「切支丹時代の智識人」をテーマに上智大学のH・チースリク教授のもとで学びはじめた成果が作品へ反映していく。前述の

ように、遠藤は「切支丹時代」を「最初に日本と西洋の文化が衝突した」きわめて激動の時代と見ており、そこに日本と西洋、日本人とキリスト教の問題や、キリスト教をめぐる人間の〈劇〉を見つめていた。

第三に、「歴史小説」の第二期。『沈黙』以後、遠藤は何度もエルサレムを訪れ、『キリストの誕生』『イエスの生涯』『死海のほとり』と聖書研究、とくにイエス研究を進めていくが、特に『死海のほとり』が不評だったため、フィクションを描くことに自信を失い、事実の積み重ねである「評伝」を集中的に書いていく。中でも、ペドロ岐部、山田長政、小西行長、支倉常長など海外に勇躍した日本人たちを描きながら、彼らがあつた西洋などの異文化の壁やキリスト教をめぐる問題、「日本人にあつたキリスト教」をテーマとした。

第四に、「歴史小説」の第三期。『侍』の主人公、長谷倉は様々な組織の陰謀に翻弄され悲劇を迎えた人物であつたが、この辺りから日本と西洋、日本人とキリスト教だけではなく、組織と個人、父と子、無意識、老い、魂などの問題が浮上する。とりわけ、組織と個人の問題は、数多くの登場人物が蠢く「歴史群像」として描かれる。このように、人間の〈劇〉を描くという遠藤の〈小説〉観は、作家として成熟していく過程の中で様々な文学的課題を取りこみ重厚さを増していったのである。ただ、人間の〈劇〉という根本だけは揺るぎのないものであつた。

五

以上が「歴史小説」の前提としての遠藤の〈歴史〉観と〈小説〉観である。改めて見ると、「歴史小説」だけではなく、遠藤文学全般にも関わるものであることがわかる。しかも、これらの〈歴史〉観と〈小説〉観を持っている遠藤が「歴史小説」に関心を持つのは当然と言えるし、その「歴史小説」が遠藤文学において重要な役割を

果たすであろうことも容易に予想される。そこで、本稿ではこれらの前提を踏まえて遠藤文学における「歴史小説」を考察する。本稿の構成は左記のとおりである。

- 第一部 「歴史小説」への序章―「トポス」をめぐる「手記」―
- 第二部 「歴史小説」―「切支丹物」の世界―
- 第三部 「歴史小説」―「評伝」の世界―
- 第四部 「歴史小説」―「歴史群像」の世界―

遠藤文学を四つの時期に分けそれぞれを「歴史小説」との関わりで読み解いていく。第一部では「神々と神と」で評論家として出発した遠藤がフランス留学を経て「アデンまで」で作家としてデビューして「白い人」による芥川賞受賞、『海と毒薬』による毎日出版文化賞と新潮文学賞を受賞し作家としての地位を獲得していくまでの時期である。この時期にはほとんどの作品が評論であっても小説であっても、日記体や書簡体といった「手記」形式で書かれている。「手記」は「記録」としての要素があり、「記録」の積み重ねがやがて〈歴史〉に繋がることから「歴史小説」への序章と呼ぶことが出来る。さらに、「トポス」の問題もこの時期から見ることが出来る。フランス留学で学んだ〈悪〉、〈テレーズ〉、〈留学〉という「トポス」、「第三の新人」たちの影響を受けた〈弱者〉〈日常性〉という「トポス」、歴史趣味の出発である〈廃墟〉という「トポス」などの様々な問題はこの時期に形成されたと考えられる。「トポス」と「手記」の二つを中心に考察する。

第二部は、第一期（一九五九（昭和三十四）～一九六九（昭和四十四）年）に描かれた「歴史小説」を対象とする。この時期の大部分の作品は「切支丹物」⑦に該当する。木下柰太郎、芥川龍之介、長与善郎などが切り開いて来た切支丹文学の系譜に連なる作品と言えよう。この時期の代表作は言うまでもなくロドリゴ神父の棄教を描いた『沈黙』である。『沈黙』前後にあらわれた「弱者」の形象、『沈黙』における〈ペドロ岐部〉の意味、及び出典の問題など様々な角度から『沈黙』に迫っていく。あわせて新資料も提示する。

第三部は、第二期（一九七〇（昭和四十五）～一九八〇（昭和五十五）年）の「歴史小説」を対象とする。この時期の作品は『黒ん坊』を除くと、小西行長、ペドロ岐部、山田長政、支倉常長といったようにいずれも「切支丹時代」に海外渡航をした日本人の「評伝」となっている。というのも、遠藤は『死海のほとり』が不評に終り、小説に自信を失っており、一時期創作から離れていたという事情もあるからだ。さらに、『沈黙』から発展したテーマである「日本人とキリスト教」の問題があった。「切支丹時代」にキリスト教と関わった日本人の「評伝」を描くことで、その人生の痕跡を辿り日本人にとってキリスト教がどのような意味を持っているのかを問い直しているのである。とりわけ、山田長政と対照的な生き方をした（ペドロ岐部）と、慶長遣欧使節としてローマまで渡った支倉常長を主人公とした『侍』はこの時期の特徴がよく表れている。そのため『侍』は、作者自身が『沈黙』に次ぐ「第二期の総決算」⑧と呼んでいる。

第四部は、第三期（一九八〇（昭和五十五）～一九九四（平成六）年）の「歴史小説」が対象である。『女の一生（一部・キクの場合）』から最後の歴史小説『女』までが該当する。この時期のほとんどの作品が、主人公を軸として様々な登場人物が交差する、いわば「歴史群像」とも呼ぶべき様相を呈している。例えば、『女の一生（一部・キクの場合）』の場合も、幕末から明治にかけての浦上四番崩れを背景として、主人公のキクと従姉妹のミツ、清吉と熊蔵、プチジャン神父とフューレ神父、伊藤清左衛門と本藤舜太郎といったように常に対照的な人物が配置されており、歴史の中に生きた人々を生き生きと描き出している。さらに、『侍』と『深い河』をつなぐ要となる『王の挽歌』に注目し、山本周五郎『赤ひげ診療譚』と比較を試みたり、キリシタン文学という観点から考察する。そして最後の歴史小説『女』を中心に、遠藤文学におけるキー・パースンである（ペドロ岐部）の形象を山田右衛門作との対比である「弱者」と「強者」の問題を確認しておく。

このような流れで、「歴史小説」を通して遠藤文学全体の見直しを図る。前提として「歴史小説」が多様な遠藤文学の中の単なる一ジャンルとしてあるのではなく、全ての作品が「歴史小説」と関連するものとして考察する。

そして、これらの作業によって初期作品を「歴史小説」の序章として位置付けられるし、「歴史小説」の「切支丹物」―「評伝」―「歴史群像」という発展の方向性も把握することができる。さらには、遠藤文学の「歴史小説」が持つ「キリシタン文学」の可能性も明らかになるう。

注

① 遠藤周作は柴田錬三郎との対談で、『黒ん坊』のような時代小説を書いた」と語っている。

② 武田友寿「連載 第一回 狐狸庵先生の天使たち 軽小説の世界」(『世紀』、一九八九・平成元年三月)「連載 第二回 狐狸庵先生の天使たち 西方のピエロ」(『世紀』、一九八九・平成元年四月)。連載と銘打っているが作者の都合で二回に終わった。連載開始の第一回では三回目の遠藤周作論として気合も入っていたが、未完に終わったことは惜しまれる。

③ 拙稿「遠藤周作の「歴史小説」の一側面―松田毅一との関連をめぐって―」(『遠藤周作研究』第四号、二〇一
一・平成二十三年九月)

拙稿では初出の発表時期を元にした(表一)を収録してある。次のとおりである。

<p>第一期（一九五九〜一九六九）「切支丹物」</p> <p>「最後の殉教者」（「別冊文芸春秋」、一九五九・昭和三十四年二月）</p> <p>「その前日」（「新潮」、一九六三・昭和三十八年一月号）</p> <p>「雲仙」（「世界」、一九六五・昭和四十年一月号）</p> <p>『留学』（「群像」、一九六五・昭和四十年三月号）</p> <p>『沈黙』（新潮社、一九六六・昭和四十一年三月）</p> <p>〈戯曲〉『黄金の国』（「文芸」、一九六六・昭和四十一年五月号）</p> <p>「ユリアと呼ぶ女」（「文芸春秋」、一九六八・昭和四十三年二月号）</p> <p>「母なるもの」（「新潮」、一九六九・昭和四十四年一月）</p>	<p>第二期（一九七〇〜一九八〇）「評伝」</p> <p>『黒ん坊』（「サンデー毎日」、一九七〇・昭和四十五年六月二十一日〜翌年三月二十八日号）</p> <p>〈戯曲〉『メナム河の日本人』（新潮社、一九七三・昭和四十八年九月）</p> <p>『鉄の首枷 小西行長伝』（「歴史と人物」、一九七六・昭和五十一年一月号〜翌年一月号）</p> <p>『銃と十字架』（「中央公論」、一九七八・昭和五十三年一月号〜十二月号）</p> <p>『王国への道―山田長政』（「太陽」、一九七九・昭和五十四年七月〜翌々年二月号）</p> <p>『侍』（新潮社、一九八〇・昭和五十五年四月）</p>	<p>第三期（一九八〇〜一九九六）「歴史群像」</p> <p>『女の一生（一部・キクの場合）』（「朝日新聞」、一九八〇・昭和五十五年十一月一日〜一九八一・昭和五十六年七月一日）</p> <p>『宿敵（上・下）』（角川書店、一九八五・昭和六十年十二月）</p> <p>『二条城の決闘』（「小説新潮」一九八七・昭和六十二年九月号）</p>
---	---	---

『反逆』（「読売新聞」、一九八八・昭和六十三年一月～一九八九・昭和六十四・平成元年二月）
 『決戦の時』（「大阪新聞他」、一九八九・昭和六十四・平成元年二月）
 『王の挽歌』（「小説新潮」一九九〇・平成二年二月号～一九九二・平成四年二月号）
 『男の一生』（「日本経済新聞」一九九〇・平成二年九月一日～一九九一・平成三年九月十三日）
 『無鹿』（「別冊文芸春秋」一九九一・平成三年春号、四月）
 『女』（「朝日新聞」一九九四・平成六年一月一日～十月三十日）

『遠藤周作歴史小説集』全七巻（講談社）

『遠藤周作歴史小説集 1 女の一生―キクの場合』（講談社、一九九六・平成八年一月）
 『遠藤周作歴史小説集 2 宿敵』（講談社、一九九五・平成七年十一月）
 『遠藤周作歴史小説集 3 反逆』（講談社、一九九五・平成七年九月）
 『遠藤周作歴史小説集 4 決戦の時』（講談社、一九九六・平成八年三月）
 『遠藤周作歴史小説集 5 男の一生』（講談社、一九九六・平成八年五月）
 『遠藤周作歴史小説集 6 王の挽歌』（講談社、一九九六・平成八年七月）
 『遠藤周作歴史小説集 7 女』（講談社、一九九五・平成七年五月）

④ 『女』の冒頭と結末は以下のとおりである。

「歴史小説を書くのは好きだ。／それは私自身の趣味と一致するからである。」

（傍線部引用者／「信長の子供たち」／『女』）

「思えば歴史小説を書ける私は幸福な人間である。それぞれの、実在した人間の生涯を実際に歩き、たず

ね、彼女等の人生を想いうかべられるからだ。」

(傍線部引用者／「終曲」／『女』)

⑤ 遠藤周作「廢墟の眼」／『狐狸庵閑話』桃源社、一九六五・昭和四十年七月)

⑥ 遠藤周作「白人の小説について」(『毎日新聞』、一九五五・昭和三十年七月二十八日)

⑦ 「わが切支丹勉強の師―松田毅一教授のこと―」／遠藤周作『ぐうたら漫談集』(角川文庫、一九七八・昭和五十二年七月)の中で次のように述べている。

『沈黙』や『黄金の国』という私の切支丹物の作品を執筆準備している時、どんなに教えられたかわからない。

(傍線部引用者)

⑧ 遠藤周作・佐藤泰正『人生の同伴者』(春秋社、一九九一・平成三年十一月)

第一部 「歴史小説」への序章―「トポス」をめぐる「手記」―

第一章 遠藤周作初期作品のエクリチュール―「手記」をめぐる―

一、問題の所在

遠藤周作の初期作品を俯瞰する時、そこには書く行為⇨エクリチュールへの執着とも執念ともいえるものが浮かび上がる。例えば、小説の方法としても書簡体や日記体などの手記形式が採られ、主人公が厳しい現実に対峙しつつ手記を書き綴ることに執念を燃やしている。また、ストーリーを動かす重要な役割を果たしているのも手紙、日記、ノートといった「手記」①であり、書かれたもの⇨エクリチュールに対する執着の強さを物語っている。いずれにしても、遠藤周作の初期作品における主人公には「手記」を書くことで厳しい現実を書き残しておくたいという願望や、書き残された「手記」に対する強い執着があり、そこに作家として書くことの意味を問い続けた遠藤周作の「手記」への執念を見る事ができるのだ。だが、従来の先行研究においては「手記」の重要性については見過ごされて来た。そこで本稿では、遠藤周作の初期作品の中で「手記」がどのような役割を果たしているのか、あるいは「手記」の意味について考察して、遠藤周作のエクリチュールについて見直しをはかりたい。

二、『青い小さな葡萄』のエクリチュール

遠藤周作の初期作品における「手記」の意味を考察する際に、欠かすことのできないのが、最初の長編小説『青い小さな葡萄』（初出…「文学界」一九五六・昭和三十一年一〜六月号）である。この作品は、遠藤周作がフラン

ス留学時代（一九五〇～一九五三）に抗独運動のレジスタンスがドイツ軍の協力者たちを虐殺した事件の現場である（フオンスの井戸）を取材した体験②を材源としたものである。この時期には遠藤周作が仏文学者③ではなく作家として生きる事を強く意識しており、「作家・遠藤周作」の出発点を物語るものとなっている。しかも、主人公伊原が「手記」を残す意味を発見することが作品の主題であり、そこに遠藤周作の「手記」に対する執念がストリートに反映されている。まずはここから検討してみたい。

この小説で、重要な役割を果たす「手記」は主人公伊原の「創作ノート」である。伊原はフランス・リヨンにいる日本人留学生であり、「創作ノート」に何かを書きこむことに熱中している人物として登場する。

「今晚は、デデ。どうせここだろうと思ったよ。おや、この店はいつから黄色人をやとったんだい」

やせた小さな男はあぶなげな足どりで階段をおり、バーテン台の前にすわりこみ、なにかをノートに書きこんでいた黄色人のボーイをじろじろとみつめた。

（傍線部引用者／『青い小さな葡萄』第一章）

「あんた、印度支那から来たのかい」とデデは「労働者週報」をゆっくりポケットに入れながら言った。「俺はサイゴンに兵隊で行ったことがあるよ」

「そうですか」ボーイはいささか迷惑そうな顔つきで答えた。彼は下をむいたまま、なにかをノートに書きつけていたのである。

（傍線部引用者／『青い小さな葡萄』第一章）

伊原は学費稼ぎのためリヨンの駅前の小さな飲屋、「コサク亭」で徹夜のアルバイトをしている。その仕事の合間のわずかな時間も惜しんで熱心になにかをノートに書きこんでいる。伊原はこの（青いちいさなノート）④にフランス語で「ある小説方法」と題して自ら書こうとする小説のプランを練っているのだ。そして、その伊原

のプランを具体化するのに格好のモデルとして登場するのがハンツであった。ハンツは一九四四年ヴァランスでフランス人女性スザンヌ・パストルから青い小さな葡萄をもらった戦時中の記憶が忘れ難く、スザンヌに会うためリヨンに来て偶然伊原と出会う。最初伊原はハンツを小説のモデルとして考えつつ距離をおいて接してきたが、次第に国境を越えた人間関係の象徴として「青い小さな葡萄」を求めるハンツの情熱に促され懐疑的ながらもスザンヌ探しを手伝うようになる。そして最後に、ハンツと伊原は「モンドンの手記」を手掛かりとしてスザンヌたち六人がドイツ軍の協力者としてヘフォンスの井戸で虐殺された記録を見つけ、悪の行われた現場であるヘフォンスの井戸にたどりつく。こうしてハンツと過した四日間を通して伊原は次のような決意を持つに至る。

一人になった伊原はふたたび雑踏のなかにはいつていった。ながい苦しかった四日間のうち、彼は同じような群衆に幾度かぶつかった。粉雪のふるパール街を傘を斜めにさしてくれたびれた表情で歩いていく人間の河。あの時、俺はその河に青い葡萄を求めるむなしさを感じていた。だが青い葡萄とは何処かにあるものではない。さがすものではない。創るものなのだろう。ハンツには逃れていく教会がある。が教会のない俺は創るしかないのだ。

（何によって創るのだ）と彼は自分の小さなノートを思いだしながら考えた。（書くことか、その時、書くこととはあのフォンスの闇の井戸も、もはや犯すことのできない一つの世界を創ることだろう。それはスザンヌやすべての人間の運命に反抗するただ一つの路なのかもしれない）

（傍線部引用者／『青い小さな葡萄』第三章）

フランソワ・モーリヤック『テレーズ・デスケルー』で主人公のテレーズが最後に（人間の森）を求めてパリへと向かったように伊原はフランスの（人間の河）⑤の中に（青い小さな葡萄）、すなわち国境を越えた人間関係を求めてきた。だが、フランスに来て二年、伊原は敗戦国である日本人としてまた、黄色人としてフランス人からは差別を受けて来た。（青い小さな葡萄）を探すことはできなかつたのである。しかも、ハンツのように逃れる

教会は伊原にはない。そこで、伊原が考えたのは、書くことで「へ一つの世界」を創ることだった。「へ一つの世界」の創造が、人間の罪や悪の象徴である「フォンスの闇の井戸」や人間の運命に反抗する唯一の路だというのだ。ここに、遠藤周作が作品を創造する意味を見ることが出来る。

以上のように『青い小さな葡萄』は、書く行為者であった日本人留学生伊原が、ハンツとの出会いや、「フォンスの闇の井戸」との対面を通して書くことの意味、すなわち「へ一つの世界」の創造を発見していく物語でもあった。また、伊原が書くことの意味を発見するために、「青いちいさなノート」や「モンドンの手記」などの「手記」が必要であった。「手記」の重要性は明らかであろう。ここに作家として書く行為に深い自覚をもった遠藤周作の出発点を見ることが出来る。

三、初期評論中の書簡体

次に、『青い小さな葡萄』を生み出した原点として初期評論⑥における「手記」について考察する。遠藤周作が初期評論で対象とした大部分はフランスのカトリック文学であり、文体も通常の評論で用いられる客観的なものである。フランス留学の当初の目的が仏文学者になることだったことから考えても当然のことと言えよう。だが特筆すべきは、書簡体や日記体などの主観的な「手記」がいくつかあることである。これらの「手記」の評論は文学的な要素が多く、遠藤周作が後に作家へと転身する準備段階とも呼びうるものである。

そこで書簡体の評論から見たい。書簡体の体裁を採った初期評論は、「フランス・カトリック文学展望―ベルナノスと悪魔―」（「望樓」一九四七・昭和二十二年七月・八月合併号）、「神々と神と」（「四季」一九四七・昭和二十二年十二月号）、「フランソワ・モウリヤック」（「近代文学」一九五〇・昭和二十五年一月号）、「テレーズの影を

追って―武田泰淳氏に―（「三田文学」一九五二・昭和二十七年一月号）などがある。それほど数は多くないが、どれも重要な評論である。このうち、「フランス・カトリック文学展望―ベルナノスと悪魔―」と「神々と神と」の二作は遠藤周作の文学活動の出発点の秘密を探る上で極めて重要な作品であり、他の評論とは別に検討する必要がある。

「フランス・カトリック文学展望―ベルナノスと悪魔―」と「神々と神と」は、遠藤周作が慶応義塾大学仏文科の学生時代に書かれたごく初期のものである。遠藤周作の文学活動はこの時から始まったわけだが、当時の遠藤周作に多大な影響を与えていたのは堀辰雄であった。遠藤周作は、一九四三（昭和十八）年、慶応義塾大学文学部予科に入学した年に、カトリック学生寮の舎監だった吉満吉彦の紹介で堀辰雄を知り、堀辰雄から「作家」としての生き方を学んだ。その意味で書簡体という創作方法も、師である堀辰雄から学んだものと言える。例えば、「フランス・カトリック文学展望―ベルナノスと悪魔―」と堀辰雄『美しい村』（野田書房、一九三四・昭和九年四月）の冒頭文を比較してみると類似性は明らかである。

N様

二週間ほど前から此の高原に来ております。朝夕は乳色の霧が肌を痺らす程冷えますが、午前、その霧が日の光に薔薇色に溶けると、冷い程青く澄んだ日本アルプスの山波が遠くに拡がります。僕の今いる古宿と云う村は、木蓮に似た辛夷の花や連翹の黄色い花で、すっかり埋っています。そんな花なんぞ、うつけた様に見ていると、僕なんぞ一日怠けほうけてしまう。毎日そうやって、林の中に本を持って行っては、辛夷の白い葩を透して冷い青空を見ていると、貴方の大好きな、フランシス・ジヤムの可憐な詩がつい唇を衝いて出てしまうのです：

（傍線部引用者／「フランス・カトリック文学展望―ベルナノスと悪魔―」／「望樓」一九四七・昭和二十二年七・八月合併号）

六月十日 K：村にて

御無沙汰をいたしました。今月の初めから僕は当地に滞在して居ります。前からよく僕は、こんな初夏に、一度、この高原の村に来て見たいものと言っていました。やっと今度、その宿望がかなった訣です。まだ誰も来ていないので、淋しいことはそりあ淋しいけれど、毎日、気持のよい朝夕を送っています。

（傍線部引用者／『美しい村』／野田書房、一九三四・昭和九年四月）

「フランス・カトリック文学展望―ベルナノスと悪魔―」では（N様）すなわち、カトリック詩人野村英夫宛の手紙になっている。野村英夫はいまでもなく堀辰雄の弟子であり、遠藤周作にとって兄弟子にあたる。そして、語り手が滞在しているのが軽井沢である。この堀辰雄と縁の深い場所で、フランス・カトリック文学に思いを寄せているという形式である。『美しい村』は宛先を書いていないが、後に婚約者となった矢野綾子に宛てた堀辰雄の手紙がもととなっている。滞在先も（K：村）、すなわち軽井沢であった。軽井沢の風景や読んだ本の話、書こうとする小説の構想などが音楽的なリズムを持って書き綴られている。形式の上での類似性は明らかである。さらに、「フランス・カトリック文学展望―ベルナノスと悪魔―」の中心となるのは日本人としてフランス・カトリック文学を受容する困難さであり、最後の部分では「僕たちの汎神的な血に抵抗し、挑むあのカトリシズムの世界を探究する決意がない限り」、「近代フランス文学の巨峰は自己流な安易な解釈の下に読了されます」と日本におけるカトリック文学の安易な受容を批判している。ここでいう汎神論的風土を負った日本人としてフランス・カトリック文学をいかに受容するかという課題は、遠藤周作が堀辰雄から問いかけられたものであり、のちの「堀辰雄論覚書」（「高原」一九四八・昭和二十三年三、七、十月号）における論旨、すなわち堀辰雄が（汎神的な血）に（抵抗）しないで（カトリシズムの世界）を深く（探究）せず、（自己流な安易な解釈の下に）受容しているという批判と通ずるものである。こうした（汎神的な血）と一神論のキリスト教の相克の問題を深めた

のが「神々と神と」である。これも冒頭文を引用したい。

H・N様

今年のクリスマスは雪が降りませんでしたね。夜の弥撒に行けなかった僕は、赤いクリスマス蠟燭を点して独りで弥撒曲をレコードで聴いたり、以前堀先生から頂いたリュツエラの *Trost im Sterben* のアンジェリコの絵、なんぞを見て楽しんでいました。その翌朝近くの教会にぶらりと行って帰りましたら、貴方のあの『瞬く星』という美しい詩が、お手紙と一緒に参りました。あの詩をここに写させて頂けましょうか。

(傍線部引用者／「神々と神と」／「四季」一九四七・昭和二十二年十二月号)

ここだけ見ても「フランス・カトリック文学展望―ベルナノスと悪魔―」との共通性は明らかであろう。まず、〈H・N様〉と野村英夫宛の書簡となっている点。カトリック最大の祝祭であるクリスマス話を話題にしている点。〈堀先生〉にもらった絵を話題にしている点などである。そしてこの後では、堀辰雄の〈沓掛の山の奥の山荘〉に遠藤周作が泊ったときに考えた「英雄主義」と「汎神論」と「一神論」の問題を提示して、リルケ『ドノイの悲歌』と堀辰雄『花あしび』を通して、〈汎神的な血〉を持った日本人が〈カトリシズムの世界〉にどうやって入っていきえるのかという課題について論じている。結論としては、〈僕はただ、この手紙で「神の世界」への旅には、「神々の世界」に誘惑させられ苦しませられる事なしには行けないことを書きつけたかったのです。〉と述べて、内なる〈汎神的な血〉と戦いながら〈カトリシズムの世界〉へ入る決意を再確認し、同じカトリックである野村英夫にその苦しみの理解を求めている。

以上のように、「フランス・カトリック文学展望―ベルナノスと悪魔―」と「神々と神と」は、野村英夫宛の手紙という「手記」の体裁を採ることで、〈汎神的な血〉を持った日本人としてどのように〈カトリシズムの世界〉に入っていくのかという共通の課題を読者に提示し、堀辰雄との深い因縁を匂わせつつ、自己の課題に迫っている。と同時に同じカトリックの信徒である野村英夫に同じ悩みを抱える者として共感を求める手紙ともなっている。

いるのだ。

ちなみに、一九四九（昭和二十四）年野村英夫が亡くなった時に、遠藤周作は病臥中の堀辰雄に協力を求められ、野村英夫の遺稿の整理と「野村英夫詩集」の編集に携わっている。堀辰雄、野村英夫、遠藤周作の三者の關係の深さを物語るエピソードである。ここに師である堀辰雄と、先輩である野村英夫に深い影響を受けた、遠藤周作の文学活動の出発点を見て取れる。

四、「作家の日記」

次に、遠藤周作が初期評論の時期に書いた日記について考えたい。日記体もまた堀辰雄の得意とする方法だった。『風立ちぬ』の最終章「死のかげの谷」では、婚約者の死という重大な出来事を一年後の日記という体裁を通して、回想している。また『菜穂子』の先行作品「物語の女」では、菜穂子の母が娘に残した遺書としての日記となっている。直接娘に語るのが難しい事実を日記として書き残したのである。既に多くの指摘があるように、これらの小説にはモーリヤックの影響が見られる。そこで、モーリヤックの小説技術について書かれた次の堀辰雄のエッセイを手掛かりに考えたい。

モオリアックは、小説の技術といふものは、さういふ現実の「再ルプロデュクション現」ではなくして、現実の「置トランスき換ポジション」であり、その結果人生がとつたのとは反対の方向をとるのも好いとしてゐる。

（堀辰雄「ヴェランダにて」／「新潮」、一九三六・昭和十一年六月号）

ここで堀辰雄はモーリヤックの小説の技術を、現実の「再現」ではなく現実の「置き換へ」、現実が単なる出

発点)にすぎないと捉えている。この点は重要である。モーリヤックの影響が指摘される『菜穂子』にしても、『風立ちぬ』にしても堀辰雄の作品は、自己の体験をもとにしつつも、フィクションの要素が多分に含まれ、どこまでが作者の体験か虚構なのか判断は難しい。そうした堀辰雄の創作はモーリヤックに学んだものであるからだ。遠藤周作もまたモーリヤックに大きな影響を受けた作家であった。ということは、遠藤周作もまた(現実単なる出発点)にすぎないという認識をもって創作に取り組んだことは十分に考えられる。ただし、(現実単なる出発点)ということは裏返せば「出発としての現実」がなければ、小説を創造することは困難ということであり、ここに日記を書く意味が生まれる。

そんな遠藤周作にとってフランス留学というのは貴重な体験というだけではなく、後に小説を描くための素材の宝庫だったと言える。実際に日記体として発表された評論は、留学前の「此の二者のうち、日記抄的芸時評・1」(『三田文学』一九四八・昭和二十三年十月号)しかないが、フランス留学時の日記として「ボルドオ」(『群像』一九五二・昭和二十七年八月号)、「滞仏日記」(一九五三・昭和二十八年七、八、九、十、十二月号)、『フランスの大学生』(早川書房)所収の「春―日記から」「夏―アルプスの陽の下で」など⑦があり、後に一九五〇・昭和二十五年六月四日から一九五二・昭和二十七年八月二六日までの日記をまとめた『作家の日記』(作品社、一九八〇・昭和五十五年九月)や、遠藤周作の死後に発表された『作家の日記』未収録の一九五二・昭和二十七年九月から一九五三・昭和二十八年一月の日記を収めた『ルーアンの丘』(PHP研究所、一九九八・平成十年)を含めるとフランス留学時代の全容が見えてくる。ここまで克明な日記を残しているのは、真面目な性格もあるうがフランス留学という貴重な体験⑧を記録しておきたいという執念からである。また、これらの日記をもとに多くのエッセイや小説が生まれていることから見ても、作家の文章修業の一つとして日記を書き残したとも考えられる。

また、遠藤周作は「アデンまで」(『三田文学』、一九五四・昭和二十九年十一月号)で作家としてデビューした

後も日記を書くことにこだわり続けた。とりわけ日記に残すことで「カトリック作家」としての自己の生を生涯追求し続けたと言えよう。そのため、歴大なエッセイの中には「作家の日記」⑨として発表されたものが多い。晩年には永井荷風の『断腸亭日乗』やジュリアン・グリーンの日記を枕頭の書として「作家の日記」に強い関心を抱いていた。先輩作家の日記を読むことで自らの作家としての人生を顧みていたのである。さらには、作品の舞台裏である「取材ノート」や「自註」⑩なども数多く残されている。仕事場も含めて作家としての生き方や、書く行為にこだわり続けた証拠と言えよう。

五、初期小説のエクリチュール

遠藤周作の〈第一期〉⑪の小説は「アデンまで」に始まり、『沈黙』で一区切りがつけられる。その中で、多く散見されるのは「手記」である。例えば、〈拷問者の歴史〉を記録した手記である「白い人」(『近代文学』一九五五・昭和三十年五、六月号)や、「海と毒薬」(『文学界』一九五七・昭和三十二年六、八、十月号)における(上田看護婦の手記)と(戸田の手記)、「パロディ」(『群像』一九五七・昭和三十二年十月号)における妻の不満を述べる夫の手記、「わたしが・棄てた・女」(『主婦の友』一九六三・昭和三十八年一〜十二月号)における(吉岡の手記)などがある。他にも、書簡体の小説として、「コウリツジ館」(『新潮』一九五五・昭和三十年十月号)、「黄色い人」(『群像』一九五五・昭和三十年十一月号)、「月光のドミナ」(『別冊文芸春秋』一九五七・昭和三十年十月)、「従軍司祭」(『世界』一九五九・昭和三十四年九月号)などがある。また、書簡体ではないが、「おバカさん」(『朝日新聞夕刊』一九五九・昭和三十四年三月二十六日〜八月十五日)、「わたしが・棄てた・女」(『主婦の友』一九六三・昭和三十八年一〜十二月号)といった軽小説では、手紙が登場人物の行動を左右する重要な

役割を果たしている。さらに、日記体としては、「アデンまで」と、「黄色い人」における（デュランの日記）、「青い小さな葡萄」における（モンドンの日記）などがある。「青い小さな葡萄」では伊原の（青い小さいなノート）が重要な役割を果たしていることは先に述べたとおりである。

以上のように「手記」の重要性は明らかであるが、とりわけ「アデンまで」「白い人」「黄色い人」をとりあげ「手記」の意味を考えたい。ここに遠藤周作の小説の出発点があるからだ。

まず「アデンまで」は初めて発表された小説である。三年の留学を終え船に乗って、フランスを離れる日本人チバの現在と過去が錯綜する物語である。作品内の現在は、チバが出航の前日、マルセイユに到着し、恋人だったマギイに別れを告げ船に乗り、ギリシャ、スエズ運河を通りアデンへと向かう数日間の出来事である。この船の同じ四等船室に乗っていた病気の黒人女性は医者や修道女から露骨な差別を受けた末に亡くなり、アデン到着前のスエズ運河を航行中の船上で埋葬される、その死の意味を（アフリカとアラビヤにはさまれた細長い紅海）で考えるとところで終わっているのだが、作品内の現在には繰り返しフランスで体験したチバの過去が挿入される。フランスでのチバの思い出はマギイというフランス人女性との交際に集約される。人種の壁を越えてチバと結ばれたいと夢見るマギイに対して、チバは周囲の日本人に対する差別や黒人差別の現実や、自身が持つ白人に対するコンプレックスを克服できず、マギイと別れることを決意するに至る。

チバのフランスでの思い出は、ヨーロッパの「白い世界」とアフリカ、アラビヤの境目であるスエズ運河に船が入ったことで、眼の前の「黄色い」砂漠や死に行く黒人女性によって相対化される。この時に書いているのが日記である。

暑さはひどく耐えがたい。そして風景は何も存在しない。この五時間のあいだ（俺がこの日記を書いているのは午後三時、船艙の窓から、もっともきびしい午後のアフリカの陽がさしこんでいる）眼にうつるものは、運河をはさんだ、黄褐色の砂漠だけである。

(傍線部引用者／「アデンまで」)

この日記の内容がチバの過去なのか船に乗っている現在なのか判別はつきにくい。だが、日記を書いている場所が「白い世界」から離れつつあるスエズ運河である点が重要である。「歴史も時間も善も悪もない黄色い砂漠の広がる世界にいるからこそ、「白い世界」を相対化できたのである。日記はそうした思考作業を促すキー・アイテムでもあるのだ。従来の先行研究では、このような日記の役割については見過ごされてきた⑫が、見直されるべきであろう。もちろん、「アデンまで」の語りを見るときに日記に書き綴った内容であるのか、日記を書く作業を通して語り手が過去や現在に思いを巡らせているのか判別がつきにくいという作品の完成度の問題も合わせて検討が必要である。

このように「アデンまで」には過去と現在が錯綜して読みづらいつい問題点があつたが、次作の「白い人」では、過去と現在の区別もはっきりとしており、「記録」という語り手の視点も鮮明に表れており、「アデンまで」より成長の跡が見える。冒頭文を見たい。

一九四二年、一月二十八日、この記録をしたためておく。連合軍はすでにヴァランスに迫っているから、早くて明日か明後日にはリヨン市に到着するだろう。敗北がもう決定的であることは、ナチ自身が一番よく知っている。

今も、このペンをはしらせている私の部屋の窓硝子が烈しく震えている。抗戦の砲声ではない。ナチがみずから爆破したローヌ河橋梁の炸裂音である。

(傍線部引用者／「白い人」)

作品の現在は、(一九四二年、一月二十八日)の夜、ナチの敗北が決定的となり、敗走するナチが破壊の限りを尽くしている時である。この混乱の中にあつて、(独逸秘密警察に協力した裏切者)として、(マキやその味方を裁き、拷問し、虐待した、あの「松の実町」事件の一味)として近いうちに糾弾される運命を待っている(私)

は、〈記録〉を残そうとして書く行為に没頭しているのだ。そうして〈私〉という〈拷問者の歴史〉が〈記録〉によって明らかにされていく。

〈私〉の〈拷問者の歴史〉は、幼年時代、女中のイボンヌが犬を虐待した時の白い腿の記憶から始まる。一九三〇年代のリヨンにおけるプロテスタントの家庭の厳格な教育を独逸人の母から受けた〈私〉ではあったが、母の願いとは反対に〈私〉の裡なる〈拷問者〉は大きくなった。中学時代には父と一緒に行ったアラビヤのアデンで、アラビヤの少年を被虐するという〈拷問者〉として決定的な体験をした。リヨン大学ではマリー・テレーズとジャックの二人に運命的な出会いをする。〈私〉にキリスト教を強制するジャックに反撃するため〈私〉は聖書を逆さまに読む事を思いつき、マリー・テレーズを誘惑し、裏切り者に仕立て上げた。一九四〇年二月、母の死によって遺産と自由を手に入れた〈私〉は、ナチ軍の侵攻に伴い独逸秘密警察の通訳、事務員となり、自ら裏切者となる道を選んだ。この時にはジャックとマリー・テレーズは修道院へ入っていた。そして「松の実町」事件が起こる。この時、マキの協力者としてジャックが独逸秘密警察に捕まった。あらゆる拷問に屈しないジャックの英雄主義を見て、苛立った〈私〉はマリーのことを密告する。捕えられたマリーに拷問を加えて、ジャックを苦しめるがそれでも口を割らない。〈私〉は遂にマリーを凌辱するが、ジャックは耐えかねて自殺をしよう。予想外のジャックの死に、マリーも発狂し、〈私〉も大きなショックを受ける。以上が〈私〉の〈拷問者の歴史〉である。戦争という異常な環境下の事件ではあるが、それを人間の真の姿として考えているからこそ〈私〉は〈拷問者の歴史〉を〈記録〉に残したのである。

そして、「黄色い人」では、「アデンまで」の日記、「白い人」の記録、「コウリッジ館」の手紙といった、それまでの「手記」方式を全て使った、実験的な試みをする。この小説は、高槻の収容所にいるブロウ神父に宛てた千葉ミノルの手紙と、ブロウ神父を裏切ったデュランの日記が交互に組み合わせられて構成されている。作品内の現在は、一九四四・昭和十九年十二月二五日のクリスマスの夜^⑬である。この日の早朝、ピストル所持の容疑で

ブラウ神父が西宮の特高に連行され高槻の収容所に送られた。夕方にはB 29の空襲によってデュランが死に、千葉と同じ部屋にいた糸子も血を流し眠っている。そんな状況の中で千葉は医学生であるにもかかわらず、デュランの死や糸子の容体を確認することも無い。空襲から二時間後、デュランが残した日記を読み、へちびた蠟燭の下でブラウ神父へ送る手紙を書いているのだ。

千葉は手紙の中で、フランス人のブラウ神父が象徴するキリスト教への違和感を告白する。幼年時代からブラウ神父をだましていたこと。母や叔母によって無理やり洗礼を受けさせられたこと。四谷の医学部に進学してからは、深い疲労を覚え、ミサにもいかず無気力になったこと。戦争で毎日多くの死体を見て、さらに受動的になったこと。肺炎が発覚した後に見た行き倒れの老人のように、静かな死を望み仁川に帰ってきたこと。帰省後、婚約者のいる糸子の体を情性のように抱いていたこと。神戸商大の学生が死にかけていたのに呼び鈴を押さなかったこと。そして、デュランがブラウ神父を裏切りピストルをブラウ神父の書齋に隠したことを知りつつ、ブラウ神父に報告するのが遅れたことなど、様々な罪を告白する。いわば告解のスタイルなのだ。カトリックの信仰を否定する千葉は、告解や懺悔ではないと否定しているが、表面上の形式では同じものである。問題はあらゆることに無気力になったはずの千葉が、ブラウ神父に手紙を書かざるを得ないほどデュランの日記に衝撃を受けたことである。

そもそもデュランは十二年前、フランスから日本の逆瀬の教会に赴任してきた宣教師であった。この仁川の町で、熱心に伝道して教会や、幼稚園、司祭館を建てたのに、八年前の阪神大水害の時、キミコと不倫の関係に落ちたために、教会から追放された人物である。そんなデュランを八年間援助し助けてくれたのがブラウ神父であった。デュランは何度も自殺を試みようとして、そのために五年前にはピストルも手に入れたが、どうしても死ぬことはできなかつた。毎朝ミサからの帰り道である仁川橋では、自分の死んだ顔や地獄に落ちた幻想やユダの幻に襲われる。デュランの日記にはそうした苦悩の日々とピストルをめぐるブラウ神父への裏切り行為が綴られ

ている。日記の日付は十二月五日から十二月二三日までである。戦争の激化に伴い、外国人に対する警察の追求も日増しに厳しくなり、自殺用のピストルの処分困ったデュランが、ブラウ神父から預かったピストルだと千葉に嘘をつき、ブラウ神父の書斎にピストルを隠し、密告の手紙を警察に送る。そうした裏切りの告白がデュランの日記である。デュランもまた日記をブラウ神父へ送ってほしいと千葉に託していることから、これもまた告解のスタイルである。いわば、「黄色い人」はブラウ神父に宛てた千葉の罪の告白の手紙とデュランの裏切りの告白の日記という二つの告白が組み合わされた作品であるのだ。

以上のように「アデンまで」「白い人」「黄色い人」の主人公は「手記」を書くことで、自身の中に潜む罪や悪を回想したり告白したりする役割を担っている。また、「手記」を書く場所も過去を想起させる空間として主人公の生きる現在と関連づけられる。遠藤周作の〈第一期〉の小説は、この三作で試みられた「手記」のヴァリエーションとも言いうるのだ。そして、こうした遠藤周作の「手記」への執着は「最後の殉教者」（「別冊文芸春秋」、一九五九・昭和三十四年二月）に始まる「歴史小説」⑭への執着と繋がっていく。

最後に〈第一期〉の歴史小説の代表として『沈黙』について触れておく。『沈黙』の主要部分は、ポルトガルの「海外領土史研究所」に所蔵されているセバスチャン・ロドリゴの書簡である。「から」までの章題に「セバスチャン・ロドリゴの書簡」と記されており、ロドリゴが捕えられたく以後は章題から「セバスチャン・ロドリゴの書簡」が消えているが、までの文体と差がないことからロドリゴが書簡として残したかった出来事を語っていることは確かである。最後のでは「長崎出島オランダ商館ヨナセンの日記」が踏み絵を踏んだ後のロドリゴの行動を伝えており、さらには、「切支丹屋敷役人日記」が江戸の切支丹屋敷におけるロドリゴの生活と最後を物語っている。『沈黙』もまた「手記」で構成された小説であるのだ。

- ① 本稿では、小説の方法としての書簡体、日記体のような手記形式も、作品の中に登場する手紙、日記、ノートも全て含むものとして「手記」とする。
- ② この時の体験は既に「フランスにおける異国の学生たち」（「群像」一九五一・昭和二十六年九月号）というエッセイで描かれている。このエッセイはのちに「フォンスの井戸」と改題されて『昭和文学全集²¹ 小島信夫・庄野潤三・遠藤周作・阿川弘之』（小学館、一九八七・昭和六十二年七月）に収録されている。さらに、同書の自作解説（遠藤周作「背後をふりかえる時」）では、「実際に起った事件に基づく私のはじめての小説だといってよい。」として「処女作ともいうべき」作品と呼んでいる。
- ③ フランスの思い出を綴ったエッセイ「ブロンドの風の吹く頃」（「旅」、一九五四・昭和二十九年五月号）や「日本読書新聞」に掲載された書評（一九五四・昭和二十九年五月十日）「基督者の偽善を非難 信仰にひそむ悪の温床を衝く 二人のカトリック作家 ベルナノス著悪魔の陽の下に モーリヤック著ガリガイ」などで遠藤の肩書は「仏文学者」となっている。
- ④ タイトルの『青い小さな葡萄』と深い関連がある。作品中で、ハンツが求める国境を越えた人間関係の象徴が「青い小さな葡萄」であり、伊原も日本人や黄色人という立場を越えた人間関係を「青いちいさなノート」の中で追求している。
- ⑤ 「人間の河」という問題意識は、『テレーズ・デスケルー』の影響を受けたもう一つの作品、『深い河』においても追求されている。
- ⑥ 本稿では初期評論の範囲を、初めて文芸誌に発表された処女評論「フランス・カトリック文学展望―ベルナノ

スと悪魔―」（「望樓」一九四七・昭和二十二年七・八月合併号）から最初の小説「アデンまで」（「三田文学」、一九五四・昭和二十九年十一月号）頃までに発表された評論とする。

⑦日記体ではないが、ユウジェニイ・ド・グランの日記に触発され、彼女の生涯の足跡を追ったエッセイ「葡萄の丘と夏の雲」（『フランスの大学生』早川書房、一九五三年・昭和二十八年七月、所収）では、ユウジェニイ・ド・グランに興味を持ったきっかけが堀辰雄の翻訳だったと述べていて興味深い。ここにも堀辰雄の影響を見る事が出来る。次のとおりである。

いつから僕はこの娘の名を知ったのだろうか。おそらく、そのうつくしい名と生涯とを一番始めに教えてくれたのは、堀辰雄氏夫妻が訳された彼等の日記の一部だったと思います。

（『フランスの大学生』）

⑧遠藤周作は第二次世界大戦後初めてフランスに渡った留学生であり、当時フランスには日本大使館もなく苦勞をしたという。

⑨日記に関連するエッセイは次のとおり。

「旅の日記から」（「世界」、一九六〇・昭和三十五年五月号）

「私と荷風―作家の日記「断腸亭日乗」について」（「図書」、一九六二・昭和三十七年十二月号）

「私の日記」（「新潮」、一九六四・昭和三十九年二月号）

「荷風日記について」（岩波書店『永井荷風全集十九』月報、一九六四・昭和三十九年五月）

「日記」（「風景」、一九六四・昭和三十九年五月号）

「作家の日記」（「小説新潮」、一九六六・昭和四十一年四月号）

「中年の作家」（「朝日新聞夕刊」、一九六七・昭和四十二年十二月六日）

「日記」（「風景」、一九六八・昭和四十三年二月号）

- 「日記（昭和四十四年十二月～四十五年一月）」（『三田文学』、一九七〇・昭和四十五年四月号）
- 「日記（昭和四十五年二月一日～同年二月二十七日）」（『三田文学』、一九七〇・昭和四十五年五月号）
- 「日記」（『風景』、一九七十四・昭和四十九年五月号）
- 「日記から」（『文学界』、一九七七・昭和五十二年九月号）
- 「日記のなかから―作家の生活」（『波』、一九八〇・昭和五十五年七月号）
- ⑩ 自作について語ったエッセイや取材ノート、創作日記の主なものは次のとおり。
- 「感想（芥川賞の受賞の言葉）」（『文芸春秋』一九五五・昭和三十年九月号）
- 「わが小説―ぼくの大きな縦糸」（『朝日新聞』、一九六二・昭和三十七年三月三十日）
- 「私の書こうとしている戯曲」（『雲』、一九六四・昭和三十九年七月）
- 「海と毒薬ノート」（『批評』、一九六五・昭和四十年四月号）
- 「『沈黙』フェレイラについてのノート」（『批評』、一九六七・昭和四十二年四月）
- 「舞台再訪『沈黙』―踏絵が育てた想像」（『朝日新聞』、一九六七・昭和四十二年八月二十五日）
- 「作品の背景―『転び者』たちの運命」（『東京新聞夕刊』、一九六八・昭和四十三年九月二十日）
- 「一つの小説ができるまで―『沈黙』を中心に」（『早稲田文学』一九七一・昭和四十六年三月号）
- 「私の『イエスの生涯』」（『読売新聞』、一九七三・昭和四十八年六月四日～二十五日）
- 「ひとつの小説ができるまで」（『本の窓』、一九七八・昭和五十三年二月）
- 「『侍』を書きおえて―私の近況」（『新刊ニュース』、一九八〇・昭和五十五年四月）
- 「取材日記」（『文芸春秋』、一九九〇・平成二年十一月号）
- 「自作再見―スキャンダル」（『朝日新聞』、一九九〇・平成二年四月八日）
- 「『男の一生』を書き終えて」（『日本経済新聞』、一九九一・平成三年九月二十九日）

「小説「女」の連載を終えて」（「朝日新聞」、一九九四・平成六年十一月七日）

「深い河」創作日記」（「三田文学」、一九九七・平成九年八月）

⑪ 遠藤周作・佐藤泰正『人生の同伴者』（春秋社、一九九一・平成三年十一月）

⑫ 管見のかぎり、「アデンまで」を日記、あるいは手記として論じたものは李英和「遠藤周作「アデンまで」―留
学体験と疎外されるという絶望」（「日本語と日本文学」二〇〇七・平成十九年八月）と緒方秀樹「遠藤周作「ア
デンまで」における他者―「日記」という閉ざされたテキスト―」（「キリスト教文学」第二十八・二十九号、
二〇一〇・平成二十二年八月）の二本だけであった。

⑬ 千葉が手紙を書いている時間にズレがあることは、拙稿「「黄色い人」論―逆説的な「恩寵」の世界の提示」
（『作品論遠藤周作』双文社出版、二〇〇〇・平成十二年一月、所収）で論じたことがあるが、ここでは一九四
四・昭和十九年十二月二十五日として扱う。

⑭ 遠藤周作の歴史小説については拙稿「遠藤周作の「歴史小説」の一側面―松田毅一との関連をめぐって―」（「遠
藤周作研究」第四号、二〇一一・平成二十三年九月）で大まかな分類を試みた。

第二章 遠藤周作論―〈劇〉を生成するトポス―

一、トポスの問題

あまり言及されることはないが遠藤文学の作品舞台は印象的な場所が多い。試みに主な作品とその舞台を挙げてみると次のようになる。

『アデンまで』のアデン（アラビア半島）、『白い人』『留学』『青い小さな葡萄』のリヨン（フランス）、『黄色い人』の仁川（兵庫県西宮市）、『海と毒薬』の世田谷と九州のF市（福岡県福岡市）、『わたしが・棄てた・女』の復活病院（静岡県御殿場市・神山復生病院）、『火山』の赤岳（鹿児島県・桜島）、『沈黙』のトモギ村（長崎市外海町など）と江戸切支丹屋敷（東京都文京区小日向）、『イエスの生涯』『キリストの誕生』『死海のほとり』『エルサレム（イスラエル）、『死海のほとり』『女の一生 第二部サチ子の場合』のアウシュビッツ収容所（ポーランド）、『メナム河の日本人』『王国への道―山田長政』のアユタヤ（タイ）、『ユリアとよぶ女』『鉄の首枷―小西行長伝』の朝鮮半島、『侍』の仙台・支倉村・ベルクルス（メキシコ）・スペイン・ローマ、『最後の殉教者』『女の一生』の浦上（長崎市）、『銃と十字架』『王の挽歌』の国東半島、臼杵（大分県）と無鹿（宮崎県）、『男の一生』の長良川、『深い河』のクルトルハイム（上智大学）、ヴァーラーナーシイ（インド）。その他にも軽井沢や二条城（京都）、美星町（岡山県）、大連（中国）、ベナン島（マレーシア）なども登場する。

こうして見ると、遠藤文学の作品舞台は日本各地ばかりでなく海外の様々な場所に点在していることが分かる。日本と西洋の狭間で生きて来た作者の問題意識とも密接に関連する。いずれの土地も遠藤は実際に住んだことがあったり、何度も取材に訪れた特別な場所である。遠藤はその場所を訪れ実際にたたずむことで、創作の構想を

練ったり、心の中に主人公像が喚起されたりもした。創作の源泉でもあったのである。しかも、それらの場所で遠藤が追求していたのは「神と悪魔、人間と社会、肉欲と霊の血みどろな闘い」①が繰り広げられる人間の〈劇〉であった。ここに遠藤文学の根幹とも関わる問題も出てくるだろう。つまり、遠藤文学における作品舞台とは登場人物が活躍する単なる舞台装置だけではなく、小説家の想像力を刺激して様々な人間の〈劇〉が生成されるトポスでもあったのだ。ここに作品舞台の重要な意味が隠されている。しかも、遠藤は場所としてのトポスだけでなく思想的な意味でのトポスからも〈劇〉を生成していたのである。

そこで本稿では遠藤文学の〈劇〉を生成するトポスに様々な側面から照明をあてて行くこととする。特に作家以前の遠藤にとって最も重要な体験であるフランス留学で学んだ三つのトポス、すなわち〈悪〉というトポス、〈テレーズ〉というトポス、〈留学〉というトポスに関わる問題と、新人作家時代に「第三の新人」から影響を受けた二つのトポス、すなわち〈日常性〉というトポス、〈弱者〉というトポスと、同時期に発見した〈廃墟〉というトポスをめぐる問題を取り上げていきたい。

二、〈悪〉というトポス

遠藤周作は『海と毒薬』の取材ノート②で〈悪〉や〈場所〉へのこだわりについて次のように語っている。

私は罪悪の行われた場所を見るのが好きだ。このような傾向はたしかにリヨンで養われたに違いない。もつとも、それは私が幼い時から持っているある回顧趣味にも原因がある。しかし、善の行われた場所ではなく、悪の行われた場所に私が感動するのは、私が人間の悪をドラマの本質とみなしているためだからか。

様々な示唆に富む話である。遠藤が「悪の行われた場所」を好む趣味がリヨンで養われたこと。また、〈悪〉に

感動を覚えるのも「人間の悪をドラマの本質とみなしているため」だということ。大きく二つの問題がある。もちろん、ここでいうドラマは先に述べた人間の〈劇〉とそのまま言い換えることが出来る。先にも述べたが人間の〈劇〉とは、「神と悪魔、人間と社会、肉欲と霊の血みどろな闘い」が繰り広げられるものであり、それがフランス留学で熟成させた文学的課題であったのだ。

〈悪〉の問題に戻ろう。遠藤はなゼリヨンで〈悪〉に関心を持つようになったのかということである。リヨンは言うまでもなく遠藤が戦後初の日本人留学生として過ごした思い出の地である。また、リヨンは「三田文学」を創刊した永井荷風が留学した土地でもあった。遠藤はリヨン滞在中、永井荷風『ふらんす物語』のリヨンの箇所を読み、その記述の確かさを嘖みしめてもいる。そのリヨンであるが、黒ミサ③が行われていたために「悪魔的な都市」④といわれることもあり、第二次世界大戦中の「一九四三年、ゲシュタポ（独逸秘密警察）は、この建物の地下室で拷問を行った」⑤という地下室も残っていた。留学中の遠藤はこれらの「悪の行われた場所」を訪れてそこに〈悪〉に手を染める人間の肉欲の問題に思い至る。

ぼくはこの中世紀さながらのキヤルチェや「黒ミサ」を自分の時代から遠いものと隔てたくなかった。ニールンベルクや、ポーランドにおけるナチズムの虐殺、拷問、また、我々日本人自身がフィリピンや南京で犯したものの心理の裡には、黒ミサ的な肉欲がかくされているのだ。

（遠藤周作「冬―霧の夜」／『フランスの大学生』（早川書房、一九五三・昭和二十八年七月）

さらに、遠藤の小説家としての視線はドイツ軍と闘ったレジスタンスにも向けられる。当時、日本ではフランスのレジスタンスはドイツ軍に抵抗した正義の英雄と見られていたが、遠藤はその正義の名の下にドイツ軍の協力者に対し、容赦なく虐殺を加えていった「悪」を知り、その「悪の行われた場所」であるフォンスの井戸までわざわざ出かけていったのである。記録によると「三十人の男女」が銃殺され井戸の中に死体が投げ込まれ、そのままになっているという現場であった⑥。『作家の日記』では次のようにある。

一九五一年三月二三日

午後、自転車にのり、フォンスの虐殺事件の井戸をみにいく。これはレジスタンスの悲劇のあった井戸なのだ。

(中略)

「何故こんな所までそれを見に来たのか」とアンドレはぼくに訊ねた。アンドレよ、文学とはそんなものなのだ。君には物好きと思えるだろうが、このほの黒い、人の叫び訴えるような声がきこえる井戸の底に、ぼくは、人生の一つの投影を見に来たのだ。

(遠藤周作『作家の日記』作品社、昭和五十五年九月)

ここで遠藤が語る「人生の一つの投影」こそ〈悪〉と言えるだろう。この時の体験は強烈だったようで、「フォンスの井戸」⑦として最初の小説の題材となっているばかりか、最初の長編小説『青い小さな葡萄』の題材ともなっている。

この他にもリヨンにはジャンヌ・ダルクの焚刑された場所やサド侯爵が刑罰をうけたピエール・アンシーズの牢がある。また、遠藤は裁判所にも見学に出かけていき、嫉妬のため妻を殺した一人の殺人者や十四歳の娘を殺したイボンヌという三十五歳になる女の裁判を傍聴したりもしている。

リヨンでのこうした様々な体験を通して「悪の行われた場所」に対する遠藤の関心が養われて行ったのである。

また、「悪の行われた場所」は人間の〈悪〉を見つめる場でもあり、〈悪〉を行なう人間の心の動きこそ〈劇〉でもあったのである。ここに「〈悪〉」というトポスの問題」がある。そして、リヨンでの体験は、『白い人』におけるマルキ・ド・サド、『海と毒薬』における九州大学医学部生体解剖事件、『最後の殉教者』『沈黙』における切支丹弾圧(踏絵、穴吊り)、『札の辻』『女の一生第二部サチ子の場合』におけるアウシュビッツ収容所などの様々な〈悪〉への関心として展開していく。

三、ヘテレーズ」というトポス

遠藤が「最も惚れ込んだ作品」⑧であり、遠藤文学に最も大きな影響を与えた小説は、言うまでもなくフランソワ・モーリヤックの『テレーズ・デスケルー』である。遠藤がフランソワ・モーリヤックのことを知ったのは堀辰雄からもらった著書であった。堀辰雄はエッセイの中でモーリヤックのことを語っており、『テレーズ・デスケルー』の影響を受けた『菜穂子』という小説も書いている。さらに遠藤は、古本屋で偶然手に入れた、佐藤朔『フランス文学素描』にも二章にかけてモーリヤックの説明があったことから、フランスのカトリック文学の存在を知り仏文科への進学を決めた。恩師となった佐藤朔からはフランスのカトリック文学について様々学んだ。そうした中で出会ったのが『テレーズ・デスケルー』だったのである⑨。作家となつてからは、小説のリズムをつかむため、創作に行き詰った時、何度も読み返したりもしましたし、自ら翻訳を試みたこともあった。そんな遠藤の『テレーズ・デスケルー』への強い愛着は、長篇評論『私の愛した小説』（新潮社、一九八五・昭和六十年七月）でますます所なく語られている。このように遠藤は『テレーズ・デスケルー』から文学的課題や文学的技法、文学的体験など様々なことを学んだ。とりわけ、重要なのはフランス留学時の一九五一・昭和二十六年八月、作品世界を味わうために行なったボルドーへの旅であった。

だが今、考えてみると、あの時ほど充実した毎日はやはりなかったように思える。特に二年目の夏休み、一人、それまで長い間読みつづけたモーリヤックの『テレーズ・デスケルー』をよりよく味わうため、その背景を丹念に見て歩いたことは忘れられない。その背景となった延々たるランド地方の森をただ一人、何時間も歩きつづけ、熱い砂地で眠り、夕暮れになると百姓家に泊めてもらった。私が食事をしていると、日本人をみるために集まってきた子供たちの顔が幾つも窓にへばりついていていた。

（傍線部引用者／遠藤周作「出世作のころ」／「読売新聞」、一九六八・昭和四十三年二月五日（十三日）

この時遠藤は「人間の孤独と宿命というのものから逃れられなかったテレーズ・デスケルウの寂寞たる生をどうしても凝視してみたくなった」から、「彼女の苦しい人生がそこで送られた曠野の地の果、ジウアノウへの旅を思い立った」という。ポルドーからランゴンまで汽車に乗り、そこから二日かけてランド地方の森を抜け三十キロ先のジウアノウまで（テレーズ）のことを思いながら歩き、さらに『テレーズ・デスケル』の作品舞台である（フアルグの葡萄島）（ロアイヤンの森）（ニザンの駅）（タルゴの井戸）（ヴィアンドロウ）（サン・レジェールの森）（サン・サンフォリアン）といった地をめぐりながら（テレーズ）の影を追いかけたのである。この旅は単なる作品鑑賞というレベルではなく（テレーズ）という一人の人間の心の秘密にまで迫るものであった。その結果、（テレーズ）は遠藤の心に決定的に刻まれたのである。

黄昏の湿った光は死のような暑さと交錯していた。この曠野には今、夕陽がここに、血のようなしみを付けていた。テレーズの姿は今すらもぼくの裡から消す事は出来ない。ランドのむせかえる西日のなかでこの女の姿を前にしてぼくは一本の死樹に靠れたまま、化石のように動かなかった：

（遠藤周作「テレーズの影を追って―武田泰淳氏に―」／『三田文学』、一九五二・昭和二十七年一月号）

この時の体験は人間の心の奥深さとそれを表現したモーリヤックの創作の秘密を知る絶好の機会となったに違いない。ここに文学空間としての（テレーズ）というトポスがあり、遠藤は自らの創作へと利用していくのである。例えば、『海と毒薬』では生体解剖事件に参加した看護婦の上田ノブを（テレーズ）のように「寂寞たる生」を送った女性として造型した。彼女は自ら望まぬ形で運命に翻弄され流産と離婚、子供の産めない体、そしてヒルダへの嫉妬心から事件へと流されて行く。『深い河』では、成瀬美津子が（テレーズ）のような「寂寞たる生」を過ごしている。ただし、上田ノブと異なるのは美津子には大津という導き手があり、大津を通して「生活」ではなく「人生」に目覚めていく。その回心の軌跡こそまさに（劇）であった。

四、〈留学〉というトポス

言うまでもなく留学とは異文化を学ぶことであり、同時に異文化体験でもある。そこには多かれ少なかれ異文化同士の衝突が生まれるのも当然と言えよう。遠藤文学は日本人としての感性と西洋を代表するキリスト教との狭間に「距離感」^⑩があることを認めることから出発しているが、この「距離感」こそ異文化同士の衝突を生み出すものであった。遠藤はフランスのカトリック文学を学び始めた時からこの「距離感」を問題としてきたが、実際にフランスへ留学することによって、「距離感」の問題はより切実に身近な問題として迫って来たと言えよう。そうした苦しみ的一端は『留学』によって垣間見ることができる。

「いや、もう来ない。もう沢山だ。田中さん。こんな詰らん小さな美術館一つに入っても、ぼくら留学生は すぐに長い世紀に渡るヨーロッパの大河の中に立たされてしまうんだ。ぼくは多くの日本人留学生のように、河の一部分だけをコソ泥のように盗んでそれを自分の才能で模倣する建築家になりたくなかっただけなんです。河そのものの本質と日本人の自分とを対決させなければ、この国に来た意味がなくなってしまうと思ったんだ。田中さん。あんたはどうします。河を無視して帰国しますか。」

（傍線部引用者／遠藤周作『留学』）

主人公・田中に留学の意味を問うたフランス留学の先輩・向坂のセリフである。ここで向坂がぶつかったのは、「ヨーロッパの大河」という留学生が取り組むべき課題の大きさと、西洋の本質であるキリスト教と日本人の自分との対決の困難さともいうべきものであった。ここに、「留学時代」、「ますます西洋と日本、キリスト教と日本」という問題に関心をふかめていた」^⑪遠藤の「距離感」の問題が反映していることは明らかであろう。

さらに、『留学』には遠藤がぶつかったもう一つの問題も言及されている。フランスのカトリック教会の人たちが寄せた善意である。彼等は日本のことを何も知らずただザビエルへの憧れから日本宣教を夢見ており、その担い手として留学生の遠藤に大きな期待を寄せていた。日本人の感性と西洋的なキリスト教との「距離感」に苦悩していた遠藤にとって負担以外の何物でもなかったであろう。例えば、『留学』の「第二章ルーアンの夏」では主人公の工藤が、フランス留学中、珍しい日本人留学生として町中の人から注目され、教会では日本宣教の担い手として過度の期待を受けて苦闘する姿が描かれている。しかも、ホームステイ先の家庭の亡くなった息子は、ザビエルに憧れ日本宣教を夢見ていた神学生であり、工藤にはその青年の代わりに日本宣教に活躍するよう期待されていた。これらは小説の中の話ではあるが、多かれ少なかれ遠藤が留学中に似たような体験をしたことは確かである。言い換えると、これもまた「距離感」の問題である。フランスのカトリック教会の人々が持つ日本認識と現実の日本との「距離感」が相当あったことを示しているのだ。ちなみに、ザビエルへの憧れは、エッセイでも描かれている。後に「フォンスの井戸」と改題される「フランスにおける異国の学生たち」(『群像』、一九五一、昭和二十六年九月号)では次のようにある。

：またこのリヨンにも「どうしても日本に布教にいく」と堅い決意をもった三人のカトリック神父がいます。この司祭の一人はフランシスコ・シャビエルの書簡をよみ「私は東洋の諸国の中で、日本人程信仰に適した国民を知らない。」という言葉から、日本をゆめみ始めたのだそうです。

おそらくこれが、『留学』に登場する日本宣教を夢みた神学生のモデルとなったのであろう。遠藤はこうした体験から、自分と同じようにヨーロッパに留学した日本人に関心を抱き、ザビエルが派遣した最初の留学生ベルナルドや天正遣欧使節、帰国後背教した荒木トマス、ペドロ岐部などを知ることになる。さらには彼らが生きていた「切支丹時代」の発見にも繋がっていく。

「切支丹時代」とは、一五四九年のザビエルによるキリスト教伝来から、一八七三年キリシタン禁制高札の撤廃

までを示す時期だが、遠藤は「我々の国が、まともに西洋とぶつかった時代」「西洋のなかでも最も我々とは縁遠いあの基督教が、我々の国に直接ぶつかってきた」^⑫時代と見て、『最後の殉教者』に始まり『沈黙』『侍』を経て『女』に至る一連の歴史小説の時代背景としている。「西洋と日本、キリスト教と日本という問題」を抱えている遠藤が作品舞台として設定するのに最も好都合な時代でもあったのである。

このように、遠藤にとって〈留学〉とは、日本人としての感性と西洋のキリスト教が直接ぶつかるトポスであり、自身の文学的課題であった「西洋と日本、キリスト教と日本」の意義を問い直し深めていく「場」としてのトポスでもあったのである。

五、「第三の新人」の影響

前章まで遠藤がフランス留学で学んだ三つのトポスについて考察してみた。次にこの章からは帰国後に新人作家であった遠藤が文学的課題とした三つのトポスについて考えていくこととする。すなわち、〈弱者〉というトポス、〈日常性〉というトポス、〈廃墟〉というトポスの三つである。

三つのうち二つは同世代の仲間であった「第三の新人」から影響を受けたものである。そもそも遠藤と「第三の新人」との交流は同じ慶應大学出身の安岡章太郎の紹介によって始まっている。エッセイでは次のようにある。

安岡はそんな私を、彼のグループである「構想の会」の集まりにつれていってくれた。私はそこで、庄野潤三や三浦朱門や小島信夫や近藤啓太郎や進藤純孝に紹介された。「現代評論」の雰囲気とこのグループのそれとが、あまりに違うのにはじめはびっくりした。しかし私はこの「構想の会」に毎月出ることが大変たのしかった。

やがて清瀬の療養所に入院していた吉行淳之介が、この会に復帰してくるようになった。彼は安岡について芥川賞をとり、吉行のあとで小島氏と庄野氏とが受賞した。

そんな彼らに刺激されて私も「アデンまで」という短編をひそかに書いてみた。生まれてはじめて書いた小説だったが佐藤朔先生にみていただき、その推挙で「三田文学」に掲載された。

（傍線部引用者／遠藤周作「出世作のころ」／「読売新聞」、一九六八・昭和四十三年二月五日（十三日））

「第三の新人」とは誰が含まれるのか研究者によって異同があるが、ここでは「構想の会」のメンバーであった安岡章太郎、庄野潤三、三浦朱門、小島信夫、近藤啓太郎、進藤純孝、吉行淳之介、そして遠藤周作が該当することがわかる。この「第三の新人」グループとの交流で刺激をうけた遠藤が小説を書き始めることになる。遠藤は既にフランス留学時代に作家修業を始めているが、同世代の作家たちに刺激をうけたことは大きかったと言えよう。もちろん「第三の新人」たちとは問題意識も異なるが、小説を書くことへの意欲を掻き立てられたのは確かだったようだ。

また、創作方法も影響を受けたという。〈弱者〉と〈日常性〉の二つである。まず「弱者」については次のように語っている。

ぼくが「第三の新人」から受けた影響というのは二つあると思います。ひとつはなんとといっても「第三の新人」の文学——といっても全部が全部ではないですが、彼らのなかに共感を見出したのは、強者の立場から書かないということです。弱者、もしくは劣等者の立場から書くということですね。それは私がキリスト教にもっていた考え方——さきほど申し上げました——と一致しておるわけです。これがひとつ。

（傍線部引用者／対談「文学——弱者の論理——遠藤周作氏に聞く」／「国文学解釈と教材の研究」、一九七三・昭和四十八年二月号）

「第三の新人」から受けた影響というが、「共感」という言葉に注目したい。「第三の新人」の文学が「弱者の立

場」、「劣等者の立場」から書かれていることは、安岡章太郎の芥川賞受賞作「悪い仲間」、「陰気な愉しみ」を見ても明らかである。翻って遠藤の初期作品を見ると、「アデンまで」「白い人」「黄色い人」「海と毒薬」の主人公は、心の弱さを抱えていて恋人や友人たちを裏切ってしまう（弱者）であった。元来遠藤文学も「弱者の立場」、「劣等者の立場」から書かれていたのである。だからこそ「第三の新人」たちに「共感」したのだと言える。

その上で、「弱者の立場」、「劣等者の立場」がその後の遠藤文学でどのように展開したのかを見ると二つのことがわかる。第一に、『おバカさん』『へちまくん』などのユーモア小説や「狐狸庵先生シリーズ」の軽妙洒脱なエッセイの流れがある。後には「ぐうたらシリーズ」へと展開し、一大ブームを巻き起こした。狐狸庵先生も「ぐうたらシリーズ」も「弱者の立場」、「劣等者の立場」で書かれていることは明確である。第二に、『沈黙』のキチジローに代表される文学的課題としての（弱者）である。このことは『沈黙』の取材ノートとも言えるエッセイ集『切支丹の里』（人文書院、一九七一・昭和四十六年一月）に（弱者）の生成過程が詳しく描かれている。前述のように遠藤は留学をきっかけにしてヨーロッパに留学した日本人に興味をもつようになり、ベルナルド、荒木トマス、ペドロ岐部などを知った。なかでも帰国後背教者となった荒木トマスに関心を持ち、切支丹研究を始めた。そこでは「華々しく殉教した強者」^⑬ではなく、心の弱さ故に背教せざるを得なかった（弱者）である転び者が中心であった^⑭。そうした中から、切支丹時代の「代表的な弱者」、「フアビアン不干斎、トマス荒木、フェレイラ（沢野忠庵）、ジョゼフ・キャラ（岡本三右衛門）の四人」を選び出し、やがて「フェレイラ（沢野忠庵）、ジョゼフ・キャラ（岡本三右衛門）」の二人を主人公として『沈黙』を生み出していったのである^⑮。さらに、（弱者）というトポスは、『鉄の首枷 小西行長伝』で「面従腹背」の人生を送った小西行長、『銃と十字架』で「華々しく殉教した強者」であるペドロ岐部の弱者的側面、『侍』で組織に翻弄された長谷倉の悲劇などへ展開する。

次に、「第三の新人」から影響を受けたもう一つの問題である（日常性）のトポスについて考えたい。これも先ほどと同じインタビューの中で語っている。

「おれはやっぱりおれの立場として、彼らのいつている『日常生活』というのを書きながら、どうしてメタフィジックなものをそこから出すか―日常生活だけで終わらないで―。日常生活ピョンと飛び越えて、大きなテーマでバシッと攻めたてるのではなく日常生活のいろんなものを書きながら、そのなかから自分が考えた、メタフィジックなものを出すにはどうしたらいいかということをして、『第三の新人』と話していて考えたわけです。」

（傍線部引用者／対談「文学―弱者の論理―遠藤周作氏に聞く」／「国文学解釈と教材の研究」、一九七三・昭和四十八年二月号）

（弱者）の問題の時は「共感」であったが、今度は「第三の新人」たちが語る「日常生活」に対する「違和感」が出発点にある。服部達、村松剛、遠藤周作の三人が「三角帽子」の名の下に「メタフィジック批評」を「文学界」で提唱した時、遠藤にとって「メタフィジック」とはカトリックであった。とすると、「日常生活」を描きながら、そこから「メタフィジック」なものをどうやって出すのかという問題は、「日常生活」を描きながらどうやってカトリックの問題を出していくかというカトリック文学の課題でもあったのである。遠藤文学では、『海と毒薬』の始まりを、流行歌が流れる東京の郊外の日常生活から描きだしている。どこにでもある日常風景でありながら、そこに住む人たちの戦争時代の「過去」が次第に浮かび上がってくるという形式であった。『わたしと棄てた・女』や『おバカさん』では東京に住む一般家庭を中心に描き出し、やがて何らかの事件へ巻き込まれて行く。『哀歌』に収められた作品は日常生活が舞台になっているものが多い。『深い河』でも最初に登場する磯辺夫婦はごくありふれた平凡な夫婦であるが、妻が遺した最後の言葉をきっかけに、妻の生まれ変わりの少女を探するため夫はインドまで出かけることになる。このように、（日常性）と関連する作品では、最初は平凡な人物が登場し、作品舞台も東京の郊外など平凡な場所が描かれるが、最後には非日常的な人物へと変貌し、作品舞台も日常とは異なる様相を見せる。「日常生活」を書きながら、メタフィジックなものを出そうとした遠藤の苦闘の跡を見

ることが出来よう。また、こうした〈日常性〉が〈非日常性〉へと変化していくことこそ〈劇〉であり、遠藤文学の根幹を占めるものであったといえよう。ここに〈日常性〉というトポスがある。

六、〈廃墟〉というトポス

拙稿⑯で論じたが、遠藤文学には多くの歴史小説があり、それぞれ重要な意味を持っている。期間も最初の歴史小説「最後の殉教者」から最後の『女』まで約三十五年にわたっており、遠藤が作家として活躍した時期とほぼ重なる。こうした歴史小説への傾斜の根底にあるのは歴史への強い関心である。

『埋もれた古城』（新潮社、一九七二・昭和四十六年五月）によると、趣味としての歴史探索は一九六二・昭和三十七年頃、家の近所にあった世田谷城が忠臣蔵で有名な吉良家と縁があったという意外な歴史に驚いたことから始まるという。注目すべきは、世田谷城の建物は残っておらずいわば〈廃墟〉であったという点である。つまり、遠藤の歴史小説の原点は〈廃墟〉というトポスにあったのである。ここに歴史が織りなす〈劇〉に魅せられた遠藤の姿を見ることが出来る。元々、遠藤は〈廃墟〉に対して異常な関心を持っていた。例えば、フランス留学の時もジュミエージュの〈廃墟〉に絶対的な印象⑰を残しているし、また、エッセイ「廃墟の眼」⑱には〈廃墟〉というトポスへの強い愛着が語られている。長くなるが引用したい。

私は河のうねうねと流れている形を高いところから眺めるのも好きだが、うねうねと流れ、さまざまの川を所々に残している河は私にながら人間の人生を連想させるから好きなのである。その河のほとりにどんなにさまざまの人間が住み、さまざまの人生を送り、それらの横を河が黙々と流れていたという事実が私に思わずあのニタニタツとする笑いを浮かべてしまうのである。廃墟がつくりあげた第二の自然には、なにか

この河の黙々とした流れに似た感じがふくまれているのではないか。(略) 河や廃墟はただ、黙々と存在し、しかし黙ってその「眼」で多くの者の人生を見ていたのだ。

その眼を、私はやはり廃墟にたつと、自分の周囲にふいに感じるのである。その眼が私に肉欲に似た快感を思わず与え、ニタニタ笑いを思わず浮かせるのである。

(傍線部引用者／「廃墟の眼」／『狐狸庵閑話』桃源社、一九六五・昭和四十年七月、所収)

ここには、河と人間の類似性、人間の人生と黙々と流れる河との対峙、廃墟と河の類似性、多くの人間の人生を見つめる河や廃墟の「眼」など様々な問題が語られている。これらは遠藤の創作過程とも類似している。そもそも遠藤は様々なトパスを通じて人間の人生を見つめ、そこで展開される「神と悪魔、人間と社会、肉欲と霊の血みどろな闘い」が繰り広げられる人間の〈劇〉を描くものであった。河や廃墟が「黙ってその「眼」で多くの者の人生を見ていた」ように、遠藤もまたトパスを通じて黙って「多くの者の人生を見ていた」のであり、そこから生成される人間の〈劇〉を創作へと繋げていったのである。このようにして遠藤は歴史小説ばかりではなくほとんどの小説を〈廃墟〉というトパスから創作していったと言える。特に「河」に関しては、『メナム河の日本人』『鉄の首枷 小西行長伝』『銃と十字架』『王国への道―山田長政―』におけるメナム河、『男の一生』における長良川、『深い河』におけるガンジス河へと展開する。

七、おわりに

以上、遠藤文学の根幹に関わる六つのトパスについて考察してみた。こうして見るとき、人間の〈劇〉を生成するトパスに対する遠藤の愛着や関心の深さを改めて知ることが出来よう。また、遠藤がそこまで深くトパスに

こだわったのは、人間を見つめる作家の「眼」があったからとも言える。時として、人間の〈悪〉や〈テレーズ〉の生を見つめることもあるし、〈留学〉を通じて異文化の「距離感」を見つめることもあった。〈日常性〉や〈弱者〉を通じて平凡な生活の意味を見つめることもあった。そして、時間を超えて〈廃墟〉の中に息づく人間の人生を見つめることもあった。このように遠藤は様々なトポスを通じて人間の人生を見つめ、生成された人間の〈劇〉を創作へと結びつけていったのである。ここに遠藤文学の根幹を指摘できる。

① 遠藤周作「白人の小説について」(『毎日新聞』、一九五五・昭和三十年七月二十八日)

② 遠藤周作「海と毒薬」ノート―日記より―(「批評」、一九六五・昭和四十年四月)

③ 黒ミサに関して遠藤がどの程度知識を持っていたかはわからないが、先輩作家である柴田錬三郎が新しい主人公の造型に悩んでいる時に、黒ミサによって生まれた主人公を勧めたというエピソードがある。遠藤のアドバースにより生れたのが眠狂四郎であった。

柴田 ありましたよ。で、キミがそそのかしたんだよ、黒ミサで生まれた子にしろって。

遠藤 そうそう。あのころ、僕は黒ミサの本など読みふけていたから、その話をしたことがあります。

柴田 オレもキリシタンというものは読んでたしさ、バテレンと日本人の合いの子というので、ちようどうまく結びついちゃったわけだ。

遠藤 それじゃア僕は、日本大衆小説史に残る「眠狂四郎」の助産婦みたいなものですなア。

(初出…「週刊読売」一九七四・昭和四十九年六月二十二日号／『ぐうたら会話集 第2集』角川文庫、一九七八・昭和五十三年十月、所収)

柴田錬三郎が『眠狂四郎無頼控』の連載を始めたのが一九五六・昭和三十一年五月なので、このエピソードはそれより少し前のことになる。ということは、遠藤はフランス留学から帰国した一九五六・昭和三十一年頃、「黒ミサの本など読みふけていた」ということになる。

④ 遠藤周作「冬―霧の夜」(『フランスの大学生』早川書房、一九五三・昭和二十八年七月、所収)

⑤ 遠藤周作「恋愛とフランス大学生」(『群像』、一九五一・昭和二十六年二月号)

⑥ 遠藤周作「フランスにおける異国の学生たち」(『群像』、一九五一・昭和二十六年九月号)

⑦ 遠藤は「日記」での体験をもとに、「イレレーヌ」と「こびと」という架空の人物を設定し、「フランスにおける異国の学生たち」(のちに「フォンスの井戸」と改題)として発表した。そして、この作について遠藤は「実際に起った事件に基づく私のはじめの小説だといってよい。」として「処女作ともいうべき」作品と呼んでいる。

(遠藤周作「背後をふりかえる時」／『昭和文学全集21 小島信夫・庄野潤三・遠藤周作・阿川弘之』小学館、一九八七・昭和六十二年七月)

⑧ 遠藤周作「モーリヤックと私」(『朝日新聞夕刊』、一九七〇・昭和四十五年九月四日)

⑨ 遠藤周作「フランソワ・モーリヤック」(『近代文学』、一九五〇・昭和二十五年一月号)には初めてモーリヤックの作品を読んだことが次のように語られている。

此のノートをとる為に数年前、はじめて貴方の作品を読んだ六甲山のふもとにぼくは帰って来た。

⑩ 遠藤周作の初期評論「神々と神と」(『四季』、一九四七・昭和二十二年十二月)では、この「距離感」について詳細に論じられている。

⑪ 遠藤周作「出世作のころ」(『読売新聞』、一九六八・昭和四十三年二月五日〜十三日)

⑫ 遠藤周作「切支丹時代の智識人」(『展望』、一九六六・昭和四十一年一月号)

⑬ 遠藤周作「『沈黙』―踏絵が育てた想像」(『朝日新聞』、一九六七・昭和四十二年八月二十五日)

⑭ 遠藤は切支丹研究を始めた頃、恩師である上智大学のH・チースリク教授と次のようなやり取りを交わしたことがある。

三浦朱門と私とが上智大学のチースリク先生を週に一回たずね、この切支丹の碩学から転び者の一人、一人について教えを乞うたあの日々のことを私は今、なつかしく思います。「どうして、あなたたちは」とチースリク先生はある日、苦笑して言われた。「転び者に興味をもつのですか」

私は笑って黙っていた。しかし唇にその返事はほとんど出かかっていた。「それは……私が小説家だからです。そして私が彼等に近い……からです」

⑮注⑭に同じ。
(傍線部引用者／「一枚の踏絵から」／『切支丹の里』人文書院、一九七一・昭和四十六年一月)

⑯遠藤周作の歴史小説の分類やジャンルについては、拙稿「遠藤周作の歴史小説の一側面―松田毅一との関連をめぐって―」(『遠藤周作研究』第四号、二〇一三・平成二十三年九月)を参照されたい。

⑰『作家の日記』(作品社、一九八〇・昭和五十五年九月)の「一九五〇年七月二三日」の項には次のようにある。
ジュミエージュの〈廃墟〉

「この廃院は絶対的な印象をぼくに与えた。」

⑱遠藤周作「廃墟の眼」(『狐狸庵閑話』桃源社、一九六五・昭和四十年七月、所収)

第三章 『黄色い人』論―逆説的な「恩寵の世界」の提示―

一、事実と創作の間

『黄色い人』は、芥川賞受賞作『白い人』（初出：『近代文学』一九五五・昭和三十年五、六月）に続き、一九五五・昭和三十年十一月、『群像』に発表された、遠藤周作の初期に属する作品である。作家として出発して間もない時期だけに、初出においても地名や語句の誤謬等はかなり数の数に上る。これらの誤謬は、単行本（『白い人・黄色い人』講談社、一九五五・昭和三十年十二月）や全集（『遠藤周作全集第一巻』新潮社、一九七五・昭和五十年六月）収録の際、大部分訂正されている①が、何度か繰り返された改訂でもなお歴史的事実との齟齬が見られる。特に作品の時代背景を語る上で欠かせない、川西工場の空襲の日は全く事実と異なる②。これは、「黄色い人」の構成上の問題とも深く関わるので、少し煩雑になるが先に指摘しておきたい。

本文から読み取れる空襲の日付は二つ存在する。(1)昭和二十年三月中旬と、(2)昭和十九年十二月二十五日であり、両方とも「川西工場」のモデル、「川西航空機株式会社宝塚製作所」が空襲に遭った昭和二十年七月二十四日③と明らかに異なる。ちなみに、この時の空襲では、B 29と小型艦載機あわせて約一五〇機から爆弾が投下され、二〇機ないし四〇機による波状攻撃が、宝塚製作所を目標に、加えられている。会社側の報告では、死者八十三名、重傷者三十九名に及ぶ。当然この中には、学徒動員されていた関西学院、神戸女学院、兵庫県立伊丹中学校、同第一中学校などの学生・生徒や、女子挺身隊として働いていた小林聖心女子学院（注：糸子の通う聖母女学園のモデル）、宝塚音楽歌劇学校の生徒も含まれている（参照：『宝塚市史第三巻』一九七七・昭和五十二年三月）。しかも、山根道公氏編の年譜④によると、遠藤周作は「終戦の少し前には仁川の母の家に帰り」、「仁川にある川

西の飛行機工場をB 29が襲うのを目撃」して、単なる過失とは考えにくい。作者がそこになんらかの意図を込めていると考えるべきだろう。

少し詳しく追ってみよう。デュランの日記の日付と、千葉の手紙の言葉からブドウ神父が逮捕された日は昭和十九年十二月二十五日と推測される。その上で、まず「の千葉の手紙を見ると、「その通り昨年の寒かった冬の」と、デュランさんと会った夜、貴方が西宮の特高につれていかれた朝のことをカンタンに述べようとしているのですが、まだ三カ月もたたぬあれらの思い出も、……」（傍線部引用者／二六五頁）とある。これを手掛かりとすれば、空襲の日は、川島秀一氏⑤が推測する昭和二十年三月中旬となる。言うまでもなく、日本への空襲はこの頃から激化し、三月九、十日の東京大空襲を皮切りに大都市への大規模な空襲（三月十三日名古屋、三月十四日大阪、三月十七日神戸）が開始された時期であり、時代状況を盛り込む意味では無理のない設定と言える。しかし、Ⅲでは、昭和十九年十二月二十五日クリスマス夕方に、川西工場が空襲に遭い、その爆撃でデュランは自分の日記を千葉に託して死に、爆風に巻き込まれた糸子もベッドで血を流し半死半生の状態であるにも関わらず、その二人を放置したままブドウ神父への手紙を千葉が執筆していることになっている。手紙の末尾には、「ちびた蠟燭の下でかいたこの手紙ももう筆をおきましょう。もう真夜中です。クリスマスの夜だということを忘れていました。」（三二二頁）とあり、この言葉を信じるならば、この日は昭和十九年十二月二十五日となる。宮坂覺氏⑥はこちらを小説内時間としている。となれば、「で手紙を書き始めたときの、「まだ三カ月もたたぬあれらの思い出」という言葉（すなわち、川西工場空襲の日が昭和二十年三月中旬であること）と明らかに矛盾が生じる。もう一度整理すると川西工場空襲の日は、「黄色い人」の作品内では次の二つが存在するのだ。

(1) 昭和二十年三月中旬………「を手掛かりとする。

(2) 昭和十九年十二月二十五日………Ⅲを手掛かりとする。

単純に考えれば、作者が最初、(1)に設定した上で執筆を進めながら、Ⅲに至り(1)を忘れてしまい、(2)の設定で

終わらせてしまったのであろう。だとすれば、(1)の設定で読みすすめ、㉔の「クリスマスの夜」に手紙を書いているという設定に目をつぶれば、何ら問題はないし、おそらくこれまではそういうものとして読まれてきたはずだ。だが問題は、なぜそのような変更が生じたのかにある。つまり、(2)昭和十九年十二月二十五日のクリスマスにこめられたカトリック作家・遠藤周作の意図である。たとえ、作品に矛盾が生じようとも、クリスマスの夜に、デュランや糸子の死体を置き、千葉に神父宛の手紙を書かせたことは、「すべての穢れを夜、ひそやかに浄化する雪のなかに自分の罪の象徴である女を埋めた」⑦『宿命』の主人公に示された「救いの路」と同じ意味を持つ行為なのだ。すなわち、「罪を浄化する」雪の代わりとしてクリスマスの夜に、「罪の象徴」であるデュランや糸子、千葉、あるいはキミコを手紙の中に記録すること、すなわち埋めることに、千葉のひそやかな「救いの路」を遠藤は示したかったのではないだろうか。少なくとも千葉の手紙が神父宛に書かれたものであることの意味は大きい。そこで、このことを中心に以下論を進めたい。

二、「手記」形式の問題

『黄色い人』は、高槻の収容所に拘留されているブラウ神父に宛てた医学生千葉の手紙と背教神父デュランの日記が交互に組み合わせられ構成されている。全七章のうち、㉑・㉒・㉓・㉔が千葉の手紙、㉕・㉖・㉗がデュランの日記となっていて、日記を書いている時点でのデュランの視点と、デュランの日記を読んだ上で自分の経験を照らし合わせる千葉の視点、さらに双方と関わり最終的に千葉の手紙を読む立場にあるブラウ神父の視点、以上三つの視点が重なり、交錯して乱反射しながら、人間内部の深層をかいま見せる構図となっている。読者に提示されるのは、多方向から立体的に浮かび上がるそれぞれの人間の外面と内面であり、それはまた西洋人や東洋

人の違いといった、単なる人種の問題に収斂されない「魂の領域」にまで及ぶ。なかでも、手紙の経過と共に千葉の内面に変化が見られることは重要であり、その意味で『黄色い人』の主人公は千葉であると言えよう。というのも、何事にも無関心で、罪の意識もないことを告白する千葉が、一見つかみ所がないため、「戦時下の半病人の怠け学生が、自分の恋や疲労やを、悉く自分が黄色人種であるせいにするのは狡い」⑧という安易な批判の対象となったり、「むしろ、作品の主題は黄色人種に対比される二人の白人（一人は背教者、一人は神父）の生の選択にある」⑨と、千葉よりもブロウやデュランの（劇）に重点を置いた見方も可能であるからだ。しかし、ここで重要なことは、先の構成上の破綻とも関係するが、仁川に帰省して約二カ月間ただ「ふかい疲れだけ」を感じて受動的だった千葉が、はじめて自ら手紙を書くという積極的な行為に出たことである。警察にあらぬ嫌疑をかけられる危険を冒してまでも手紙を書かざるを得なかった千葉の内面の衝動。これこそ『黄色い人』の主題と言えよう。ではそれは何か。結論を先に言えば、〈白い人〉に対する、〈黄色い人〉としての反発と、その裏に潜む「罪の浄化への願望」である。従来論で、「白い人と黄色い人の距離感」は繰り返し問題とされてきたが、この救済の可能性も考慮した上で、千葉の微妙な心の動きに目を留めるべきであろう。例えば、千葉は神父宛の手紙を書いた理由を次のように述べる。

しかし、貴方のように純白な世界ほどぼく等、黄いろい者たちから隔たったものはない。それがこの手紙をしたためさせた、理由になるかもしれない。

（『黄色い人』）

この訴えには、ブロウ神父に対する千葉の反発を見てとれる。それは、罪の感覚がなく、死ぬことにも無関心であることを標榜していた千葉が、その裏でどれだけ罪の問題に悩まされ、死の恐怖におびえていたかを逆に暗示するものである。だからこそ、罪や死の問題に悩まされることもなくひたすら信仰に殉じることのできるブロウ神父に対して嫉妬ともいえるべき反発が千葉の内部に起っているのだ。さらに、作者がこだわった前述のクリスマス

スの意味と絡めると、わざわざクリスマス之夜にプロウ神父への手紙を書いた千葉の心理の奥底に、「罪の浄化への願望」を読み取るべきだろう。

その理由として第一に、『黄色い人』には、カトリック小説の方法が意識的に採用されていることがあげられる。たとえば、『黄色い人』で「神があるうとなかるうとどうでもよい」千葉がプロウ神父に書き送る手紙から始まるのは、モーリヤックの『黒い天使』で、「神などを勿論、信じない」ガブリエルが、若い司祭に書き送る手紙から始まる形式を借りたものである。ならば、ガブリエル同様、『黄色い人』の千葉においても、「自分の過去」を語る背後に「告白の秘蹟」がもたらす「罪の浄化の願望が潜んでいる」ことは十分に考えられるだろう。ちなみに、この他にもデュランがキミコに「憐憫」をかけたために、彼女を助けるどころか自らも罪に陥ってしまうという「憐憫の地獄絵図」は、グリーンンの『事件の核心』から借りたものであり、千葉やデュランがそれぞれ自己の内面を過去に遡り追求することはモーリヤックの『テレーズ・デスケルウ』におけるテレーズの内面の探求から借りた形式である。ある意味で『黄色い人』は、こうした多種多様なカトリック小説の形式のモザイクであり、作品の端々でその継ぎ目が見え隠れするところに欠点があるといつてよい。ただ、『黄色い人』があくまでもカトリック小説の方法を用いている以上、その文脈で作者が意図したものを読み取った上で作品の評価を下すべきであろう。こうした側面から見たとしても、残念ながら『黄色い人』は不首尾に終わっている。

第二の理由として、糸子やキミコに込められたダブル・イメージの問題がある。これは一人の人物に二つのイメージを重ねて作品に重層性を与えるもので、遠藤作品では多用されている。遠藤周作はおそらくこれをグリーンの『モイラ』から学んだと思われる。例えば次の箇所である。

それに、この原題の「モイラ」と言う言葉には二つの意味があります。一つはわれわれ人間を最初に原罪にみちびいたアダムの妻、エバ、もう一つは聖母マリアの意味です。モイラは主人公をエバの如く罪に誘いました。しかし、この小説がかたならなかった部分、永遠の余白の部分ではもう一人の女マリアが彼を浄化す

る世界に導くでありましょう。

（傍線部引用者／遠藤周作『カトリック作家の問題』早川書房、一九五四・昭和二十九年七月）

ここから遠藤がモイラからエバと聖母マリアのダブル・イメージを読み取っていることがわかるだろう。これを『黄色い人』にあてはめると糸子にもキミコにもダブル・イメージが読み取れる。糸子には婚約者の佐伯を裏切り千葉を「不倫」の罪へと墮落させる点ではエバのイメージが込められており、一方で「聖母のメダイユ」を胸にかけ、幼い頃の「聖家族ごっこ」では聖母マリアを演じた点では、千葉に残された「救いの路」を示す聖母の役割を果たしている。キミコには、デュランを罪へと誘惑した点ではエバのイメージが重ねられ、一方でデュランを救う聖母的な役割もある。異教の方法ながらも「神を忘れて」「罪と死を重ねれば」「苦しみを忘れることができる」とデュランに啓示を与えたのはキミコだったからである。勿論それはデュランの「罪の浄化」でなく、「救いの路」の雛形に過ぎない。また、キミコの聖母的イメージを詳細にみると、さらなるダブル・イメージを読み取ることができる。つまり、「聖母マリア」と「マグダラのマリア」という二人の「マリア」のダブル・イメージをも含まれてくるのである。しかも、「マグダラのマリア」^⑩こそ「イブ的なもの聖母的なものとのあいだを」「さまよった」女性であり、「恩寵なき世界」と「恩寵の世界」に二分される遠藤の人間観の体現者でもある重要な人物であるのだ。^⑪

第三の理由として、罪や死をめぐる千葉の苦悩と、遠藤の結核体験との類似性が挙げられる。勿論、千葉と遠藤は同一人物ではない。だが遠藤が肺病に冒された千葉を造形する際に、戦時中とフランス留学中の二度結核に苦しみ死の恐怖に襲われた自己の体験を下敷きにしたことは十分に考えられる。ならば、フランス留学中結核が再発して「死の恐怖のくるしみの中で、ぼくは恩寵なき世界を浄化する聖母の光をみた」^⑫遠藤の信仰回復体験が、いくぶんでも作品に反映する可能性はあろう。「恩寵なき世界」と「恩寵の世界」を両極とした魂の（劇）はデュランのみならず千葉においても存在すると考えるからだ。

三、魂の〈劇〉

では、千葉における魂の〈劇〉を見てみよう。手紙の中で千葉は、母や叔母の手によってカトリックの洗礼を受け「無邪気な少年」を装っていた幼年時代にまで遡り内面の追究を始める。ここで自らの偽善に目が向けられ、ブラウ神父はそれに騙されていたと告白するが、その上で次のようにブラウ神父に対して疑問を投げかける。

結局、神父さん、人間の業とか罪とかはあなたたちの教会の告解室ですまされるように簡単にきめたり、分類したりできるものではないのではありませんか。(中略)黄色人の僕には、繰り返していいますがあなたたちのような罪の意識や虚無などのような深刻なもの、大袈裟なものはないのです。あるのは、疲れだけ、深い疲れだけ。ぼくの黄ばんだ肌の色のように濁り、湿り、重く沈んだ疲労だけなのです。

(『黄色い人』)

ここで千葉は告解という信仰の形式だけではつかみ切れない、人間の業や罪の深さをおぼろげながら感じ取っているのだ。ブラウ神父に対する違和感はこのから始まる。さらに千葉は糸子と「聖家族ごっこ」をして遊んだ古墳の闇の中に「甘美な死の臭気」を嗅ぎ、「異教の静かな死」の「あやしい魅惑」に誘惑されている。だが、いずれにせよ幼年時代から汎神論的な誘惑にさらされ、その一方でブラウ神父と関わっていることは「恩寵なき世界」と「恩寵の世界」の間で揺れる千葉の精神状態の原点を如実にあらわすものとなる。

次に千葉の内面の追究は三年前、そして医学生となった二年前へと進む。この頃、千葉は教会から離れるが理由は明確ではない。しかし結核にかかり自己の死が間近に迫ったことや、戦争の悪化で毎日多くの死体と息をひきとる罹災者に間近で接していたこととも無関係ではない。千葉は忍び寄る死の恐怖を前にして心も体も疲れ果

てており、「金色の髪、金色の髭をもった基督」という「この一人の白人を消化する気力」も消耗し切っていたからである。また千葉は結核の宣告を受けた直後に「ふしぎに死は恐ろしくも身近にも感ぜられませんでした」と述懐しているが、これは衝撃があまりにも大きすぎて判断停止状態になっていたと考えられる。「戦争に勝とうが負けようがどうでもよかった」のも、多くの人が戦争のために次々と死んでゆくのを聞いても自己の死以外に他のことを考える余地がなかったのだろう。

それゆえに千葉は「死の臭い」のない糸子と関係を結ぶことを「暗い時代から目を背」けたかったからという。対する糸子もまた、今は「三重の津の飛行隊」にいてやがては「特攻隊」に配属される婚約者の佐伯がいずれば戦死する運命にあるという不安を抱えており、二人の「不倫」の行為は暗い現実から目を背けたいという共通の願望の象徴となっている。後に情性的に何度も繰り返される二人の行為は、言うなれば愛情でも情欲でもなく現実逃避なのだ。そんな千葉や糸子と対照的なのが「ミサをたて、告悔をきき、病人を見舞い、自分の信仰、自分の使命のために働くことのできる」ブrou神父の「新鮮な真白いカラー」に象徴される「恩寵の世界」である。その「真白なカラー」も千葉にあつては「灰色の膜」の中に消えてしまうが、そのあとに千葉の心に残るのが瓦礫の中に埋もれた老人の静かな死の姿であることは注意してよい。その静かな死は幼年時代の千葉が古墳の闇の中で感じた「異教の死の恐怖も罪のおびえも、永遠の地獄もない静かさ」と同質の汎神論的な誘惑であるからだ。それはまさに「恩寵なき世界」を暗示するものでもある。

以上見てきたように千葉は仁川に帰省する以前、既に罪や死と深く関わり苦闘しており、その一方でブrou神父の姿を自分とは異質なものとしながらも気にかけてきた。ただ、ブrou神父と千葉との距離は「疲労感」に象徴される感覚的で不分明なものであり手紙の末尾で告白された反発のようなものはまだ形を取っていない。この千葉の反発が次第に嵩じていくのは、仁川に帰省した後関わりを持つデュランの姿と彼の日記を通してとなる。そこで次にデュランを追ってみよう。デュランは十二年前に宣教師としてフランスから日本に渡ってきた。昭

和十二年の阪神大水害^⑬のあと偶然知り合ったキミコと不倫な関係を結んでしまったために教会から追われてしまい、今はブrou神父から渡されるわずかなお金でキミコとひっそり暮らしている。戦争の悪化に伴い外国人に対する警察や憲兵の取り締りが厳しくなっていく中でデュランは、自殺するために手に入れたピストルをどう処理するか苦闘する。そんなデュランを襲うのが、基督を裏切って自殺したユダの姿であり、死後も地獄で苦しむ自分の姿である。この神の刑罰は死への恐怖としてデュランに自殺を思い止まらせているが、千葉を誘惑する「異教の静かな死」と両極に位置する。つまり、千葉のいう「静かな死」とは死後神に裁かれる恐れがないゆえに「静か」なのだ。

デュランはキミコに啓示を受けて神を忘れようと決意する。その際「黄色い人」の眼を、「神と罪とに無感覚な眼」「死にたいする無感動な眼」と理解していく。すなわち、「黄色い人」は「神と罪とに無感覚」であり、「死に無感動」であるというのだ。注意しておきたいのは、これらが繰り返す千葉が訴える「黄色い人」の特徴であることだ。デュランに千葉が共感していた証拠と言えよう。ところが、このデュランの「黄色い人」観は主観的で一面的でしかない。例えば、千葉が初めてデュランの家を訪問した時、そこから感じ取ったのは罪の臭いであった。

もし、罪というものに臭いがあるなら、憎悪、嫉妬、呪詛に臭いがあるならその臭気だったのでありませんか。
（『黄色い人』）

あれほど罪がわからないことを繰り返し告白する千葉が、ここで罪の臭いをかいていることは注意してよいだろう。たとえ罪意識が欠如しているかに見える千葉にも罪を敏感に察知する感性は持っているのだ。この点で「罪がわからない」という本人の告白と明らかに相違する。

デュランは「罪と死に無感動」な「黄色い人」のようになるためブrou神父を裏切る。だがデュランが人目を避けてブrou神父の書齋に侵入した時、『パンセ』の「イエズスの秘儀」の章^⑭が机の上に開かれてあった。そこ

にはイエスとユダのイメージがそれぞれ投影された、ブrou神父とデュランの関係が示されている。

（哀愁の中のイエズス）

（基督はユダのうちに敵意を見ず、自分の愛する神の命令を見、それを言いあらわし給う。なぜなら、ユダを友と呼び給うからである）

（イエズスは世の終りまで苦悶し給うであろう。その間我々は眠ってはならぬ）

（『黄色い人』）

デュランの苦悩はユダのような背教者をも神は救いうるのかという点にあった。だからこそ裏切者の代表者であるユダをイエスは救いえなかったのか、神が全能であるならばユダをも救いうるはずではないのか、といった疑問を持っていた。そんなデュランに対するブrou神父の回答がここにある。さらに「カナの奇蹟」にダブル・イメージが付される。一つはデュランを墮落へと導いた悪魔の策略としての奇蹟。デュランの「憐憫」が「姦淫」へと置き換えられたこと。もう一つは神の恩寵としての奇蹟。デュランを「破滅」へと導く象徴としてのピストルが「救済」の象徴へと置き換えられたことである。つまり、先のデュランに対してブrou神父はユダのような背教者をも救い得る「救済」の路をしめたのである。それは「やっぱりカトリシズムはカナの奇蹟です、ピエール。あなたを自殺においやろうとしたものは今日から永遠に消えるでしょう」（全集三一六頁）というブrou神父の言葉がすべてを物語っている。それに対してデュランは日記で「私は**最初**ブrouの不思議な言葉の意味を取ることができなかった」（傍線部引用者）と記している。「最初」わからなかったということは、後になってわかったことを意味している。いつの時点でわかったかは日記には記されていない。しかし、ブrou神父と話を交わしたその帰り道で「黄色い人」との距離を認識して「白い人」であることを自覚したデュランにとって残された路は「神を信ずるか、憎むか、どちらか」しかない。明後日のクリスマスに「晴れていたらだろう」とぼんやり願い、クリスマスの日に日記を千葉に託したことを考えあわせるとそこにデュランの信仰回復を見て取るべ

きだろう。

結局デュランは「黄色い人」の「魂の秘密」に近づくことができたにせよ「白い人」としての生き方に殉じていく。「恩寵の世界」と「恩寵なき世界」の往還であるのだ。その軌跡の中でデュランは「白い人と黄色い人の距離感」を実感して「白い人」の世界へ戻っていかうとするが、爆弾で死ぬ。そんなデュランの見つけた「距離感」に対する共感が、千葉に手紙を書かせた衝動の正体であった。つまり、千葉はデュランの死と日記を通して「恩寵なき世界」である「黄色い人」の姿と「恩寵の世界」にある「白い人」の姿を認識することが可能となったのである。それゆえに「白い人」に対して反発する気持ちが生まれたのだ。それはまた「神なき人間の悲惨」を訴えることでもあり、逆説的な「罪の浄化への願望」であるといえよう。以上のように『黄色い人』はデュランに促された千葉の内面に生じた「白い人と黄色い人の距離感」発生の「劇」であると結論付けられよう。

四、エピグラフの問題

補足としてエピグラフの問題を付け加えたい。周知のように『黄色い人』には二つのエピグラフがある。これまでエピグラフが持つ意味に関してはあまり注目されなかったが、近年、笛木美佳、井上万梨恵の両氏による共同研究^⑮によって第一エピグラフの出典についてほぼ解明されつつある。残るは第二エピグラフであるが、これについて問題提起をしたい。

第二エピグラフは黙示録三章十五、十六節である。カトリックである遠藤が聖書の引用をするのは特別なことではないが、ここにはドストエフスキーの影響を見てとれる。なぜなら、この箇所はドストエフスキー『悪霊』の中の「スタヴローギンの告白」に引用されており、遠藤が最も影響を受けたところであるからだ。

そもそも遠藤のドストエフスキー体験は学生時代に遡る。次の証言がある。

はじめてドストエーフスキーの作品を読んだのは十八歳の時である。図書館から借りだした米川氏訳の『罪と罰』だった。私の学生時代にはこの作品は青春の必読書にあげられていたから、あの当時には私だけでなく、多くの人が同じように『罪と罰』か『地下生活者の手記』からドストエーフスキーを読みだしたにちがいない。

その時、どこまで理解したか全く自信がない。熱が出て幻影でも見ている気持だったのを憶えている。

（傍線部引用者／遠藤周作「アンケート われらとドストエーフスキー」／荒正人編著『ドストエーフスキーの世界』河出書房新社、一九五三・昭和三十八年十一月）

遠藤が十八歳の一九四一（昭和十六）年頃と言えば、一九三四（昭和九）年に巻き起こった「シエストフ的不安」⑩により、転向問題も含めて『悪霊』の本格的受容が始まり、戦後のドストエーフスキー大流行⑪の萌芽を形成していた頃である。

さらに、遠藤は『悪霊』体験とも呼ぶべき衝撃をフランス留学時に受ける。

二十年近く前にリヨンにいた頃、むし暑い夏休み、私は仏訳で『悪霊』を読んだことがあった。学生時代、米川正夫氏の訳でこれも河出書房版のドストエーフスキー全集を拡げて以来の経験であった。その時『悪霊』のなかの「スタヴローギンの告白」に眩暈のするような感動をおぼえ、『白痴』のうまさに舌をまいた。学生時代は訳もわからず、義務のようにめくっていた頁が、改めて新しい光をあてられたような気持だった。小説技術的にも何とすごい作家だと思った。

（傍線部引用者／遠藤周作「ドストエーフスキーと私」／河出書房新社刊『ドストエーフスキー全集』月報、一九六九・昭和四十四年八月）

この時の様子を日記には次のように書いてある。

夜、ドストエフスキイの『悪霊』中の「スタヴローギンの告白」を読みかえしてみた（テキストの仏訳本は仏蘭西出版のものではなく、ベルギ版ラ・ボエシー版のもの、N・ポラヴツェフの翻訳）。

しかし、フランス語の素晴らしさよ、かつて日本語版で読んだ（二度）時、気のつかなかった各語の深長さが、まず、ぼくを驚かした（日本版、米川正夫訳について、ぼくはかねてから不満であった）。

（傍線部引用者／「一九五二年八月二十五日」／遠藤周作『作家の日記』福武文庫、一九九六・平成八年十月）

ここで遠藤はフランス語で『悪霊』を読み感銘を受けている。しかも、『悪霊』の中でも「スタヴローギンの告白」を読んだ意味は大きい。「黄色い人」の第二エピソードに引用された黙示録十三章がここに引用されているからである。子供の頃から聖書に慣れ親しんでいた遠藤は黙示録のこの聖句を当然知っていたはずであるが、ドストエフスキイによって新たに喚起されたに違いない。また、この聖句は、フランス留学中に日本と西洋の距離という問題に直面していた遠藤にとって日本人について考える大きなヒントになったと考えられる。しかも、「スタヴローギンの告白」が内包する「手記」や「告白」の問題は、そのまま「黄色い人」の「手記」形式や「告白」の意味と共通するものがあり、『悪霊』の痕跡を垣間見ることが出来る。

※本文の引用は『遠藤周作文学全集第一巻』（新潮社、一九七五・昭和五十年六月）に拠った。

注

① 「黄色い人」の初出（『群像』、一九五五・昭和三十年十一月）と、全集（『遠藤周作文学全集第一巻』新潮社、一九七五・昭和五十年六月）では、地名や語句の間違い等の訂正箇所が四十二箇所あったが、内容上の異同はない。

② ちなみに、阪神大水害も時期が間違っている。本文中では、「あれは昭和十二年の九月十一日だった。」（ロデュランの日記）とあるが、実際は昭和十三年七月五日であり、これは単なる作者の誤りと考えられる。

③ 参考までにアメリカ側の資料（『米軍資料 日本空襲の全容 マリアナ基地B 29部隊』東方出版、一九九五・平成七年四月）の一部（必要と判断した箇所のみ適宜抜粋した）を提示しておく。これを見ると、日付ばかりか「黄色い人」で「黄昏」と描かれた空襲の時間も異なることが明らかである。

作戦任務第二八五号

一、日付 一九四五年七月二四日

二、目標 川西航空機宝塚製作所

四、出撃機数 八十八機

八、第一目標上空時間 七月二四日十時三十三分～十一時三分

十二、作戦任務の概要早期の弾着写真によると、目標はほぼ破壊。目標の北と南にある工員宿舎は酷い損害。写真偵察は目標の77%に損害を与えたことを示した。一機だけが目標を目視しなかった。目標に投下された爆弾九四九個のうち、四一八個が平均弾着点の、一、〇〇〇フィート以内に命中。

(以下略)

- ④ 『高原文庫』(一九九八・平成十年七月)
- ⑤ 川島秀一「『黄色い人』論―遠藤周作ノート(6)―」『日本文芸論集』(一九九〇・平成二年九月)のち『遠藤周作 愛の同伴者』(和泉書院、一九九三・平成五年六月)所収
- ⑥ 宮坂覺「『アデンまで』『白い人・黄色い人』」(山形和美編『遠藤周作―その文学世界』国研出版、一九九七・平成九年十二月、所収)

⑦ 遠藤周作『カトリック作家の問題』(早川書房、一九五四・昭和二十九年七月)

⑧ 中村真一郎「今月の問題作五選「黄色い人」」(『文学界』、一九五五・昭和三十年十二月)

⑨ 池内輝雄「白い人・黄色い人」(『国文学解釈と鑑賞』、一九七五・昭和五十年六月)

⑩ 遠藤周作『聖書のなかの女性たち』(角川書店、一九六〇・昭和三十五年十二月)

⑪ 遠藤周作『作家の日記』(作品社、一九八〇・昭和五十五年九月)に「恩寵なき世界」と「恩寵の世界」に二分される「(人間)の映像」について次のように論及されている。

「一九五一年一月二十四日(水)」

：何故だか知らぬが、今のぼくの人生を支えているものは、人間のふしぎと無限の暗黒へ対する執拗な興味である。ぼくは人間を思う時、あるほの暗い湿地帯、沼のように光のはいらぬものに身をかがめようとする。その中にぼくが段々ひきずりこまれていく時――ぼくは一枚の古い枯葉のように暗淵の中でねむるが――あるいは一条の莊嚴な恩寵のひかりを発見するにかかっている。

今考えてみると、このぼくの「人間」の映像を沼に結びつけるものは、仁川の家の裏山にあった、古い小沼からきているのかもしれない。

「一九五一年二月十九日（月）」

この世界、二つの世界がある。一つは自然的世界であり恩寵なき世界である。

それは一月二十四日にぼくの心に結ばれた映像であった。その時ぼくは又、別の世界のありうる事、恩寵の世界のありうる事を無視した。しかし昨夜死の恐怖のくるしみの中で、ぼくは恩寵なき世界を浄化する聖母の光をみたのである。それは、自然的世界の、ぷよぷよした湿地帯を透明にうつくしく、変容してしまうものであるに違いない。

（傍線部引用者／『作家の日記』）

ここにあらわれた人間観は作家・遠藤周作の原点とも言いうる重要な箇所である。また、この日記の中で思いつきの地として仁川の沼を取り上げて、この沼は『沈黙』における「日本泥沼論」へと展開する重要な課題を孕んでいると考えられる。

⑫ 注⑪に同じ。遠藤周作『作家の日記』「一九五一年二月十九日（月）」

⑬ 注②で指摘したようにこれは過ち。実際は昭和十三年七月五日である。

⑭ 『パンセ』「イエズスの秘儀」の章は、のちに「同伴者イエス」像へと展開する。遠藤のキリスト教観の原点とも言い得る重要な箇所である。

⑮ 笛木美佳、井上万梨恵「遠藤周作「黄色い人」論…第一エピソードをめぐって」（『遠藤周作研究』第七号、二〇一四・平成二十六年九月）

⑯ 当時、社会主義者への弾圧が強化され、様々な検挙事件が相次いだ。検挙後の拷問などによって転向者が続出して、加え、シエストフ『悲劇の哲学―ドストエフスキーとニーチェ』（阿部六郎・河上徹太郎訳 芝書店、一九三四・昭和九年）が引き金となった。

⑰ 遠藤は戦後のドストエフスキー大流行の様子について評論「シャルル・ペギイの場合」（『三田文学』一九四八・昭和二十三年十二月号）で詳細に語っている。

第四章 『海と毒薬』論―「トポス」をめぐる「手記」―

一、問題の所在

『海と毒薬』は、「文学界」の一九五七（昭和三十二）年六、八、十月号に連載され、一九五八（昭和三十三）年四月に文藝春秋新社より刊行された。同年第十二回毎日出版文化賞と第五回新潮社文学賞の二つの賞を受賞し大きな反響を巻き起こした作品である。戦時中に起った九州大学医学部生体解剖事件、いわゆる相川事件をモデルとして日本の戦争犯罪、ひいては日本人の罪意識を主題として描かれている。先行研究を見ると、主に「日本文化や風土の問題」、「神なき人間の悲惨」、「日本人の罪意識の欠如」の三つをめぐる議論されてきた。これらの文学的課題は最初に山本健吉が提出し①、現代に至る数多くの論文②の中で様々な角度から検討を加えられているが、主題に関する議論はこの三つにほぼ集約されているように思える。だがその一方で作品の構造や作品中における「手記」が持つ意味などに注目した研究は数少ない。影山恒男氏③、細川正義氏④、大田正紀氏⑤、下山嬢子氏⑥など数本が散見できる程度である。

そこで本稿では「手記」に注目し、作品の構造の見直しを図りたい。さらに、「悪の行われた場所」⑦という「トポス」の問題⑧も取り上げ、作品構造に潜む二項対立の問題など様々な問題も合わせて考察することとする。

二、「手記」の所在

まずは大まかな作品構造を示し、「手記」形式の所在を明らかにしていきたい。『海と毒薬』は「第一章 海と毒薬」「第二章 裁かれる人々」「第三章 夜のあけるまで」の三部で構成される。

第一章は、章番号のない部分（以下、「序章」と呼ぶ）と章番号のある「Ⅰ」「Ⅱ」の二つに区分され、それぞれ「東京の新興住宅地に引越してきた会社員の〈私〉が、その地で開業している医師の勝呂の過去を知るに至るまでの経緯」⑨と、「戦争末期に勝呂やその同僚であった戸田が生体解剖に参加するに至るまでの過程」⑩が描かれている。まずこの「序章」が〈私〉の「手記」である。

第二章は「Ⅰ 看護婦」と「Ⅱ 医学生」の二つの手記に続いて、「Ⅲ 午後三時」と一九四五（昭和二十）年二月二十五日午後三時の生体解剖手術当日に入る。視点人物は「Ⅰ」が上田ノブ、「Ⅱ」が戸田剛、「Ⅲ」が勝呂である。

第三章の「Ⅰ」で生体解剖手術の様子、「Ⅱ」で術後の様子が描かれる。「Ⅰ」の視点人物は戸田と勝呂の二人、「Ⅱ」では上田ノブも加えた三人が視点人物となり、「多角的視点」⑪で描かれる。つまり、『海と毒薬』には、「序章」の〈私〉の「手記」、第二章の「Ⅰ」の上田ノブの「手記」、第二章の「Ⅱ」の戸田剛の「手記」という三つの「手記」が存在し、事件の外側から事件そのものを対象化し相対化する役割を担っているのだ。三つの「手記」は、執筆者も〈私〉、上田ノブ、戸田剛とそれぞれ異なり、執筆された時間も〈私〉の「手記」が一九五四（昭和二十九）年十月頃、上田ノブの「手記」が一九四五（昭和二十）年二月二十五日の事件後すぐ、あるいは数年後、戸田剛の「手記」が一九四五（昭和二十）年二月二十五日の事件当日、手術が始まる直前と推定され、三つとも異なる。

次に三つの「手記」の意味と役割について考えたい。第一に「序章」の〈私〉の「手記」。序章が「手記」であることを初めて指摘したのは下山嬢子氏である。氏は、前出の論考⑫において、次の箇所を論拠として「手記」であることを示した。

時には自然気胸を併発させたりする場合もあるのは先にも書いた通りだが、そんな突発事故を起さなくても、一打ちで針をしかるべき部分まで突き入れなければ患者が痛がる時があるものだ。

(傍線部引用者／『海と毒薬』)

重要な指摘である。「先にも書いた」というように、これが「手記」であることは明らかである。さらに、次の箇所も考慮すれば「手記」であることはより確かならう。

：右側には煙草屋と肉屋と菓屋とが、左側にはソバ屋とガソリン・スタンドとが並んでいるのだ。そうだ。それから洋服屋もあることを言い忘れていた。洋服屋は、ガソリン・スタンドから五十米ほど離れた地点にひとつだけポツンと建っているのだが、なぜこんな辺鄙な所をえらんだのかわからない。

(傍線部引用者／『海と毒薬』)

冒頭部で〈私〉が西松原住宅地について説明している箇所である。「そうだ。それから洋服屋もあることを言い忘れていた。」という語り口から、〈私〉が今語っているという現在性が明らかであり、先ほどの「書いた」という記述を合わせると〈私〉が今書いている「手記」であることの確実性は増す。

〈私〉が「手記」を書いた理由は、「手記」の結末部が手がかりとなる。八月に西松原住宅地へ引っ越しをした〈私〉が近所の勝呂医師に診療を受け、さらに勝呂医師の過去の事件まで知ってしまう。そして〈私〉が勝呂医師に過去の事件を知ったことをそれとなく告げた時、勝呂医師はショックを受け、「仕方がないからねえ。」と呟く。その様子を見て〈私〉は、今後勝呂医師の治療を受けるかどうか迷う。この時結論は出ていないが、そうした混乱の中で、改めて勝呂医師との出会いを回想したのがこの「手記」であると推測できるからだ。

第二の上田ノブの「手記」は、最初から「手記」であることが明示化されている。例えば次の箇所である。

夫のことは今は忘れたいですし、彼との結婚生活も一つのことを除いてはこの手記に関係ありませんから詳しくは書かないようにしましょう。

(傍線部引用者／『海と毒薬』)

お産のことは今日、これを書いていいる間も思いだすだけで辛くなります。この手記を読んでくだされば、わたしが子供を持ってない女になったため、心にも人生にも罅がはいったことがわかってくださるでしょう。赤ちゃんはどうしたとか、わたしのお腹の中で死んでいたのです。

(傍線部引用者／『海と毒薬』)

「手記」と出てくるのは他にも何箇所⑬があるが、この二か所だけでも十分に「手記」であることはわかる。問題は、「今」、「今日」書いているという現在性の問題と、「この手記」を書いている理由である。大田正紀氏は論考⑭の中で、上田ノブの「手記」を「検察自白調書・手記・上申書」とされているが、根拠は示されてなかった。だが、生体解剖事件に関する内容であることは確かである。上田ノブは事件に関与した原因を、過去の自分の体験に求めており、結婚、死産、離婚、ヒルダへの反発と順に自分の心の奥を探っている⑮。いずれにしる事件後の内省である点に注意したい。

第三の戸田剛の「手記」は、事件直前まで書かれていた形跡がある。次の箇所である。

研究室の戸を開くと、既に戸田がこちらに背をむけて机にむかっている。勝呂の方にふりむきもせず、声もかけなかった。ひどく真剣な表情でノートになにかを書きこんでいる。

(傍線部引用者／『海と毒薬』)

第二章の「目 午後三時」で、生体解剖手術が行われる朝、研究室に入った勝呂が見た戸田の様子である。ここで戸田が書いているノートが「手記」であると推測される。しかも、内容から見ても事件の前であることは明らかである。「手記」の最終部には次のような言葉もある。

(これをやった後、俺は心の呵責に悩まされるやろか。自分の犯した殺人に震えおののくやろか。生きた人

間を生きたまま殺す。こんな大それた行為を果したあと、俺は生涯くるしむやろか)

(『海と毒薬』)

戸田が事件への参加を問われた時に考えていたことである。戸田はこれまで様々な罪を犯して来た自分が良心の痛みを感じなかったことに疑念を抱いており、生体解剖という恐ろしい罪を犯したとき、果して良心が痛むのかどうか実験のような気持で結局は参加を承諾した。この出来事を「一昨日」と記していることから事件前に書かれたことは確かである。

以上が、三つの「手記」である。これらの「手記」を除く他の部分は、勝呂を視点人物として事件に至る遠因であった大杉医学部長の死から、個室の田部夫人の手術の失敗、おばはんの衰弱死、事件当日の様子、生体解剖事件直後の様子までが書かれており、ある意味で勝呂の「手記」的な様相を帯びている。このように『海と毒薬』における「手記」形式の重要性は明らかである。

三、「序章」の「トポス」

前述のように、「序章」は東京郊外の新興住宅地に引越した「〈私〉」が、その地で開業している医師の勝呂の過去を知るに至るまでの経緯^⑩を記した「手記」であった。内容を詳細に見ると、「序章」は二つの時間と二つの場所によって構成された「トポス」であることがわかる。まずはここから考えたい。

第一の二つの時間については川島秀一氏^⑪の指摘がある。氏によると、『海と毒薬』は『過去』と『現在』という二重の時間によって構成されており、『現在』という時間をしめるのは「第一章 海と毒薬」のうちの「I」に入るまでのプロローグに当たる部分、全集本一四二頁のうちわずか二〇頁にも満たない。」としている。つまり、

《現在》が「序章」で、《過去》が生体解剖事件に関わる残り全ての箇所ということになる。作品全体の構成を考えた場合はこの通りである。だが、「序章」に限定した時間を考えると少しずれが生ずるように思われる。というのも、「序章」の中で《過去》が浮かび上がってくるのは、勝呂だけではなくガソリン・スタンドの主人、洋服屋、《私》の戦争体験という《過去》もあるからだ。ガソリン・スタンドの主人は、戦争中中支に兵隊として行った。迫撃砲で火傷を負ったが、女性を強姦したり、男性を突き刺して殺したり、好き放題できたと言っている。洋服屋は、南京で憲兵としてあばれたことがあるという。つまり、南京虐殺に関わり、何十人も人を殺したということが示唆されている。《私》は終戦前、鳥取の部隊に応召されたが、すぐに帰ったので、人を殺す事はなく、内務班で上官に苛められただけであった。これらのことが伏線となり、勝呂が戦時中の事件に関わったことを《私》が知るに及び、大きな衝撃を受ける。

私はなにがなんだかわからなかった。今日までそうした事実をほとんど気にもとめなかったことが非常にふしぎに思われた。今、戸をあけてはいつてきた父親もやはり戦争中には人間の一人や二人は殺したのかもしれない。けれども珈琲をすすったり、子供を叱ったりしているその顔はもう人殺しの新鮮な顔ではないのだ。トラックが洋服屋のショーウィンドーを汚していったように無数の埃が彼等の顔に積っている。

（『海と毒薬』）

ここで《私》は、勝呂の《過去》を知り、改めて《過去》において戦争で人を殺したことがある人々が、《現在》何もなかったように日常生活を送っているという現実を衝撃を受けているのだ。言い換えると、《過去》の罪を簡単に忘却できる日本人の罪意識の不在、ひいては人間の不思議に対する《私》の疑問が「手記」を書くに至るモチベーションとなっているのだ。

また、「序章」の作品内時間となる《現在》は、一九五四（昭和二十九）年である。根拠となるのは美空ひばりの流行歌である。作品の冒頭部でトラックに乗っている「若い人夫」が歌っている「流行歌」として歌詞の一部

が引用され、風呂屋でも「どこかでラジオの流行歌が聞えてきた。あれは美空ひばりの声である」としている。日常風景を彩る流行歌として紹介されているのだ。この歌は一九五四（昭和二十九）年五月に発売された美空ひばりの「ひばりのマドロスさん」である。この曲により美空ひばりは一九五四（昭和二十九）年度NHK紅白歌合戦に初出場を果している。「序章」の「八月」に「流行歌」として町のあちこちから聞えてくるのは当然と言えよう。〈私〉が九州のF市へ行ったときには「江利チエミ」^⑱の名前が見えることから、《現在》が一九五四（昭和二十九）年であることは確実である。つまり、「序章」は一九五四（昭和二十九）年八月に「手記」が始まり、九月の終りに義妹の結婚式のため〈私〉が九州のF市へと出かけ、偶然に勝呂の《過去》を知り、帰京後の秋（十月頃）に勝呂にF市へ行ったことを告げ、〈私〉が勝呂の下へ通院を続けるかどうか迷うところで終わっている。先にも述べたが、〈私〉の「手記」は、この終わった時点で書き始められたと推測される。

第二の二つの場所は、東京の西松原住宅地と九州のF市であり、色調や気候から対照的に描かれている。西松原住宅地は東京の郊外に位置し、東京まで新宿から電車で一時間もかかる「辺鄙な所」にある。白と黄色が基調で「雨の降らない日」が続いている。そもそも「序章」は「スフィックスの微笑」という題の短編であったため、この土地は砂漠のイメージで彩られている。国道をトラックが走り、「白い／黄色い埃」が舞っている。渴いた日が続く「陽がカッと路に照りつけている」。「砂漠のような土地」である。洋服屋のショーウィンドーにはスフィックスのような「白人の男子人形」が微笑をうかべている。対する九州のF市は「水の街」である。黒色が基調であり、〈私〉が滞在した数日間はずっと雨が降っていた。この街の雰囲気や臭さは勝呂医院と類似している。

水の街という話はきいていたが、その街の中心を流れる那珂川も真黒でドブ臭かった。その黒い水の上に仔犬の死骸やふるいゴム靴が浮いていた。私は勝呂医院の庭や診療室の臭いを思いだした。

（『海と毒薬』）

白と黄色が基調である西松原住宅地において勝呂医院だけが暗い重苦しい雰囲気を持っていたが、そうしたも

のとF市の印象は重なるように描かれている。

このように対照的な二つの街で《現在》と《過去》を結びつけるのがF医大病院と病院から見える海である。〈私〉は義妹の結婚式で偶然勝呂医師の《過去》を知り、もっと詳しく知るために、わざわざ地元の新聞社を訪れ当時の新聞記事を目にして事件の概要を掴む。さらには、F医大病院にも潜入し、勝呂の《過去》を追体験する。これはそのまま廃墟を好み⑩、何度も取材旅行を行い、人間の人生を追体験した作者の趣味が反映している。そうして病院で勝呂の《過去》の重みを味わった〈私〉は屋上で海を見て救われる。

頭が痺れるような気持がしたので屋上にのぼった。眼下にはF市の街が灰色の大きな獣のように蹲っている。その街のむこうに海が見えた。海の色は非常に碧く、遠く、眼にしみるようだった。

（『海と毒薬』）

F市が「灰色」で、街の中心を流れる那珂川も「黒い水」であったが、病院の屋上から見える海の色だけは「碧く」「眼にしみるよう」な明るい色であった。この色の対比は印象的に描かれている。しかも、屋上とは言え、F医大病院は生体解剖という「悪の行われた場所」であることに変わりはない。そうした「悪」や「罪」の蠢く中における唯一の救いが海であったことは興味深い。なぜなら、屋上から見える海という「トポス」こそ、タイトルの由来でもあり、《現在》と《過去》、〈私〉と勝呂をつなぐ鍵となるからである。

四、二つの「手記」の位相

前述の川島氏の論考⑫では、『海と毒薬』が《現在》と《過去》という二重の時間によって構成されており、《現在》にあたるのが「序章」の部分であった。となると、「序章」を除く残りがすべて《過去》にあたる。ここも詳

しく見ていくと、第二章の「I」「II」にある二つの「手記」とそれ以外の二種類で構成されていることがわかる。二つの「手記」はそれぞれ、事件後（上田の「手記」）と事件前（戸田の「手記」）に執筆されており、残りは勝呂を視点人物として事件に至る経過が描かれていた。いわば、事件の外側と内側という二重構造なのだ。つまり、事件の内側が第一章の「I」〜「V」、第二章の「III」、第三章の「I」「II」で、事件の外側が第二章の「I」の上田の「手記」、「II」の戸田の「手記」ということになるのだ。

二つの「手記」は、いずれも「なぜ事件に関わってしまったのか」という原因究明や弁明である。「手記」を書いていない勝呂にしても事件の経過を描いた第一章の「I」〜「V」を見ると、「なぜ事件に関わってしまったのか」という原因究明や弁明が全体に流れている。これらには明らかに『テレーズ・デスケルー』の影響が見てとれる。『テレーズ・デスケルー』はテレーズが夫の殺人未遂を疑われた裁判から帰る場面で始まり、テレーズが「ほんとうに夫を殺そうとしたのか」を自分の心の闇と対峙する原因究明を主要とする物語であった。上田、戸田は「手記」を通して自分の心の闇と対峙して、勝呂は病院の屋上から見える海と対峙することで、自分の心の闇と向かい合っている。

まず上田の「手記」を見よう。「手記」は事件と関わる遠因となった夫との出会いから始まる。上田は二十五歳の時、F市の看護婦学校を卒業し、医大病院で勤務を始めた。その年の夏、病院で盲腸の手術をして入院していた夫と出会った。ここで重要なことは、『海と毒薬』に含まれる三つの「手記」がいずれも夏から始まっていることである。（私）の「手記」は、一九五四（昭和二十九）年八月の「ひどく暑いさかり」、上田の「手記」は一九四〇（昭和十五）年頃の夏、戸田の「手記」は一九三五（昭和十）年頃の九月といったとおりである。作品の中で事件が真冬の一九四五（昭和二十）年二月二十五日に発生したことと明らかに対照的に設定してある²¹。ヒルダとの確執の始まりも「夏の夕暮れ」であり、離婚の原因となった夫の浮気は大連での「最初の冬」であった。

上田は満鉄の社員であった夫と結婚した。F市出張所から大連本社へ移った夫に連れられ大連へ渡った。最初の冬、妊娠をしている間に夫は浮気をしていた。四月。満鉄病院でお産をしたが死産の上に子宮摘出を行い不妊の女となった。その後も二年間結婚生活を続けたが、離婚しF市へ帰った。F医大病院で再び勤務をはじめ、病院の近くに下宿をした。寂しさをまぎらわすために犬を飼った。そんな孤独な生活をしていた「夏の夕暮れ」、「四、五歳ぐらいの男の子」を見かけた。橋本部長とヒルダの子どもだった。思わず男の子に手を触れようとした瞬間、ヒルダに制止され口惜しさを感じた。ヒルダへの対抗意識はこの時から始まる。さらに、個室の患者（田部夫人）の手術で医者が全てかかりきりになっていた時、前橋トキが自然気胸を起し処置に困った。浅井助手の「どうせ助からん患者だろう。麻酔薬をうって…」という言葉に触発され、どうせ死ぬ患者だから注射を打ち死なそうと思いい、注射器を準備する。結局、注射器を見たヒルダに激しく叱責され、のちには休職を言い渡される。その後、生体解剖手術に参加を要請された時、ヒルダへの対抗意識で参加を決めた。

次に戸田の「手記」を見よう。戸田も夏に始まり自分の犯した罪の数々を告白していく。この告白の内容について山本和22が重要な指摘をしている。

「戸田の手記は、生体解剖のような極限事例に対する息抜きであるとともに、やはり準備をしているんですね。人を殺してしまっても何にも不安がない。先生の標本の蝶を盗んで、嘘をつく。姦淫事件。こうやって数えてくると大体十戒の後の五つがあるんだな。」

（傍線部引用者／『海と毒薬』）

十戒とは言うまでもなく聖書にあるモーセの十戒のことである。参考までに『カトリック要理』の十戒を示して戸田の罪と対応させると次のようになる。

第一 われはなんじの主なる神なり、われのほか、何者をも神となすべからず。

第二 なんじ、神の名をみだりに呼ぶなかれ。

- 第三 なんじ、安息日を聖とすべきことを覚ゆべし。
- 第四 なんじ、父母を敬うべし。
- 第五 なんじ、殺すなかれ。
- ↓〈戸田〉 医大生の三年生の時、女中の佐野ミツに中絶手術を行い、胎児を殺した。
- 第六 なんじ、かんいんするなかれ。
- ↓〈戸田〉 浪速高校の理科にいた夏休み、大津の従姉と姦通。
- 第七 なんじ、盗むなかれ。
- ↓〈戸田〉 N中学の時、博物の教師が大切にしていた貴重な蝶の標本を盗む。
- 第八 なんじ、偽証するなかれ。
- ↓〈戸田〉 小学校五年生、夏休みの作文で嘘を書く。
- 第九 なんじ、ひとの妻を望むなかれ。
- ↓〈戸田〉 浪速高校の理科にいた夏休み、大津の従姉と姦通。
- 第十 なんじ、ひとの持ち物をみだりに望むなかれ。
- ↓〈戸田〉 N中学の時、博物の教師が大切にしていた貴重な蝶の標本を盗む。

〔カトリック要理〕中央出版社、一九六〇・昭和三十五年三月

山本和の指摘通りに「十戒の後の五つ」が戸田の罪と対応していることがわかる。これは重要な指摘である。これまであまり注目されることはなかったが、戸田の告白が聖書的な罪意識に基づいていることは確かである。そして、上総英郎が指摘するように、「彼は罪意識をこの作中の誰よりも強く求めようとして挫折しているのだが、それだけに神に近づいていると言えるのである」²³。もちろんそこには、武田友寿が指摘する「「倫理的」空虚さ」²⁴もある。つまり、本当に罪意識や良心の痛みを感じないのであれば「手記」を書くこともなかったし、生体解

剖の手術後、再び手術室を訪れる行動も取らなかったからだ。

以上のように上田と戸田は「手記」を通して自身の心の闇と対峙しており、事件の外側からそれぞれの内面を照らしている。

五、F医大病院という「トポス」

繰り返すが、『海と毒薬』は三つの「手記」と勝呂視点の《過去》によって構成されている。《過去》の主要部は、一九四五（昭和二十）年一月から二月の出来事であり、最後には事件の起った二月二十五日のことが描かれている。細かく言うと、第一章の「一」が一九四五（昭和二十）年一月、第一章の「二」が一九四五（昭和二十）年二月の初めから終り、第二章の「三」と第三章の「四」、「五」が一九四五（昭和二十）年二月の五日の出来事である。勝呂が視点人物となり、F医大病院を舞台に物語が展開する。ここには第一外科と第二外科の対立や西部軍の介入を中心としてそれぞれの思惑が交差し、ぶつかっていく中で全てが生体解剖事件へと巻き込まれていく様子が描かれているのである。

これらの主な舞台となるのがF医大病院である。そこでF医大病院が持つ〈場〉の問題すなわち「トポス」について考えたい。ここには地理的空間と文学的空間の二つが存在している。

第一に地理的空間。医学部と病院とは街から二里ほど離れた田舎に位置している。そのため空襲を逃れて、病院自体は安全な場所となっている。屋上からはF市の街と海が見える。町が空襲のため日ごとに小さくなっていく様子や、様々な色に変化する海も見える。いわば、医学部と病院は街と海が相対的に見える位置にあるのだ。〈私〉、勝呂、戸田の三人は屋上から街の様子や、海を見たりすることになる。

〈私〉が病院の屋上から見たF市の街は「灰色の大きな獣のように蹲っている」と暗いイメージだった。対する海は「海の色は非常に碧く、遠く、眼にしみるようだった」と明るいイメージだった。この対照的なイメージの違いは重要であろう。

戸田は屋上から海を見ることはない。もちろん見えているはずだが、作品中では海鳴りの響きを聞くことはあっても、海を見たという記述はない。その代わりに、F市が空襲で壊滅的な被害を被っている状況や、断末魔の人間の叫び声を聞いている。「みんな死んでいく時代やぜ」という虚無的な発言の根拠となっている。

勝呂は〈私〉と同様、屋上から街や海を見ている。戸田と一緒に街が壊滅的な状況に陥っている様子を見たり、「碧く光」ったり「陰鬱に黝ずんだ海」を見て来た。その彼が生体解剖事件に巻き込まれ、手術後に屋上から海を見る。ここが最も大事な箇所である。

「そやろか。俺たちはいつまでも同じことやろか」

勝呂は一人、屋上に残って闇の中に白く光っている海を見つめた。何かをそこから探そうとした。

(羊の雲の過ぎるとき) (羊の雲の過ぎるとき)

彼は無理矢理にその詩を呟こうとした。

(蒸気の雲が飛ぶ毎に) (蒸気の雲が飛ぶ毎に)

だが彼にはそれができなかった。口の中は乾いていた。

(空よ。お前の散らすのは、白い、いろいろな、綿の列)

勝呂にはできなかった。できなかった……。

(傍線部引用者／『海と毒菓』)

印象的な箇所である。ここで勝呂が一人で屋上にいる孤独な状況は、約十年後〈私〉が屋上にのぼり海を見たことと共通する。〈私〉が見たのは「非常に碧く、遠く、眼にしみる」ような海であったが、勝呂は「闇の中に白

く光っている海」であった。ここでいう「闇」は戦争で誰もが死んでいく暗い時代状況や運命を象徴しており、「白く光っている」ものとは、生命そのものであったり、罪のない純粹無垢な心を意味するだろう。勝呂はそうした罪や暗い運命に囲まれながら、「光」を「探そう」としていたのである。もちろん、病院そのものは生体解剖という「悪の行われた場所」となってしまうているが、屋上から見える海に救いの可能性を探したのである。

第二に文学的空間。生体解剖事件に至る様々な二項対立がここにはある。まず大前提として戦争がある。日独伊三国同盟対連合、日本対アメリカという対立である。この対立が空襲で街を壊滅状態に陥れ、米軍捕虜を生み出した。次に軍部と医学部という対立である。西部軍が病院内の権力闘争に介入することで病院内の対立が激化していく。病院の医師も大半が軍医として出征しており、病院に残った者と軍医となった者の間にも見えない対立をもたらしている。また、病院内でも医学部長の椅子をめぐる第一外科の橋本教授と第二外科の権藤教授の間に対立がある。二人の対立はそれぞれの部下の助教授、助手、医学生や看護婦ばかりか担当患者にまで様々な影響を与えた。この状況に対して勝呂は、「おぼはんは柴田助教授の実験台やし、田部夫人はおやじの出世の手段や」と発言している。結局、橋本教授は医学部長の選挙を有利に進めようとして焦り、個室の田部夫人の手術に失敗し患者を死なせてしまう。大部屋のおぼはんも手術を受ける必要はなくなったが空襲の夜に衰弱して死んでいった。そして、勝呂と戸田の対立もある。普段は仲のよい二人ではあるが、医学に対する姿勢や生き方は全く異なる。戸田は「誰もが死んでいく時代」だから患者が苦しもうが死のうが割り切っている。対する勝呂は、「誰もが死んでいく時代」だから最初の患者である大部屋のおぼはんだけは生かそうとした。生体解剖手術への参加も戸田は自分の良心を試す実験の意味で積極的に参加を表明したが、勝呂はおぼはんが亡くなったため、「どうでもいい」投げやりな気持ちになり、はつきりと参加をすることも断ることもしなかった。手術中も戸田は一生懸命手伝っているが、勝呂は壁にもたれて何もしなかった。二人の態度は正反対であった。一方、看護婦の間でも橋本教授の夫人であるヒルダと上田看護婦、上田看護婦と大場看護婦長といった対立があった。以上のような様々

な対立が物語を動かし、最終的には生体解剖事件へと結びついていくのである。

六、〈私〉と勝呂

最後に作品の重要な視点人物でもある〈私〉と勝呂について考えたい。

「序章」の「手記」の語り手でもある〈私〉は平凡なサラリーマンである。終戦前、少しだけ鳥取の部隊に召集され、内務班の古参兵にいじめられた〈過去〉を持つ。〈現在〉は東京の郊外の西松原住宅地にマイホームを持ち、釘の間屋に勤め、毎日新宿から電車で一時間通勤をしている。昨年集団検診で肺の空洞が見つかり、気胸療法を受けている。結婚しており、妻は妊娠している。義妹の結婚式のために九州のF市へ行き、勝呂医師が関与した〈過去〉の事件のことを知った。以上が作品内で〈私〉についてわかることである。〈私〉は平凡な生活への漠然とした憧れを持っている。次の二箇所である。

私はこれで病気さえ良くなれば倅せなんだと思うことがあった。子供もでき、平凡な倅せかも知れないが、それでいいのだと考える。

(『海と毒菓』)

義妹の主人になる男は背のひくい、善良そうなサラリーマンだった。私と同じように朝の新宿駅で電車を待っているあの無数の勤め人の一人である。やがて義妹も子供ができ、この男と何処か郊外の安い土地に小さな家建てて私と同様、平凡な倅せを楽しめばいい。何も無いこと、何も起らないこと、平凡であることが人間にとって一番、幸福なのだ。私は彼等をみながら、ぼんやりと考えた。

(傍線部引用者／『海と毒菓』)

こうして（私）は自分が幸福であると自分に言い聞かせているような側面を持っている。

対する勝呂医師もちよつと変わってはいるが平凡な医者である。（私）が見た勝呂医師は「医者は四十位だろうか老けた感じのする男だった」と記している。終戦間際、医学生だった勝呂医師は一九五四（昭和二十九）年の時点で三十五、六頃だと推定できるので実年齢より老けて見えたことになる。西松原住宅地に内科の医院を開業している。医院の庭にはよごれた子供の赤い長靴があり、犬小屋には犬はいなかった。妻は元看護婦で、子供を連れて東京へ出た。「赤い長靴」から子供は女の子であると推測できる。（ちなみに、（私）のもうすぐ生まれる子供も女の子の可能性がある。）勝呂医師は《過去》の一九四五（昭和二十）年ではF医大病院の第一外科で戸田と共に研究員をしていた。糸島郡に両親がおり、平凡な生活への憧れを抱いている。

：平凡でもいい、何処かの、小さな町でささやかな医院に住み、街の病人たちを往診することである。町の有力者の娘と結婚できれば、なお良い。そうしたら、自分は糸島郡にいる父親と母親との面倒をみることもできるだろう。平凡が一番、幸福なのだと思ふ。

（傍線部引用者／『海と毒薬』）

細川正義氏が指摘25するように勝呂が抱いている夢は「町の有力者の娘」との結婚を除けば（私）と大差はない。結局は看護婦と結婚することになるが、勝呂も戦争さえなければ「町の有力者の娘」と結婚できたかもしれない。《過去》において、戸田と比較して頭が悪いと卑下しているが、《現在》において西松原住宅地ではちよつと変わってはいるが、腕は悪くないと認められており、それこそ戦争さえなければ町の人に信頼される医者として平和に過ごせたかも知れない。このあたりは『沈黙』のキチジローの嘆きに共通するものがある。キチジローも平和な時代であれば篤実なキリスト教信徒として平安な一生を送れたかもしれないのに、弾圧と迫害の時代に生まれてしまったせいで棄教者の汚名を被りながら惨めな一生を送らざるを得ないと嘆いていた。勝呂も戦争さえなければ平凡ながらも幸福な人生を歩めただろう。

問題はここで二人が口にする「平凡が一番」という言葉が、後の作品では主人公の父の俗悪性を示すものとして使われている点である。次の三作品である。

：父は伯父のように軽々しい性格ではなかった。大学を出ると、すぐM財閥の銀行に入ったが銀行員には打ってつけの細心な性格だった。波瀾のないことが一番、倅せだとか、他人に信用されぬ人間になるなよと口癖のように私に言っていたものである。

（傍線部引用者／「帰郷」／「群像」、一九六四・昭和三十九年九月号）

後年、父は口癖のように「平凡が一番倅せだ。何も起らぬことが一番、倅せだ」と言っていた。あれは母との生活にたいする反動だったのだ。十年間、母にひきずりまわされたこの男は離婚後母との過去を忘れるためにも、手がたい、地味な人生だけを求めていた。何も起らぬこと。平凡であること。そして私が文学をやるうとした時彼が依怙地なまで反対したのは自分の息子のなかに再び母の面影を見つけるのが不快だったからにちがいない。

（傍線部引用者／「六日間の旅行」／「群像」、一九六八・昭和四十三年一月）

父と生活して見て、僕は母が父となぜ別れたかわかるような気がしました。「平凡が一番倅せだ。波瀾のないのが一番倅せだ」そのような意味のことを父はたえず口にしていました。経営している会社の余暇には、盆栽をいじり、庭の芝生の手入れをし、ラジオの野球中継をきくような生活。僕の将来についても、安全なサラリーマンの道を選ばせようとする毎日、それは母と二人つきりで過したきびしい日常とは全くちがっていました。

（傍線部引用者／「影法師」／「新潮」、一九六八・昭和四十三年一月）

いずれも作者を匂わせる人物が主人公となっている私小説的な作品である。ここに登場する主人公の父は、激しく劇的な人生を歩んだ母と正反対の人物として造型されていて、「平凡が一番」として波風の立たない無難な人生を歩んでいる地味で平凡な人物である。遠藤周作の父・遠藤常久がモデルであることは言うまでもない。だが、これらはいくまでも小説であるので、父のことにことよせて作者自身の俗悪な部分を強調したとも考えられる。そうした意味でこれらの父親像と〈私〉や勝呂に共通性があるのは当然のことかもしれない。

以上のように、『海と毒薬』は、「日本文化や風土の問題」、「神なき人間の悲惨」、「日本人の罪意識の欠如」の三つを主題として、複数の視点人物、時間、場所が複合的にからまりあいながら「悪の行われた場所」であるF医大における「悪」の様相、「悪の行為」の実態、「場所」が持つ意味を浮かび上がらせた作品であると結論付けられる。また、作品舞台である西松原住宅地、F市、F医大病院はそれぞれ色彩のイメージを持つ「トポス」である。さらに、文学的空間としての「トポス」をめぐる三つの「手記」が含まれており、「手記」形式が果す意味は大きい。

① 『海と毒薬』に関する山本健吉の発言は次の四本がある。

一、山本健吉「らいぶらりー 神のない人間の醜悪さ 遠藤周作著『海と毒薬』」（『日本経済新聞』、一九五八・昭和三十三年四月二十一日）

二、山本健吉「文学直言―小説の中の文学的風土―」（『文学界』、一九五八・昭和三十三年六月）

三、山本健吉「神と人間性の追求を―遠藤周作氏に答える」（『読売新聞夕刊』、一九五八・昭和三十三年六月十二日）

四、山本健吉「新潮文学賞 選後評」（『新潮』、一九五九・昭和三十四年一月）

② 管見の限り、書評、解説、論文、単行本収録記事などあわせると百十二本見つかった。これは遠藤作品では、『沈黙』、『深い河』に次いで三番目に多い。

③ 影山恒男『『海と毒薬』の叙法と構造 状況と倫理への一つの挑戦』（『活水日文』35、一九九七・平成九年十二月）

④ 細川正義『『海と毒薬』論』（『作品論 遠藤周作』双文社出版、二〇〇〇・平成十二年一月、所収）

⑤ 大田正紀「遠藤周作「海と毒薬」論(2)―描かれざる『恩寵』をめぐる」（『梅花短大国語国文』、一九九八・平成十年十月）のち『近代日本文芸試論』キリスト教倫理と恩寵』（おうふう、二〇〇四・平成十六年三月）

⑥ 下山嬢子『『海と毒薬』―（語り）のディメンション』（『日本文学研究』、二〇〇三・平成十五年二月）

⑦ 遠藤周作「『海と毒薬』ノート―日記より―」（『批評』、一九六五・昭和四十年四月）

⑧ 拙稿「遠藤周作論―（劇）を生成するトポス―」（『昭和文学研究』、二〇一六・平成二十八年三月）

⑨ 笠井秋生「6 『海と毒薬』／『遠藤周作論』双文社出版、一九八七・昭和六十二年十一月）

⑩ 注⑦と同じ。

⑪ 玉置邦雄「『海と毒薬』の世界」(『人文論究』21(4)、一九七一・昭和四十六年十二月)のち『現代日本文芸の成立と展開』(桜楓社、一九七七・昭和五十二年十月)所収

⑫ 注⑥と同じ。

⑬ 次の二箇所がある。いずれも「今」書いている事実が強調されている。

それから二年後、わたしは夫と別れました。別れ話が持ち上がった時、わたしも人並みにわめいたり泣いたりしましたが、そうしたくどい経過を書くのは、この手記を長くするだけです。今、強いて想いだすふしぎなことですが、あの二年間のことで特に思いだすことはほとんどないのです。今、強いて想いだすとしても、眼に浮び上ってくるのは彼の白い体が益々、肥えはじめたこと、彼が血圧を気にして毎日「ベルゲール」という茶色い液体の薬を飲んでいた姿ぐらいです。

(『海と毒薬』)

今更、この手記で弁解がましいことを書くのは嫌ですが、たしかにあの頃、橋本部長はわたしにとって職業的な先生という以外、なんの関心もない老人でした。(略)そして看護婦とよばれるわたしたちは下女のような役目をするのですし、そんな看護婦の一人にすぎぬわたしを橋本部長に結びつけるのは皮肉なことに彼の妻ヒルダさんでした。

(『海と毒薬』)

⑭ 注⑤と同じ。

⑮ 既に多くの指摘があるように、上田ノブはフランソワ・モーリヤック『テレーズ・ドスケルー』のテレーズに似せられた人物として造型されている。ここではテレーズが夫を殺そうとしたのかどうか心の奥を探るように、上田も心の奥を探っている。

⑯ 注⑦と同じ。

⑰ 川島秀一「遠藤周作ノート(二)——『海と毒薬』について——」(『山梨英和短期大学紀要』第21号、一九八八年一月)のち『遠藤周作—愛の同伴者』(和泉書院、一九九三・平成五年七月)所収

⑱ 美空ひばり、江利チエミ、雪村いずみは当時十七歳の同じ年齢で、一九五五・昭和三十年には映画『ジャンケン娘』で共演し、「三人娘」と呼ばれた。

⑲ 「廢墟の眼」(『狐狸庵閑話』桃源社、一九六五・昭和四十年七月、所収)

⑳ 注⑰に同じ。

21 実際の相川事件は、一九四五(昭和二十)年五、六月にかけて生体解剖が行われており、作品中の二月二十五日午後三時という設定とは明らかに異なる。作者が意図して設定したと推測される。

22 山本和、北森嘉蔵、国谷純一郎、小川圭治「遠藤周作『海と毒薬』をめぐる」(『兄弟』、一九六〇・昭和三十五年四月)

23 上総英郎『遠藤周作論』(春秋社、一九八七・昭和六十二年十一月)

24 武田友寿『遠藤周作の世界』(講談社、一九七一・昭和四十六年七月)で戸田の心の問題について次のように指摘している。

ぼくらが戸田のなかにはつきりみてとれるものは罪の意識もなく、罪の怖れもない「倫理的」空虚さである。

25 注④に同じ。

第二部 「歴史小説」―「切支丹物」の世界―

第一章 「弱者」の形象——二つの系譜をめぐって——

一、「弱者」の問題

遠藤文学において「弱者」は様々な形で登場し重要な役割を担っている。中でも「歴史小説」においては「華々しい殉教」を遂げた「強者」と対照的に、心の弱さ故に棄教してしまった「弱者」として繰り返し登場する。拙稿①でも「強者」の代表として〈ペドロ岐部〉を取り上げ、様々な作品から考察したが、それも作品の中で「弱者」が重要な役割を担っているからこそ「強者」にも意味が生まれるのである。そうした「弱者と強者」の問題を考へて行く上で最も重要な作品は言うまでもなく『沈黙』である。

遠藤は『沈黙』執筆のきっかけとなった踏絵を見た時に感じた疑問について次のように述べている。

この二つの疑問はそれをその後、噛みしめているうちに次第に私には切実なものになりはじめた。なぜならば、それは強者と弱者、——つまりいかなる拷問や死の恐怖をもちねかえして踏絵を決して踏まなかった強い人と、肉体の弱さに負けてそれを踏んでしまった弱虫とを対比することだったからである。

（傍線部引用者／「一枚の踏絵から」／『切支丹の里』人文書院、一九七一・昭和四十六年一月）

ここには「強者と弱者」の明確な線引きがある。踏絵を踏まなかった「強者」と踏絵を踏んだ「弱者」である。いずれにしろ「強者」は「華々しい殉教」を遂げていくわけだが、「弱者」の場合は「転び者」、「棄教者」として心に負い目を感じ苦しみながら後の人生を歩まざるを得ない。だが、そこにこそ「神と悪魔、人間と社会、肉欲と霊の血みどろな闘い」②という〈劇〉があり、作家として遠藤が「弱者」の問題に取り組んだ最大の理由がある。

そこで本稿では「弱者」像が確立した『沈黙』を中心として、『沈黙』前後の作品に散見される「弱者」の系譜を考察していきたい。

二、「弱者」像の形成

『沈黙』において「弱者」像が明確化されるに至るまで、初期作品で既に「弱者」に近い人物が数多く登場している。そのことでまず確認しておきたいことは、初期作品の主人公が遠藤に近い人物であることだ。遠藤の自作解説では次のように発言している。

：『アデンまで』から『黄色い人』を経て『海と毒薬』という作品を結ぶ一本の線はぼくの作品の大きな縦糸になっている。『アデンまで』の主人公は『黄色い人』の私になり、『黄色い人』の私は言うまでもなく『海と毒薬』の二人の主人公、勝呂医師と戸田医師とになっていたわけだ。『アデンまで』はぼくの今まで書いた小説の原型みたいなものなのだろう。

(遠藤周作「わが小説」／「朝日新聞」、一九六二・昭和三十七年三月三十日)

ここには三つの重要な証言がある。第一に『アデンまで』―『黄色い人』―『海と毒薬』が遠藤の「作品の大きな縦糸」であること。第二に主人公も「たがいに似すぎている」こと。そして、第三に、主人公が作者の分身であることである。これらを踏まえると遠藤文学において既に「弱者」は登場していたということになる。『アデンまで』、『黄色い人』、『海と毒薬』のいずれの主人公も受動的な人物で「弱者」と呼ぶことが出来るからだ。いずれの人物も遠藤が自身の姿を投影しつつ造型された人物である。それに加えて、「第三の新人」との交流、「切支丹時代」の発見、ヘルツフォード神父の棄教という三つの要因によってより明確な形での「弱者」が形成されていったと考えられる。順に追って見たい。

第一に「第三の新人」との交流。遠藤は同じ大学出身の安岡章太郎の紹介で後に「第三の新人」と呼ばれた作家たちと知り合いになり、小説を書くことへの様々な刺激を受けた。中でも大きく影響を受けた一つが「弱者」の問題であったという。次のように語る。

ぼくが「第三の新人」から受けた影響というのは二つあると思います。ひとつはなんとといっても「第三の新人」の文学——といっても全部が全部ではないですが、彼らのなかに共感を見出したのは、強者の立場から書かないということです。弱者、もしくは劣等者の立場から書くということですね。それは私がキリスト教にもっていた考え方——さきほど申し上げました——と一致しておるわけです。これがひとつ。

（傍線部引用者／対談「文学——弱者の論理——遠藤周作氏に聞く」／「国文学解釈と教材の研究」、一九七三・昭和四十八年二月号）

この中で「共感」とあるように、元来遠藤文学は「弱者の立場」から書かれており、「第三の新人」たちと交流することによって、「弱者」の問題がより意識化、あるいは明確化されたことになる。しかも、遠藤の場合はキリスト教の問題から「弱者」の問題を考えるようになったのである。

第二に「切支丹時代」の発見。遠藤はフランス留学を通して自分と同じようにヨーロッパに留学した日本人に興味を持つようになった。調べて行くと、ザビエルが派遣した最初の留学生ベルナルド、天正遣欧使節、有馬神学校の卒業生たちがいたことがわかった。さらに上智大学のチースリック教授の下でキシタンについて本格的に学ぶ機会を得る。その頃の様子を次のように語っている。

三浦朱門と私とが上智大学のチースリック先生を週に一回たずね、この切支丹の碩学から転び者の一人、一人について教えを乞うたあの日々のことを私は今、なつかしく思い出します。「どうして、あなたたちは」とチースリック先生はある日、苦笑して言われた。「転び者に興味をもつのですか」

私は笑って黙っていた。しかし唇にその返事はほとんど出かかっていた。「それは……私が小説家だからで

す。そして私が彼等に近い……からです」

このチースリック先生のおかげの勉強で、私にはしかし、ほんの僅かな知識ではあったが、その頃の代表的な弱者を選び出すことが出来た。フアビアン不干斎、トマス荒木、フェレイラ（沢野忠庵）、ジョゼフ・キヤラ（岡本三右衛門）の四人である。

（傍線部引用者／「一枚の踏絵から」／『切支丹の里』人文書院、一九七一・昭和四十六年一月）
遠藤は「転び者」すなわち「弱者」に興味を持つ理由を、自分が「小説家」であり「彼らに近い」からという。

ここに遠藤と「弱者」の問題の関係を窺うことができる。しかも、四人の代表的な「弱者」のうち、フェレイラとキヤラが『沈黙』の主人公であるし、トマス荒木の名前も『長崎出島オランダ商館員ヨナセンの日記』に登場する。いずれも重要な人物である。こうして彼らが生きていた時代、すなわち「我々の国が、ともに西洋とぶつかった時代」③である「切支丹時代」を発見するに至ったのである。

第三にヘルツォーグ神父の棄教。一九五七年、遠藤の母の恩人であり、遠藤夫婦の結婚式の司式も務めたヘルツォーグ神父が突然、失踪し、のちに日本人女性と結婚するという衝撃的な事件が起った。このことは、『黄色い人』と『火山』のデュラン、『沈黙』のフェレイラ、『影法師』の「貴方」のモデルとして繰り返し描かれている。この棄教という問題が「弱者」の意味を問うことにも繋がっていく。遠藤は次のように語る。

遠藤 だからその棄教者という問題は、さきほど言った外人の神父さんからも私の問題になりましたし、それから切支丹時代の棄教者、日本人の棄教者たちの心理、単に教えを棄てたというのではなくて、ほんとうに自分が愛したものを棄てるということですから、その心はどうしても考えざるをえなかったんです。

（遠藤周作・佐藤泰正『人生の同伴者』人生者、一九九五・平成三年十一月）
ヘルツォーグ神父がなぜ棄教者となってしまったのか本当の理由は誰にもわからないだろうが、遠藤にとって

信仰の指導者でもあった師を単純に棄教者や、教会の裏切者として断罪することは難しかったであろうし、できなかったはずである。その苦悩の中で改めて「弱者」の問題を考えたに違いない。

こうして遠藤が初期作品で描いて来た弱者的な主人公像が、これらの三つの出来事により深められ、明確な形での「弱者」が形成されたと言える。

三、二つの「弱者」の系譜

先に述べたように遠藤の「歴史小説」では、「強者」は殉教者、「弱者」は棄教者という明確な定義がある。この定義を『沈黙』の登場人物にあてはめると、「強者」はキチジローの兄妹、モキチとイチゾウ、長吉、春、ガルペであり、「弱者」はキチジロー、ロドリゴ、フェレイラ、井上筑後守、通辞となる。それぞれの人物の概略を示すと次のようになる。

第一に「強者」。殉教者たちである。先ずキチジローの兄妹である。彼等は密告され、キチジローと共に詮議を受けた。キチジローだけが棄教し追放されたが、棄教しなかった兄妹は火刑で殉教した。それに衝撃を受けたキチジローは日本を離れマカオで暮らしていた。八年前の話として語られる。

モキチとイチゾウは、ロドリゴとガルペが潜入したトモギ村の住民だった。役人の詮議により村の代表としてキチジローと共に三人が役所に出向いた。三人共に踏絵を踏むが、さらに役人から踏絵に唾をかけ聖母の悪口を言うように強制された時、キチジローだけが言われたとおりに棄教し、モキチとイチゾウはできなかった。そのため、二人は水磔に処せられて殉教を遂げた。

生月島の長吉は、片眼の男で、生月島の久保浦の出身である。イルマンの石田から洗礼を受け、洗礼名はジュ

アンである。ロドリゴと同じ牢屋にいたが、役人の刀で処刑された。

春は、長吉と同じ生月島の久保浦の出身で、イルマンの石田から洗礼を受けた。洗礼名はモニカである。ロドリゴと同じ牢屋にいて、ロドリゴに白瓜をくれた。一度踏絵に足をかけたが、ガルペを棄教させるため、役人によって薦に包まれたまま海に突き落とされて絶命する。

ガルペはポルトガル人司祭である。リスボン生れで、ロドリゴやマルタと同じカムポリードの修道院でフェレイラから神学を学んだ。フェレイラ棄教の報告を受け、真相を突き止めることと日本潜伏のため、ロドリゴと共に日本に潜入した。潜入後、ロドリゴと共に宣教にあたっていたが、役人の追求が激化するに伴い、ロドリゴと別れ単独行動を取ったが捕まってしまう。海に突き落とされた信徒たちを助けようとして海に入り絶命した。

こうして見ると、モキチやイチゾウ、春など一度は踏絵を踏んでおり、必ずしも「華々しい殉教を遂げた」殉教者とは言えないが、最終的には殉教者と言えるだろう。このあたりは殉教に対するロドリゴの幻想を打ち砕き、あらためて神、教会、信仰の意味を問い直させる役割を果たしている。

第二に「弱者」。キチジローが代表的な棄教者である。八年前、キチジローとその兄妹はその一家に恨みをもった密告者のため密告されて切支丹として取り調べをうけた。兄妹は水磔で殉教したが、キチジローは役人が一寸、脅しただけで棄教した。いたたまれなくなったキチジローは日本を離れマカオで暮らしていた。八年後、キチジローはロドリゴやガルペと共に日本へ戻った。トモギ村で平穏な生活を過ごしていたが、役人の詮議が激しくなりモキチやイチゾウと共に村の代表として役所に出向かされた。役所で踏絵を踏み、さらに役人の強制どおりに唾を吐き聖母の悪口を言い追放された。追放後も、ロドリゴを役人に売ったり、何度もコンヒサンをしては棄教を繰り返した。だが、最後には江戸切支丹屋敷で中間としてロドリゴに仕えた。

通辞は、キチジローの密告により捕まったロドリゴが日本に来て最初に討論した人物である。地侍の息子であり、出世するためにセミナリオで学び、通辞となった。洗礼は受けたが、もともと修道士になる志も切支丹にな

る心も持ち合わせていなかったという。カブラル師の日本人蔑視に強い不満を抱いていた。

井上筑後守は、三十年前、蒲生家の家臣だったとき、切支丹となった。今でも切支丹は邪教とはおもっていないが、日本には必要ないものとして弾圧に当たっている。元切支丹であっただけに様々な方法を駆使して多くの信徒や司祭を棄教させた。

フェレイラはポルトガル人司祭である。リスボンの神学校で教えていたことがあり、二十年間イエズス会の地区長として、日本宣教に活躍した。逮捕後、三日間穴吊りの拷問にも耐えたが、同じ穴吊りにあっている五人の百姓たちを助けるために棄教した。棄教後は、沢野忠庵という日本人を名乗らされ、「天文、医術の書を翻案し、病人を助け」、西勝寺ではキリスト教批判の書、「顕偽録」を書いている。ロドリゴの説得に当たり日本沼地論を展開する。

ロドリゴは、鉾山で有名なタスコ町で生れ、十七歳で修道院に入った。マルタとガルペと共にカムポリードの修道院でフェレイラから神学を学んだ。フェレイラ棄教の報告を受け、真相を突き止めるためにガルペと共に日本に潜入した。トモギ村、五島と宣教の働きは拡大したが役人の追求が激化した。モキチとイチゾウが水磔で殉教する姿を見届けた後、ガルペと別れ単独行動を取るが、キチジローの裏切りにより捕まった。同じ牢屋にいた長吉が刀で処刑されたり、春が海に突き落とされ死ぬ様子やそれを助けようとして海に沈んだガルペの姿を目の当たりにする。穴吊りの拷問にあっている信徒の苦しみやフェレイラの話聞き、踏絵を踏み棄教する。棄教後は長崎でフェレイラと共に切支丹探索の任に当たっていた。江戸に送られたのちは、岡田三右衛門の名と妻を与えられ、三十年間切支丹屋敷に幽閉され病死した。

ここに登場した「弱者」はよく見ると二種類に分けられる。キチジローを代表とする貧しい信徒とロドリゴを代表とする智識人である。さらに智識人は通辞、井上筑後守といった日本人とフェレイラ、ロドリゴの外国人司祭に分けられる。キチジローのような貧しい信徒の中には拷問の末に殉教する「強者」もいれば、キチジローの

ように拷問が怖くて棄教する「弱者」もいる。信徒側の問題は拷問に耐えられるかどうかにあると言ってよい。対する知識人は、日本人側には幕府の政策の変化や「西洋のキリスト教」に対する不満が根底にあり、拷問とは無関係である。そして西洋人側は、拷問を受けた上に、数多くの殉教者に対して神が沈黙しているという信仰的な煩悶と、「西洋のキリスト教」に対する不満もあった。このように棄教した「弱者」もそれぞれ異なる理由により棄教しており、単純に切支丹弾圧のせいだけとは言えない。そこで、「弱者」をキチジローを代表とする貧しい信徒の系譜とロドリゴを代表とする智識人の系譜に分け、次章から詳しく考察していきたい。

四、キチジローの系譜

キチジローの系譜に連なる「弱者」を順に見て行きたい。最初に確認できるのは『最後の殉教者』（「別冊文芸春秋」、一九五九・昭和三十四年二月）に登場する喜助である。『最後の殉教者』はいわゆる浦上四番崩れを背景とした作品で、舞台は浦上中野郷である。喜助は「囚体だけは象のように大きいが体に似あわぬ臆病者で何をさせても不器用」であった。部落の総代の国太郎爺からは、「喜助はいつかこの臆病ゆえに、ゼズ様を裏切るユダのごとなるかもしれない」と心配されていた。迫害が始まると案の定、真っ先に棄教し、「ころんだ」という証拠の爪印を押して、皆の前から姿を消した。国太郎爺の心配どおりになってしまったのである。その後、中野郷の信徒たちは津和野へ送られ、そこでも激しい拷問を受けていた。そこへ喜助がやってきて仲間と同じ牢屋に入った。作品はその翌日、喜助の拷問が始まる場面で終わっている。

さて、この作品には様々な問題が孕まれている。まず「強者」と「弱者」の定義である。棄教した喜助は、自分の弱さを嘆き、「人間には生れつき心の強いもの、勇氣あるものと、臆病で不器用なものとの二種類がある」と

考える。前者が「強者」で後者が「弱者」である。次に生れた時代の違いである。「信仰の自由が許されている昔に喜助が生きていたなら彼だって立派とはいえぬまでも、ゼスス様やサンタ・マリア様を決して裏切る羽目には陥らなかつたであろう」とある。これは遠藤が「サド伝」で、サドが「生まれた時代が違えば立派なクリスチャンであつただろう」と考えたことと同じである。そして、喜助の信仰が蘇ったきっかけを与えたのがある声だつたことである。失意の中にあつた喜助に対して次のように呼びかけている。

「みなと行くだけでよか。もう一ぺん責苦におうて恐ろしかなら逃げ戻つてもいい、わたしを裏切つてもよかよ。だが、みなのを追つて行くだけは行きんさい」

（『最後の殉教者』）

この声を聞いた喜助は、再び中野郷の信徒が拷問にあつて津和野にまでやつて来て同じ牢屋に入ったのである。『沈黙』では主人公のロドリゴに対して踏絵のキリストが語りかけていたが、ここではキチジローの原型とも言える喜助に呼びかける声が聞えたのである。キチジローとロドリゴが同じ「弱者」という範疇で括られる証左と言えよう。

次に登場するのは『その前日』（「新潮」、一九六三・昭和三十八年一月号）の藤五郎である。『最後の殉教者』と同じ浦上四番崩れが背景となっている。

『その前日』は、作者と等身大の（私）が手術を受ける前日の話と、浦上四番崩れの時の藤五郎の話が同時進行する。手術に怯える臆病者で聖書に触れてから三十年になる（私）と、拷問に耐えられず踏絵を踏んだ「弱虫」で三十歳の藤五郎と、キリストを裏切ったイスカリオテのユダの三人が同質の人間として描かれている。ここに登場する藤五郎がキチジローの系譜に連なる人物である。

藤五郎は「体の大きな男のくせに臆病者」で、みんなから軽蔑されており、「三十になつても嫁のきてがな」く、「母親と二人だけで暮らしてい」た。浦上四番崩れの時、藩の警吏が高島村を襲撃し、浦上に引っ張られた十人

の男の内の一人である。村人の心配通り藤五郎は代官所の吟味で弓をふりあげられる前に踏絵を踏み釈放された。藤五郎を除く九人は信仰を守り抜き、津山に送られる。九人が送られる船着き場には藤五郎の姿が見られた。津山で拷問を受けていた九人のうち、一番の年寄りだった久米吉が死んだ。それでもなお拷問に耐えている時、藤五郎が牢屋に入れられた。藤五郎は不思議な声を聞いたからだという。

そうれ：、拷問が恐ろしいなら戻れと言うと、藤五郎は奇妙なことを言いだした。自分がここに来たのは声を聞いたからである。自分はたしかにその声を耳にした。その声は藤五郎にもう一度だけ、皆のいる場所に行くことを奨める。皆のいる津山に行つて、もし責苦が恐ろしければ「逃げもどつてよい」から、あと一度だけ、津山まで行つてくれ、と泣くように哀願したと言うのである。

(傍線部引用者／『その前日』／「新潮」、一九六三・昭和三十八年一月号)
そのようにして皆の元へ戻つた藤五郎ではあつたが翌日、拷問を受けた藤五郎は再び棄教して、役人によつて追放され、行方知らずとなつた。一方で、拷問に耐えた八人は、明治四年、新政府の手で釈放された。

ここで重要なのは藤五郎が喜助と同様に皆が拷問を受けている場所へ戻つてくれという声を聞くことと、戻つた藤五郎が再び棄教した点である。何度も棄教する藤五郎の行為は一見無駄なように見えるが、臆病者の藤五郎が拷問を受ける覚悟をして皆の元へ戻つたことは一人が死んで失意の中にあつた八人に勇気を与えたに違いない。もしかすると、ここで藤五郎が戻つて来なかつたら八人は拷問に耐えられなかつたかもしれない。藤五郎の行為には意味があつたのである。

そしてキチジローという名前が初めて登場するのが『雲仙』（「世界」、一九六五・昭和四十年一月号）である。この作品でも作者と等身大の「能勢」という作家が、一六三一年十二月五日、雲仙の地獄谷で七人の信徒が殉教を遂げた場所を訪れ、その場所にいたはずのキチジローの痕跡を辿る取材旅行である。「能勢」は、「子供の時、家族ぐるみで洗礼をうけさせられ」「四十歳の今日まで、まだ棄教もせずに生きてきた」人物である。彼が雲

仙まで来た最初の目的は、コリヤドの『切支丹告白集』の中であつただ一人の「弱者」である「男」の痕跡を辿るためであつた。「強者」の告白にあふれている『切支丹告白集』のなかにあつて唯一の「弱者」であるこの「男」は、武士で「能勢と同じような薄弱な意志やまずしい節操を持つて」おり、「三百年も前、司祭の前に駱駝のように跪き幾分、自暴自棄と自分の汚なさを曝けだす快感にかられ」て、切支丹であることを隠した罪を告白している。だが、地獄谷に来ると、この「男」ではなくキチジローの姿が「能勢」の前にあらわれる。

キチジローもまた「女房子供の命を逃れうずるために」役人衆の前で転宗を誓つた「弱者」であつた。だが、転んだ後も長崎から小浜まで歩き、さらに雲仙を登つて七人の信徒が拷問を受けた場所まで来た。この時のキチジローの気持ち「能勢」は次のように推測する。

「ゆるしてください。わしはお前さまらのように殉教ばできる強か者でござりませぬ。こげんな怖ろしか責苦を思うただけで胸がつぶれるような気がいたします」

／（転び者には、あなたのわからぬ、転び者としての苦しさがござりまする）

（『雲仙』）

雲仙で拷問に耐えた七人の信徒はさらに島原の刑場へ送られる。キチジローはそれにもついていった。死刑を前にした牢舎にキチジローはあらわれ食事を差し入れする。だが、棄教者であるキチジローからの差し入れは拒否される。次の日、七人の信徒は火刑にあい殉教する。役人が火をつけた瞬間、キチジローは受刑者に近づくが、役人から切支丹かと尋ねられると、「自分は切支丹ではない、この人たちとは何の関係もない。ただこの光景に気が顛倒したのだ」と呟いて立ち去つた。キチジローは最後まで「強者」にはなれなかつたのである。

ここでキチジローは、『最後の殉教者』の喜助や『その前日』の藤五郎のように声に促されて信徒たちのもとに戻つてきたわけではないが、『沈黙』のキチジローとほぼ同様に、「弱者」の苦しみを味わいつつ、何度も棄教を繰り返している。「能勢」はそんなキチジローを想像しながら、完全にキチジローと一体化してキチジローの心の

弱さに寄り添っている。しかも、これらの記録を書いたのがクリストヴァン・フェレイラであるところに、『沈黙』との共通性がある。そのようにして、『沈黙』へと繋がっていくのである。

また、『沈黙』以外にも姉妹作『黄金の国』（「文藝」、一九六六・昭和四十一年五月号）と『メナム河の日本人』（新潮社、一九七三・昭和四十六年九月）の二作に繰り返し登場する嘉助がいる。『黄金の国』では、キチジローがロドリゴを裏切ったように嘉助はフェレイラを裏切り役人に居場所を知らせようとし、踏絵を踏む。嘉助は最初に登場した場面から「弱者」の苦しみを訴えており、ユダの問題に強い関心を持っていた。踏絵を踏んだ時も次のように訴えていた。

嘉助　かんにんしてくれんですか。かんにんしてくれんですか。皆の衆。こん世の中には弱か者と強か者とがおるとさ。強か者はこげんきつかこともこらえてハラインに行かるつとばってん、弱か者はこげんして踏絵ば踏んでしまう。

（『黄金の国』）

嘉助は棄教後もフェレイラの元を訪れ、雪や源之介、久市、茂吉の四人が水磔にかかることを報告して去る。『メナム河の日本人』での嘉助は、『黄金の国』と同一人物である。フェレイラの居場所を密告し棄教した罪の重荷に耐えきれず日本を離れアユタヤに流れ着いている。アユタヤでは殉教を覚悟して日本宣教に向う（ペトロ岐部）と出会い慰めを受ける。

嘉助　いやいや。転び者は地獄の火に投げ入れらるる。そうにきまつとります。こげん俺んような男は。ペトロ岐部　いいか、嘉助殿。神さまはな、お前さまのように己がつまずきに泣く者のためにおられるのだ。

もし日本の転び者たちが、皆、お前さまのように我と我が身をそのように責め苛んでいるならば：私は尚更、日本に戻りたい。戻って、神さまは罰したり裁いたりなさるために在すのではない。神さまは転び者の苦しみも心底知っておられると告げにいかねばならぬ。

ここに登場する〈ペドロ岐部〉は、「強者」であるばかりでなく人間の哀しみを知っている。そのことをエルサレムやローマを巡る十年の旅を通して知ったという。だが結局、嘉助は心の重荷を苦にして生き続ける。

このようにキチジローの系譜に繋がる「弱者」たちは、作者と等身大の主人公に共感を寄せられつつ、信仰の問題に苦悩して踏絵を踏んでいったのである。

五、ロドリゴの系譜

前述の通り、ロドリゴの系譜とは智識人であり、日本人と西洋人の両方がいる。遠藤文学で一番最初に登場する知識人の「弱者」は、『留学』の荒木トマスである。荒木トマスは有馬神学校を卒業し、しばらく修道士をしていた。一五八七年、突然禁教令が出され日本人司祭の養成が急務となりマカオの神学校に派遣された。さらに初めてヨーロッパに送られた留学生としてローマへ渡り、コレジオ・ロマノで学んだ間違いなく当時としては一流の「智識人」である。そして司祭の資格を得た後、一六一四年、伴天連追放令で激しい迫害が始まった日本へ帰国した。五年間潜伏したがついに捕まり棄教した「弱者」である。「汝のラテン語は善し。されど汝の信仰は悪し。汝の留学は無駄であった」というオザラザ師の評価④が最も象徴的である。この荒木トマスと対照的な生き方をしたのが〈ペドロ岐部〉である。拙稿⑤で論じたように、遠藤文学で初めて〈ペドロ岐部〉の名前が登場したのが『留学』であった。荒木トマスと〈ペドロ岐部〉は同じ有馬神学校を卒業し、同じようにローマへ渡り神父の資格を取り、同じように日本へ帰国し潜伏司祭として活躍した。だが、逮捕後、荒木トマスは棄教し、〈ペドロ岐部〉は殉教をした。同じような道を歩みながら最後は全く別な人生を歩んだ対照的な二人の生き方は、「強者と弱

者」の問題として大きな課題だったと言えよう。しかも荒木トマスもまた、遠藤が自分に近い人物として共感を持って描かれている。このことは、『留学』が単行本として刊行される際に削除された第二章の末尾部分に明確に現われている。『沈黙』とも関連する箇所なので引用したい。

信徒だけではなく、宣教師や司祭のような人たちの中にも、取調べの最中に棄教した者がいた。外人宣教師のキャラやフェレイラや日本人の荒木トマスのような人物がそうである。キャラやフェレイラは、転んだあとは岡本三右衛門とか沢野忠庵という日本名をつけさせられ役人たちの手先にされている。日本人の女を妻にもち子供まで生んだその人たちのことを教会側の研究では僅かしかふれていないが、その僅かな解説にも伝道史の汚点であり裏切者だという烈しい非難の言葉が使われていた。

(中略)

夕靄は街道を包みはじめていた。大村湾の島々も、もう背後の空の暗さと区別がつかなくなっている。この夕靄の街道を荒木トマスや沢野忠庵や岡本三右衛門などは、幾度通りすぎたことであろう。彼等は迫害の時代に生れたため、裏切者と言われる伝道史上の汚点と非難され、自分は今の時代に生れたからせいぜい布教雑誌で叩かれるだけですみ、こうして妻や子供までつれて九州に遊びに来ている。しかしこの夕靄の街道を荒木トマスや沢山の転び信徒が工藤と肩を並べて歩いている。

(傍線部引用者／『留学』／「群像」、一九六五・昭和四十年三月)

ここに出てくる「外人宣教師のキャラやフェレイラ」は言うまでもなく『沈黙』の主人公ロドリゴのモデルとなったイタリア人司祭ジュゼッペ・キャラとポルトガル人司祭フェレイラのことである。二人は背教した後、それぞれ「岡本三右衛門」、「沢野忠庵」と名乗らされ日本の役人の手先となった「転び者」であり、荒木トマスも「転び者」として似たような境遇をたどっている。また、ここで彼等達「転び信徒」と一緒に歩いている工藤は、「第一章 ルーアンの夏」の主人公で、フランス留学の経験があるカトリック信徒の作家であり、作者自身が色

濃く投影された人物である。「転び者」への遠藤の深い共感を読むことが出来る。

こうして『沈黙』では、フェレイラとキャラが主人公となっていたわけだが、姉妹作の『黄金の国』では、井上筑後守とフェレイラが「弱者」として登場する。『沈黙』に登場した井上筑後守は元切支丹であったことを自分でも告白しているが、なぜ切支丹を棄てたのかは語られていなかった。それに対して『黄金の国』の井上筑後守は棄教の理由を語っている。

井上 余が棄てたわけか。それはな：この日本の土にあの教えの苗は育たぬと思う
に至ったからだ。(中略)

井上 ……いいか。朝長。余は時折、この日本が嫌になることがある。嫌というより怖ろしくなることがある。切支丹で申す悪魔よりも、もつともつとうす気味のわるい泥沼だ、この日本は。他国のどんな苗でもこの沼に植えれば、枯れるか、似ても似つかぬ花を咲かすのだ。

(『黄金の国』)

井上がここで語る「日本泥沼説」は『沈黙』ではフェレイラがロドリゴに語ったものであるが、『黄金の国』では井上筑後守が切支丹であり後に殉教する朝長作右衛門に語っている。この意味は大きい。いわば、井上筑後守とフェレイラの深い関連性を窺うことができるからだ。さらにフェレイラを尋問した時の井上の次のセリフも重要である。

井上 そこもとの神が勝つか。余が勝つか。平田。

(『黄金の国』)

このセリフは明らかに芥川龍之介『神神の微笑』(「新小説」、一九二二・大正十一年一月)の「泥烏須が勝つか、大日靈貴が勝つか」を意識したものとと言える。先ほどの「日本泥沼説」も『神神の微笑』でオルガンティノ師を脅かす日本の「造り変える力」とよく似ている。こうした『沈黙』と『神神の微笑』の関連についてはいくらか

議論もあるが、ここを見る限り影響関係は明らかであろう。

さらに、『黄金の国』のフェレイラは、『沈黙』のロドリゴのように信徒が迫害を受けているのに沈黙している神に疑念を抱いている。様々な拷問にも耐えたが、最後には信徒たちを助けるため踏絵を踏む。ロドリゴのように踏絵から声は聞えないし、ロドリゴとは異なり、踏絵を踏んだことを後悔しているような様子も見られるが、日本で二十五年間宣教の働きをして、様々な迫害や殉教を見て来た結論として説得力がある。

そして、『メナム河の日本人』にもモレホンという元神父が登場する。史実のモレホン神父は二十七年間日本宣教で活躍し、日本追放以後も日本再潜入の方法を画策していた日本宣教の中心人物であった。だが、『メナム河の日本人』のモレホンはアユタヤに教会を建てたが、女性問題のため教会から離れたという過去を持つ。この点ではヘルツォーグ神父を思わせる。そしてアユタヤの町ではいつも酔っ払い、神からも人からも忘れられたいという願いを持ってひっそり暮らしている。この点ではグラム・グリーン『権力と栄光』のウイスキー神父を思わせる。

作品中でのモレホンの役割は、アユタヤに住んでいた日本人たちや、心の重荷を負っている嘉助、殉教したヘドロ岐部、王室の権力闘争に夢破れた山田長政らの人生を見守ることにある。

モレホン 人はそれぞれにわが身を賭けたもののために死んでいく。ペトロ岐部もオーヤ・セーナ・ピモック・長政殿も。その二人の臭いが、この日本人町の跡のどこかにまだくすぶっているようだ。その人間の臭いのなかには神がいる。神もその跡を私たちと同じように、つらそうに見ておられる気がする。

(『メナム河の日本人』)

このようにロドリゴの系譜につながる「弱者」たちは、智識人として高度な智識を要しながら、あるいは智識ゆえに「日本と西洋」「日本人とキリスト教」の問題にぶつかり、キリスト教から離れて行ったと言えるだろう。

六、荒木トマスの問題

最後に荒木トマスの問題について言及しておきたい。前述のように荒木トマスは、『留学』に初めて登場し、「強者」の（ペドロ岐部）と対照的な「弱者」として、他の作品にもいくつか登場する。拙稿⑥で論じたように、（ペドロ岐部）は『沈黙』に大きな影響を与えている。その『沈黙』の「オランダ商館員ヨナセンの日記」の中に一箇所だけ荒木トマスの名前が出て来る。次の箇所である。

一六四五年（正保二年十一月・十二月）

十二月五日（略）余は日本に來た時から背教パードレたちの事を知ろうと努めたが、荒木トマスという日本人は長くローマに滞在し、法王の侍従を勤めたこともあり、前に数回キリシタンであることを自訴したが、奉行は、彼が老年のために精神錯乱したのであると考えて放置し、その後一昼夜穴で吊された後、教えをすてたが、心中には信仰を失わず死亡した。今は二人のみ生存しているが、一人は忠庵というポルトガル人で元当地の耶蘇会の長であったが、その心は腹黒い。他の一人はポルトガル、タスコ生れの司祭ロドリゴで、これも奉行所で踏絵を踏んだ。二人とも現在、長崎に住んでいる。

（傍線部引用者／『沈黙』（新潮社、一九六六・昭和四十一年三月）

原典である村上直次郎訳『長崎オランダ商館の日記』（岩波書店、一九五六～一九五八）では「トーマ」となっているが『沈黙』ではわかりやすく「荒木トマス」と変更されている。これ以外で、荒木トマスに関する内容に変更はない。ただ、沢野忠庵（フェレイラ）と共に長崎に住んでいる「背教パードレ」が「ロドリゴ」となっており、原典にある「前の乙名後藤庄三郎殿（町年寄後藤庄左衛門貞朝か）の兄弟」とは全く異なる。これは明らかに創作である。

また、『沈黙』に関連する形で遠藤はいくつかのエッセイを書いていて、その中にも荒木トマスの名前が見受けられる。その一つが三浦朱門と共著の『キリシタン時代の知識人―背教と殉教―』（日本経済新聞社、一九六七・昭和四十二年五月）である。この中に「トマス荒木―最初のヨーロッパ留学生の苦悩」という章があり、荒木トマスについて説明しているが、実は『留学』第二章「留学生」とほぼ同じである。「荒木トマス」が「トマス荒木」となるなど多少の語彙の違いはあるが内容はほとんど変わらない。もう一つは『沈黙』の取材記録や舞台裏を語ったエッセイ「一枚の踏絵から」（『切支丹の里』（人文書院、一九七一・昭和四十六年一月、所収）であり、これも『留学』第二章「留学生」と内容が重なる。

そして、荒木トマスと同じようにヨーロッパへ渡り日本に帰国したのちに背教した天正少年使節の一人千々石ミゲルと同列に比較する形でエッセイ「主観的日本論 Ⅱ」（『朝日新聞』、一九七二・昭和四十七年八月二十八日）や小説『銃と十字架』（中央公論社、一九七九・昭和五十四年四月）に登場する。特に『銃と十字架』では荒木トマスと（ペドロ岐部）の生き方の違いについて明確に示されている。次の箇所である。

ペドロ岐部が千々石ミゲルや荒木トマスの轍を踏まなかったのは、この基督者の歴史的行為と基督教との明確な区別を認識したためだと思われる。不幸にして千々石ミゲルや荒木トマスは十六、七世紀の西欧基督教会の行動を基督教の教えそのものと混同した。この世紀の教会の過失を、基督教自体の性格と錯誤したのである。彼等は基督教会もまた歴史的に数多くの過ちを犯しながら、より高きものに成長していくのだという「教会の成長」という考えを持ちえなかったのだ。千々石ミゲルや荒木トマスは、この時代の教会の過失を基督教そのものと同一視して、信仰を放棄した。だがペドロ岐部は彼等二人よりも、よくイエスを知っていた。

（傍線部引用者／『銃と十字架』）
『留学』の時点では「転び者」の荒木トマスと「殉教者」の（ペドロ岐部）という認識しかなかったが、ここ

ではなぜ二人が異なる生き方をしたのかその分岐点をヨーロッパ体験に置いている。「転び者」となった千々石ミゲルや荒木トマスと、「殉教者」となった（ペドロ岐部）の生き方の違いは、ヨーロッパの植民地支配の現状に対して、教会の過失と基督教そのものを区別できるか否かにあったという。このことは、遠藤自体が「基督者の歴史的行為と基督教との明確な区別」ができるようになったことを示しているのではないだろうか。この頃、遠藤の切支丹研究は十年以上におよび、東京、東北、長崎の日本各地にある殉教地を何度も訪れて小説の糧としてきた。子供の頃から読み続けていた聖書研究も、最新の神学を学んだ上でエルサレムも訪れ、『イエスの生涯』『キリストの誕生』『死海のほとり』を著した。その上で、（ペドロ岐部）のような「強者」の心情と、荒木トマス、千々石ミゲルのような「弱者」の心情のいずれにも通じるようになったのである。荒木トマスが問いかける「弱者」の意味の大きさを物語っている。

① 例えば、次のようなものがある。

一、「遠藤文学における〈ペドロ岐部〉(一)——『留学』『沈黙』を中心として——」(『遠藤周作研究』第八号、二〇一五・平成二十七年九月)

二、「遠藤文学における〈ペドロ岐部〉(二)——『メナム河の日本人』から『王国への道』まで——」(『京都外国語大学研究論叢』第八十五号、二〇一五・平成二十七年七月)

三、「『人間』を語る「歴史小説」——山本周五郎『赤ひげ診療譚』と遠藤周作『王の挽歌』——」(『キリスト教文藝』、二〇一五・平成二十七年七月)

② 遠藤周作「白人の小説について」(『毎日新聞』、一九五五・昭和三十年七月二十八日)

③ 遠藤周作「切支丹時代の知識人」(『展望』、一九六六・昭和四十一年一月号)

④ 遠藤周作「トマス荒木——最初のヨーロッパ留学生の苦悩」(『キリシタン時代の知識人——背教と殉教』日本経済新聞社、一九六七・昭和四十二年五月)

⑤ 「遠藤文学における〈ペドロ岐部〉(一)——『留学』『沈黙』を中心として——」(『遠藤周作研究』第八号、二〇一五・平成二十七年九月)

⑥ 注⑤に同じ。

第二章 遠藤文学における〈ヘペドロ岐部〉(一) — 『留学』『沈黙』を中心として —

一、「強者」と「弱者」

「弱者」の文学①と呼ばれる遠藤文学において〈ヘペドロ岐部〉②は唯一の「強者」③である。〈ヘペドロ岐部〉は、一六一五年禁教令により日本を離れた後、フィリピン、マカオ、ゴア、エルサレム、ローマをめぐる司祭の資格を得た後、一六三〇年禁教下の日本に潜入し、九年間潜伏司祭として活躍し、逮捕後も穴吊りの拷問にまで耐え、一六三九年殉教を遂げた。二〇〇八年には「福者」にも認定された④、間違いなく「強者」と言える。そんな〈ヘペドロ岐部〉に遠藤が関心を持つようになったのはH・チースリク(一九一四—一九九八)の影響を抜きに考えられない。というのもH・チースリクが歴史に埋もれかけていた〈ヘペドロ岐部〉を発掘し、その業績を世に知らしめた功労者であるからだ。H・チースリクがいなかったら地元の人ですら知らなかった〈ヘペドロ岐部〉⑤が大分を代表する人物として取り上げられることもなかったし、「福者」として認定されることもなかっただろう。さらに特筆すべきはH・チースリクの〈ヘペドロ岐部〉研究⑥が形成されつつあった一九六五・昭和四十年頃、遠藤周作がH・チースリクの下で切支丹研究を進めていたことである。遠藤は〈ヘペドロ岐部〉のような「華々しく殉教した強者」⑦についてH・チースリクから講義を受ける一方で講義では扱わなかった様々な「転び者」に関心を寄せていき創作へと結びつけていった。作品の中で主人公は「転び者」のような「弱者」であったとしても、対照的な存在である「強者」を無視することは不可能であるからだ。

そこで本稿では、H・チースリクの〈ヘペドロ岐部〉研究を概観した後、遠藤文学における〈ヘペドロ岐部〉について考えていきたい。ただし、遠藤文学における〈ヘペドロ岐部〉とはいっても多岐にわたるため、『メナム河の日

本人』（新潮社、一九七三・昭和四十八年九月）以降については別稿⑧に譲るとしてここでは『留学』『沈黙』を中心としていくこととする。

二、H・チースリクと（ペドロ岐部）

まずは（ペドロ岐部）について概要を示すことから始めたい。H・チースリク監修『日本史小百科 キリシタ』（東京堂出版、一九九九・平成十一年九月）には次のようにある。

ペドロ岐部カスイ（一五八七～一六三九）

江戸初期のイエズス会司祭。殉教者。豊後国東半島の浦辺出身。慶長五年（一六〇〇）頃から長崎のセミナリヨ（注…有馬のセミナリオ）で修学。禁教発令後元和元年（一六一五）マニラに渡航。ついで海路と陸路をたどりローマ着。一六二〇年同司教区で司祭に叙階された。二年ローマを発ち、五年にはマカオ着。日本潜入を決意し、寛永七年（一六三〇）薩摩坊津に上陸、長崎を経て東北で布教に従事。寛永十六年（一六三九）伊達藩領で捕縛され、江戸送りの後、穴吊し等あらゆる拷問を受けたが、屈することなく、同年焼き殺され、凄絶な最後を遂げた。

（傍線部引用者／『日本史小百科 キリシタン』）

ごく簡潔にまとめられているが、末尾の「同年焼き殺され、凄絶な最後を遂げた」という箇所を見るだけでも遠藤が言うところの「華々しく殉教した強者」であることは間違いない。ではこの（ペドロ岐部）にH・チースリクがどうして関心を持つようになったのか。長い引用となるが見ていきたい。

岐部神父との最初の出会いは、前記の通り三十年前のことであった。そのとき私は、今の栄光学園の校長

フオス神父と一緒に、江戸のキリシタン屋敷の古記録集である『契リス督記』と『査祓余録』をドイツ語に翻訳し、種々の研究と注釈を加えて、一九四〇年に上智大学の『モニュメンタ・ニッポニカ・シリーズ』で出した。

中に、「仙台より二十一年以前寅年、日本伴天連キベ・ペイトロ……」が捕えられ、また「キベ・ペイトロは転び申さず候、吊し殺され候」という記事が出ていた。無論、この箇所について、すでに姉崎正治博士が調べたことがあり、このペイトロは疑いもなく、ペイトロ・カスイという名で知られている神父である確証を得た。したがって『契リス督記』の翻訳も、姉崎博士の注釈をそのまま引用した。

姉崎博士の調査は、大体パジェスの『日本切支丹宗門史』によるものではあったが、そのときカスイ神父の父は、ロマノ・キベと言われたこと、また、彼は豊後に生まれ、後にローマまで歩いて行き、途中でパレスチナに巡礼したので、初めて聖地を訪れた日本人であるなどのことを知り、その並々ならぬ人格に魅きつけられ、非常な感銘を受けたのである。

（H・チースリク「岐部神父の研究を顧みて」／『海賊の末裔―波乱にとんだ岐部神父の物語―』（中央出版社、一九六九・昭和四十四年八月）

色々と興味深い話である。まずH・チースリクが〈ヘドロ岐部〉と出会ったきっかけとなった「江戸のキリシタン屋敷の古記録集である『契リス督記』と『査祓余録』や「パジェスの『日本切支丹宗門史』という史料であるが、いずれも遠藤周作が『沈黙』を書く際に使った重要な史料であり、後で言及するが〈ヘドロ岐部〉と『沈黙』との深い関わりを証拠付けるものとなっている。また、ここで言及されている三十年前とは一九三九・昭和十四年頃のことであり、H・チースリクの〈ヘドロ岐部〉への深い関心を窺い知ることができる。

H・チースリクはこうした〈ヘドロ岐部〉との最初の出会いから二十年後の一九五九・昭和三十四年、〈ヘドロ岐部〉に関する最初の論文である「最後の日本人伴天連（上）…ペドロ・岐部神父の生涯」（「ソフィア」一九五九・

昭和三十四年六月）を発表する。その後次々と論文を発表し、それらの研究成果をまとめた最初の研究書が『キリシタン人物の研究―邦人司祭の巻―』（吉川弘文館、一九六三・昭和三十八年十二月／以下『キリシタン人物の研究』と呼ぶ）⑨であり、これもまた『沈黙』の重要資料となった。さらに一般向けの『海賊の末裔―波乱にとんだ岐部神父の物語―』（中央出版社、一九六九・昭和四十四年八月）や『世界を歩いた切支丹』（春秋社、一九七一・昭和四十六年六月）⑩などを通して（ペドロ岐部）の生涯や業績が初めて明らかとなった。というのも、（ペドロ岐部）は日本国内だけでも東北、東京、大分、長崎、鹿児島と渡り歩き、海外ではフィリピン、マカオ、タイのアユタヤ、インドのゴア、エルサレム、ローマ、ポルトガルのリスボンと世界中に痕跡を残しているまさに「世界を歩いた切支丹」であり全貌を掴むのは困難であったからだ。

こうした（ペドロ岐部）研究が進む中で、H・チースリクに師事したのが遠藤であった。遠藤は切支丹研究を進めるために、一九六五・昭和四十年四月から上智大学のH・チースリクの授業に三浦朱門とともに参加している。この授業を通して遠藤が強く関心を寄せたのは「転び者」と呼ばれる背教者たちであり、「強者」と「弱者」であった。これらについて遠藤は次のように述べている。

当時、私はまだ切支丹の勉強を詳しくやっていたから、三浦朱門をさそって、上智大学のチースリク教授のところに出かけた。先生は切支丹学者として私もすでにその名を知っていたからである。

こうして切支丹の本を少しずつ読みながら、私の勉強はさきほどの三つの疑問にすべて、しぼられていた。つまり、華々しく殉教した強者のことではなく、卑怯さ、肉体の弱さ、死への恐怖、家族を助けたい一心で、遂に信念を捨て、踏絵に足をかけてしまった弱者たちに私の心は向けられていたのである。

そして、気がついたことは、切支丹の数多い文献は、殉教者について語っていても、裏切り者についてはほとんど触れていないということだった。

（傍線部引用者／『『沈黙』―踏絵が育てた想像』／「朝日新聞」、一九六七・昭和四十二年八月二十五日）

三浦朱門と私とが上智大学のチースリック先生を週に一回たずね、この切支丹の碩学から転び者の一人、一人について教えを乞うたあの日々のことを私は今、なつかしく思い出す。「どうして、あなたたちは」とチースリック先生はある日、苦笑して言われた。「転び者に興味をもつのですか」

私は笑って黙っていた。しかし唇にその返事はほとんど出かかっていた。「それは……私が小説家だからです。そして私が彼等に近い……からです」

（傍線部引用者／「一枚の踏絵から」／『切支丹の里』人文書院、一九七一・昭和四十六年一月）

H・チースリックに師事することで遠藤の切支丹研究が深まっていく様子がわかる。しかも遠藤は単なる学問的好奇心だけではなく小説家として「転び者」や「弱者」に対して関心を寄せており、さらには創作の構想へと繋げていることも窺い知ることが出来る。また同時にH・チースリックと遠藤の関心の相違もはっきりとしている。H・チースリックの関心が〈ペドロ岐部〉のような「華々しく殉教した強者」にあったのに対して、遠藤の関心が「卑怯さ、肉体の弱さ、死への恐怖、家族を助けたい一心で、遂に信念を捨て、踏絵に足をかけてしまった弱者たち」や「転び者」にあったことである。ここでは具体的な名前は挙げられていないがこの頃発表された論文や著作からもH・チースリックが〈ペドロ岐部〉に関心を持っていたことは明らかである。当然遠藤もH・チースリックから〈ペドロ岐部〉について様々な教授を受けていたはずである。だが、遠藤の関心は〈ペドロ岐部〉よりも「転び者」に向いていたのである。ただし、光がなければ闇も存在しないように、遠藤がいくら「弱者」に関心を持ち強調したとしても、「強者」がいなければその存在は曖昧なものとなる。その意味で「弱者」の対照としての「強者」である〈ペドロ岐部〉の存在は、遠藤にとつて特別な地位を占めていたはずである。以下具体的に作品の中で〈ペドロ岐部〉がどのような役割を果たしているのかを明らかにしていきたい。

三、『留学』 ～荒木トマスとヘペドロ岐部～

『留学』（文藝春秋社、一九六五・昭和四十年六月）におけるヘペドロ岐部を考える。『留学』は「第一章 ルーアン⑩の夏」 「第二章 留学生」 「第三章 爾も、また」の三部で構成されており、主人公や時代はそれぞれ異なるが「ヨーロッパに留学した日本人」という共通点を持っている。いずれも遠藤のフランス留学体験が反映している⑩。このうちの「第二章 留学生」では主人公荒木トマスと似たような境遇をたどりながら全く別の人生を歩んだヘペドロ岐部の名前が三回登場する。遠藤作品においてヘペドロ岐部の名前が登場したのはこれが初めてである。登場個所を順に引用すると次のようになる。

第一に有馬セミナリオの卒業生について説明している部分である。

…この神学校（注…有馬セミナリオ）を終えた学生の中には後年、長崎の西坂の丘で二十六聖人と同様に火刑に処せられたセバスチアン木村や、また荒木トマスのようにローマに留学して帰国後捕えられ、穴吊りの刑によって死んだカスイ岐部の両神父がいる。

（傍線部引用者／遠藤周作『留学』）

同じ有馬セミナリオを卒業したものの、背教した荒木トマスと異なり「華々しい殉教」を遂げたセバスチアン木村⑩やヘペドロ岐部について言及されている。「弱者」としての荒木トマスと「強者」としてのセバスチアン木村とヘペドロ岐部との対照的な生き方の違いが明確に表れている。

第二に日本からヨーロッパにわたる道についてである。

ヨーロッパに行くのは、ここから二つの道があった。後年、殉教者となったカスイ岐部がとったようにペルシャ湾のオルムズに渡り、隊商たちに加わってパレスチナから伊太利に赴く方法と海路をえらんでポルトガルに行きローマを目指す方法とである。荒木はおそらくこの後者の道を選んだものと思われる。

荒木トマスも「ペドロ岐部」も「ヨーロッパに留学した日本人」であるが、ローマへの道のりは異なる方法を取っている。荒木トマスは海路を選びポルトガルからローマを目指し、「ペドロ岐部」は陸路を選びエルサレムからローマを目指した。どちらの道も過酷な旅程であったことはいうまでもない。ここまでは二人の生き方はほぼ同じ道を進んでいる。

第三にローマ留学時代の記録についてである。

十年後、同じローマに留学したカスイ岐部の場合には、後年、殉教者となった榮譽を飾るためにもその記録もかなり残り、通学したコレジョ・ロマーノ（今のグレゴリアン大学）では成績表も保存しているし、この修練院で修練を受け、いつ司祭になったかもわかっている。しかし、転び者、荒木トマスの場合は、この場合もほとんどが不明にされている。

(傍線部引用者／遠藤周作『留学』)

二人ともローマではコレジョ・ロマーノに学び、司祭となったが「殉教者」の「ペドロ岐部」の成績表などの記録が残されているのに対し、「転び者」の荒木トマスの記録はほとんど残っていない。ヨーロッパでの二人の生き方に対する受け止められ方の違いが窺える個所である。

以上三ヶ所である。ほんのわずかしか「ペドロ岐部」の名前は登場しないが、有馬セミナリオを卒業し、ヨーロッパに渡り、ローマで学び司祭となった荒木トマスとほぼ同じ人生を歩んだことはよくわかる。問題は同じ「ヨーロッパに留学した日本人」でありながら、「ペドロ岐部」ではなく荒木トマスを主人公として遠藤が選んだ理由である。この三ヶ所の引用でも明確に示されている通り、荒木トマスは「転び者」であり、「殉教者」の「ペドロ岐部」と最後には正反対の道を選んだからである。

四・『沈黙』と〈ペドロ岐部〉

前述のとおり『沈黙』はH・チースリクに師事した遠藤の切支丹研究の一つの到達点であり、藤田尚子編『遠藤周作『沈黙』草稿翻刻』（長崎文献社、二〇〇四・平成十六年三月）の蔵書目録を見てもその研究の堅実さや重厚性は揺るぎのないものである。多種多様な資料があるが〈ペドロ岐部〉とも深い関連のあるH・チースリク『キリシタン人物の研究』は『沈黙』成立に関わる決定的な役目を果たしており、同時に『沈黙』における〈ペドロ岐部〉の役割を証拠づけるものとなっている。

そもそも遠藤が〈ペドロ岐部〉の存在を知ったのは「ふと読んだチースリック教授の論文」に拠る⑬。この論文に関してはいくつかの可能性があるが、三木サニア氏⑭の指摘するように『キリシタン人物の研究』で間違いはないだろう。例えば、『沈黙』執筆時の「一九六四・昭和三十九年七月十九日（日曜日）」の日記⑮にはっきりと読んだと書いてあり、同時期のエッセイでも「名著」として次のように紹介されている。

殉教した智識人の生涯については上智大学チースリック教授の「キリシタン人物の研究」という名著があるが、棄教した人物については教会側もできるだけ黙殺しようとしたためか、また幕府も闇から闇に葬り去ろうとしたせい、その生涯があきらかでない。

（傍線部引用者／遠藤周作「切支丹時代の智識人」／「展望」、一九六五・昭和四十年一月号）

また、『沈黙』の草稿を発見した藤田尚子氏も『沈黙』の「まえがき」でフェレイラが巡察師アンドレ・バルメイロ神父に宛てて長崎から発送した雲仙殉教の報告も『キリシタン人物の研究』から引用されたことを指摘されている⑯。藤田尚子氏の指摘をもとに『沈黙』「まえがき」と『キリシタン人物の研究』「アントニヨ石田」を比較検討⑰すると、フェレイラの報告書は『キリシタン人物の研究』「アントニヨ石田」に資料としてあり、『沈黙』ではその重要部分を抜粋して編集されていることがわかる。

さらに他の箇所においても『キリシタン人物の研究』の引用が発見できた^⑩。『沈黙』の「まえがき」でロドリゴが日本に向いリスボンを出発してモザンビーク、ゴアを経てようやくマカオへ辿り着きヴァリニャーノ神父から日本の状況を聞く場面と「セバスチアン・ロドリゴの書簡」で日本へ渡る直前の苦難の場面の二ヶ所である。両方とも『キリシタン人物の研究』の「ペドロ・カスイ・岐部―世界を歩いた伴天連―」で「ペドロ岐部」が日本に戻るため、リスボンを出発してマカオに至る場面とフィリピンから日本へ潜入する際の苦難の場面から地名や重要語句などがほぼそのまま引用されている。ここにはロドリゴの「強者」としての側面を見ることが出来る。つまり、ロドリゴは最初から最後まで「弱者」として描かれたのではなく、最初は「強者」を目指した人物が挫折をして「弱者」の哀しみを理解する人物として造形されているのだ。その「強者」として神学校の恩師であったフェレイラやフランシスコ・ザビエル、そして「ペドロ岐部」がいたと考えられるし、だからこそ「ペドロ岐部」の苦難の旅路を引用したのである。

その上で、引用ではないが『沈黙』と『キリシタン人物の研究』および「ペドロ岐部」が深く関わる「神学校」「ミゲル・マツダ」「穴吊り」「一六三九年」の四つの側面から考えたい。

第一に「神学校」。『沈黙』ではロドリゴとフェレイラは同じポルトガルの出身でポルトガルにあるカムポリーアの修道院では師弟関係にあったという設定である。ロドリゴのモデルとなったジュゼッペ・キャラはイタリヤ出身でありポルトガルの修道院とは何の関係もないが、「ペドロ岐部」をモデルとして想定した場合、有馬セミナリオで師弟関係だったポルロ神父、式見神父との関係が連想される。これら三人の数奇な運命について遠藤は後年次のように述懐している。

水沢市福原（見分）のまだ畠や藁葺きの農家や林の残っているあたりを歩いていると、人間の運命というものを考えざるをえない。ポルロ神父、式見神父、岐部神父―この三人はともに遠い九州有馬にある有馬神学校で教師であり生徒だった関係であるその三人がやがてこの見分で再会し、死の危険を冒しながら自分の

信ずる神の教えを説き、そしてそのあげく、ふたりはころびバテレンとなり、ひとりが殉教するにいたった。凄惨というか、過酷というか、その運命の結末はそれぞれまったくわかれてしまったのである。わたしは見分の畠や林を歩きながら、ここでも神の存在、神の意志に思いをはせざるをえなかった。

（傍線部引用者／遠藤周作「東北の切支丹―支倉常長とペドロ岐部」／『探訪大航海時代の日本⑧回想と発見』小学館、一九七九・昭和五十四年三月）

有馬セミナリオで同じ時間を過ごした三人のうちポルロ神父と式見神父は「ころびバテレン」となり、ヘペドロ岐部は「殉教者」となった。また、前述したように同じ有馬セミナリオを卒業した中には、荒木トマスのような「転び者」もいれば、セバスチアン木村やヘペドロ岐部のような「殉教者」もいる。こうした有馬セミナリオの様々な卒業生の運命も含めてフェレイラとロドリゴの関係を遠藤は造形したのかもしれない。付け加えると、『沈黙』の中で捕縛後、ロドリゴと初めて議論を交わした通辞もセミナリオでポルトガル語を学んだという。これも有馬セミナリオを卒業した「転び者」が意識されている。第二に「ミゲル・マツダ」。ミゲル松田神父はヘペドロ岐部とともに一六三〇年フィリピンから日本へ潜入に成功した。長崎へ渡り司祭として潜伏活動をした末、一六三三年八月長崎近郊にて病没した。『沈黙』では長崎へ潜入したロドリゴたちが日本人からミゲル松田神父の話を聞いている。

司祭はもちろん修道士たちの一人にもこの連中はもう六年も会っていないのです。六年前までは、それでもミゲル・マツダとよぶ日本人の司祭とイエズス会のマテオ・デ・コーロス師とがひそかにこの近辺の村や部落と連絡を保っていました。二人とも一六三三年の十月に疲れ果てて死んでしまったのです。

（傍線部引用者／「ロセバスチアン・ロドリゴの書簡」／『沈黙』）

ここでの話は歴史事実通りであるが、遠藤は恐らく『キリシタン人物の研究』の次の箇所を参考にしたと考えられる。

同年（注…一六三三年）十月には松田神父の運命もついに尽きてきた。それはこの大規模な搜索と関係するのであるが、彼をそれまでかくまっていた家の主人がもはや危険に耐えられなくなったのである。おそらく家宅搜索が切迫していたのであるう、宿主は荒天の日に彼を追い出してしまった。嵐と雨の中を身を置くところもなく三日間さまよった末、彼はついに力尽き、行き付いて死んだのであった。

この組織的な探索によって長崎と大村に潜伏していた宣教師の大半も捕えられ、処刑されたが、これは迫害下の教会にとって大打撃であった。（中略）管区長マテオ・デ・コーロスは十月二十九日大村に近い波佐見で衰弱のため歿した。他の会の損失も同様に傷ましいものであった。

（傍線部引用者／H・チースリク「ペドロ・カスイ岐部」『キリシタン人物の研究』）
「ミゲル・マツダ」と「マテオ・デ・コーロス師」の二人は確かに「疲れ果てて死んでしまった」のであり、内容は重なる。このミゲル松田の名前を出すことで作品に実証性と「ペドロ岐部」との深い関連を匂わせているのである。

第三に「穴吊り」。『沈黙』における拷問のうち「穴吊り」は特別な意味を持っている。そもそも『沈黙』はフェレイラが「穴吊り」の拷問を受け棄教したことから物語が始まった。ロドリゴは恩師であり敬愛するフェレイラすらも棄教せしめた「穴吊り」の恐怖におびえていた。ロドリゴが踏絵を踏む決意をしたのも「穴吊り」で苦しめられている農民たちを救うためでもあった。「穴吊り」はそれほど恐ろしい拷問であった。歴史事実としては「穴吊り」で棄教した代表的な人物がフェレイラであり、棄教しなかった数少ない一人が「ペドロ岐部」である。こうした「穴吊り」をめぐるフェレイラと「ペドロ岐部」の違いについては遠藤が『沈黙』創作の際に利用した資料の一つ山本秀煌『江戸切支丹屋敷の史蹟』が参考になる。同書では次のようにある。

竹中采女はこの倒懸の刑（注…穴吊り）を宣教師に適用して首尾よく一人の司祭フェレイラなる者を棄教せしめたが、今、井上筑後は之れをペイトロ（注…ペドロ岐部）に適用して失敗したのである。併しながら

ペイトロの死んだのは拷問の結果ではなく、同穴に同時につるされて居た同宿二人則ち切支丹の学生が殺したのだと云ふ。

(傍線部引用者／山本秀煌『江戸切支丹屋敷の史蹟』イデア書院、一九二四・大正十三年六月)
フェレイラを棄教させるのに成功した「穴吊り」をへペドロ岐部へに用いたが失敗したという短い記述だが、竹中采女、フェレイラ、井上筑後守といった『沈黙』の重要登場人物とへペドロ岐部との関わりを知る重要な手がかりである。さらに『キリシタン人物の研究』ではへペドロ岐部も体験した「穴吊り」に関連してロドリゴのモデル、ジュゼッペ・キアラの名前も見受けられる。

たとえば井上筑後守の報告の中には、司祭でさえも穴の中で棄教し、「念仏」を唱えたという記録がしばしば見られる。キアラ神父(注：『沈黙』ロドリゴのモデル)とその伴侶はオランダ人の目撃者のはっきり報じているとおり、後で棄教を取り消そうとしたが、当局はこれを認めず、神父たちをその後も棄教者として扱っている。

悲しむべき例外は不幸なクリストヴァン・フェレイラ神父であった。一六三三年、彼は穴吊しになって棄教し、それを取り消さなかったばかりか、その後、沢野忠庵と称して二十年にわたって幕府のために働いたのである。それ以来「穴吊し」が棄教させるために最も有効な手段と見られるようになったのである。

(傍線部引用者／H・チースリク「ペドロ・カスイ岐部」『キリシタン人物の研究』)
へペドロ岐部へが屈しなかった「穴吊り」の拷問が様々な司祭を陥れてきたのかを説明する場面である。ここでもフェレイラの棄教によって幕府が「穴吊り」の有用性を知り、多くの司祭に用いられたことがわかる。そして『沈黙』の登場人物、井上筑後守、キアラ(ロドリゴ)、フェレイラとへペドロ岐部との関わりを知ることが出来る。おそらく遠藤はこれらの資料をもとに「穴吊り」をめぐる竹中采女、フェレイラ、井上筑後守、ロドリゴといった登場人物を造形していったと考えられる。

最後に「一六三九年」。『沈黙』の主人公ロドリゴは㊦章、一六三九年五月に日本へ潜入¹⁹し、㊧章、一六三九年九月に長崎で踏絵を踏み棄教する。全九章（「まえがき」「切支丹役人日記」も章として数えると全十一章）のうちほとんどが一六三九年に起った出来事である²⁰。これはロドリゴのモデル、ジュゼッペ・キャラとは異なる。キャラが日本に潜入したのは一六四三年五月のことであり、四年もの差がある。

そもそも一六三九年は（ペドロ岐部）が逮捕され殉教した年であった。このことは『キリシタン人物の研究』をはじめとする多くの資料で確認できる。中でも『契リス督記』²¹や『沈黙』の「創作ノート」²²を見ると、島原の乱後の一六三九年に（ペドロ岐部）が殉教したと一六四三年にキャラが日本へ潜入したことが並べて書かれてあり、遠藤がロドリゴを造形する際に（ペドロ岐部）の殉教の年とキャラの日本潜入の年を入れ替えたことが考えられる。また、一六三九年は取り調べの中で（ペドロ岐部）とフェレイラが出会った年でもある。その時の様子を遠藤は次のように説明している。

パジェスによると、一六三九年（寛永十六年）イエズス会のカスイ神父が捕えられ、前後して捕縛され式見神父、ポルロ神父とともに江戸に移送され、五月か六月に評定所に出た所、フェレイラがそこに列席し、棄教をすすめたという。もしそれが事実ならば沢野忠庵ことフェレイラは長崎と江戸とを棄教後たびたび往復して、その後、捕えられた宣教師たちの取り調べの通訳をさせられたと考えられる。「日本人カスイ神父が白洲で不幸なフェレイラに引き会わされたのであった。そしてカスイ神父はそのフェレイラを臆せず非難した。フェレイラは白洲から姿をかくした」

（傍線部引用者／遠藤周作「一枚の踏絵から」／『切支丹の里』人文書院、一九七一・昭和四十六年一月）

「パジェス」とは『沈黙』の資料の一つであるレオン・パジェス『日本切支丹宗門史（上・中・下）』（岩波文庫、一九三八・昭和十三年）のことであり、「カスイ神父」は（ペドロ岐部）のことである。ここで（ペドロ岐部）は棄教して幕府の手先となっているフェレイラに対して「臆せず非難した」という。『沈黙』におけるロドリゴと

フェレイラの出会いを連想させる場面である。ロドリゴのモデルであるキャラ神父も福岡へ上陸後すぐに逮捕され博多、長崎と連行され、最終的に江戸²³で取り調べを受けた際に通訳としてフェレイラと出会っているが、二人の間にどのようなやり取りがあったのかは記録にない。おそらく遠藤は「ヘペドロ岐部」とフェレイラのやり取りをもとにロドリゴとフェレイラの出会いを演出していったのであろう。

以上のようにして『沈黙』において「ヘペドロ岐部」は名前こそ登場しないもののロドリゴの形象と深く関連し、ポルトガルから日本へ潜入する旅路という『キリシタン人物の研究』からの直接的な引用によって用いられたり、「神学校」「ミゲル・マツダ」「穴吊り」「一六三九年」といった「ヘペドロ岐部」の周辺から間接的にロドリゴの形象と関与している。これらのことはいずれも「強者」としてのロドリゴの側面と関わり、ロドリゴが「強者」から「弱者」へ関心を変化させていく心の劇を演出するものとなっている。その意味でも「ヘペドロ岐部」の果たす役割は大きい。

- ① 例えば、武田友寿は『『沈黙』の世界―弱者の論理―』／『遠藤周作の世界』（中央出版社、一九六九・昭和四十四年十月）の中で『沈黙』の核心を「弱者の復権」と捉えている。
- ② （ペドロ岐部）については「ペドロ岐部」「カスイ岐部」「岐部神父」「ペドロ岐部カスイ」「ペドロ・カスイ・岐部」など様々な呼び方があるため本稿では「ペドロ岐部」と統一して呼ぶこととする。
- ③ 『銃と十字架』の「あとがき」には次のように「ペドロ岐部」を「強者」と規定している。
彼は今日まで私が書きつづけた多くの弱い者ではなく、強き人に属する人間である。そのような彼と自分との距離感を埋めるため、やはり長い年月がかかった。
- ④ 列福式の様子については「カトリック東京大司教区」HPにあるリーフレット「日本の一八八殉教者列福式」などで知ることが出来る。
- 《参考URL》 <http://www.tokyo.catholic.jp/text/diocese/rekishijunrei.htm>
- ⑤ 「ペドロ岐部」の地元である国東半島浦辺で「ペドロ岐部」が知られるようになった経緯についてはH・チーリックの『海賊の末裔―波乱にとんだ岐部神父の物語―』（中央出版社、一九六九・昭和四十四年八月）の巻末に詳しく書かれている。
- ⑥ H・チーリックは『キリシタン人物の研究―邦人司祭の巻―』（吉川弘文館、一九六三・昭和三十八年十二月）で三人の邦人司祭を取り上げているが、その中の「ペドロ・カスイ・岐部―世界を歩いた伴天連―」で「ペドロ岐部」についてまとめている。これはまとまった形で発表された最初の「ペドロ岐部」研究でもある。
- ⑦ 遠藤周作『『沈黙』―踏絵が育てた想像』（『朝日新聞』、一九六七・昭和四十二年八月二十五日）

⑧ 拙稿「遠藤文学における〈ペドロ岐部〉(二)―『メナム河の日本人』から『王の挽歌』まで―」『京都外国語
大学研究論叢第八十五号』(二〇一五・平成二十七年七月)

⑨ 注⑥に同じ。「ペドロ・カスイ・岐部―世界を歩いた伴天連―」では「一 武士の後裔 二 ローマへの旅 三
波乱に富んだ帰国 五 捕縛と殉教」と初めて〈ペドロ岐部〉の生涯の全貌を明らかにしている。

⑩ この書においてH・チースリックは七人の人物を紹介しているが、そのうち〈ペドロ岐部〉については「ロー
マまで歩く ペドロ・カスイ岐部」としてその生涯を紹介している。

⑪ 遠藤は「小説家の海外旅行」(『海』、一九七九・昭和五十四年七月)で〈ペドロ岐部〉に関心を持ったきっかけ
について次のように語っている。

私は戦後おそらく最初の留学生の一人として大使館もなく日本人もほとんどいない仏蘭西に渡ったが、そ
の時、はじめてこのヨーロッパに勉強した日本人はどんな人かという疑問を持ち、以来、彼等のことを調べ
てきた。しかもその彼等は私と同じように日本のカトリック信者であったから、彼等の上に我が身を重ねて
考えることができるようになった。

⑫ セバスチアン木村に関してH・チースリックの詳細な研究(「セバスチアン木村―最初の日本人司祭―」／『キ
リシタン人物の研究―邦人司祭の巻―』吉川弘文館、一九六三・昭和三十八年十二月、所収)がある。時期的
にいつても遠藤がこの書を参考にしたことは十分に考えられる。しかも背教者として荒木トマスのことも言及
されている。次の箇所である。

：まことに、日本の教会にも悪い麦があったのである。おそらく木村神父はかつての友、不幸なトマス荒木
のことを考えたかもしれない。この人はローマで神学を学び、そこで司祭に叙階されたのであるが、故国に
帰って後思わしくない生活態度の為イエズス会から脱会させられた。ついで迫害の始まったとき信仰を捨て、
それ以後官憲の手先きとなったのである。

(傍線部引用者)「セバスチアン木村―最初の日本人司祭―」/H・チースリク『キリシタン人物の研究―邦人司祭の巻―』吉川弘文館、一九六三・昭和三十八年十二月)

⑬(ペドロ岐部)を主人公にした遠藤の小説『銃と十字架』の「あとがき」では次のように語っている。

十数年前にふと読んだチースリク教授の論文が私にペドロ岐部という、人々には知られていないが、あまりに劇的な生活を送った十七世紀の日本人の存在を教えた。

(遠藤周作「あとがき」/『銃と十字架』中央公論社、一九七九・昭和五十四年四月)

⑭三木サニア氏は「『銃と十字架』論」(『キリスト教文学 第30号』、二〇一一・平成二十三年八月)で次のように推測されている。

上記の「チースリク教授の論文」の題名や典拠は明確には判明しないが、昭和38年に発行されたH・チースリク著『キリシタン人物の研究』(吉川弘文館 昭和38年12月25日)の中の「ペトロ・カスイ岐部―世界を歩いた伴天連―」が、それに該当するのではないかと推測している。この他に、『世界を歩いた切支丹(フーベルト・チースリク著 春秋社1971年6月15日)』の中にも「ローマまで歩くペドロ・カスイ岐部」があり、その書の参考文献として、前記の『キリシタン人物の研究』の他に『海賊の末裔』が記されているが、年代的には『キリシタン人物の研究』がもっとも有力なので、本論文を参照しつつ遠藤の評伝を鑑賞した。

⑮遠藤の「一九六四・昭和三十九年」の日記には次のようである。これを見ると『沈黙』創作の過程で『キリシタン人物の研究』を読んでおり、影響関係を十分に推測できる。

七月十八日(土曜日)

Aはキリシタン背教徒X、岡本三右衛門か沢野忠庵の伝記を書く小説家

七月十九日(日曜日)

H・チースリック『キリシタン人物の研究』（吉川弘文館）、及び新井白石の西洋紀聞を読む。

八月六日（軽井沢、雨）

主人公沢野忠庵（フェレイラ）

⑯（傍線部引用者／藤田尚子編『遠藤周作『沈黙』草稿翻刻』（長崎文献社、二〇〇四・平成十六年三月）
〈解説〉（藤田尚子編『遠藤周作『沈黙』草稿翻刻』（長崎文献社、二〇〇四・平成十六年三月）

補足であるが、本書71頁二行から75頁六行については、遠藤旧蔵書のH・チースリック著『キリシタン人物の研究』（吉川弘文堂・昭和三十八年十二月二十五日）との関連が窺える。『キリシタン人物の研究』103頁八行から107頁三行まで鉛筆で鍵括弧が付されており、この箇所が本書と一致していることから、草稿執筆段階ではこれを書き写したと考えられる。

⑰ ≪参考資料一≫『沈黙』と『キリシタン人物の研究』（その一）

⑱ ≪参考資料二≫『沈黙』と『キリシタン人物の研究』（その二）

⑲ この根拠となるのは、「マツダ・ミゲル」に関する情報である。本文でも引用したが、次の部分である。

司祭はもちろん修道士たちの一人にもこの連中はもう六年も会っていないのです。六年前までは、それでもミゲル・マツダとよぶ日本人の司祭とイエズス会のマテオ・デ・コーロス師とがひそかにこの近辺の村や部落と連絡を保っていました。二人とも一六三三年の十月に疲れ果てて死んでしまったのです。

「で、その六年間どうしたのです。洗礼やそのほかの秘蹟を」ガルペはそう訊ねました。

（傍線部引用者／「ロセバスチアン・ロドリゴの書簡」／『沈黙』）

長崎へ潜入が成功したロドリゴたちが地元の人たちから状況を聞く場面である。最後に会った司祭がマツダ・ミゲルやコーロス師が亡くなったのが一六三三年であり、これはそのまま歴史事実とも合致する。司祭た

ちの死が「六年前」とあるので単純に足し算をすると、ロドリゴたちがいるのが「一六三九年」の出来事であることがわかる。

⑳ ≪参考資料三≫『沈黙』の作品内時間

21 『契リス督記』は『沈黙』「切支丹屋敷役人日記」の原典である『査祿余録』と同じ『続々群書類従』に収められており、遠藤が参考にしたことは十分に考えられる。

22 へ付録目 創作ノート（藤田尚子編『遠藤周作『沈黙』草稿翻刻』（長崎文献社、二〇〇四・平成十六年三月）の【井上筑後守】についてまとめた項に次のようにある。

1639年 ポロ神父、式見神父の捕縛 切支丹屋敷

3年 キヤ（ア）ラ神父 （傍線部引用者）

ポロ神父と式見神父は（ペドロ岐部）と共に東北の水沢で捕縛された人物であり、次の「3年」は一六四三年、キヤラの日本潜入を意味し、それらの取り調べにあたったのが井上筑後守であったことがわかる。

23 『沈黙』ではロドリゴとフェレイラが出会ったのは長崎の西勝寺となっている。この寺にはフェレイラの直筆の「ころび証文」が残っており、それを実際に見て感銘を受けた遠藤は西勝寺をロドリゴとフェレイラの出会の場所に設定した。

<p>『沈黙』「まえがき」</p>	<p>今日、一六三二年の三月二十二日に彼が巡察師アン ドレ・バルメイロ神父にあてて長崎から発送した手 紙が残っているが、それは当時の模様をあますこと なく伝えている。</p> <p>「前の手紙で私は貴師に当地の基督教界の状態を お知らせした。引きつづき、その後には起ったことを お伝えする。すべては新しい迫害、圧迫、辛苦に尽 きるのである。一六二九年以来信仰のために捕えら れている五人の修道者、すなわち、バルトロメ・グ チエレス、フランシスコ・デ・ヘスス、ビセンテ・ デ・サン・アントニヨの三人のアウグスチノ会士、 われらの会の石田アントニヨ修道士、フランシスコ 会のガブリエル・デ・サンタ・マダレナ神父の話か ら始めよう。長崎奉行の竹中采女は彼らを棄教さ せ、もつてわれらの聖なる教えとそのしもべを嘲笑 し、信徒の勇気を挫こうとした。だが采女は、やが て言葉では神父たちの決心を変えさせることがで</p>
<p>『キリシタン人物の研究』「アントニヨ石田」</p>	<p>クリスヴァン・フェレイラ神父は一六三二年三月二 十二日付の手紙に、この興味ある討論について、以 下のように報じている。</p> <p>「前の手紙で私は貴師に当地のキリスト教界の状 態をお知らせした。ここで私は引き続き、その後には 起ったことをお知らせする。すべては新しい迫害、 圧迫、辛苦に尽きるのである。一六二九年以来信仰 のために捕えられている五人の修道者、すなわち、 バルトロメ・グチエレス、フランシスコ・デ・ヘス ス、ビセンテ・デ・サン・アントニヨの三人のアウ グスチノ会士、われらの会の石田アントニヨ修道 士、フランシスコ会のガブリエル・デ・サンタ・マ ダレナ神父の話から始めよう。長崎奉行の竹中采女 は彼らを棄教させ、もつてわれらの聖なる教えとそ のしもべを嘲笑しようとした。こうして信徒の勇気 を挫き、彼らをその手本によって容易に棄教させ、 そして自分のためには將軍の前で手柄を立てよう</p>

きないことを知った。そこで別の手段を用いる決心をしたのである。それは他でもなく、雲仙地獄の熱湯で彼等を拷問にかけることであった。

(P183' 下 ～ P184' 上)

これが、われわれの聖なる教えが大衆に鑽仰されるようになり、信徒が勇気づけられ、暴君がさきに計画し期待したことと反対に打ち負かされるに至った戦いの赫々たる結末である」

このような手紙をかけたフェレイラ神父が、たとえ、いかなる拷問をうけたにせよ神とその教会とを棄てて異教徒に屈服したとはローマ教会では思えなかつたのである。(P185' 下)

とした。(P98,6~14)

「采女は、討論または忠告や約束によって神父たちの決心を変えさせることができないことを知り、彼を再び牢に入れた。采女は、彼やその他の修道者を屈服させるに確実と思われる別の厳しい手段を用いる決心をした。それは他でもなく、雲仙地獄の熱湯で彼等を拷問にかけることであった。

(P103,8~10)

これが、われわれの聖なる教えが大衆に賛仰されるようになり、信徒が勇気づけられ、暴君がさきに計画し期待したことと反対に、打ち負かされるに至った戦いの赫々たる結末である」。

この心打たれる報告を書いたその人が不幸にして、二年後自ら棄教し、その後長く間諜として幕府に仕えて活動したということは、実に悲劇といふべきである。彼が死ぬ前に、少なくとも心の中で改心したかどうかは、我々は知るすべがないのである。

(P107,1~6)

<p>『沈黙』「まえがき」</p>	<p>『キリシタン人物の研究』「ペドロ・カスイ岐部」</p>
<p>*ジョアン・ダセコ司教 〓 ジョアン・ダ・ロカ + デイオゴ・セコ 一六三八年三月二十五日、三人を乗せたインド艦隊は、ベレム要塞の祝砲をうけながらタヨ河口から出発した。彼等は、<u>ジョアン・ダセコ司教</u>の祝福を受けた後、司令官の乗る「サンタ・イサベル号」に乗船した。 (P187 下 5~8)</p>	<p>イエズス会のアフオンゾ・メンデスは総大司教に任ぜられ、別に<u>デイオゴ・セコ</u>と<u>ジョアン・ダ・ロカ</u>の二神父が後任の権をもった補佐司教となった。 (P134 8~9)</p> <p>三月二十五日、インド艦隊はベレム要塞の祝砲の轟きの中をタヨ河口から出発した。それは三隻の大物の「船艦」と三隻の護衛艦から成っていた。三人の司教とイエズス会員は二隻の主艦に配分され、総大司教は旗艦「サン・フランシスコ・ザビエル号」、他の二人の司教は七人の神父と共に司令官の乗る「サンタ・イサベル号」に分乗した。カスイ神父がどの組にいたかは伝えられていない。 (P134 12~15)</p>
<p>四月二日、ポルト・サント島に、それから間もなくマデイラに、六日にはカナリヤ諸島に到着した後は、たえ間ない雨と無風状態に襲われた。それから潮流のため、北緯三度の線から五度まで押しもどされてギネ</p>	<p>四月二日、ポルト・サント島に、それから間もなくマデイラに、六日にカナリヤ諸島に着いた。二十二日北緯七度に達したが、それからは絶え間ない雨と無風状態が続き、そのため迂回してようやく三度に達した。</p>

<p>ア海岸に突きあたった。(P187 下 17~21)</p>	<p>そこで潮流のため、我らは五度まで押しもどされ、ギネアの海岸に突き当り、陸に打ちあげられそうな大きな危険にさらされた。(P195 16~17 P196 1~9)</p>
<p>無風の時、暑さは耐えられるものではなかった。その上、各船には多くの病気が生じ、「サンタ・イサベル号」の乗組員でも、甲板や床で呻く病人の数が百人をこえはじめた。ロドリゴたちは、船員と共に病人の看護に走りまわり、彼等の瀉血を手伝った。(P187 上 22~23 P188 上 1~3)</p>	<p>無風の時期に、各船に多くの病気が生じたが、我らの船以上に多かったものは他になく、ここでは床に就いた者の数は三百以上に及んだ。(P136 4~5)</p>
<p>七月二十五日、聖ヤコボの祝いにやつと船は喜望峰を廻った。喜望峰をまわった日に、再度の烈しい嵐が襲ってきた。船の主帆がくだかれて烈しい音をたてて甲板にぶつかった。同じ危険にさらされた前部の帆を、病人たちもロドリゴたちもかりだされて、漸くにして救った時、船は暗礁に乗りあげたのである。もし、他の艦がただちに救いにこなければ、「サンタ・イサベル号」はそのまま沈んだかもしれない。(P188 上 4~11)</p>	<p>七月二十五日、聖ヤコボの祝日に船は喜望峰を廻った。艦長は国王から、もし時間があればモザンビクへ行くように命じられていたので、我らは水先人の習慣により内部へ向けて航行した。しかし、たちまちにして激しい嵐がおこり、我らの船の主帆は碎かれて倒れ、同じことが前部の帆柱にもおこる危険があった。(P136 12~14)</p>

<p>嵐のあとにはふたたび風が凪いだ。マストの帆は力なく垂れ、ただ真黒な影だけが甲板に死んだように倒れている病人たちの顔や体の上に落ちてゐる。海面は暑く、光るだけで波のうねりさえない毎日である。航海が長びくにつれ、食糧と水も不足になってきた。こうしてようやく目的のゴアに着いたのは十月九日のことだった。</p> <p>(P188 上 12~18)</p>	<p>旗艦がサン・ジヨルジ島沿岸で暗礁に衝突し、そのため艦は水の中に投げ出された。それゆえ我らは帆柱を折るほかなかった。もし―守護者聖フランシスコ・サビエルの助けは別として―提督が驚くべき熱意をもって助けに来なかつたならば、疑いもなく艦は沈んでしまつたであらう。</p> <p>(P137 9~12)</p>
<p>く垂れ、ただ真黒な影だけが甲板に死んだように倒れている病人たちの顔や体の上に落ちてゐる。海面は暑く、光るだけで波のうねりさえない毎日である。航海が長びくにつれ、食糧と水も不足になってきた。こうしてようやく目的のゴアに着いたのは十月九日のことだった。</p> <p>(P188 上 12~18)</p>	<p>その後にはまた、かなり長い無風となり、それが刻々と時間を奪つた。</p> <p>(P136 14~15)</p> <p>それは航海が非常に長びくに相違なく、その上食料と水も不足になったからである。</p> <p>(P137 5)</p> <p>しかし舟は小さく、手軽に造られたものであったから、十月九日にようやくゴアに着いた。</p> <p>(P138 3)</p>

日本にむかう母国の便船が全くないことを知った三人の司祭は、絶望的な気持で澳門までたどりついた。

この町は、極東におけるポルトガルの突端の根拠地であると同時に、支那と日本との貿易基地であった。万一の僥倖を待ちのぞみながら、ここまで来た彼等は、到着早々、ここでも巡察師ヴァリニャーノ神父からきびしい注意をうけねばならなかった。日本における布教はもはや絶望的であり、これ以上、危険な方法で宣教師を送ることを澳門の布教会では考えていないと神父は言うのである。

この神父は、もう十年前から日本及び支那に向う宣教師を養成するために布教学院を澳門に建設していた。のみならず日本における基督教迫害以来、日本イエズス会管区の管理はすべて彼によってなされていた。

(P188 上 7~20)

カスイ神父はまずマニラに行き、そこから一六二四年か二五年にマカオに向かった。

この町は極東におけるポルトガルの突端の根拠地であると同時に、日本および支那との貿易の基地であった。ここにはまた、巡察師ヴァリニャーノ神父の建てた学院があり、日本と支那とに行く宣教師たちは、ここで将来の仕事のため特別の養成を受けることになっていた。迫害の勃発以来、日本イエズス会管区の管理もこのマカオで行なわれた。カスイ神父は、ここから日本に渡るすべを見つかるであろうと考えたのである。

(P139 8~13)

《一 セバスチアン・ロドリゴの書簡》

ヴァリニヤーノ神父のおかげで我々はともかく、大きな一隻のジャンクは手に入れられそうです。ところが人間の計画はいかに、もろく、はかないことでしょう。船は白蟻によって食いつくされているという報告を今日、受けました。ここでは鉄や瀝青などがほとんど手に入れがたいので…。

毎日、少しずつこの便りを書いているので日附のない日記のようになりました。我慢して読んで下さい。一週間前、私は、我々が手に入れたジャンクが相当、白蟻によって食いつくされていることをのべましたが、幸い神のお陰で、この困難を克服する方法が見つかったようです。とりあえず内側から板で目張りをし、台湾まで航行するつもりです。そしてもし、この応急の措置がそれ以上もつなら日本まで直接、行こうと思えます。ただこの上は、東支那海で、できる限り大きな嵐に出会わないよう、主のお加護を願うつもり

：水夫たちの少なからぬ骨折りにより、旅に必要なものはすべてととのい、この地区の主任司祭から得た板によって、私が思った以上に立派に船は造られた。しかし人間の計画がいかにはなく、もろいものであることを知らない人はない！ 既に万端の準備ができあがったとき、船が全く白蟻、というより虫に喰いつくされ、それも今は手の施しようもないまてになつていくことが分かった。なぜかといえば、この地方には鉄、瀝青その他すべてが全然ないからである。おまけに、僅かの間にすべてを完了させなければならぬ。それでわれわれは、内側から船に板で目張りをし、ブリナまで航行してみようと決めた。もしこの応急の措置がそこまでもつなら、日本まで直接航海する。もし、もたないなら、船をとり替えるか、外側からも補強するつもりである。 (P150 15~17, P151 1~4)

まえがき (一六三三年頃) フェレイラ神父棄教の報告

一六三二年三月二十二日

フェレイラ神父、巡察師アンドレ・バルメイロ神父宛書簡 雲仙殉教

《『キリシタン人物の研究』》

*フェレイラ探索と日本潜伏計画 一六三五 第一陣 ローマ ルビノ神父

一六三七 第二陣 **ポルトガル 三人の若い司祭**

ポルトガル「海外領土史研究所」所蔵セバスチアン・ロドリゴの書簡

一 セバスチアン・ロドリゴの書簡 一六三八年十月九日 ゴア到着

一六三九年五月一日 マカオ到着

二 セバスチアン・ロドリゴの書簡 一六三九年五月六日 トモギ村到着

三 セバスチアン・ロドリゴの書簡 一六三九年六月 トモギ村・五島

四 セバスチアン・ロドリゴの書簡 一六三九年六月五日 キチジロー転び

六月二十三日 モキチ・イチゾウの殉教

ロドリゴ逃亡

ロドリゴ捕縛

横瀬浦ー大村ー鈴田ー諫早

千束野ー長崎・牢屋 踏絵

一六三九年八月 ガルペの死

八月十三日

一六三九年九月 西勝寺 フェレイラとの再会

一六三九年九月 長崎・奉行所 踏絵

Ⅹ

Ⅲ

Ⅲ

Ⅲ

Ⅲ

《長崎出島オランダ商館員ヨナセンの日記》

一六四四年七月三日ー八月七日 フェレイラ・ロドリゴの切支丹取調べ

一六四五年十一月十九日 十二月五日 荒木トマス

十二月二十三日

一六四三(?)年八月 外浦町

(一六四六年二月 江戸切支丹屋敷 岡田三右衛門、妻帯)

切支丹屋敷役人日記

寛文十二年（一六七二）

延宝元年（一六七三）

延宝二年（一六七四）

延宝四年（一六七六）

延宝九年（一六八一）

七月二十六日、ロドリゴ病死

享年六十四歳

第三章 『沈黙』論―引用の織物―

一、問題の所在

『沈黙』は島原の乱後一六三九年に長崎に潜入したポルトガル人司祭セバスチアン・ロドリゴの信仰をめぐる葛藤を描いた作品である。『沈黙』にはポルトガル「海外領土史研究所」所蔵セバスチアン・ロドリゴの書簡など様々なフィクションが存在する一方、一六三二年三月二十二日付巡察師アンドレ・バルメイロ神父宛のフェレイラ書簡など実在の史料もそのまま引用されている。他に「長崎出島オランダ商館員ヨナセンの日記」や「切支丹屋敷役人日記」など実在の史料をもとに創作されたものもある。いわば『沈黙』は様々な引用が織りなすエクリチュールであるのだ。また、登場人物にしてもセバスチアン・ロドリゴはジュゼッペ・キヤラという実在した神父をモデルとして造型された人物であり、フェレイラにしろ井上筑後守にしろ実在する人物である。キチジロ―は架空の人物であるが、それぞれモデルとなる人物が存在する。

だがキヤラやフェレイラは背教した神父であったがために教会の歴史から抹殺され、資料となるものがほとんど残っていないかったという①。遠藤は「そうした乏しい材料はかえって小説家の空想力をかきたてた」②として、『沈黙』を構想していったわけだが、いくら「小説家の空想力」といっても、何もない所から全て生みだしたとは考えにくい。特に『沈黙』のように歴史的背景を持った作品の場合、ある程度歴史資料に依拠する部分があっても当然と言えよう。そこで本稿では、遠藤が『沈黙』を構想の際に依拠した資料を考察し、『沈黙』成立の秘密に迫りたい。

二、『沈黙』の構成

最初に『沈黙』の構成を確認しておきたい。『沈黙』は大まかに次の四つの部分に分けられる。

「まえがき」

「Ⅰ～Ⅲ セバスチアン・ロドリゴの書簡」

「Ⅳ～Ⅷ」

「切支丹屋敷役人日記」

これら四つの部分は、それぞれ文体も異なる。佐伯彰一氏の「解説」③を参考にすると、それぞれ「純客観の視点とそれから純主観、ついで半客観、半主観」、漢文書き下ろし体といずれも異なる文体であり、「読者を無理なく作中のドラマに導き入れる上で、見事な効果をあげている」と言える。

「まえがき」はフェレイラ背教の報告がローマ教会にもたらされたところから始まっている。フェレイラの背教は一六三三年の出来事なので、この報告は一六三四年頃だと考えられる。語り手は、この歴史的な事象に臨場感を持って迫り、ヨーロッパのキリスト教会の動揺を伝えている。その中からフェレイラ背教の事実確認と日本の信徒を励ますための日本潜伏計画が立案される。第一陣のルビノ神父グループがローマで、第二陣のロドリゴたちもポルトガルで結成され、それぞれ日本へ向けて出発する。第一陣の消息は語られないが、第二陣はポルトガルを出発し苦難の末マカオに至りヴァリニャーノ師に出会う。

そして、ポルトガル「海外領土史研究所」所蔵セバスチアン・ロドリゴの書簡が「今でも見ることが出来る」というように語り手は時間を超越し自在に駆け巡る自由な視点を持っている。問題はロドリゴの書簡が架空のものであり、元になるような歴史資料も存在しないことである。勿論小説であるので全て事実に基づく必要はない

が、本物らしく装うことで読者を歴史空間へ招き入れる効果がある。そして、この架空のロドリゴの書簡が一章から四章にかけて開示される。

書簡はマカオに到着したロドリゴ一行がヴァリニャーノ師から日本の状況を聞くことから始まり、キチジローの裏切りによってロドリゴが捕縛されるまでが「報告」④されている。ロドリゴは捕縛後、手紙を書く時間や方法、宣教会への連絡手段も全て失われたので書簡の続きは心の中に記される。それを中心に描かれるのが<章から<章である。<章から<章ではロドリゴが三人称の「司祭」「彼」という言葉で語られる。

さらに≡章では「記録によれば」、<章では「長崎出島オランダ商館員ヨナセンの日記より」と引用されながら、ロドリゴの動向を伝えている。「ヨナセンの日記」では「一六四四年七月三日〜八月七日」「一六四五年十一月十九日、十二月五日、十二月二十三日」の記録が挿入されており、ロドリゴが踏絵を踏んだ一六三九年九月から江戸切支丹屋敷へ移動が告げられる一六四六年一月の間の約七年間、長崎の外浦町に住みフェレイラと共に切支丹探索の手伝いをさせられていた事実を垣間見ることが出来る。一六四六年二月、ロドリゴは長崎から江戸切支丹屋敷へ移住させられ、岡田三右衛門という日本人名と妻帯をさせられるが、その後の生活は「切支丹屋敷役人日記」で窺うことが出来る。作品中の「切支丹屋敷役人日記」は寛文十二年（一六七二）から始まっているので、<章の最後の「一六四六年から二十六年経過している。続いて記事は延宝元年（一六七三）、延宝二年（一六七四）、延宝四年（一六七六）、延宝九年（一六八一）七月二六日のロドリゴ病死までが記されている。ロドリゴの享年は六十四歳であった。

以上のように全体を通して、教会の歴史から抹殺されていたロドリゴ（ジュゼッペ・キャラ）やフェレイラを作品の登場人物として蘇らせ、最後には、「ヨナセンの日記」や「切支丹屋敷役人日記」という歴史の中に戻している。こうした弱者に光を当てるために欠かせないのが様々な歴史史料であった。以下作品で引用された史料を考察していきたい。

三、『沈黙』の「まえがき」

前述のように「まえがき」は一六三四年頃、フェレイラ背教の報告がローマ教会にもたらされたところから始まり、一六三九年、ロドリゴ一行がマカオに到着し、ヴァレンチーノ師から日本の情勢を聞く所までが描かれる。

「まえがき」には二つの重要な資料が本文中に引用される。フェレイラ書簡とロドリゴ書簡である。前者のフェレイラ書簡は、レオン・パジェス『日本切支丹宗門史（上・中・下）』（岩波文庫、昭和十三年）やH・チースリク『キリシタン人物の研究―邦人司祭の巻―』（吉川弘文館、昭和三十八年十二月／以下『キリシタン人物の研究』と呼ぶ）に記載されている。藤田尚子氏は、この書簡の典拠について『キリシタン人物の研究』から引用されたことを指摘されている⑤。藤田氏の指摘をもとに両者を比較すると書簡の重要部分は改変されることなくほぼ原文から抜粋して編集されていることが分かる。ただここで問題となるのは、遠藤が『キリシタン人物の研究』から引用した事実を隠していることにある。故意か否か定かではないが、いくつかのエッセイで遠藤がフェレイラ書簡について、レオン・パジェス『日本切支丹宗門史』に記載されていることのみ言及され、『キリシタン人物の研究』のことは一言も触れていない。

後者のロドリゴ書簡は前章で述べたように架空のものである。そもそもセバスチアン・ロドリゴはイタリア人司祭ジュゼッペ・キヤラをモデルとして造型された人物であり、背教者として教会の歴史から抹殺されているため資料はほとんど残されていない。また、ポルトガルの「海外領土史研究所」そのものも実在しない。

さらに二つの書簡とは別に史料が使われた部分がある。これは拙稿⑥で論じたが、ロドリゴがポルトガルから日本へ向う苦難の旅は『キリシタン人物の研究』「ペドロ・カスイ岐部」の134頁から139頁までと地名、人名

などほぼ一致しており、典拠であることは確実である。「まえがき」ではマカオに到着しヴァリニャーノ師と出会うところまでがそのまま『キリシタン人物の研究』から引用されている。

四、『沈黙』の「I」～「V」セバスチアン・ロドリゴの書簡

一章からⅢ章までは「まえがき」で紹介されたロドリゴ書簡が引用されたという形式を取っている。書簡はマカオに到着したロドリゴ一行がヴァリニャーノ師から日本の状況を聞くことから始まり、キチジローの裏切りによつてロドリゴが捕縛されるまでが「私」という一人称で「報告」⑦される。

一章の日本に潜入するためロドリゴたちがマカオで手に入れた船が白蟻の被害に遭う場面も、『キリシタン人物の研究』の150頁、151頁とほぼ同じ内容である。これも典拠であることが確実である。

ロドリゴや同門の二人の司祭たちはザビエルに対する憧れと尊敬の念を抱いている。中でもザビエルに強い尊敬を抱いていたマルタはマカオで病死する。そのモデルは遠藤がフランス留学中に出会った日本宣教を志すカトリック神父たち⑧である。彼等はフランシスコ・ザビエルに憧れ、書簡の「私は東洋の諸国の中で、日本人程信仰に適した国民を知らない」という言葉に感動を覚え日本宣教を夢みている。

Ⅳ章でロドリゴたちは日本へ到着する。ロドリゴとガルペは、様子を見に出かけたキチジローがキリストを裏切ったユダではないかと疑心を抱く。このあとキチジローはユダのような人物として繰り返して描かれる。それを象徴する言葉は「去れ、行って汝のなすことをなせ」である。この言葉はⅢ章で二回、Ⅴ、Ⅵ章と計四回繰り返される。文語訳聖書のヨハネ福音書十三章二十七節、「なんぢが為すことを速かに為せ」から引用された言葉であるが、これに「去れ」と「行って」という強い言葉が付け加えられている。

目、マ章では、トモギ村から五島へと宣教が拡大する一方で切支丹詮索の追求も過酷になりロドリゴはガルペと別れ逃亡生活へ入る。この場面はG・グリーン『権力と栄光』のウイスキー神父の逃亡生活がモデルである。『権力と栄光』と『沈黙』の影響関係については既に英文学者から多くの指摘⑨がある。

五、『沈黙』の「V～IV」

マ章以降は書簡ではないので、章題から書簡という言葉が省略される。語り手も「私」ではなく三人称の「司祭」「彼」という言葉で語られる。さらにⅢ章では「記録によれば」、Ⅳ章では「長崎出島オランダ商館員ヨナセンの日記より」と引用されながら、ロドリゴの動向を伝えている。「ヨナセンの日記」では「一六四四年七月三日～八月七日」「一六四五年十一月十九日、十二月五日、十二月二十三日」の記録が挿入されており、ロドリゴが踏絵を踏んだ一六三九年九月から江戸切支丹屋敷へ移動が告げられる一六四六年一月の間の約七年間、長崎の外浦町に住みフェレイラと共に切支丹探索の手伝いをさせられていた事実を垣間見ることが出来る。一六四六年二月、ロドリゴは長崎から江戸切支丹屋敷へ移住させられ、岡田三右衛門という日本人名と妻帯をさせられるが、その後の消息は「切支丹屋敷役人日記」で窺うことが出来る。

マ章で捕まったロドリゴに深い印象を残すのは「片眼の男」の長吉と「白瓜をくれた女」の春の二人であるが、Ⅳ章で長吉は役人に刀で惨殺され殉教をし、Ⅴ章で女は薦に入れられて海に沈められてしまう。Ⅳ章では二人がそれぞれ「久保浦、長吉」「久保浦、春」と呼ばれることで名前が判明するが、この名前は切支丹屋敷でジュゼツペ・キヤラやシドッチに仕えた下人夫婦とおなじ名前である。二人はシドッチの感化で切支丹になったと自首し獄中で病死、シドッチは御禁制の基督教を二人に伝えた罪で地下牢に幽閉され衰弱死した。この「長吉、お春」

事件は様々な小説⑩の題材になっている。

Ⅲ章ではロドリゴと井上筑後守の論争が繰り広げられる。キャラにどの程度の日本語能力があったのかよくわからないが、日本人と宗教論争をできるほど高度な日本語能力はなかっただろう。とすれば、ヘペドロ岐部^⑪や『西洋紀聞』を典拠とした可能性が高い。『西洋紀聞』は新井白石がシドツチへ尋問した記録であり、『沈黙』の創作日記⑪にも遠藤が読んだ記述がある。「長吉、お春」も含めて『西洋紀聞』を典拠としたのであろう。

また、ロドリゴとフェレイラの再会にもフィクションが加えられている。『沈黙』では二人の再会の場所が長崎の西勝寺となっているのである。この寺にはフェレイラの転び証文が残されており、それを見て感動した遠藤は二人の再会の場所を江戸ではなく西勝寺に設定したという⑫。しかも、この再会の場面にもヘペドロ岐部^⑬の姿が重なる。『キリシタン人物の研究』によると、ヘペドロ岐部^⑭は一六三九年東北で逮捕され江戸の評定所で尋問を受けるが、その時に同席したフェレイラに対して激しい非難を浴びせたという。さらに言えば、フェレイラがロドリゴに「日本泥沼説」を語る場面も、日本の事情をシドツチに語る新井白石の姿がモデルとして考えられる。ちなみに、『沈黙』の姉妹作『黄金の国』で「日本泥沼説」を展開するのは井上筑後守になっている。ところが、レオン・パジェス『日本切支丹宗門史』によると、ロドリゴのモデルのキャラの取調べのときにフェレイラが通訳として同席した記録はあるが、二人の間で個人的な会話は交わされていない。このあたりにフィクションの問題が存在する。

Ⅳ章でロドリゴは踏絵に足をかけついに背教してしまう。ところが、モデルであるキャラが背教したのは穴吊りの拷問であった。拙稿⑮でも触れたが、『沈黙』で穴吊りは特別な意味を持った拷問である。というのも、穴吊りによって初めて背教した宣教師がフェレイラであり、穴吊りにも屈しなかったのがヘペドロ岐部^⑯であったからだ。キャラは穴吊りの拷問を受け、苦痛の中で何かうめき声を発して、それが念仏を唱えたこととなり背教を認定されてしまう。その後、キャラは背教を取り消そうとしたが全て却下され、屈辱の中で生涯を終えている。

『沈黙』ではロドリゴは拷問を受けることはなかった。その代わり、切支丹として捕まった百姓たちが穴吊りの拷問に苛まれており、ロドリゴは心理的な拷問を受けたことになる。しかも、背教の方法をわざわざ踏絵としたところに、作者の踏絵へのこだわりを見てとれよう^⑭。

㊦章は、踏絵を踏んだ後のロドリゴの姿が描かれる。長崎の外浦町に住み、フェレイラと共に切支丹探索の役目をさせられている。その様子は、日記により客観的に描かれる。ここに引用されるのは「長崎出島オランダ商館員ヨナセンの日記」の「一六四四年七月三日〜八月七日」「一六四五年十一月十九日、十二月五日、十二月二十三日」である。これに関しては小川仁子『沈黙』の「ヨナセンの日記」が意味するもの（「遠藤周作研究」第二号、平成二十一年九月）が詳しい。小川氏が指摘するように、典拠となるのは村上直次郎訳『長崎オランダ商館の日記』（岩波書店、昭和三十一年〜三十三年）であり、遠藤はこの中からフェレイラやロドリゴに関する部分を抜粋し、ほぼ資料通りに引用してある。ただし、小川氏は触れていないが、「ヨナセンの日記」が始まる（一六四四年）七月三日」の部分は原典ではロドリゴのモデルであるジュゼッペ・キヤラの死亡記事がある。これは明らかに誤報であるが、イタリヤ人としてのキヤラがヨーロッパ側の資料から消えて、日本人としての岡田三右衛門が誕生した記録でもあった。

「日記」に続くのは、一六四六年元日に行われた正月風景としての踏絵である。島原の乱以後踏絵は形骸化し、次第に年中行事の一つとなった。荒瀬康成氏^⑮はこの場面の典拠として古賀十二郎編『長崎市史 風俗編』（清文堂出版、昭和十三年四月）をあげている。説得力のある指摘である。ということは、一六三九年九月にロドリゴは踏絵を踏んでから、一六四六年の正月に至る七年間、ロドリゴは踏絵を踏んだ意味を考えつつ、フェレイラと共に長崎で切支丹探索の任にあたっていたことになる。

六、『沈黙』の「切支丹屋敷役人日記」

「切支丹屋敷役人日記」は寛文十二年（一六七二）から始まっているので、Ⅹ章の最後の1646年から二十六年経過している。続いて記事は延宝元年（一六七三）、延宝二年（一六七四）、延宝四年（一六七六）、延宝九年（一六八一）七月二六日のロドリゴ病死までが記されている。ロドリゴの享年は六十四歳であった。

「切支丹屋敷役人日記」をめぐる、『沈黙』の先行研究⑩のほとんどがこれに集中して来た。典拠となるのは『査祓余録』（国書刊行会編『続々群書類従 第十二 宗教部2』）である。原典の漢文体を『沈黙』では書き下し文にして、キチジローなど一部に変更を加えてある。『査祓余録』と「切支丹屋敷役人日記」の比較については笠井秋生氏などの先行研究で語りつくされているので加えることはない。

ただここで問題となるのはロドリゴとキチジローの関係である。何度も裏切ったキチジローが屋敷ではロドリゴの召使として傍にいることである。このキチジローの姿にはキャラの世話係となった長助、お春の夫婦が重なる。二人はⅣ、Ⅴ、Ⅵ章にも登場し殺された。実在の二人はキャラばかりかシドッチの世話係も行い、シドッチの感化で切支丹となり自首をして牢内で病死した。おそらく拷問のために亡くなったのであろうが、キチジローの最後にも共通するものがある。

七、結論

遠藤が『沈黙』を書いた動機の一つが、教会の歴史が「沈黙」している背教者たちに光を当てるということであつた。『沈黙』では、フェレイラとロドリゴという二人の背教者に光を当て、信仰に生き信仰に殉じた人生を復活させたのである。そのために、実在の史料や架空の史料を様々な形で引用し、歴史の中の一場面として印象付

けられている。特に最後の「切支丹屋敷役人日記」はロドリゴの半生を歴史の中に位置付けようとしているのである。ここに引用の織物としての『沈黙』の真骨頂を見ることが出来る。

- ① 遠藤は「大学ノートの五枚」程度と言っている。（『沈黙』―踏絵が育てた想像」（『朝日新聞』、一九六七・昭和四十二年八月二十五日）。遠藤周作文学館（企画）藤田尚子（編集・解説）『遠藤周作『沈黙』草稿翻刻』（長崎文献社、二〇〇四・平成十六年三月）所収の「創作ノート」を確認してもこれが本当の事だということが分かる。
- ② 遠藤周作『『沈黙』―踏絵が育てた想像』（『朝日新聞』、一九六七・昭和四十二年八月二十五日）
- ③ 佐伯彰一「解説」／『沈黙』（新潮文庫、一九八一・昭和五十六年十月）
- ④ この時代の書簡は単なる私信ではなく宣教報告という公文書の性格を持っている。
- ⑤ 〈解説〉／藤田尚子編『遠藤周作『沈黙』草稿翻刻』（長崎文献社、二〇〇四・平成十六年三月）
補足であるが、本書71頁二行から75頁六行については、遠藤旧蔵書のH・チースリク著『キリシタン人物の研究』（吉川弘文堂・昭和三十八年十二月二十五日）との関連が窺える。『キリシタン人物の研究』103頁八行から107頁三行まで鉛筆で鍵括弧が付されており、この箇所が本書と一致していることから、草稿執筆段階ではこれを書き写したと考えられる。
- ⑥ 拙稿「遠藤文学における〈ペドロ岐部〉（一）―『留学』『沈黙』を中心として―」（『遠藤周作研究』第八号、二〇一五・平成二十七年九月）
- ⑦ この時代の書簡は単なる私信ではなく宣教報告という公文書の性格を持っている。
- ⑧ 後に「フォンスの井戸」と改題される「フランスにおける異国の学生たち」（『フランスの大学生』）に次のように紹介されている。

：またこのリヨンにも「どうしても日本に布教に行く」と堅い決意をもった三人のカトリック神父がいます。この司祭の一人はフランシスコ・シャビエルの書簡をよみ「私は東洋の諸国の中で、日本人程信仰に適した国民を知らない。」という言葉から、日本をゆめみ始めたのだそうです。

また、『留学』の「第二章ルーアンの夏」にもザビエルに憧れて日本宣教を志した神学生の話が出てくる。

⑨ 中野記偉「G・グリーンと日本の作家たち(二)——遠藤周作の場合——」(『世紀』、一九七〇・昭和四十五年六月)を始めとする多くの先行研究がある。

⑩ 例えば次のような作品があり、『沈黙』にも少なからず影響を与えたと考えられる。

- 一、岡本綺堂「切支丹屋敷」(『スバル』、一九〇九・明治四十二年二月)
- 二、田中貢太郎「異説切支丹屋敷」(玄文社、一九一八・大正七年)
- 三、高木卓「獄門片影」(『意識』、一九三六・昭和十一年一月)
- 四、太宰治「地球図」(『新潮』、一九三七・昭和十二年十二月)
- 五、坂口安吾「イノチガケーヨワン・シローテの殉教——」(『文学界』、一九四〇・昭和十五年七、九月)
- 六、中山義秀「切支丹屋敷」(『文芸春秋』、一九五一・昭和二十六年五月)
- 七、長与善郎『切支丹屋敷 或る後日物語』(講談社、一九五六・昭和三十一年十一月)
- 八、柴田鍊三郎「切支丹坂」／『眠狂四郎無頼控第二巻』(新潮社、一九五七・昭和三十二年一月)

⑪ 遠藤周作文学館「企画」藤田尚子(編集・解説)『遠藤周作『沈黙』草稿翻刻』(長崎文献社、二〇〇四・平成十六年三月)所収の「創作日記」「七月十九日」には『キリシタン人物の研究』と共に『西洋紀聞』を読んだという記述がある。

⑫ 注②に同じ。

⑬ 注⑥に同じ。

⑭ 注⑪に同じ。

⑮ 「遠藤周作『沈黙』における一典拠について」（『京都語文』5、二〇〇〇・平成十二年三月）

⑯ 例えば次のようなものがある。

- 一、笠井秋生「遠藤周作とキリスト教―「黄金の国」「沈黙」を中心に―」／『日本文藝研究』20-2/3、一九六八・昭和四十三年九月）のち『遠藤周作論』（双文社出版、一九八七・昭和六十二年十二月）所収
- 二、宮尾俊彦『『沈黙』覚書―『切支丹屋敷役人日記』と『查祓余録』』／『長野県短期大学紀要』36（一九八一・昭和五十六年十二月）
- 三、池田純溢「遠藤周作『沈黙』の研究―「切支丹屋敷役人日記」・〈虚〉と〈実〉との間」／「上智大学国文学論集」26（一九九三・平成五年一月）
- 四、荒瀬康成「遠藤周作『沈黙』におけるロドリゴの最期の信仰―「切支丹屋敷役人日記」に描かれた作者の文学的意図／「阪神近代文学研究」3（二〇〇〇・平成十二年七月）
- 五、下川原睦美「遠藤周作『沈黙』論…「切支丹屋敷役人日記」の意味」／「言文」49（二〇〇二・平成十四年三月）
- 六、下野孝文「キャラ、そして岡本三右衛門―「沈黙」論の前提として（二）」／「語文研究」95（二〇〇三・平成十五年五月）
- 七、笠井秋生『『沈黙』の「切支丹屋敷役人日記」を読み直す―弱者はいかにして強者になったか』／「キリスト教文藝」25（二〇〇九・平成二十一年四月）
- 八、下山嬢子「遠藤周作『沈黙』―「切支丹屋敷役人日記」のことなど」／「近代文学研究」3（二〇一一・平成二十三年三月）
- 九、笠井秋生『『沈黙』をどう読むか―ロドリゴの絵踏み場面と「切支丹屋敷役人日記」―』／「遠藤周作研

究」5（二〇一三・平成二十四年九月）

十、兼子盾夫「神学と文学の接点からみる『沈黙』——笠井秋生氏の『沈黙』論（『沈黙』をどう読むか——ロード
リゴの絵踏み場面と「切支丹屋敷役人日記」——）をめぐって——」／「遠藤周作研究」6（二〇一三・平成
二十五年九月）

第三部 「歴史小説」―「評伝」の世界―

第一章 遠藤文学における〈ペドロ岐部〉(二) —『メナム河の日本人』から『王国への道』まで—

一、問題の所在

「弱者」の文学と呼ばれる遠藤文学の中で〈ペドロ岐部〉①(一五八七—一六三九)は対立項の「強者」という重要な役割を担っている。だが、先行研究において遠藤文学における〈ペドロ岐部〉が注目されることはほとんどなかった②。「弱者」に関心が集中していたためである。そうした現状を踏まえ本稿は遠藤文学において〈ペドロ岐部〉がいかなる役割を果たしてきたかその痕跡を確認し、見直しを図ることを目的とする。既に論者は「遠藤文学における〈ペドロ岐部〉(一)」③において『留学』(一九六五)、『沈黙』(一九六六)を中心として〈ペドロ岐部〉の隠れた痕跡を明らかにした。すなわち、〈ペドロ岐部〉が殉教を遂げた「強者」として荒木トマス、フレイラなどの背教した「弱者」と対照的な位置に置かれていることや『沈黙』の主人公ロドリゴの形象に大きな影響を与えたことなどである。しかし、二作品における〈ペドロ岐部〉の役割はあくまでも副次的なものであり、〈ペドロ岐部〉が実際に重要な登場人物として作品の中で動き始めるのは『メナム河の日本人』(一九七三)以降となる。

そこで本稿では、最初に〈ペドロ岐部〉が登場する『メナム河の日本人』(一九七三)から最後に登場する『王国への道—山田長政—』(一九八一)までを取り上げ、作品の中で〈ペドロ岐部〉がどのような役割を果たしているのかその痕跡をたどることにする。結論を先に述べると、〈ペドロ岐部〉は『イエスの生涯』(一九七三)、『死海のほとり』(一九七三)で遠藤が描いてきた「無力なイエス」のイメージと相似形の人物として、また「地上の

王国」を目指した山田長政と対照的に「神の王国」を目指した人物として描かれたと言えよう。以上のことを手がかりとして遠藤文学における〈ペドロ岐部〉について見直しを図りたい。

二、『メナム河の日本人』における〈ペドロ岐部〉

『メナム河の日本人』は一九七三（昭和四十八）年九月に〈書き下ろし新潮劇場〉の一卷として新潮社より刊行された。『黄金の国』、『薔薇の館』に続く戯曲作品であり、また遠藤文学で初めて〈ペドロ岐部〉が登場人物としてあらわれた作品である。先行研究はほとんどなくわずかに四本の劇評④が見られるのみである。

作品の原点は一九七一（昭和四十六）年十月に『死海のほとり』の取材のためエルサレムを訪ねた帰りに「偶然」⑤立ち寄ったタイのアユタヤ訪問にある。遠藤は日本人町の跡地を訪れ山田長政や〈ペドロ岐部〉への興味を膨らませた。この時の様子について遠藤は次のように語っている。

長政の情熱とペトロ岐部の情熱とは同型だが、一方では地上の国を目指し、他方は神の国のみを考える点でちがう。しかし二人共、日本鎖国の初期になお、海外に向ったあの時代の昂揚した精神の持ち主である。アユタヤの廢墟に並ぶ焼けこげたパゴダの塔は私には長政の姿やペトロ岐部の姿を思いださせるのだ…。

（遠藤周作「廢墟と芝居」／『波』、一九七三・昭和四十八年十一月）

遠藤は日本人町の跡地において山田長政と〈ペドロ岐部〉の二人の姿を想像する。二人は同型の情熱を持ちながら、目指すところは違った。山田長政は「地上の国」を目指し、〈ペドロ岐部〉は「神の国」のみを考えていたのだ。それでもそれぞれ信じるもののために生きてきた。遠藤はこうした生き方も目指すところも違う二人がアユタヤで三年間だけが同じ時を過ごしたという事実に関心を持った。しかもここでの「地上の国」を目指した山

田長政と「神の国」のみを考える（ペドロ岐部）というテーマは、やがて「地上の王国」を目指した山田長政と「神の王国」を追い求める（ペドロ岐部）というように、「王」というキーワードを含み、『銃と十字架』や『王国への道―山田長政―』の中の山田長政と（ペドロ岐部）へと展開していく。さらに『王の挽歌』の冒頭では豊臣秀吉と大友宗麟の会見から始まるが、「生き方の違い」という章題が示す通り「地上の王国」を追求した豊臣秀吉と「神の王国」を夢見た大友宗麟の対照的な生き方として現われていて山田長政と（ペドロ岐部）の関係を発展させたものである。こうした対立する生き方は『沈黙』における「強者」と「弱者」という対立項が基になっていると考えられる。また、『鉄の首枷』における「水の人間」小西行長と「土の人間」加藤清正の対立もこのパリエーションの一つである。

作品はタイのアユタヤでソンタム大王臨終により王位継承権をめぐる王宮で様々な権謀術数が巡らされる場面から始まる。いかにして日本人傭兵を利用するのか策略をめぐる権力者たちとこの機を生かしてアユタヤの地に日本人だけの小さな「地上の国」を作ろうとする山田長政の駆け引きが話の軸となりストーリーが展開する。中心人物である山田長政は「アユタヤの秀吉」と呼ばれるように知恵と才覚でアユタヤの日本人傭兵隊長にまでのぼりつめた人物である。長政は目に見える富と権力を追い求めて戦って来た。そんな長政に対して、（ペドロ岐部）は目に見えない「神の国」のことを語る。結局、長政は（ペドロ岐部）を理解することはできないが、（ペドロ岐部）に対して深い印象を残すことになる。

長政 なぜかわからぬ。愚かな者よと思っておる。が、別れば不思議と忘れられぬ。武士の血を受けたとは見えぬほど弱々しく、その上、熱病まで患うておった。俺とは別の生き方だ。だが……兄弟のような気さえる。

（遠藤周作『メナム河の日本人』新潮社、一九七三・昭和四十八年九月）

ここで長政が語るように（ペドロ岐部）は「大友家の家臣」という「武士の血を受けたとは見えぬほど弱々し」

い体をしており、その上日本を離れた十年にわたる長い旅のせいで「熱病まで患」っている。『イエスの生涯』『死海のほとり』で描かれてきた「無力なイエス」を連想させる姿である。だが、〈ペトロ岐部〉は長い旅で苦心を重ねたおかげで人間の哀しみを知り、さらには人間の哀しみに寄り添う神さまの心も知ったという。そして最後には神父として迫害に苦しむ信徒のために日本へ潜入し殉教を遂げた。外見的には「弱者」であっても内面的には「強者」であったのだ。山田長政が〈ペトロ岐部〉に惹かれたのは「神の国」のみを一途に考える信念の強さと情熱の激しさを見抜いていたからかも知れない。だからこそ「兄弟のような気さえする」とまで考えたのであるろう。ちなみに史実では山田長政と〈ペドロ岐部〉が交流した形跡は全くない。一六二七年から一六三〇年までの三年間、二人がアユタヤにいたことは確かな事実だが、当時の手紙や記録にも互いの名前すらなく、互いに無関心であった。すなわち、『メナム河の日本人』における山田長政と〈ペドロ岐部〉の交流は全くの創作である。

次にもう一人の重要人物であるモレホン神父について考えたい。モレホン神父は〈ペトロ岐部〉がアユタヤで日本へ行く方法を探す手伝いをした実在の人物である。『銃と十字架』では次のように紹介されている。

：モレホン神父とは一六一四年の家康の切支丹追放令まで二十七年間、主として京都を中心にして布教していた宣教師である。彼は秀吉政権下の切支丹武将から深い信頼を受けたが、大追放令の時には高山右近たちと共にマニラに避難せざるをえなかった。神父は一時、ヨーロッパに戻っていたが、一六二五年、マニラにふたたび戻った時、フィリピン総督から依頼を受けて、シヤム・アユタヤに拘留されているスペイン人の釈放交渉のためシヤムに向う途中、打ちあわせのためマカオに寄ったのである。

（遠藤周作『銃と十字架』中央公論社、一九七九・昭和五十四年四月）

史実のモレホン神父は二十七年間日本宣教で活躍し、日本追放以後も日本再潜入の方法を画策していた日本宣教の中心人物であった。この時モレホン神父が立ち寄ったマカオにヨーロッパから帰国して日本潜入を企ててい

た（ペトロ岐部）がいた。（ペトロ岐部）はモレホン神父のアドバイスを受けてアユタヤへ向い、日本潜入の機会を窺った。そしてアユタヤにいる間、（ペドロ岐部）は神父であることを隠して日本行の船を捜した。切支丹であれば乗船できなかったからである。結局（ペドロ岐部）はアユタヤで三年過ごしたが日本行の船は見つからなかった。それでフィリピンに渡り、一六三〇年フィリピンから日本へ潜入した。これが史実である。

だが作中でのモレホン神父は、女性問題のために教会から離れざるを得ず、その苦しみを忘れるため常に酒を飲み、ひたすら神からも人からも忘れ去られることを望んでいる。墮落神父となっている。女性問題で教会を離れた神父と言えば「黄色い人」（一九五五）のデュランのモデルであるヘルツォーグ神父を想起させる。また、酒飲みであるところはG・グリーン『権力と栄光』のウイスキー神父をモデルにしたのであろう。

このようにモレホン神父が女性問題で身を崩したことが、酒飲みであること、アユタヤで（ペドロ岐部）が自ら神父であると名乗っていたことなどごとく史実とは異なる。いずれも作者の創作である。

作品の最後でモレホン神父は山田長政と（ペトロ岐部）の二人の死を語る。王宮の陰謀に巻き込まれ毒殺された山田長政と、苦難の末ようやく日本に潜入したもののわずか五日後に捕まり殉教を遂げた（ペトロ岐部）。どちらも悲惨な最期を遂げた。地上での人間の虚しさを物語っている。だがここにも作者の創作が見られる。山田長政が毒殺されたのは事実であるが問題は（ペドロ岐部）の方にある。実際の（ペドロ岐部）は一六三〇年、フィリピンから鹿児島島の坊ノ津へ商人のふりをして潜入に成功した後、長崎や東北で九年間神父として活躍した。一六三九年に捕えられた後も「穴吊り」などの過酷な拷問に耐えて華々しい殉教を遂げた。したがって、『メナム河の日本人』のように上陸後わずか五日で捕まったわけではない。ここには（ペトロ岐部）の無力さをより悲惨に見せようとする作者の創作のあとが窺える。

以上のように『メナム河の日本人』は山田長政を中心として、対照的な生き方をする（ペドロ岐部）や語り手としてのモレホン神父を副次的な人物として物語が展開する。作品の随所に歴史事実とは異なる様々な作者の創作

が見え隠れする。だが特筆すべきは「神の働き」について語られる三つの場面にある。これらにこそ作者の大胆な創作の跡を見ることが出来るし、作品を見直す鍵も隠されている。すなわち、〈ペドロ岐部〉が「転び者」の嘉助に慰めを与える場面、〈ペドロ岐部〉が山田長政に神の働く領域について語る場面、そしてモレホン神父がアユタヤでの日本人たちに思いを馳せる最後の場面である。これらの場面は人間の心の働きに触れたものであり、単なる心理ではなく魂の領域に及び作者の宗教観をも浮き彫りにする。

第一に〈ペドロ岐部〉が「転び者」の嘉助に慰めを与える場面。そもそも嘉助は前作の『黄金の国』に登場しフェレイラや仲間を裏切り棄教した「転び者」であり、『沈黙』のキチジローとよく似た人物である。『メナム河の日本人』では「転び者」になったことで日本にはいたたまれずアユタヤに逃げ落ちたという設定になっている。嘉助は自分の罪を自覚し、心に重荷を負ったまま暮している。そんな嘉助を〈ペドロ岐部〉は慰める。

ペドロ岐部　いいか、嘉助殿。神さまはな、お前さまのように己がつまずきに泣く者のためにおられるのだ。もし日本の転び者たちが、皆、お前さまのように我と我が身をそのように責め苛んでいるならば、私は尚更、日本に戻りたい。戻って、神様は罰したり裁いたりなさるために在すのではない。神さまは転び者の苦しみも心底知っておられると告げに行かねばならぬ。

茂吉　ふしぎな神父さまじゃな、お前さまは。

ペドロ岐部　（笑って）ふしぎなものか。私はただこの十年の旅のち、人間の哀しみがどんなものか、やっとなつた愚かな男だ。（後略）

（傍線部引用者／遠藤周作『メナム河の日本人』新潮社、一九七三・昭和四十八年九月）
〈ペドロ岐部〉は「転び者」の嘉助に対して人間の哀しみや苦しみに寄り添う同伴者としての「神さま」を優しく説いている。〈ペドロ岐部〉も過酷な「十年の旅」を経て「人間の哀しみ」や「転び者」の苦しみを理解し、同時に人間の苦しみを共に分かち合う「神さま」を知ったからだ。さらに重要なことは〈ペドロ岐部〉が嘉助に

説く「神さま」像が『沈黙』における「踏絵」の「イエス」と重なる点にある。

（踏むがいい。お前の足は今、痛いだろう。今日まで私の顔を踏んだ人間たちと同じように痛むだろう。だがその足の痛みだけでもう充分だ。私はお前たちのその痛みと苦しみをわかちあう。そのために私はい

るのだから）

「主よ。あなたがいつも沈黙していられるのを恨んでいました」

「私は沈黙していたのではない。一緒に苦しんでいたのに」
「しかし、あなたはユダに去れとおっしゃった。去って、なすことをなせと言われた。ユダはどうなるのですか」

「私はそう言わなかった。今、お前に踏絵を踏むがいいと言っているようにユダにもなすがいいと言ったのだ。お前の足が痛むようにユダの心も痛んだのだから」

（傍線部引用者／遠藤周作『沈黙』新潮社、一九六六・昭和四十一年四月）

「踏絵」の「イエス」がロドリゴに語りかける有名な場面である。ここで「イエス」はロドリゴに対して裏切り者のユダの苦しみを知っていること、人間の「痛みと苦しみをわかちあ」い、「一緒に苦しん」でいることを切々と訴えている。へペトロ岐部が語る「転び者の痛みも心底知っている」「神さま」像と同じである。

第二にへペトロ岐部が山田長政に神の働く領域について語る場面。アユタヤに日本人だけの「地上の国」建設の夢を語る山田長政に対してへペトロ岐部は「一人一人の人間の心の奥ふかい影のなかに作られ」る「神の国」について語る。へペドロ岐部はモレホン神父から山田長政の秘密を聞き⑥、そうした心の奥に神の働きがあることを主張する。その秘密とは口のきけない王女を不憫に思い、誰も見ていないところでは王女を慰めるために刀で軽業を見せることであった。富や権力を追求し闘いに明け暮れる山田長政にも別な一面があったのである。しかも王女の前で軽業を披露する山田長政の姿は聖母の前で軽業を披露したアナトール・フランス『聖母の

軽業師』を連想させる。結局、山田長政は（ペドロ岐部）の話に耳を傾けることはなく、「地上の国」建設に全力を注ぎ続けるが、心の秘密を解き明かした（ペドロ岐部）は忘れ難い存在となる。

第三にモレホン神父がアユタヤでの日本人たちに思いを馳せる最後の場面。敵の策略によって山田長政が毒殺され日本人町も荒廃し、（ペドロ岐部）も日本潜入後五日後に逮捕され殉教を遂げる。他の日本人も殺されたり、どこかに逃げ延びたりしている。生き残ったのは一人の赤ん坊だけになった。そうしたアユタヤでの日本人たちの運命をつぶさに目撃したモレホン神父は最後に感慨を漏らす。

モレホン 人はそれぞれにわが身を賭けたものために死んでいく。ペドロ岐部も、オーナ・セーナ・ピモック・長政殿も。その二人の臭いが、この日本人町の跡のどこかにくすぶっているようだ。その人間の臭いのなかには神がいる。神もその跡を私たちと同じように、つらそうに見ておられる気がする。

（遠藤周作『メナム河の日本人』新潮社、一九七三・昭和四十八年九月）

先に（ペドロ岐部）が嘉助に語った人間の哀しみや苦しみに寄り添う同伴者としての「神さま」像がここにも見られる。モレホン神父が感じているのは地上における人間の儂さであり、その夢の痕跡を「人間の臭い」という身体感覚で捉えているのだ。しかも『沈黙』から『イエスの生涯』、『死海のほとり』と発展してきた人間の哀しみや苦しみに寄り添う同伴者イエスの姿が神の働きとして明示されている。また、人間の心の奥に神が働く領域があるというように、「第三のデイメンション」と呼ばれる「魂」の領域まで描かれている。

要するに、『メナム河の日本人』は歴史小説としてだけでなく、心理小説という側面も持っているのだ。さらには、心の奥の奥に潜む「第三のデイメンション」である魂の領域にまで踏み込んでいる。こうした様々な側面から見直される必要のある作品であろう。

三、エッセイの中の〈ペドロ岐部〉

戯曲『メナム河の日本人』（一九七三）の次に〈ペドロ岐部〉が登場する作品は評伝『銃と十字架』（一九七九）であるが、その間に六年もの時間を費やしている。この頃にはH・チースリク教授の〈ペドロ岐部〉研究⑦もほぼ完成しており、〈ペドロ岐部〉の全貌も明らかになりつつあった。一九六五年には出身地の国東半島に銅像も建てられ地元での顕彰運動も大いに盛り上がっており、資料に関しては小説を書くのに十分な材料が揃ったと言える。だが資料だけでは小説は書けない。作家の創作意欲を刺激する何かが必要なのである。この辺りの事情に関しては、『銃と十字架』の「あとがき」に「彼は今日まで私が書きつづけた多くの弱い者ではなく、強き人に属する人間である。そのような彼と自分との距離感を埋めるため、やはり長い歳月がかかった」とある。『沈黙』をはじめ遠藤がこれまで書いてきた人物があくまでも「弱者」であって、〈ペドロ岐部〉のような「強者」ではなかったのである。こうした遠藤と〈ペドロ岐部〉との「距離感を埋める」作業の過程はいくつかのエッセイで確認することが出来る。そこで『銃と十字架』を考える前に、〈ペドロ岐部〉について書かれているエッセイをたどることとする。

まず「彼等と西洋」（『野生時代』一九七五・昭和五十年五月）。題名の「彼等」とはヨーロッパに留学した最初の日本人たちを意味する。遠藤はフランス留学体験から「彼等」に関心を持つようになったと語っている。日本人で最初のヨーロッパ留学生ベルナルドや荒木トマスなど何人かが紹介されており、そのうちの一人が〈ペドロ岐部〉であった。

カスイ岐部はおそらく日本人で最初に中近東にわたり、ローマに赴いた青年である。岐部は国東半島の豪族の子で有馬の神学校で学んだ後、幕府の追放令にあいマカオに逃げた。だがマカオの聖職者たちの無理解に反抗した彼は陸路、ペルシャに行き、聖都エルサレムにたどりつき、そこから更にローマに単身、渡って

いる。一六二〇年（元和六年）のことである。彼はそこで司祭となり、グレゴリオ大学で勉強（その名簿は今日でも残っている）、一六二三年にポルトガルから日本への帰国の途についている。彼がその旅の途中、シヤムのアユタヤで山田長政と出会ったことを人はあまり知らない。

（傍線部引用者／遠藤周作「彼等と西洋」／『野生時代』一九七五・昭和五十年五月）
（ペドロ岐部）の略歴に関しては事実をそのまま列挙しているだけだが、最後にわざわざ山田長政との出会いを強調している点に注目すべきだろう。戯曲『メナム河の日本人』（一九七三）の余韻を感じることができる。

次に『走馬燈 その人たちの人生』（毎日新聞社、一九七七・昭和五十二年五月）。「日本人でありながら、イエスと関わった」⑧人物を追って日本の各地やメキシコ、フランス、ポーランド、エルサレムなどを取材した「創作ノート」⑨である。この中には『沈黙』に関わる「長崎（フェレイラのこと）」「文京区・小日向一丁目（キヤラ神父のこと）」「鉄の首枷―小西行長伝」（一九七七）と関わる「室津にて（小西行長のこと）」「岐阜県・春日村（行長の逮捕）」「天草島・仏木坂（清正のこと）」「対馬・巖原（小西マリアのこと）」「熱海市・網代（おたあのこと）」「韓国・蔚山（山川長兵衛尉のこと）」「韓国・熊川（ある陶工師の子孫）」「韓国・釜山市（内藤如安のこと）」「長崎市・大波止（内藤如安のこと）」「侍」（一九八〇）に関わる「牡鹿半島・月ノ浦港（偽りの使節）」「メキシコ ベラ・クルス（支倉常長のこと）」「南仏 サン・トロペ（支倉常長のこと）」「宮城県・支倉村（支倉常長のこと）」などがある。さらには『最後の殉教者』（一九五九）、『女の一生 一部・キクの場合』（一九八二）と関わる「島根県・津和野（浦上村の祐次郎のこと）」や『女の一生 二部・サチ子の場合』（一九八二）に登場するコルベ神父に関わる「ポーランド ニエポカラノフ村」や『イエスの生涯』『死海のほとり』『キリストの誕生』（一九七九）に関わるエルサレムとイスラエルなど様々な作品の源泉ともなっている。

（ペドロ岐部）に関しては「長崎（フェレイラのこと）」「長崎県・北有馬（有馬神学校のこと）」「仏蘭西・リヨン市（ポルロ神父のこと）」の中で少し名前が登場し、「国東半島（ペドロ岐部の話）」「アユタヤ（ペドロ岐部

の話」では半生について語られている。中でも「アユタヤ（ペドロ岐部の話）」における山田長政との関わりは重要である。

裏づける資料はないが、同じ日本人である山田長政とペドロ岐部とは、このアユタヤの日本人町で顔を合わせたであろう。二人がどのような対話をかわしたか、我々には残念ながらわからない。

アユタヤの廃墟にたたずんで、鳥の声を聞きながら、私はいつの日かペドロ岐部を主人公に小説を構想する日が来たら、この長政と彼との会話を書こうと思った。一方は日本を逃れた同胞のために理想の国を築こうとした男、もう一人はその日本にふたたび戻り、同胞のために神の国を説こうとした男、同時代に生まれ、同じように波乱の生涯を送りながら、地上の国と神の国とを夢みることで別の生き方を選んだ二人の男がここで顔を合わせたのである。

（傍線部引用者／「アユタヤ（ペドロ岐部の話）」／遠藤周作『走馬燈 その人たちの人生』毎日新聞社、一九七七・昭和五十二年五月）

前述のように『走馬燈』は「日本人でありながら、イエスと関わった」人物について書かれたエッセイである。そのため山田長政が章題に出て来ることはない。おそらく遠藤は「アユタヤ（ペドロ岐部と山田長政の話）」でもつけたかったのかもしれない。だが、山田長政は日本人ではあるが「イエスと関わった」人物ではないので章題から削除されたのであろう。ここで重要なのは資料にはないがアユタヤで山田長政と（ペドロ岐部）が出会ったことと、二人の生き方の違いが「地上の国」と「神の国」という『メナム河の日本人』で登場した対立項で提示されていることである。この対立項が展開した先に『銃と十字架』や『王国への道―山田長政―』（一九八一）がある。

そして、「石仏の里 国東」（『太陽』、一九七七・昭和五十二年七月）。（ペドロ岐部）の故郷である国東半島を訪ねた取材旅行の記録である。エッセイの冒頭部で（ペドロ岐部）への思いと略歴が語られる。

国東をいつかは訪れようと思っていた。国東を故郷とする一人の実在人物のことを書くつもりだったからである。

その男の名は岐部という。今日でも国東半島の北端にこの名を持った漁村があるが彼の一族は四百年ほど前、そのの豪族だった。彼の父は大友宗麟に属し、その影響をうけて熱心な切支丹になったが、彼もまた島原有馬の神学校に入学して生涯を信仰に生きようとした。

(中略)

だがこの男はその帰国の途中、当時、シヤムにいた山田長政に会い、小野田少尉のかくれていたルパング島から日本に戻ったあと、東北に潜伏して遂に捕まり、過酷な拷問を受けても屈せず、遂に江戸で死ぬという数奇な生涯を送っている。

(傍線部引用者／遠藤周作「石仏の里 国東」／『太陽』、一九七七・昭和五十二年七月)
へペドロ岐部)の略歴の中で、シヤムで山田長政に会ったことと東北で捕まったことの二点は注意すべきであろう。『メナム河の日本人』以来の山田長政とへペドロ岐部)の関係性と『侍』の主人公のモデル支倉常長との関連を裏付けるものとなるからである。

いずれにしる遠藤は国東半島を訪れ、石仏や神社仏閣を目にして、複雑な宗教性を実感する。国東半島には宇佐八幡宮、朝鮮仏教、平安仏教など様々なものが「ゴツタ煮のようにそのまま共存して」おり、その上に「大友宗麟の勢力で西欧の基督教もはiriこみ」、へペドロ岐部のような切支丹まで生んだ。「秘境」の地であり、「我々の解せぬ謎」に満ちている。それこそ国東半島の魅力だという。こうした複雑な国東半島の情勢について『銃と十字架』では少ししか触れられないが、後に大友宗麟を主人公にした『王の挽歌』(一九九二)では、国東半島が豊後国を統治するための要所となっている。大友宗麟は国東半島の田原家の娘と結婚するなど様々な策略を使って国東半島の勢力を自身の統治下に取り込んでいくことで、豊後国の支配体制を固めていったのである。

その意味ではこのエッセイは『銃と十字架』ばかりではなく『王の挽歌』の取材ノートとも言える。

続いて「世界史のなかの日本史」（『文学界』、一九七八・昭和五十三年一月）。『銃と十字架』執筆準備中に書かれたエッセイ。世界史のリズムのなかで日本史を考えるべきというテーマをもとに日本人で最初にヨーロッパに留学した人たちが、大航海時代という世界的な冒険の気運の中で、冒険的生涯を送った意味を遠藤は問いかけている。その代表として〈ペドロ岐部〉を取り上げる。

この前、国東半島にある岐部という小さな町に行ったが、それはここ出身の青年もまた、島原半島の神学校で学び、その後、ヨーロッパに留学したことを知ったからであった。

（中略）

留学を終えた彼は、その後、日本に帰る途中、シヤムのアユタヤに寄った。当時のアユタヤは山田長政を首領にする日本人傭兵と日本商人とが日本人町を作っていたから、彼と山田長政はきっと顔を合わせたにちがいない。長政のように異国の地に地上の王国をこしらえようとした男とこの青年のようにひたすら精神の王国を目指した男とがどのような会話をしたか、私など知りたいところである。

彼はその後、あの小野田少尉のひそんでいたルパン島に渡り、そこから白蟻のため破損した古船を手に入れて日本に戻っている。そして東北の仙台附近で捕えられ、過酷な拷問を受けた後、死んだ。

（傍線部引用者／遠藤周作「世界史のなかの日本史」／『文学界』、一九七八・昭和五十三年一月）
「地上の国」「神の国」から「地上の王国」「精神の王国」へと「王国」という言葉に変っていることに注意したい。『侍』の自作解説⑩ではタイトルを『侍』ではなく『王に会いに行った男』としてもよかったと語っているように、『侍』において「王」は重要な意味を持っている。それも「王」と言ってもスペイン国王やローマ法王のよくな地上の「王」だけではなく、人間の精神の「王」たるイエスをも含んでいる。このエッセイで山田長政が「地上の王国」建設を夢見て奮闘し、〈ペドロ岐部〉が「精神の王国」を目指してその果てに殉教を遂げたことと重な

る。山田長政が目指したのは地上の「王」であり、ヘペドロ岐部が考えたのは精神の「王」であるイエスであったのだ。

次に「東北の切支丹―支倉常長とペドロ岐部」(『探訪大航海時代の日本⑧回想と発見』小学館、一九七九・昭和五十四年三月)。東北の切支丹と殉教の歴史を語ったエッセイである。支倉常長、カルバリオ神父、後藤寿庵、ヘペドロ岐部など殉教者の足跡を辿る。支倉常長を主人公とした『侍』やヘペドロ岐部を主人公とした『銃と十字架』の取材旅行記でもある。副題に二人の名前があるが、支倉常長とヘペドロ岐部は直接交流したわけではない。二人を含む様々なキリシタンたちがそれぞれ「日本人でありながら、イエスと関わった」人物であり、「切支丹最後の地」である東北で確かに生きた痕跡を残したのである。例えば、支倉常長は慶長遣欧使節としてメキシコ、スペイン、ローマを訪問しローマ法王にまで謁見している。また、日本人として初めて太平洋、大西洋を往復した人物であるが、それほどまでの偉業を成し遂げながら帰国後は政策の転換もあり不遇のまま過ごし、最後には切支丹として処刑された。政治に翻弄された人生だったのである。一方、ヘペドロ岐部も日本人として初めてエルサレムを巡礼して、ローマで神父となり、一六三〇年日本に帰国後、長崎、東北で潜伏神父として年間活躍した。一六三九年東北の水沢の地で逮捕され、江戸で殉教を遂げた。このようにエッセイに登場する人物は殉教者たちであり、一方で「転び者」も存在した。そうした全てをひっくり返して東北の地で見られた「切支丹最後」の姿を描いているのである。

最後に遠藤周作・山本健吉「リレー対談 長崎あれこれ」(『月刊自由民主』、一九七八・昭和五十三年七月)。「銃と十字架」が『中央公論』連載中に開かれた山本健吉との対談である。山本は長崎で生まれ育った人物であり、遠藤にとって慶応大学の先輩にあたる。また、山本はフランシスコ・ザビエルの半生を描いた『きりしたん事始』(芸術社、一九五六)で遠藤から切支丹関係の資料を提供してもらったり、「天草四郎」について「評伝」⑩を書いたり切支丹に対して少なからぬ関心を抱いている。そんな山本に対して遠藤はヘペドロ岐部のこと

を熱く語る。

遠藤 (略) やっぱりすごいやつ、いますよ。僕がさつき保存してほしっていった、学校の卒業生の岐部なんていうのは、徳川家康の大追放でマカオへ行くでしょう。そして、すぐ勉強するんだけど、それじゃ飽き足らなくて、もっと勉強したいとゴアまで行って……もちろん路銀もないのに。三人、小西行長の孫と一緒に行ってます。

(中略)

「だけど、すごいでしょう。あの時代にアラビア砂漠を隊商とエルサレムへ行つて、エルサレムから……だからあの時代を調べると、すごいやついますよ。で、意外とそういう人のことを、学校の歴史なんかで教えないんですよ。」

(傍線部引用者／遠藤周作・山本健吉「リレー対談 長崎あれこれ」／「月刊自由民主」、一九七八・昭和五十三年七月)

「長崎あれこれ」という題名通り対談では長崎に関する様々な話題がのぼり、最後に有馬神学校に及び、さらに卒業生であるへペドロ岐部の話に至る。遠藤は終始一貫してへペドロ岐部を「すごいやつ」として興奮して語っている。『銃と十字架』連載中ということもありへペドロ岐部に対する並々ならぬ遠藤の関心の高さを窺い知ることが出来る。

以上、エッセイにあらわれたへペドロ岐部を確認してみた。エッセイや対談などの差はあるが最初は単なる知識にとどまり事実を列挙したに過ぎなかった。それが故郷である国東半島やローマ、アユタヤ、逮捕の地である東北水沢などへペドロ岐部の足跡を辿ることで遠藤が自分の近い人物として次第に「距離感」を埋めていったと言える。こうした過程を経て『銃と十字架』に辿りつくのである。また、ほとんどのエッセイで山田長政とへペドロ岐部の生き方の違いが対照的に取り上げられており、二人の対立がエッセイの中心となっている。

四、『銃と十字架』における〈ペドロ岐部〉

『銃と十字架』は「銃と十字架―有馬神学校^{セミナリオ}」という題名のもとで『中央公論』の一九七八年一月号から十二月号まで連載されたあと、一九七九年四月、『銃と十字架』と改題され中央公論社より刊行された。小説ではなく事実を客観的に述べる評伝の形式を取っている。これも先行研究は少なく一本の書評と四本の論文⑫があるのみである。

初出の副題にあるように有馬神学校が重要な役割を担っており、本文の約三分の一は有馬神学校や卒業生に関する記述で占められている。主人公の〈ペドロ岐部〉も有馬神学校の卒業生であることを考慮すると作品全体が有馬神学校の卒業生について描かれたとも言える。この辺りの事情に関しては前出の取材ノートである『走馬燈』が参考になる。同書の「長崎県・北有馬〈有馬神学校のこと〉」では『銃と十字架』の構想を垣間見ることが出来るからだ。

上智大学のチースリック教授や長崎の片岡弥吉教授の研究のおかげで、私たちはこの有馬神学校で学んだ生徒たちの名や略歴を知ることができる。生徒たちだけではなく、そこで教えた教師たちのことを調べる手がかりも与えられる。

私は、この姓名と略歴を調査された両先生の論文をひろげるたびに、そこに書かれた一人一人の生徒たちの生涯を、小説家として空想することがある。いつかは書きたいと思っている「卒業生」という作品の下準備をしているのかもしれない。

（傍線部引用者／遠藤周作『走馬燈 その人たちの人生』毎日新聞社、一九七七・昭和五十二年五月）
この段階でタイトルは『銃と十字架』ではなく「卒業生」であったことがわかる。整理すると、「卒業生」（一九七七）↓「銃と十字架―有馬神学校^{セミナリオ}」（初出…『中央公論』、一九七八・一〇―十二）↓『銃と十字架』（初版…

中央公論社、一九七九・四）という変遷をたどったことになる。そもそも遠藤が有馬神学校に関心を持つようになったのは『沈黙』（一九六六）執筆の頃から長崎を度々訪れ、有馬神学校のあった日之枝城^⑬付近を歩きまわり、往年の神学校の様子を偲んだことがきっかけである。また、『銃と十字架』の「あとがき」によると、遠藤が「ペドロ岐部」を知ったのも「十数年前にふと読んだチースリック教授の論文」であった。「チースリック教授の論文」とは『キリシタン人物の研究』のことで、中には有馬神学校についての記述もあり、これもまた有馬神学校への関心を高めたことは確かである。しかも「十数年前」というのは『沈黙』の取材のため遠藤が長崎をしばしば訪れた時期と重なる。遠藤が有馬神学校や「ペドロ岐部」に関心を持つようになったのは同じ時期だったのである。

作品自体は「一五八〇年に開校して三十三年の間存続したが、迫害のため閉鎖した」有馬神学校の卒業生の生涯を軸に、有馬神学校が設立された経緯や一五八七年豊臣秀吉によって出された禁教令に始まる迫害から一六三九年「切支丹最後の地」東北で逮捕され殉教した「ペドロ岐部」の最後までが、半世紀に及ぶ日本における基督教迫害の歴史と共に語られる。有馬神学校の卒業生の中には「ペドロ岐部」のように殉教した「強者」もいれば、千々石ミゲルのように背教した「弱者」もいる。誰もが神学校で西洋を学んだ日本人として西洋基督教国の日本に対する蔑視や東洋侵略の肯定という教会の罪とたたかったのである。

中でも注目すべきは千々石ミゲルと荒木トマスである。二人はそうした西洋とのたたかいの末棄教をしまったからである。この棄教問題について遠藤は既に「主観的日本人論^② テージュ川のほとりで 基督教棄てた二人」（『朝日新聞』、一九七二・昭和四十七年八月二十八日）^⑭で提起している。タイトルが示すようにこのエッセイは遠藤が主観的に日本人について論じたものである。「主観的日本人論^②」ではポルトガルのテージュ川を訪れて、四百年前同じ場所に上陸した天正遣欧使節について思いをはせている。その上で使節の一人であった千々石ミゲルと同じ頃この地を訪れた荒木トマスの二人が帰国後なぜ基督教を棄てたのか心の秘密に迫っている。

明治の初期における外国文化の輸入とちがい、切支丹時代に基督教は日本人にとってヨーロッパそのものだったし、ヨーロッパはまた基督教そのものだったのである。だから千々石ミゲルやトマス荒木が長い間信じた基督教を棄てることは、言いかえればヨーロッパを棄てることだったのである。もちろん、彼等の棄教には迫害による圧迫とか、拷問にたいする恐怖も考えられるだろう。だが、それ以上に彼等はこの迫害下にヨーロッパの考え方では死ねないと考えたからにちがいない。ヨーロッパで育った基督教と自分の体液の間に溶けあわぬものを感じたからにちがいない。その溶けあわぬものを彼等はその留学中に少しずつ考えたのではないかと私は想像するのだ。

この二人の心の秘密をさぐる資料は一つとしてない。ないがしかしこの二人の心の秘密は私には見のがすことができぬような気がするのである。

(傍線部引用者／遠藤周作「主観的日本人論2」／『朝日新聞』、一九七二・昭和四十七年八月二十八日)
千々石ミゲルと荒木トマスは有馬神学校の卒業生であり、荒木トマスは神父でもある。その二人がなぜ背教をしたのかという謎は解き難い問題である。手掛かりとなる資料も残されていない。これに対して遠藤は自身の留学体験にひきつけて考える。一九五〇年、遠藤は戦後初の留学生としてフランスへ渡り、「ヨーロッパで育った基督教と自分の体液の間に溶けあわぬものを感じ」て帰国した。同じように二人にはヨーロッパや基督教に対する違和感があったと遠藤は想像する。

これに対して『銃と十字架』では別の理由を提示している。基督教国の植民地政策である。

「見るべきではなかったもの」かつてヴァリニャーノ巡察師が天正少年使節の少年たちを同じ航路で異国に送った時、この「見るべきではないもの」を見させぬよう苦心したことはその書簡からも窺える。だが少年使節の一人、千々石ミゲルはその「見るべきではないもの」を目撃して後に背教者となった。

見るべきではないもの。それは基督教国の東洋侵略の具体的な姿である。

（傍線部引用者／遠藤周作『銃と十字架』中央公論社、一九七九・昭和五十四年四月）
「見るべきではないもの」、すなわち十六、七世紀の基督教国が武力により侵略を繰り返し、基督教も肯定していた事実である。千々石ミゲルはそれを目撃してしまったために基督教に違和感を覚え、帰国後遂に背教者になったと語り手は考える。また、題名の『銃と十字架』も基督教国の植民地政策に関わる「銃」、すなわち武力介入と「十字架」、すなわち基督教の教化による現地民の懐柔策を象徴したものであった。時の江戸幕府は基督教国の植民地政策を恐れたからこそ禁教令を強化し鎖国までした。こうした中で唯一異なる対応したのがへペドロ岐部である。へペドロ岐部は「見るべきではないもの」を見ながらも千々石ミゲルや荒木トマス、そして江戸幕府とは違う認識を持つに至ったのだ。

へペドロ岐部が千々石ミゲルや荒木トマスの轍を踏まなかったのは、この基督者の歴史的行為と基督教との明確な区別を認識したためだと思われる。不幸にして千々石ミゲルや荒木トマスは十六、七世紀の西欧基督教会の行動を基督教の基督教の教えそのものと混同した。この世紀の教会の過失を、基督教自体の性格と錯誤したのである。彼等は基督教会もまた歴史的に数多く過ちを犯しながら、より高きものに成長していくのだという「教会の成長」という考えを持ちえなかったのだ。千々石ミゲルや荒木トマスは、この時代の教会の過失を基督教そのものと同じ視して、信仰を放棄した。だがへペドロ岐部は彼等二人よりも、よくイエスを知っていた。

（傍線部引用者／遠藤周作『銃と十字架』中央公論社、一九七九・昭和五十四年四月）
作者の推測によらなくてもポルトガルの植民地の中心地であるインドのゴアを訪れたへペドロ岐部が「見るべきではないもの」、すなわち十六、七世紀の基督教国の侵略の実態を見たことは確かである。だが、へペドロ岐部は千々石ミゲルや荒木トマスと違い、最後まで信仰を棄てることはなかった。しかも、作者はその理由についてへペドロ岐部が植民地政策への協力という「教会の過失」と「基督教そのもの」は区別しており、そこ

に「ペドロ岐部」が「よくイエスを知っていた」からという大胆な推測を述べている。

ではなぜ「ペドロ岐部」は「よくイエスを知」ることができたのであろうか。『銃と十字架』では評伝という特質上、登場人物の行動に関しては客観的事実が中心として語られており、語り手の主観は極力抑えられている。それでも、語り手が「ペドロ岐部」の心理に踏み込んだ箇所もいくつかあり、ここに謎を解く鍵と「ペドロ岐部」の苦悩が隠されている。すなわち、「ペドロ岐部」は苦悩を通して同じ苦しみを味わった受難のイエスを知ることが出来たのである。そこで「ペドロ岐部」の苦悩の内実を確認したい。

まず、「ペドロ岐部」の苦悩と密接な関係を持つ弱さを見せた場面から考える。ここには語り手の主観が如実に表れている。

私の観察では、強固な意志そのものだったペドロ岐部がその生涯のなかで、弱さを見せたのはこれが二度目である。一度目はあの大追放令の時、日本信徒たちを見すててマカオに逃げた時である。二度目は目前に日本を見ながらアユタヤに引きかえしたこの瞬間である。だがそのような弱さをここに至って見せたペドロ岐部を、誰も責められぬ。彼の信ずるイエスさえも、十字架での自分の死を予感した前夜、血のような汗を地に落して苦しんだ。イエスはその苦しみのあと、自分の運命を神の意志として引き受けたが、ペドロ岐部はすぐには引き受けられなかったのだ。

（傍線部引用者／遠藤周作『銃と十字架』中央公論社、一九七九・昭和五十四年四月）
語り手の「観察」によると、「ペドロ岐部」は生涯の中で一回だけ弱さを見せたという。

元来「ペドロ岐部」は「剛毅な性格」と「海賊的な冒険精神」と「頑健な肉体」を持った人物として『銃と十字架』では一貫して描かれていた。その意味ではまさに「強き人」であった。だが、そうした中でわずかに二回でも弱さを見せたところは逆に人間らしい姿とも言える。

「一度目」に「ペドロ岐部」が弱さを見せたのは、一六一四年切支丹追放令が出た時、日本に残るか、海外に

出て帰国する機会を窺うか二者択一を迫られて、日本を出る道を選んだことである。〈ペドロ岐部〉には神学校を卒業したとはいえ「同宿」にしか過ぎない自分が日本に残るより、日本を出て神父になって帰国した方が信徒の役に立つだろうという大義名分はあった。だが迫害に苦しむ日本の信徒を見捨てたことは事実であり、そのことに対する後ろめたさがヨーロッパへ渡る冒険の原動力ともなる。

そこで〈ペドロ岐部〉はマカオに渡るが、ここでは神父になれる可能性がないことを知った。するとインドのゴアへ行きそこでも神父になれないことを知ると、ゴアから砂漠を通ってエルサレムを巡礼し、ローマにまで至る。金銭的な援助もなく言葉もわからないままほぼ徒歩で走破した文字通り大冒険であった。この冒険を支えたのは、「剛毅な性格」と「海賊的な冒険精神」と「頑健な肉体」の三つであるが、その根底には日本の信徒を見捨てたという後ろめたさがあつたと語り手は繰り返し強調する。大事なことは、〈ペドロ岐部〉が「はやく神父となつて帰国したい。だが帰国すれば殉教を覚悟しなければならない」という苦悩の中で受難のイエスの姿を何度も思い起こしていることだ。そうして次第に〈ペドロ岐部〉の苦悩とイエスの苦悩の姿が重なってくる。

受難のイエスの姿を彼はいつも思いうかべる。なぜなら、そのイエスの姿は帰国した暁の自らの似姿と理想とになるからだ。イエスが死を決意して過越祭のエルサレムに戻つたように、ペドロ岐部も死を覚悟して日本に帰るのだ。イエスがその予感通り、彼を迫害する大祭司やサドカイ派に捕えられたように、ペドロ岐部も切支丹を迫害する日本の権力者に捕縛されるだろう。だがイエスが愛した弟子の一人ユダから裏切られたように、ペドロ岐部も愛した誰かから、裏切られるだろうか。

（傍線部引用者／遠藤周作『銃と十字架』中央公論社、一九七九・昭和五十四年四月）
こうして〈ペドロ岐部〉は受難のイエスに自身の姿を重ねることで、苦悩を克服して「殉教の準備と死の覚悟」を整えて行つたのである。

「二度目」に〈ペドロ岐部〉が弱さを見せたのは神父となりヨーロッパからマカオへ渡り、日本潜入の機会を

窺った時のことである。マカオでは日本行の方法がないことと日本での基督教迫害の激化を知り、モレホン神父のアドバイスを受けてアユタヤへ行ったことである。この時、語り手は〈ペドロ岐部〉が拷問や殉教に対して「たじろいだ」と強く非難する一方で、受難のイエスも苦悩したのだから仕方がないと認めてもいる。だが、〈ペドロ岐部〉はアユタヤに渡ると、自分が神父であることを秘密にして黙々と日本潜入の機会を窺っている。マカオで「たじろいだ」にしろすぐに「殉教の準備と死の覚悟」を固めたのである。以上が〈ペドロ岐部〉の苦悩の内実である。

ところでここにはもう一つ問題がある。作者が意図的に〈ペドロ岐部〉をイエスの「相似形になろうとするキリスト者」^⑬として描いている点である。〈ペドロ岐部〉が殉教に至る過程とイエスが十字架で死ぬまでの過程が相似形となっているのだ。例えば、イエスが死を覚悟してエルサレムに戻ったように、〈ペドロ岐部〉も死を覚悟して日本に戻った。イエスが捕らわれる直前までゲッセマネの園で苦しみながら祈っていたように、〈ペドロ岐部〉も拷問や死に対して深く苦悩してアユタヤへ退いた。イエスが逮捕される時弟子達に裏切られたように、〈ペドロ岐部〉も一緒に「穴吊り」の拷問を受けた式見神父とポーロ神父が棄教して裏切られてしまった。イエスが拷問を受けて十字架上で死刑になったように、〈ペドロ岐部〉も「穴吊り」などの拷問を受けた末、火あぶりにされて絶命した。こうして〈ペドロ岐部〉と受難のイエスが重なって相似形になるのである。

最後に〈ペドロ岐部〉と山田長政との関係について述べたい。先に確認したように『銃と十字架』で中心となるのは〈ペドロ岐部〉をはじめとする有馬神学校の「卒業生」であった。そのため、山田長政が登場するのはわずかに「山田長政とペドロ岐部」の章にしかすぎない。しかも評伝という形式上、史実に基づいた山田長政がいた頃のアユタヤの歴史に関わる記述が大半を占めている。それでも語り手は章の最後の部分で山田長政と〈ペドロ岐部〉との関係を述べる。

けれども長政とペドロ岐部とは、あの十七世紀初頭の日本人として同型の人間である。彼等は共に日本を

捨て、日本の外に走った。彼等は共に日本をこえた国際人であろうとした。彼等は共に自分の創る国を夢みた。だが長政が地上の栄達を考え、日本を離れた場所に日本人の王国を得ようとしてリゴールに赴いたのにたいし、ペドロ岐部は日本に戻って神の国をそこに築こうとした。長政がその地上王国のために死を懸けたように、岐部もこの神の国に死を賭けた。地上の王国と神の王国。二人の夢みたそれぞれの王国はあまりに離れ、あまりに次元を異にしていた。

(傍線部引用者／遠藤周作『銃と十字架』中央公論社、一九七九・昭和五十四年四月)

『メナム河の日本人』やその他のエッセイに既出ではあるが、「地上の王国」を築こうとした山田長政と「神の王国」のために働く〈ペドロ岐部〉という二人の生き方の違いである。これまでの主張と特に変わったところはないが、「評伝」という制約の中にありながらも言っておきたいという作者の強い意志が感じられる。

五、『王国への道』における〈ペドロ岐部〉

「地上の王国」を築こうとした山田長政と「神の王国」のために働く〈ペドロ岐部〉の生き方の違いを示した最後の作品が『王国への道―山田長政―』（初出…『太陽』、一九七九年七月〜翌々年二月号）である。副題に示されているとおりの主人公は山田長政である。〈ペドロ岐部〉は副主人公に過ぎず、ストーリーの中心となるのはあくまでも山田長政である。駿府の駕籠かきでしかなかった長政が出世の機会を求めて日本を飛び出しアユタヤへ渡り、リゴールの藩主として「地上の王国」を築く一歩手前まで登りつめていくことがストーリーの中心となっている。だが最後には身内の裏切りに遭い毒を盛られ「地上の王国」の夢は半ばで挫折する。そんな山田長政が成功していくのと同時進行で〈ペドロ岐部〉も神父となるためにマカオからゴア、エルサレムを経てついに

はローマに辿りつく。神父となってからはローマからポルトガル、ゴア、マカオ、そしてアユタヤで山田長政と再会し、最後には基督教迫害下の日本へ戻り殉教を遂げる。このように別なものを目指しながらも同じような情熱を持った二人の人生が交錯していくところが重要である。では順に山田長政とヘペドロ岐部への関わりを確認する。

作品の冒頭は一六一四年の切支丹追放令から始まる。バテレンの宣教師、有馬神学校の学生たちと同宿のヘペドロ岐部へたちは長崎から船に乗ってマカオへと向うが、同じ船に山田長政が密航していた。最初に山田長政と言葉を交わす西ロマンは、史実では一六二七年ヘペドロ岐部とアユタヤで再会した人物であるが、『王国への道』では冒頭部分にしか登場しない。山田長政とヘペドロ岐部が初めて言葉を交わすのは、船の中で船酔いに苦しむ神学生たちをばかにする山田長政をヘペドロ岐部がたしなめた時からである。ヘペドロ岐部は「大友家の家臣」であった武家の誇りを持つ強い意志を持った人物として登場する。

マカオに到着すると、山田長政はすぐに阮子竜の手下となりアユタヤに住む日本人相手の商売を手がける。ヘペドロ岐部へはマカオで神父になる可能性もなく、厄介者扱いされて不満を抱えていたがアユタヤへ行くという山田長政から刺激を受け、マカオを出る決意をする。『銃と十字架』ではヨーロッパで学び神父となった荒木トマスが存在がヘペドロ岐部へにヨーロッパ留学の夢を与えたことになっているが、ここでは荒木トマスは登場しない。

アユタヤに着くと山田長政は様々な策略をめぐらし、日本人傭兵隊の中で頭角をあらわし、遂には傭兵隊長にまで登りつめる。一方、ヘペドロ岐部へも過酷な旅の末マカオからエルサレムを経てローマへ至り、ついに神父となる。二人は互いのことが気になりながらそれぞれの道を進んでいく。

一六二七年、日本へ潜入する方法を捜すためにヘペドロ岐部へは山田長政のいるアユタヤへ着く。史実では『メナム河の日本人』に登場したモレホン神父からアドバイスを受けてアユタヤへ向ったのだが、モレホン神父は登

場しない。また、『銃と十字架』では（ペドロ岐部）がアユタヤに着いた時、神学校の先輩である西ロマノと再会したが、西ロマノも登場しない。さらに、（ペドロ岐部）は山田長政に対して神父であることを公表し、神父として小さな教会を開いたり、医療活動にも従事していく。『銃と十字架』では切支丹であれば日本行の船に乗ることができないので、アユタヤにいた三年間は自分が神父であることを隠していた。

アユタヤで再会した山田長政と（ペドロ岐部）は互いに親近感を抱きながらも生き方の違いを実感して別れる。要するに二人の議論はいつまでも平行線をたどっていた。ペドロ岐部は長政の生き方がこの世のはかない幻影を追ったものだと考えていたし、長政は岐部の信ずる神とか永遠の命がわからなかった。

ただこの二人はたがいに気がつかなかったが一点においてよく似ていた。それは狭い日本にあくせくと生さず、おのれの生き方のために海をこえて新しい世界に突入したことだった。自分の熱情を信じて、まっしぐらに進むその生き方には両者共通したものがあつた。

（遠藤周作『王国への道―山田長政―』平凡社、一九八一・昭和五十六年四月）

（神の国はな、すべて人の魂のなかに作られる）

岐部が言った言葉はまだ長政の耳のなかに残っていた。

（お前は地上の国ば作るがよか。しかしこの俺はな、神の王国のため働くのよ）

長政がじつと岐部を船の上から見おろすと岐部もまた腕をくんだまま、長政を見上げていた。二人はたがいに沈黙したまま、すれ違った。

（遠藤周作『王国への道―山田長政―』平凡社、一九八一・昭和五十六年四月）

ここにも「地上の王国」を築こうとする山田長政と「神の王国」のために働く（ペドロ岐部）の生き方の違いが明確に表れている。二人の生き方の違いはこれまで確認して来たとおりで格別新しい内容ではないが、小説ら

しくより生き生きとした言葉で語られている。もちろん、これまで確認したように史実では二人の間に交流は全くなく、互いに無関心であった。

最後に山田長政は妹のように可愛がっていた「ふき」に毒を盛られて死ぬ。「ふき」は山田長政が出世する際の犠牲になった城井久右衛門の娘であり、山田長政は父の仇として殺されたのである。史実では敵の宰相に毒殺されたのだが、より劇的な形で最後の場面を飾っている。一方、〈ヘペドロ岐部〉はアユタヤからフィリピンを経て日本潜入に成功する。長崎や東北で神父として九年間活躍した後、仙台で逮捕された。「穴吊り」などの拷問を受けた末に火あぶりにされ殉教を遂げた。〈ヘペドロ岐部〉は最後に役人たちに対して「私のことはおぬしには、わからん：」という言葉を残して絶命した。おそらく役人だけではなく山田長政にも言いたかった言葉であろう。同様に『銃と十字架』でも棄教を勧める役人たちに対して、〈ヘペドロ岐部〉は「あなたに私の基督教は理解できぬ。だから何を言っても無駄なのだ」と答えて絶命した。ほぼ同じ終わり方である。

以上、山田長政と〈ヘペドロ岐部〉の関わりを確認した。こうして概観すると、山田長政は主人公であるだけに人物関係や行動に大胆な創作がなされており、より劇的に描かれていて、〈ヘペドロ岐部〉とも密接な関係にあることがわかる。一方で、〈ヘペドロ岐部〉は他の人物との交渉が省かれており、ほとんど描かれることはない。『銃と十字架』ではマカオで荒木トマスやモレホン神父、アユタヤで西ロマノと出会ったのだが、これらの人物は省略されており、その分、山田長政との交流の深さが一層際立つ構造になっている。また、『銃と十字架』で〈ヘペドロ岐部〉は二度弱さを見せたが、『王国への道』では少しも弱さを見せることもなく、「剛毅な性格」と「海賊的な冒険精神」と「頑健な肉体」を持った人物として一貫して描かれている。最初から最後まで一貫して〈ヘペドロ岐部〉は「強者」だったのである。

六、おわりに

遠藤文学において〈ヘドロ岐部〉が登場する『メナム河の日本人』、数編のエッセイ、『銃と十字架』、『王国への道』について概観した。『メナム河の日本人』では〈ヘドロ岐部〉の外面的な弱さと内面的な強さが明確に表れていた。数編のエッセイでは、「強者」である〈ヘドロ岐部〉との心の距離感が埋められていく過程を見ることができた。『銃と十字架』では二度だけ弱さを見せたが、それ以外は強者として信仰を貫き、受難のイエスと相似形となった〈ヘドロ岐部〉の姿が現れた。『王国への道』では一貫して「強者」としての〈ヘドロ岐部〉の姿を見ることが出来た。

これらの作品を改めて見直すと、〈ヘドロ岐部〉が登場するほとんどの作品には対照的な存在として必ず山田長政が登場しており、二人の関係性が重要なテーマを形成している。すなわち、「地上の王国」を築こうとする山田長政と「神の王国」のために働く〈ヘドロ岐部〉との生き方の違いであり、目指すものは異なるが同じような情熱を持ち、海外に勇躍した日本人の姿である。

さらに他の作品との関連も考えられる。〈ヘドロ岐部〉の信仰の対象であるイエスを描いた『死海のほとり』『イエスの生涯』『キリストの誕生』。評伝という同形式の『鉄の首枷』『侍』。二項対立のバリエーションである『侍』の長谷倉とベラスコ、『王の挽歌』の豊臣秀吉と大友宗麟。いずれの作品も〈ヘドロ岐部〉が直接登場することはないが、〈ヘドロ岐部〉の生涯と深い関連があり、遠藤文学の「歴史小説」をより豊かな世界へと導くのに役立っているのである。

- ① ペドロ岐部)については「ペドロ岐部」「カスイ岐部」「岐部神父」「ペドロ岐部カスイ」「ペドロ・カスイ・岐部」など様々な呼び方があるため本稿では(ペドロ岐部)と統一して呼ぶこととする。
- ② 本稿で取り上げる作品に関する先行研究がほとんどないことが(ペドロ岐部)に対する関心の低さを物語っている。
- ③ 拙稿「遠藤文学における(ペドロ岐部)――『留学』『沈黙』を中心として――」『遠藤周作研究第八号』(二〇一五・平成二十七年九月)。
- ④ 次の四本である。
- (1) 鈴木秀子『メナム河の日本人』(『世紀』、一九七三・昭和四十八年十一月)
- (2) 麻生直『日本人の原像にせまる：雲「メナム河の日本人」(上演劇評)』(『テアトロ』、一九七三・昭和四十八年十二月)
- (3) 矢代静一「二人三脚 『メナム河の日本人』」(『文芸』、一九七三・昭和四十八年十二月)
- (4) 三浦朱門「挫折する人生―遠藤周作『メナム河の日本人』について―」(『海』、一九七三・昭和四十八年十二月)
- ⑤ 遠藤周作「小説家の海外旅行」(『海』、一九七九・昭和五十四年七月)
- ⑥ 山田長政の秘密を知っているモレホン神父と(ペドロ岐部)が二人とも神父であることに注意したい。
- ⑦ H・チースリクには(ペドロ岐部)研究の書として『キリシタン人物の研究―邦人司祭の巻―』(吉川弘文館、一九六三・昭和四十八年十二月)、『海賊の末裔―波乱にとんだ岐部神父の物語―』(中央出版社、一九六九・昭和四十八年十二月)、『海賊の末裔―波乱にとんだ岐部神父の物語―』(中央出版社、一九六九・昭和四十八年十二月)

和四十四年八月）、『世界を歩いた切支丹』（春秋社、一九七一・昭和四十六年六月）の三冊がある。

⑧ 「あとがき」／遠藤周作『走馬燈 その人たちの人生』（毎日新聞社、一九七七・昭和五十二年五月）

⑨ 『走馬燈 その人たちの人生』の帯には「創作ノート；宗教史的回顧に拠るエッセイの試み」とある。

⑩ 遠藤周作・三浦朱門『王』にあいに行った男―書き下ろし長編『侍』をめぐって―（『波』、一九八〇・昭和五十五年四月）

⑪ 山本健吉「天草四郎」（『人物日本の歴史10 桃山の栄光』小学館、一九七六・昭和五十一年、所収）

⑫ 次の四本がある。

（一）久保田暁一「遠藤周作の視点―『鉄の首枷』と『銃と十字架』について」（『キリスト教文学の可能性』だるま書房、一九七九・昭和五十四年十一月）

（二）尾崎秀樹「大航海時代」（『歴史文学夜話 鷗外からの180篇を読む』講談社、一九九〇・平成二年七月）

（三）広石廉二「『銃と十字架』―殉教者の論理」（『遠藤周作の縦糸』朝文社、一九九一・平成三年十月）

（四）三木サニア「遠藤周作『銃と十字架』（『キリスト教文学第八号』、二〇一一・平成二十三年八）

⑬ 「有馬、日之枝城」（『切支丹の里』人文書院、一九七一・昭和四十六年一月、所収）

⑭ このエッセイは『朝日新聞』に五回に分けて連載された。ちなみに一回目では、アユタヤの日本人町の跡地を訪れ山田長政に対して思いを馳せている。

⑮ 〈ペドロ岐部〉とイエスの相似形の問題は作者が自作解説で触れている。

遠藤 それはもう明らかにロドリゴ、キチジローの線と対比させていました。でもしかし一方では、『沈黙』のときは同行者イエスといえますか、こちらの苦しみを知っているイエスというのを書きましたけれど、ペドロ岐部のとき（引用者注…『銃と十字架』）はイエスに少なくとも相似形になろうとするキリス

ト者です。イエスもまたこの同じ苦しみを受けたんだからという、相似形になろうとするキリスト者を書くことで、右翼左翼を固めようという気持はありました。その相似形になろうという気持が、やがて『侍』のなかで侍がキリストというのはぜんぜん信じなかったけど、「あの人」と相似形になっていくわけです。

（傍線部引用者／遠藤周作・佐藤泰正『人生の同伴者』春秋社、一九九一・平成三年十一月）

第二章 『侍』論―フィクションの内実について―

一、問題の所在

『侍』（新潮社、一九八〇・昭和五十五年四月）は、伊達藩が一六一三年ローマ法王とスペイン国王に派遣した慶長遣欧使節の支倉常長をモデルとした歴史小説である。既に知られているように『侍』執筆に先立ち遠藤は前作の『死海のほとり』（新潮社、一九七三・昭和四十八年六月）から約七年かけて支倉常長の足跡を辿り綿密な調査研究を行っている。『大日本史料第十二編之十二』（東京大学出版会）など当時手に入るだけの膨大な資料に眼を通し、宮城県月ノ浦港や支倉村、メキシコの各地に出かけ現地調査を行った。メキシコでは現地の支倉常長研究家大泉光一氏①の教示を受け、日本では南蛮学の第一人者松田毅一氏②に師事を仰いだ。こうした周到な準備と惜しみない労力をかけ謎の多い支倉常長の実像に迫り小説の骨組を形成したのである。小説の技法としても七年の間に数多くの評伝③を手がけ歴史小説の技法を磨いてもいる。だが一方で『侍』のかなりの部分には、史実とは異なるフィクションが盛り込まれている。年代の変更や架空の人物設定などである。その上、作者自身が、支倉常長に自己の姿を投影した「一種の私小説」④であるとさえ明言している。このことは既に多くの指摘⑤があるが、本稿では『侍』執筆時に遠藤が参考にした松田毅一の『慶長使節―日本人初の太平洋横断―』（新人物往来社、一九六九年四月／以下『慶長使節』と呼ぶ）⑥を元に『侍』の作品背景、慶長遣欧使節、長谷倉とベラスコの造型の三つの視点からフィクションの内実に迫りたい。

二、『侍』の作品背景

『慶長使節』によると慶長遣欧使節は、ルイス・ソテローロ神父が立案し、メキシコとの貿易を望む徳川家康の暗黙の了解を受け伊達政宗がローマ法王とスペイン国王に派遣したものである。作品背景として当時メキシコを支配していたスペイン人と徳川家康の太平洋貿易の支配権を巡る政治的な駆け引きがあつた。『慶長使節』では、五章あるうちの「徳川家康とスペイン人」、「ドン・ロドリゴと家康」の二章が、慶長使節派遣に至るスペイン対徳川家康、すなわち日本対西洋の二つの世界の対立構造と歴史を明確にしている。

『侍』では、『慶長使節』で描かれた日本対西洋の対立構造に加えて聖書の世界が作品全体の通奏低音として潜んでいる。例えば、ベラスコは日本宣教の困難さに直面するごとに、パウロの伝道旅行やキリストの受難を重ねて聖書の世界を想起する。さらに政治の世界についても、ベラスコに対するボルゲーゼ枢機卿の説得の中で浮き彫りになる。司教会議で日本宣教の道が断たれたにも関わらずベラスコはなおもローマ法王に訴え日本宣教を進めようと策略をめぐらせる。そうしたベラスコに対して、ボルゲーゼ枢機卿は法王という組織を守るため迫害の国に宣教師を送りたくないと言断する。大多数を守るためには一人の者を見棄てるのはやむをえないし、大祭司カヤパが組織の秩序と安全を守るために主イエスを生贄にしたのと同じであつた。そして、「愛のお方は愛のために政治の世界で殺された」という枢機卿の言葉は、ローマ法王もまた政治の世界であり、キリストの愛を実践しようとするベラスコの理想とは異なることを示した。ボルゲーゼ枢機卿もベラスコも考え方は異なるものの、聖書の世界を意識しつつ西洋や日本を見ていることは明らかである。

このような日本、西洋、聖書の世界をめぐる構図の詳細は図一に示した。そこでさらに、『侍』の作品背景を日本と西洋、それぞれの支配者層と被支配者層に分け整理して考えて見たい。

日本における支配者層には、天子（天皇）―内府（徳川家康）―殿（伊達政宗）―評定衆の序列がある。この中で気になるのは、徳川家康と伊達政宗の存在感の薄さである。ベラスコは徳川家康とは一度会ったきりであり、伊達政宗と直接面会した記述はない。下級武士として設定されている長谷倉も徳川家康は言うまでもなく伊達政宗も遙か雲の上の存在であり、直接会うことなどは考えられない。つまり、徳川家康も伊達政宗も作品の中では蔭の存在だと言える。ところが、史実では、ベラスコのモデルであるルイス・ソテロ神父は徳川家康や伊達政宗には何度も会い信任を得ている。特に伊達政宗には処刑されるところを釈放させてもらったり、使節派遣後日本へ再入国し捕まった後獄中より手紙を出して協力を要請している。ということは、支配者層に翻弄された使節の悲劇性を高めるために、史実におけるソテロ神父と徳川家康や伊達政宗ら要人との関係を弱めたのではないだろうか。また、徳川家康や伊達政宗は歴史上の有名人物であるため描写も難しく存在感も大きいので、長谷倉とベラスコの存在感が相対的に小さくなるのを避けたかったのかもしれない。

日本における被支配者層には百姓たちがいる。作品冒頭では長谷倉が統治する谷戸と三つの村の様子が語られる。百姓たちは、「押し潰されたような村」の「家畜小屋のように臭く、暗い」家に住み、長谷倉と同じように「眼がくぼみ、頬骨が突き出た」容貌を持ち感情を表に出すのが苦手で、長谷倉よりも従順で我慢強く早朝から夜まで「牛のように」働き、喧嘩も争いもしない。この村では身分の上下はあるものの長谷倉も百姓たちと同じように畠で働き、山で炭を焼き、戦よりも飢饉を恐れながら生活している。こうした百姓たちの姿は『慶長使節』には全く出て来ない。

西洋における支配者層には、ローマ法王―ボルゲーゼ枢機卿―スペイン国王―ポロ会・ペテロ会といった序列がある。ほぼ史実どおりだが、スペイン国王だけ『侍』には登場しない。『慶長使節』によると、慶長遣欧使節の当初の目的はローマ法王に謁見し、メキシコとの貿易をスペイン国王に斡旋してもらおうとする

ものであったが、『侍』はここに大きな変更を加えている。使節の目的地をローマではなくメキシコに置いているのだ。出発前の打ち合わせでは、長谷倉ら使者衆がベラスコと同行するのはメキシコまでであり、うまくいかない場合にはベラスコだけがローマまで行くということであった。実際に使者衆はメキシコまで行くとしか聞かされていなかった。ところが、ベラスコの陰謀でスペインやローマへと使者衆が向かわざるを得ない状況になる。日本人を同行し洗札を受けさせた方が交渉を有利に進められるとベラスコが考えたからだ。さらに、史実では、スペイン国王やローマ法王との謁見は慶長使節の最も華々しい場面であったのだが、『侍』では司教会議に伊達藩のキリスト教弾圧が報告され、スペイン国王との謁見は中止になり、ローマ法王との謁見も形ばかりのものとなってしまい、最も悲惨な場面になっている。ここでも慶長使節の悲劇性がより高められている。

西洋における被支配者層としてスペインの植民地であるメキシコに住むインディオ達が登場する。西洋人の支配の下、貧しい生活が描かれる。もちろんこれも『慶長使節』には全く出て来ない。ベラスコは植民地政策の非人間性にはあえて眼をつぶり、キリスト教の伝道のために仕方のないこととして、日本人には極力負の面を見せないようにしている。だが、この矛盾に真正面からぶつかったのは日本人の元修道士であった。元修道士は神父に連れられて長崎の横瀬浦からメキシコへ渡ってきたのだが、西洋人の教会からは離れてインディオたちと共に住んでいる。その信仰の中心は、「私のイエス」である。こうした元修道士の姿は、後に『深い河』で西洋のキリスト教から脱落し、インドの貧しい人たちと共に住む大津神父に重なる。

以上のように『侍』における日本と西洋、それぞれの支配者層と被支配者層を整理してみた。その結果、史実と大枠は同じであってもそのほとんどがフィクションであった。しかも日本、西洋、聖書の三つの世界には、多くの共通点が見られる。例えばいずれも政治の対立がある点だ。日本ではメキシコとの貿易をめぐる評定衆の鮎貝と白石が、西洋では日本宣教をめぐるペテロ会とパウロ会が、聖書の世界ではイエスの処分

をめぐるカヤパとピラトが、それぞれ権力争いをしていた。しかも政治の争いのために長谷倉、ベラスコ、イエスという犠牲者を出している点、また被支配者層で日本の百姓、メキシコのインディオ、ユダヤの民が貧しい牛馬のような生活を送っている点、彼らと共にいる「同伴者」として与蔵、日本人の元修道士、イエスがいる点。権力者、犠牲者、同伴者という構図は日本、西洋、聖書ともに同じである。

三、『侍』の慶長遣欧使節

慶長遣欧使節に關しても史実との大幅な変更が見られる。最初に使節の記録が残る年月日から整理したい。『慶長使節』から簡単にまとめると以下の通りとなる。

使節は一六一三年十月二十八日、月ノ浦出帆。翌年一月二十八日にアカプルコ入港。メキシコシティには三月の復活祭に到着、六月まで滞在する。このメキシコシティ滞在中に七十八人の日本人が洗礼を受けたとされている。以後大西洋横断、スペインに到着。マドリードでスペイン国王フェリーペ三世に謁見後、支倉常長が洗礼を受ける。さらにローマへ進み、一六一五年十月二十日、ローマ教皇に謁見、書状を渡し帰途につく。スペイン、メキシコ、フィリピンを経て一六二〇年九月二十二日、仙台に帰国して使節の役目を終える。

対する『侍』では具体的な年月日はほとんどなく、「將軍の父である内府さまが今年、幕府直轄領に切支丹の教えを禁じられた」「フランシスコ・ザビエルが六十三年前にはじめて日本に上陸」といった記述から第一章が一六一二年から始まることを推測できるに過ぎない。この推測を元にするると使節は、(一六一三年)五月五日、月ノ浦出帆。(一六一三年九月二十五日頃)アカプルコ入港。(一六一三年九月二十九日)聖ミカエルの日曜日⑦にメキシコシティで三十八人の日本人が洗礼を受けた。以後大西洋横断、スペインに到着。マドリードで

スペイン国王との謁見を有利に進めるため、長谷倉、田中、西の使者衆と従者が洗礼を受けるが、伊達藩でのキリスト教弾圧の報告が司教会議にもたらされ、国王との謁見は中止になった。復活祭の一週間前にローマに入り、復活祭の真つ最中ローマ法王と形ばかりの非公式の謁見を行い、書状を渡し帰途につく。スペイン、メキシコ、フィリピンを経て（一六一七年頃）長谷倉は仙台に帰国して使節の役目を終えた。

こうしてみると『慶長使節』と『侍』とは、日付が全く異なることに気付く。史実で使節のメキシコシテイ到着が復活祭の最中であるのはソテローロ神父の計画であったが、遠藤は復活祭をローマ法王との謁見の日に設定しているのである。おそらくこの復活祭の変更にあわせるために他の日付を設定したと考えられる。このあたりは大胆な変更と言える。

次に使者の構成をまとめたい。『慶長使節』によると、月ノ浦港を出帆した船に確実に乗っていたのは支倉六右衛門、フランシスコ会員ルイス・ソテローロと同僚イグナシオ・ヘスースとディエゴ・イバーニエスの三人と元司令官でスペイン大使のヴィスカイノだけで、その他の事はあいまいである。約百四、五十名が日本から出国し、そのうち約二十名がスペインに渡り、約十五名がローマに達し、スペインからメキシコに渡る際に支倉に随行した日本人は五名だった。支倉六右衛門以外の使者には、伊達家以外にも山城、摂津、尾張、奥州の住民が含まれており、キリシタンもいた。松木忠作は伊達藩のキリシタンの代表者であった。

対する『侍』では月ノ浦港を出帆した船には、神父はベラスコー一人だけで南蛮人の船員たち三十余人のほか、日本人の使者衆四人とその従者たち、そしてまた日本人の水手頭など十数名、商人たち百人以上が乗っている。メキシコで松木忠作や商人たちと別れた後、三人の使者衆とその従者たちという固定したメンバーがスペイン、ローマに至る。途中田中の従者の負傷死と田中の切腹はあったが、メキシコ出発後はほぼ同じ構成で日本へ帰国している。使者衆は四人全てが伊達家の召出衆と呼ばれる下級武士であり、キリシタンはいない。むしろ、史実にも登場する同じ名前の松木忠作は長谷倉たちに「絶対に切支丹になるな」と忠告す

らしている。

ここで『慶長使節』と『侍』の異なる点は、ソテロ神父と共に船に乗ったヴィスカイノに当たる人物が『侍』には登場しないことと、使節の人数や出身地の単純化が見られるところにある。史実ではヴィスカイノはメキシコ到着後、ベラスコに対する批判や使節の欺瞞性をメキシコ副王に告発している。この批判を打ち消すのにソテロ神父と支倉は苦勞しているが、『侍』でそうした紛糾はスペインで行われた司教会議に持ち越され、ヴィスカイノの代わりにヴァレンテ神父が登場する。史実では司教会議ではなくインド顧問会議であり、ソテロ神父と対決させられるのは、ソテロ神父と同じ修道会に所属し、日本で親密の間柄であったムーニョス神父であり、ほとんど争いはなかった。一方、『侍』のヴァレンテ神父は、ベラスコと対立する修道会ペテロ会に所属し、日本在住三十年、『日本宣教史』の著者であり、秀吉やその家来、小西行长や高山右近に尊敬された人物でもある。この履歴からはヴィスカイノではなくむしろ『日本史』の作者ルイス・フロイス^⑧が想起される。ヴァレンテ神父はベラスコと日本人のキリスト教観について論争した末、使節を派遣した伊達藩でキリスト教弾圧が始まった報告を持ち出し、ベラスコに徹底的な敗北をもたらす。この司教会議でのヴァレンテ神父とベラスコの論争は『侍』のクライマックスともいうべき重要な場面であるが、ここにも史実と大きな隔たりがあつたことは確認しておきたい。

最後に使者衆四人の性格と特徴を整理する。使者衆には長谷倉六右衛門、松木忠作、西九助、田中太郎左衛門がいる。四人とも伊達家の召出衆であり、使者の役目を果たした後に旧領地が復活することを夢見ている。ほぼ同じ身分、同じ願いをもった四人ではあるが、年齢においては年若く好奇心旺盛な西と年長者で保守的な田中が対比される。長谷倉と松木はその中間に位置する。長谷倉は、西の若さが羨ましくもあり、田中の気持も理解できる中立の立場にいる。従順さにおいては長谷倉と松木が対比され、西と田中はその中間に位置する。長谷倉は自分に与えられた使者の務めを果たすことだけを考えているが、頭のさえている松木

は藩内の勢力を見抜き、帰国後出世をする。他にも小肥りの田中と痩せている松木の対比などがある。いわば、四人はそれぞれ対比的な個性や容貌を持っているのだ。このことはもちろん『慶長使節』には描かれていない。

四、長谷倉とベラスコの造型

『侍』の二人の主人公、長谷倉六右衛門とベラスコは、それぞれ支倉常長とルイス・ソテロ神父をモデルとして造型されている。そこにはやはり多くのフィクションが存在する。その内実をそれぞれ整理したい。

先ず長谷倉は自分が統治する谷戸への強い愛着を持った人物として描かれる。長谷倉の愛着は、東北の一寒村の厳しい環境の中で自分と同じような容貌を持ち、同じように忍耐強く従順に働く百姓たちへの親近感と、叔父、妻、子供などの家族や死んだ父母、祖先との強い連帯感から生まれたものである。そして、この愛着は長谷倉がキリシタンの洗礼を迫られた時に激しい苦悩を呼ぶ。長谷倉は次のように告白する。「切支丹に帰依すること：方便とは申せ：長谷倉の家や祖先に背くような気が致し：」（『侍』第六章）長谷倉ばかりではなく、同じ使者衆である田中や西も同様のことを言い、キリシタンの洗礼を拒絶する。キリスト教に対する日本人の典型的な反応と言える。この日本人の祖先崇拜については、笠井秋生氏^⑨が指摘されたとおりである。また、司教会議でヴァレンテ神父が語る日本人論^⑩を具体的に実証するものでもあった。

長谷倉の造型でもう一つ注意すべきは、長谷倉が使節の壮大な旅の中でキリストの像と始終対峙して、時には対話さえしていることである。『沈黙』においてフェレイラ神父が繰り返しキリストの顔を想像し、時にはキリストの声まで聞いていることと同様である。

長谷倉が最初にキリストの像に出会ったのは、太平洋航海の船の中だった。長谷倉の従者清八^⑩が、嵐のせいで積荷に胸をつぶされ、肋骨を折る重体となり、ベラスコが親身な看病をする。その時に清八を見舞った長谷倉が偶然手にしたのが数珠だった。この数珠の端には十字架がくぐられ、その十字架に瘦せこけた男・キリストの裸体が彫りこまれていた。初めてキリストの像を見た長谷倉は、みすぼらしく無気力な存在としか感じていない。

メキシコに到着すると長谷倉は街中のあちこちでキリスト像と対峙する。この時に、日本人の元修道士からキリストの話聞くが、よく理解はできない。スペインではキリストの像に「形だけのことだ」と心の中で激しく抵抗しながら洗礼を受ける。司教会議でのベラスコの敗北。ローマ法王との形式的な謁見。使節の失敗が明らかとなる。スペインからメキシコに渡り、田中の切腹事件に衝撃を受けたあと、元修道士に再会する。この頃から長谷倉は真剣に、キリストの意味を問い始める。

帰国後、藩から無視され使節の無意味さを悟り、権力者の残酷さを存分に思い知らされる。そんなときに、長谷倉は元修道士にもらった「私の主の物語」を読み返し、惨めな者とともにいる同伴者イエスの存在を実感する。

伊達藩のキリスト教弾圧が激しくなる中で、一度洗礼を受けた長谷倉にも累が及び、処刑される。処刑される前に「ここからは：あの方が、お仕えなされます」という与蔵の叫びに頷きながら死地に赴く。「同伴者イエス」の姿が長谷倉の心の中にあることは言うまでもない。

こうした長谷倉の内面の動きはもちろんフィクションである。しかも、長谷倉に大きな影響を与える与蔵と元修道士が二人とも架空の人物である。作家の想像力が強く働いている箇所と言えよう。

次にベラスコは「日本の司教になることを死ぬほどあこがれた」^⑪ソテーロ神父の野心をもって造型されている。政治家の血をひき、日本宣教はたたかいと考える。彼は最初、「宗教に現世の利益だけを求める日本

人」としか見ていなかった。実際にベラスコの日本人観を裏付けるように、仙台からメキシコへ向かう船に同乗した日本の商人たちは、切支丹になれば商売が上手く行くというベラスコの唆しに乗って三十八人がメキシコで洗札を受けたが、日本に帰国すると全員棄教した。だが、ベラスコは旅の中で日本人の死に立ち会うことで少しづつ日本人の心情を理解するようになる。太平洋航海中の船では嵐のため二人の水夫が犠牲となり、一人の商人と長谷倉の従者清八が負傷死する。いずれの葬式にもベラスコは立ち会っている。メキシコではインディオの襲撃により田中の従者が負傷死した。また、同じメキシコではインディオの若者の死にも立ち会っている。この臨終の場面では、ベラスコは「小さな村で息を引きとる老婆を看取る一人の神父」というベルナノスの『田舎司祭の日記』に出てくるような聖職者の姿を見せてもいる。

スペインの司教会議での敗北、ローマでのボルゲーゼ枢機卿の説得により、ベラスコの野望は打ち砕かれるが、その後のベラスコは同じように権力者達の犠牲となった日本人の使者衆へ限りない親近感を持ち日本人の心情を理解するようになる。

決定的なのは日本へ帰る途上のメキシコで田中が切腹^⑬したことだった。田中は使者衆の中で一番の年長者であり保守的で、自尊心も高かったゆえに、お役目を果たせなかった責任を人一倍感じていた。この田中の死をベラスコは次のように受け止める。

この世には死によって完成する使命があるのだ。／だが主は「多くの人に仕えんため」に死を引き受け給うた。／神父とは、この地上で人々に仕えるために生きているのであり、おのれのために生きていくのではなかった。／私が仕えねばならぬのは彼であり、彼のような日本人たちだった。 (『侍』)

この時、ベラスコは慶長使節が失敗に終わった失望の中、親族の薦めるフィピンで働くつもりだったが、再び日本へ行く決意をする。日本潜入に成功はするもののすぐに捉えられ投獄され殉教を遂げる。

ベラスコが火刑で殉教者となったのは紛れもない事実だが、ベラスコに大きな影響を与えた日本人の様々

な死に方はフィクションである。『慶長使節』では逃亡者の記録はあるが、死者の記録は残されていないからだ。

最後に長谷倉とベラスコの結末の場面をみたい。長谷倉は処刑される前にベラスコの日本潜入と捕縛を知り、ベラスコも処刑される前に長谷倉と西の処刑を知らされる。史実では、長谷倉の死とベラスコの殉教には二年の差があるので、二人が互いの情報を知りえた可能性はほとんどない。しかも『侍』では長谷倉の死をキリシタンとなったために処刑されたとしている。支倉常長の死については謎が多く『慶長使節』でも明言を避けているのに大胆なフィクションと言わざるを得ない。おそらく遠藤は長谷倉を殉教者のように設定するため、あえて処刑としたのである。そのために、長谷倉とベラスコの死が同時期に変えられ、二人の殉教者のイメージが補完されたと言える。そして殉教を遂げた先には、「私も彼らと同じところに行ける」というベラスコの叫びが示す天国への道が示されている。ここに最後のフィクションがある。

① 大泉光一氏は、遠藤がメキシコを訪問した一九七四年当時メキシコに在住。四十年以上にわたる支倉研究の成果を後に数多くの著書にまとめている。支倉常長関係では、『慶長遣欧使節の研究 支倉六右衛門使節一行を巡る若干の問題について』（文真堂、一九九四・平成六年六月）『支倉六右衛門常長 慶長遣欧使節を巡る学際的研究』（文真堂、一九九八年十月）、『支倉常長―慶長遣欧使節の悲劇』（中公新書、一九九九年三月）、『支倉常長 慶長遣欧使節の真相―肖像画に秘められた実像』（雄山閣、二〇〇五・平成十七年九月）などがある。

② 遠藤周作は松田毅一氏への師事を次のように語っている。

「わが切支丹勉強の師―松田毅一教授のこと―」

困じ果てていた私に今度も松田毅一教授が貴重な資料を提供してくださった。（略）教授のお世話になったのはこれがはじめてではない。『沈黙』や『黄金の国』という私の切支丹物の作品を執筆準備している時、どんなに教えられたかわからない。私だけでなく辻邦生氏も『安土往還記』執筆の時は松田教授の話を聞いたと耳にしている。

（遠藤周作『ぐうたら漫談集』角川文庫、一九七八年七月）

③ 様々な伝記を発表しているが、江戸時代の切支丹に関連する人物が特に多い。列挙すると、『メナム河の日本人』（新潮社、一九七三年九月）、『イエスの生涯』（新潮社、一九七三年十月）、『彼の生き方』（新潮社、一九七五年三月）、『鉄の首枷 小西行長伝』（中央公論社、一九七七年四月）、『キリストの誕生』（新潮社、一九七八年九月）、『王妃マリー・アントワネット1』（朝日新聞社、一九七九年三月）『銃と十字架』（中央公論社、一九七九年四月）『王妃マリー・アントワネット2』（朝日新聞社、一九七九年十一月）、『王妃マリー・アントワネット3』（朝日新聞社、一九八〇年九月）、『王国への道―山田長政』（平凡社、一九八一年四月）。

④ 対談 遠藤周作・三浦朱門「『王』にあいに行つた男―書下ろし長篇『侍』をめぐつて―」（『海』、一九八〇年四月号）

⑤ 『侍』の「長谷倉六右衛門」に作者の姿の投影を見ることは、『侍』刊行後すぐに書かれた書評―高橋英夫「侍 遠藤周作著―信仰経験の苦闘を描く」（『日本経済新聞』、一九八〇・昭和五十五年五月十八日）、武田友寿「作者半生の魂の軌跡―遠藤周作著『侍』―」（『東京新聞』夕刊、一九八〇・昭和五十五年五月十九日）をはじめとして、多くの書評・論文で指摘されている。ちなみに、長谷倉だけではなくベラスコにも作者の信仰姿勢の投影を見ることができるといふ笠井秋生「遠藤周作『侍』について」（『キリスト教文藝』、一九八六年十一月のち『遠藤周作論』双文社出版、所収）の鋭い指摘がある。

⑥ 武田友寿『沈黙』以後 遠藤周作の世界』（女子パウロ会、一九八五・昭和六十年六月）によると、遠藤周作の支倉常長への関心は、松田毅一『慶長使節』の読了後明確になり宮城県に渡り実地調査をはじめたとされている。

⑦ 上智大学、獨逸ヘルデル書肆共編『カトリック大辞典』（富山房）

⑧ ルイス・フロイス（一五三二―一五九七）はポルトガル生まれのイエズス会司祭。一五六三年来日、二十年以上日本に滞在し、秀吉の伴天連追放令の後、マカオに退去したが再び日本に戻り一五九七年、長崎で没す。慶長使節（一六一三―一六二〇年）とは時代が違うが、経歴はヴァレンテ神父に重なる。ちなみに、フロイスの『日本史』は、松田毅一と川崎桃太氏によって『侍』と同じ時期に翻訳刊行（中央公論社、全十二巻、一九七七年十月―一九八〇年十月）され、『鉄の首枷』（中央公論社、一九七七・昭和五十二年四月）から『女』（講談社、一九九五年五月）まで遠藤の歴史小説では必須の参考文献となっている。

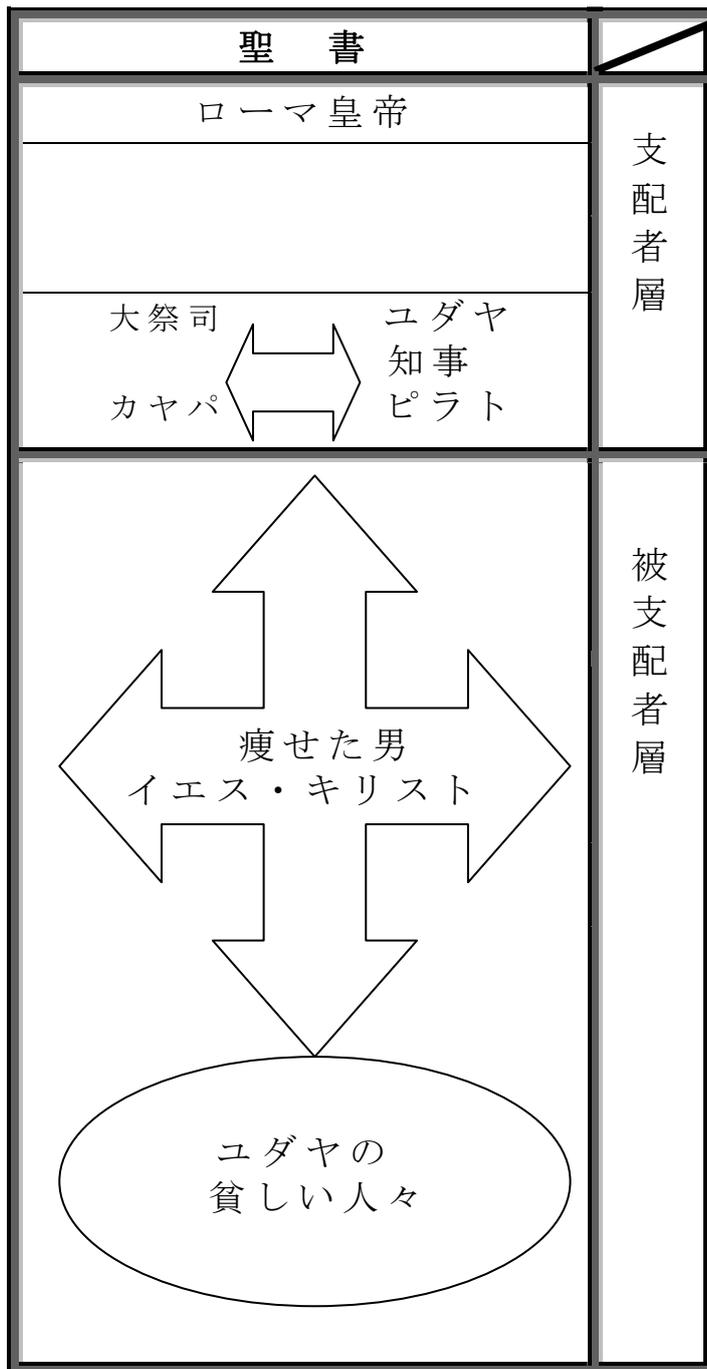
⑨ 笠井秋生「遠藤周作『侍』について」（『キリスト教文藝』、一九八六・昭和六十一年十一月のち『遠藤周作論』双文社出版、所収）

⑩ 「日本人は決して一人では生きていません。(中略)ここに一人の日本人がいます。私たちは彼を改宗させよとします。しかし『彼』という一人の人間は日本にはいなかったのです。その背後には村があります。家があります。いや、それだけではない。更に彼の死んだ父母や祖先がいます。その村、家、父母、祖先はまるで生きた生命のように彼と強く結びついているのです。だから彼とは一人の人間ではありません。村や家や父母や祖先のすべてを背負った総体なのです。(後略)」（『侍』第六章）

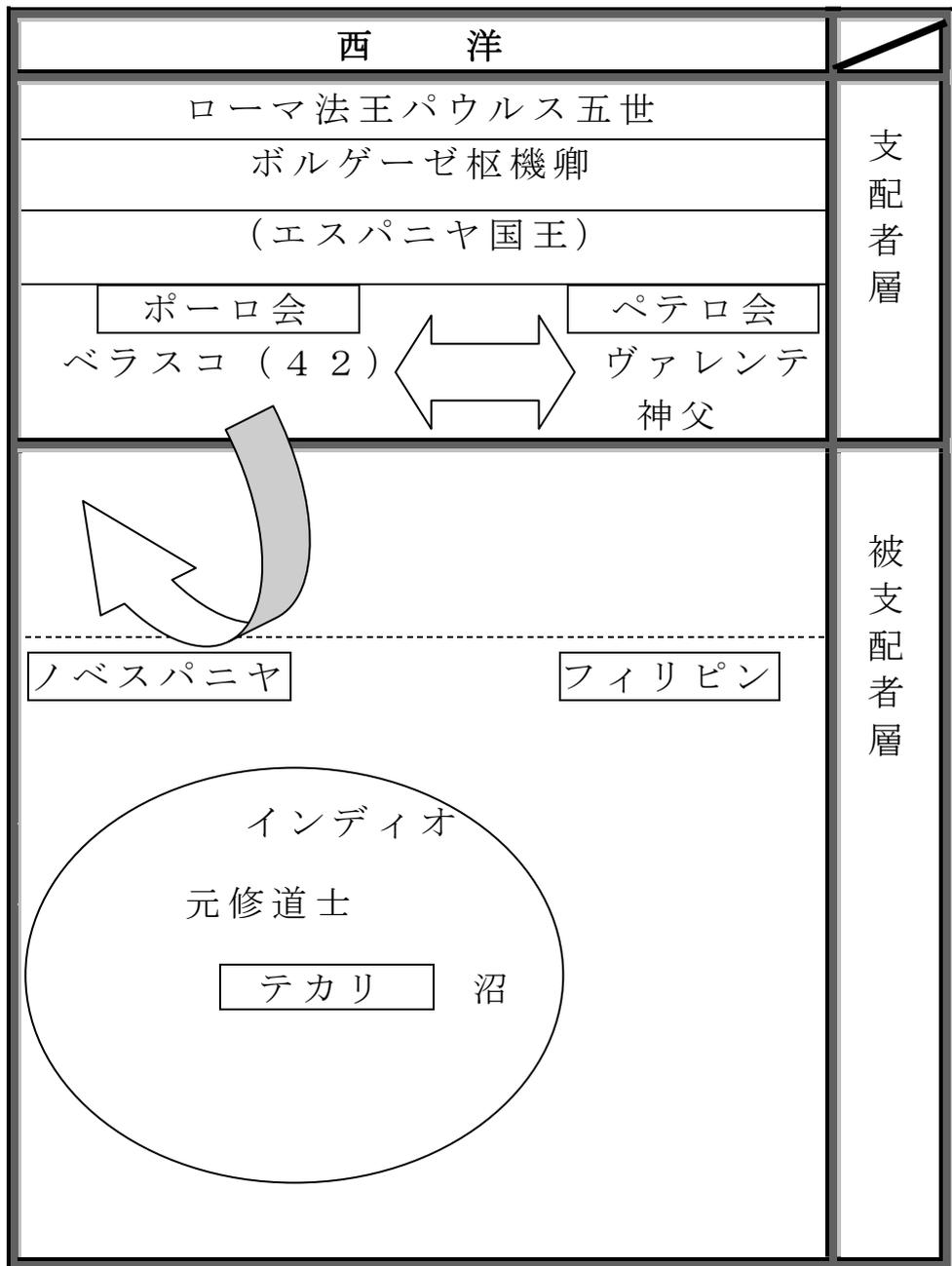
⑪ 『慶長使節』には、支倉常長の従者として清八、大助、一助の三人の名前の記録があり、帰国途中のフィリピンで三人とも逃亡したとされている。『侍』では同じ名前の清八、大助、一助が登場するほかに架空の人物である与蔵がおり、太平洋航海中に負傷死した清八以外は、長谷倉と共に帰国している。ここにも史実の小さな変更が見られる。

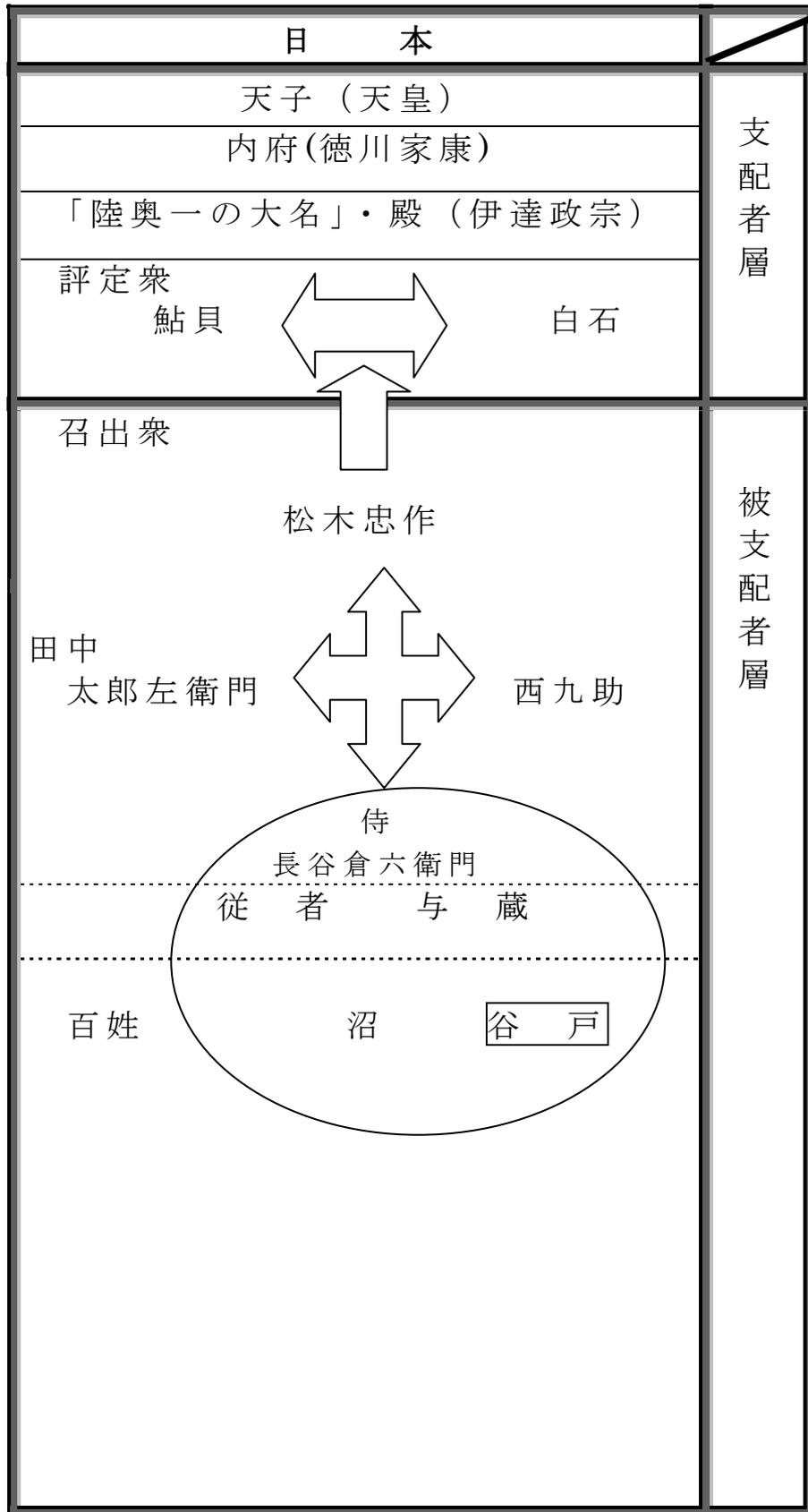
⑫ 『慶長使節』における一六一四年に仙台を訪れたイエズス会員ジェロニモ・アンジェリスの一六一九年十一月三十日付の書簡（ローマ・イエズス会員文書）による。

⑬ ちなみに、ベラスコのモデルであるルイス・ソテロ神父は日本人が切腹することを激しく批判して、徳川家康に切腹禁止令を出させている。(ロレンソ・ペレス著、野間一正訳『ベアトル・ルイス・ソテロ伝』東海大学出版会、一九六八・昭和四十三年十一月)



図一…『侍』の登場人物と世界観





第三章 『侍』論―ベラスコの視点をめぐって―

一、問題の所在

『侍』は一九八〇（昭和五十五）年四月、「純文学書下ろし特別作品」として新潮社より刊行された。作者自身『沈黙』以後の代表作として「第二期の総決算」①と呼び、『沈黙』よりも高い評価を与える論者もいる重要な作品である。しかし、研究論文は意外に少ない。管見の限り『侍』に関する雑誌記事・研究論文を調査したところ全部で四十二本②あったが、そのほとんどが書評であり、研究論文と呼べるものは十本しかなかった。しかも、数ある書評の大部分は、作者の自注③を踏まえたもので、研究論文もほぼ同様であった。そこで本稿では、比喻やキーワードなど作品の具体的な分析から、『侍』の新たな読みの可能性を探っていききたい。

二、二元的視点

『侍』は遠藤周作の得意とする二元的視点④で徹底して描かれている。「侍（長谷倉六右衛門）」を中心とした視点（以下、「侍」視点と呼ぶ）とベラスコを中心とした視点（以下、「ベラスコ」視点と呼ぶ）である。これら二つの視点がどの程度の割合で書き分けられているか試みに初版本で調査したところ次のような結果が出た。

この最後の合計を見ると、全三百三十九頁の内、「侍」視点が百五十九頁で四十六・九%、「ベラスコ」視点が百八十頁で五十三・一%とわずかながら「ベラスコ」視点が上回った。各章ごとの内訳を見ても同数の第三章を除く、九章のうち四章が「侍」視点で、九章のうち五章が「ベラスコ」視点であった。いざれにせよ全体的に「ベラスコ」視点の方がわずかながら多いのだ。この結果を踏まえると、長谷倉六右衛門

	ページ数	侍		ベラスコ	
		ページ数	内訳	ページ数	内訳
第一章	33	13	39%	20	61%
第二章	27	18	66%	9	34%
第三章	39	19.5	50%	19.5	50%
第四章	30	12	40%	18	60%
第五章	36	19	53%	17	47%
第六章	47	13.5	28%	33.5	72%
第七章	15	10.5	70%	4.5	30%
第八章	30	9	30%	21	70%
第九章	25	8	32%	17	68%
第十章	57	36.5	64%	20.5	36%
合計	339	159	46.9%	180	53.1%

とベラスコの二人が『侍』の主人公であると呼ぶことができる。

「侍」視点で、長谷倉は徹底して「侍」と呼ばれ、内面よりも行動を中心とした三人称で描かれ、心理描写は極力抑えられている。それに対して「ベラスコ」視点は、三人称では「宣教師」と呼ばれるが、そのほとんどはベラスコの強烈な個性と偏見に満ちた一人称であり、しかもそれはベラスコの手記⑤であることが第九章で明かされている。無口な侍と異なり、饒舌なベラスコは対照的である。

さらに言えば、「侍」視点を通して日本の価値観を持った「侍」が西洋を体験しスペイン国王やローマ法王などの王に会ったことが描かれ、「ベラスコ」視点を通して西洋的価値観を持ったベラスコが日本を体験し徳川家康という「王」に会ったことが描かれる。つまり、長谷倉もベラスコもある意味では「王」にあいに行った男⑥なのである。

三、日本人像

『侍』の一章から五章までの前半部では、日本からメキシコ、さらにベラクルス⑦へ使者衆が旅をする中で、「侍」「ベラスコ」の両視点から各階層の日本人像が描き出される。

江戸時代の身分制度である「士農工商」を基に、便宜上四つに分類すると、「士」―ベラスコが体験した、徳川家康や役人たちの狡獪な姿、「農」―「侍」視点で描写される、牛馬のように忍耐と従順を強いられている百姓や長谷倉の姿、「工」―ベラスコが視た、造船にいそしむ勤勉な大工や航海中の水夫の姿、「商」―ベラスコが布教を策略する、現世の利益しか求めない功利的な商人たちの姿といったように、主に「ベラスコ」視点を通して「日本人」③像が語られる。

これらの日本人像と深い関係を持つのは、小動物の比喩である。蟻が最も多く八回、蜂が二回、蜥蜴が二回、かたつむりの殻が二回といった具合である。蟻には忍耐力や勤勉さ、蜂には集団主義、蜥蜴には狡猾さ、かたつむりの殻には連帯感と閉鎖性といったイメージと密接な関係があり、先の日本人像を具体化する。このうち極めて頻度の高い蟻に注目したい。最初に出てくる箇所は「侍」視点で、谷戸で働く長谷倉の姿を形容する。

やがて侍と下男たちは仕事をやめて木の束を背負った。間もなく訪れる冬に備えて薪をつくるのである。蟻のように一列になり、川原にそって谷戸に戻る彼らの額にも雪がふれた。

(傍線部引用者／第一章／『侍』)

下級武士の長谷倉が農民たちと共に勤勉に働く姿である。この長谷倉の姿は、メキシコにおいても変わらな

い。

巨大な山は蟻のように丘をくだる日本人たちの列の前にも見えた。

(傍線部引用者／第五章／『侍』)

というようにメキシコでベラクルスに向け移動する長谷倉たち使者衆一行が、忍耐強くお役目に従事する姿に蟻の比喩が用いられる。もちろん、「侍たち」や「長谷倉たち」ではなく、「日本人たち」と描写している点も先の日本人像と密接な関係がある。侍たちを描くことは日本人を描くことであるからだ。

また、「ベラスコ」視点でも、太平洋を越えてメキシコとの貿易を目論む日本人に対して、

(蟻のような人種だ。彼らは何でもやろうとする) 宣教師(注…ベラスコ)はこの時なぜか、水溜りにぶつかると、その一部が身を犠牲にして橋となり仲間を渡す蟻を思いだした。日本人はそんな智慧を持った黒蟻の群れだ。

(傍線部引用者／第一章／『侍』)

と、日本人の集団性の脅威の象徴として蟻の比喩が用いられる。

こうした蟻をはじめとする小動物の比喩は、遠藤が『侍』執筆の構想を練っていた一九七十年代から盛んに使われるようになった「エコノミック・アニマル」^⑨という日本人批判とも同一線上にある。つまり、西洋人が感じる日本人の異質性の現れなのである。そして、『侍』で描かれる約三百六十年前の日本人の姿は、同時に一九七十年代の日本人にも通ずる普遍性を持っている。

四、「侍」

『侍』の六章から十章までの後半部では、慶長使節の失敗と主要登場人物の死が描かれる。最初に、ローマから日本へと失意の帰還をする途中のメキシコで、田中太郎左衛門が使節失敗の責任を負い自殺を遂げ、日本へ帰国した長谷倉と西も伊達藩の都合により死ぬことになり、フィリピンから日本に再入国したベラスコも殉教を遂げる。つまり、『侍』の主要な登場人物は荒木忠作を除き悲惨な最後を遂げるのだ。

こうした中で、二人の主人公、長谷倉とベラスコの人生と深く関わるのが、死に赴く長谷倉に対する与蔵の「ここからは：あの方がお供なされます」「ここからは：あの方が、お仕えなされます」という叫びと、ベラスコが最後に発した「生きた：私は：」という最後の言葉である。ストーリーも与蔵とベラスコの最後の言葉に向かって展開する。

前者の与蔵の叫びは、長谷倉の回心と関係がある。長谷倉がメキシコやヨーロッパへ渡る長い旅の間、あちこちで向き合ってきたのはキリストの「痩せて醜い」姿であった。計算したところキリストを意味する「痩せこけた男」の関連語句は作品全体で十六回登場する。長谷倉はキリストの醜い姿に「信じられぬ」と繰り返

返し信仰を否定するのだが、帰国後政治に翻弄されて死を宣告された時、「召出衆でも、人間ぞ」とそれまで熱心に仕えてきた殿や藩のやり方を初めて否定し、「世界は広うございました。しかし、私には、もう人間が信じられのうになりました」と人間不信に陥る。その惨めな長谷倉の心に蘇ったのは、メキシコの日本人元修道士が渡した『主の物語』に書かれてある「同伴者イエス」像であった。長谷倉の側にいた与蔵は彼の心の中に「同伴者イエス」像があることを知った上で、「ここからは…あの方がお供なされます」「ここからは…あの方が、お仕えなされます」と叫んだのである。

後者のベラスコの最後の言葉は、ベラスコの回心と関係がある。狡猾な日本人と戦う「策略家」として登場したベラスコが、策略を忘れ一人の聖職者の姿を見せるときは、異邦人の死に立ち会った時だった。太平洋航海中での清人の死、インディオの村での若者の死などである。そして、司教会議で、日本宣教や司教への野望が挫折した後、日本人の心情を深く理解するようになる。そこへ田中の自殺が決定的な衝撃を与える。

この世には死によって完成する使命があるのだ。(中略)だが主は「多くの人に仕えんため」に死を引き受け給うた。／私にもまた仕えねばならぬ多くの人間がいる。神父とは、この地上で人々に仕えるために生きていたのであり、おのれのために生きていたのではなかった。(中略)私が仕えねばならぬのは彼であり、彼のような日本人たちだった。「我が来れるは、多くの人に仕えんため」(中略)「命を与えんためなり」

(第九章／『侍』)

ベラスコは、キリストの十字架での死と田中の自殺の違いを区別した上で、自分の使命が「仕える」ことにあるとはっきり認識している。だからこそ、危険を顧みず再び日本へ潜入し殉教を遂げたわけだが、ここでの回心があったからこそ、「生きた…私は…」と最後に満足して殉教を遂げることが出来たのである。

以上のように、与蔵の叫びもベラスコの最後の言葉も、長谷倉とベラスコの回心と深い関係がある。とり

わけ二人の回心のキーワードとなるのが、「仕える」ことだが、これは題名の『侍』と深い関係がある。遠藤は「「きむらひ」と「侍」 河上徹太郎」（『新潮』、一九八〇年十一月号）で「侍」という字に「目上に侍する、仕える、依存するイメージ」があると言っている。これを踏まえると、インディオに仕える日本人元修道士も、長谷倉に仕える与蔵も、伊達藩に仕えてきた長谷倉も、日本人や人々に仕えるベラスコも全員が「侍」だと呼べる。そして彼ら「侍」たちの模範であり、同時に「侍」たちに仕える最大の「侍」がキリストであるのだ。

このようにして、『侍』は前半部で「侍」「ベラスコ」の両視点から「日本人像」を、後半部では長谷倉とベラスコの心の中に生きているキリストの「仕える」姿Ⅱ「侍」像を描いた作品だと言える。そして、その中心となるのが「日本人とキリスト教」の問題であるのだ。

① 佐藤藤泰正・遠藤周作『人生の同伴者』（春秋社、一九九一・平成三年十一月）

② 拙稿「作品別参考文献」『作品論 遠藤周作』（双文社出版、二〇〇〇・平成十二年一月）に二〇〇六年十二月までの論文を補足した。

③ 『侍』に関して遠藤周作は様々な発言をしているが、代表的なものは次の二点である。

（一）遠藤周作の内的自伝

「この作品は奥州の遣欧使節、支倉常長をモデルにしたが、その伝記ではない。彼の悲劇的な大旅行を私の内部で再構成した小説である。」

（『侍』初版本、函の表紙）

「常長の生涯から触発されたものを私の内面で再構成した小説なのである。」

（『侍』を書き終えて―私の近況―／「新刊ニュース」一九八〇・昭和五十五年四月）

（二）「置き換え」の手法

「『王』にあいに行った男」（対談／遠藤周作・三浦朱門、「波」（一九八〇・昭和五十五年四月号）のち『侍』初版本に折込転載）

④ 「アデンまで」（『三田文学』、一九五四・昭和二十九年十一月号）をはじめ、遠藤周作の作品はそのほとんどが複数の視点が交差する形式を取っている。

⑤ 第九章には「長い間、この手記を書かなかった。」「また、長い間、筆をとらなかつた。」というベラスコの告白がある。

⑥ 遠藤周作と三浦朱門の対談「王」にあいに行った男『侍』初版本（新潮社、一九八〇・昭和五十五年四月）の折込付録。「波」一九八〇・昭和五十五年四月号より転載。

⑦ 遠藤祐「『侍』を読む」／『作品論 遠藤周作』（双文社出版、二〇〇〇・平成十二年一月）に『侍』の分岐点をベラクルスに置くという鋭い指摘がある。

⑧ 「ベラスコ」視点では、ベラスコが関わる日本人に対して「日本人」と呼び、その行動や言動を分析する。そして、ベラスコは「（日本人たちの考えは手にとるようにはわかる）」（第一章）とまで過信している。

⑨ 「エコノミック・アニマル」という言葉が本来批判的な意味で使われたのではなかったことなど、多賀敏行『「エコノミック・アニマル」は褒め言葉だった』（新潮新書、二〇〇四・平成十六年九月）に詳しい経緯が載っている。

第四部 「歴史小説」―「歴史群像」の世界―

第一章 『女の一生』論―多層的な二項対立の世界―

一、「歴史小説」の問題

『女の一生』は、(一部・キクの場合)が、一九八〇(昭和五十五)年十一月一日から一九八一(昭和五十六)年七月一日まで「朝日新聞」に連載された。引き続き(二部・サチ子の場合)が一九八一(昭和五十六)年七月三日から一九八二(昭和五十七)年二月七日まで連載された。足かけ二年にわたる長期連載の中で、(一部・キクの場合)では、浦上四番崩れによって翻弄されたキクの一生を、(二部・サチ子の場合)では戦争と原爆によって翻弄されたサチ子の一生を描いている。のち単行本として『女の一生 一部・キクの場合』が一九八二(昭和五十七)年一月、『女の一生 二部・サチ子の場合』が一九八二(昭和五十七)年三月に朝日新聞社より刊行された。さらには、講談社の『遠藤周作歴史小説集』の一卷として『遠藤周作歴史小説集1 女の一生―キクの場合』が一九九六(平成八)年一月に刊行されている。本稿では「歴史小説」を中心に考察するので(一部・キクの場合)のみを対象としておく。

拙稿①で分類したが、遠藤の「歴史小説」は三つの時期に区分される。『女の一生 一部・キクの場合』(以下、『女の一生』と呼ぶ)は、第三期の「歴史群像」に分類される最初の作品である。そのため、第二期から継承された問題と、第三期から新たに始まる問題の両方を備えている。まず第二期から継承された問題は二人の主人公を配置する二項対立の問題がある。『メナム河の日本人』、『銃と十字架』、『王国への道―山田長政―』(以下、『王国への道』と呼ぶ)ではアユタヤに地上の王国の建設を目指す山田長政と、神の王国を目指す日本へ戻り殉教した(ペドロ岐部)の異なる生き方が対照的に描かれていた。『鉄の首枷―小西行長伝―』では「水の人間」である小西行長を「土の人間」である加藤清正との対比で描き出していた。『侍』でも長谷倉とベラスコという二人の主人公を配置し、それぞれが組織の思惑に翻弄されながら、キリスト教と向かい合い、信仰へ殉じていく姿が描かれた。また、第三期の新たな問題がある。「歴史群像」である。既に『王国への道』や『侍』でも二人の主人公がそれぞれ組織の中で翻弄される生が描かれてきたが、『女の一生』に始まる第三期ではさらに多元的な視点が展開

されている。また、「歴史小説」としても「世界の中の日本」というグローバルな視点を持ち合わせている。そこで、本稿では多層的な二元論の問題を中心として『女の一生』を考察していくこととする。

二、「語り」の問題

『女の一生』の作品分析をはじめめる前に「語り」の問題から考えたい。というのも、『女の一生』の「語り」には司馬遼太郎の影響が見られるからである。試みに『坂の上の雲』（初出：『産経新聞（夕刊）』、一九六八・昭和四十三年四月二十二日）と一九七二・昭和四十七年八月四日）と比較してみると次の四つの共通点が浮かび上がる。

- 1、新聞小説
- 2、グローバルな視点
- 3、多元的な視点
- 4、〈歴史〉愛好者としての「語り」

以上である。順に考えて行くこととする。

1、新聞小説。『女の一生』は「朝日新聞」に、『坂の上の雲』は「産経新聞（夕刊）」に連載された新聞小説である。その特質上、多種多様な読者を意識せざるを得ない。〈作者〉（『坂の上の雲』では〈筆者〉）が顔を出し、複雑な歴史背景や場所について解説・説明することなどもその一例である。例えば、『女の一生』では次のような場面に見られる。

もしあなたが偶然、長崎に行かれ、長崎駅から車を原爆落下地点の方に走らせると、国道にそって右側に聖徳寺幼稚園という字を書いた寺がみえる。その一帯がかつての馬込郷である。

キクやミツがはじめて訪れた頃の大浦の風景は今とはかなり違っていた。

(「ミツとキク」／『女の一生』)

(「南蛮寺」／『女の一生』)

今日、彼等がやっと戻った浦上村には昔日の面影はない。そこは長崎市に入れられて、丘は切りくだかれ、林の木は倒され、住宅地と変わったからである。

だが、彼等が帰ってきた頃の浦上は荒れに荒れていた。

(「エピローグ」／『女の一生』)

いずれも、作品舞台の今の姿を伝えることで、読者が作品舞台である長崎を想像する手助けとなっている。そのため、『女の一生』の文体について「現代小説の文体」②という指摘も見られるほどである。さらに、笛木美佳氏もこうした「語り」の問題に関して次のように述べている。

この〈作者〉が単に出来事の再生をするだけにとどまらず、時空を超え、きめ細やかな配慮のもとに主観的な感想・説明を加えながら語っていくところにこの作品の魅力がある(以下略)

(笛木美佳「女の一生 一部・キクの場合」論—雨が語りかけてくるもの—／「学苑」二〇〇一・平成十三年一月)

ここで氏が指摘するように『女の一生』の「語り」には「時空を超え、きめ細やかな配慮のもとに主観的な感想・説明を加えながら語っていく」という特徴があるが、これはやはり新聞小説という特質上、様々な年齢層、地域に住む読者を意識したものとと言える。もちろん、これらの特徴はそのまま『坂の上の雲』の「語り」にも当てはまる。例えば次のような場面である。

この物語の主人公は、あるいはこの時代の小さな日本ということになるかもしれないが、ともかくもわれわれは三人の人物のあとを追わねばならない。

(傍線部引用者／「春や昔」／『坂の上の雲』)

この兄弟がいなければ日本はどうなっていたかわからないが、そのくせこの兄弟が、どちらも本来が軍人志願でなく、いかにも明治初年の日本的事情から世に出てゆくあたりに、いまのところ筆者はかぎりない関心をもっている。

(傍線部引用者／「真之」／『坂の上の雲』)

ここで語り手は「われわれ」「筆者」として作品に顔を出している。(作者)が直接顔を出して読者に説明する姿が想定されている。「われわれ」という時、作者と読者が一体化した「語り」であるし、「筆者」という時も、読者に「筆者」の関心を明確に提示するという役割もあった。そのようにして「主観的な感想・説明を加えながら語っていく」のである。

2、グローバルな視点。『女の一生』も『坂の上の雲』も日本の分岐点である明治という一時代を「世界の中の日本」というグローバルな観点から鳥瞰的に捉えるという共通点を持っている。『女の一生』では、幕末から明治初めの浦上四番崩れを描いているが、清吉が属する浦上の信徒たちの「浦上村の歴史」③だけではなく、プチジャン神父が見たフランシスコ・ザビエル以来の日本のキリスト教の歴史や欧米の植民地支配の歴史、さらには本藤舜太郎が岩倉使節団に参加して見たアメリカの対日批判の様子など西洋諸国が日本に影響を与えていくといった世界の動きも視野に入れている。例えば、プチジャン神父は初めて長崎へ赴任した時、数百年にわたる日本の姿に思いを寄せる。

三味線、読経の声、更に街の至るところからひびいてくる無数の蝉の声。朝から晩まで同じ声でなく蝉たちにも彼は虚無の臭いをかぐ。

(これが日本なのだ)

とプチジャンは思った。

(二百数十年の間、日本はこの形で続いてきたのだ。世界から孤立して…)

この形で続いてきた日本が今、一寸だけだけれど変ろうとしている。その変り目に彼は日本にやってきたのだ。いや、ひよっとすると、彼はその日本の変化に関係するのかもしれないかった…

(「探索者」／『女の一生』)

ここでプチジャン神父は「二百数十年の間」「世界から孤立」していた日本の姿と日本の変化への予感を覚えている。こうした日本の鎖国の状況は、プチジャン神父が日本へ来る前に学んだフランシスコ・ザビエル以来の日本宣教の歴史や当時の西洋諸国の植民地支配と教会との関わりといった歴史認識を踏まえたものであると言えよう。一方で、『坂の上の雲』も語り手はグローバルな視点に立ち、明治の日本を「小さな国」と捉えている。

まことに小さな国が、開化期をむかえようとしている。

(傍線部引用者／「春や昔」／『坂の上の雲』)

小さな。

といえ、明治初年の日本ほど小さな国はなかったであろう。産業といえ、農業しかなく、人材といえ、三百年の読書階級であった旧士族しかなかった。この小さな、世界の片田舎のような国が、はじめてヨーロッパ文明と血みどろの対決をしたのが、日露戦争である。

(傍線部引用者／「真之」／『坂の上の雲』)

この「小さな国」という認識は当時の世界情勢から見るときわめて正確なものである。

『坂の上の雲』は、その「小さな国」が日露戦争でどのようなようにして「大きな国」であるロシアと対等に戦ったのかという問題を三人の主人公を通して描いたものだからである。

3、多元的な視点。先に述べたように『女の一生』は『王国への道』や『侍』のように二元的な視点が交互に

切り替わり同時並行で進行する。最初はキクを中心とした視点とプチジャン神父を中心とした視点と津和野にいる清吉たちを中心とした視点に替わっていく。いずれにせよ二元的視点であるという点は変わらない。さらに詳細に見て行くと、キクとミツ、プチジャン神父とフューレ神父、清吉と伊藤清右衛門といった対照的な人物の個別の視点も合わり、多層的な視点が絡み合うことで「歴史群像」が描かれていくのである。対する『坂の上の雲』は正岡子規、秋山好古、真之の三人を中心として、それぞれが文学、陸軍、海軍といった異なる場所で奮闘する姿が描かれている。その際に高橋是清、夏目漱石、広瀬中佐、東郷元帥、乃木將軍といった著名人も関連して描くことで「歴史群像」を垣間見せている。

4、〈歴史〉愛好者としての「語り」。『女の一生』は遠藤の「心の故郷である長崎への恩返し」のつもりで書いた作品⑤であった。同様に『坂の上の雲』は司馬遼太郎の正岡子規への愛着が書かせたものであった⑥。いずれも長崎や松山というトポスや歴史がモチーフとなっていることは言うまでもない。そうした愛着の中で、ストーリーの本筋から外れることであっても書かざるを得ない事象について、両作家は同じ「余談」という言葉をつかって説明を加えている。

余談だが、この死亡記録をみると死亡者は女より男のほうが二倍ちかくも多い。即ち女十二名にたいして男は二十二名である。そのうち圧倒的に多いのはやはり年寄りで五十歳以上が十二名だが、それに続いて二、三十歳代の者が七人も死んでいるのは、この年齢の者が人数も多く集中的に責苦を受けたためかもしれない。

(傍線部引用者／「伊藤という男」／『女の一生』)

余談ながら、私は日露戦争というものをこの物語のある時期から書こうとしている。／この兄弟がいなければ日本はどうなっていたかわからないが、そのくせこの兄弟が、どちらも本来が軍人志願でなく、いかに明治初年の日本の事情から世に出てゆくあたりに、いまのところ筆者はかぎりない関心をもっている。

(傍線部引用者／「真之」／『坂の上の雲』)

両作家ともに綿密な資料収集や取材旅行を通して作品を描いている。そのために、ストーリーに収まりきれない歴史的事実やエピソードが数多くあり、「余談」としてでも書きたいという作家の事情が生まれることになる。また、先に述べたように新聞小説であるため多くの読者を想定する必要もあつた。ここに〈歴史〉に対する強い愛着を垣間見ることが出来る。

そもそも遠藤周作と司馬遼太郎は同じ一九二三(大正十二)年に生れ、同じ一九九六(平成八)年に没した⑦。同世代というより全く同じ時代をきた同級生である。この世代は「戦中派」と呼ばれる。遠藤は『女の一生 第二部サチ子の場合』の「あとがき」で、同世代である「戦中派」に対する親近感を表明している。

電車のなか、バスのなか、あるいは駅前で、私は自分と同じ年頃の主婦を見るたびに何とも言えぬ親近感を急に感ずることがある。

その親近感自分たちが同世代であり、共におなじ歴史を生きてきたのだという事実から生れている。あのくるしかつた大きな戦争を生きぬき、あの変動の戦後をどうにか経てきた―それが我々の世代なのだが、そうしたムツかしいことではなく、

「おたがい、よく生き残れましたね」
という率直な気持なのかもしれない。

おたがい、よく、生き残れた―しかしこの気持の背後には、もっと複雑な感情がある。つまり自分は生き残ったが、いとしい者、愛した者、親しかった者を戦争や戦後で失ったという悲しみや苦しみがかくれているのだ。

(傍線部引用者／「あとがき」／『女の一生 第二部・サチ子の場合』朝日新聞社、一九八三・昭和五十七年三月)

ここには戦争に翻弄され愛する者を失ったサチ子の人生を描いた『女の一生 第二部サチ子の場合』のモチーフが隠されていると言えよう。また、この同世代の女性に対する親近感、同世代の司馬遼太郎に対しても同様であったことだろう。しかも、遠藤と司馬遼太郎の二人には〈歴史〉を愛好するという同じ趣味があり、「歴史小説」を描く同志でもあった。そのせいか、遠藤が盛んに「歴史小説」を描いていた一九七〇年代には、二人は京都で一緒に正月を過ごすことを数年にわたって行ったこともあった。この時の交流が遠藤の〈歴史〉に対する姿勢や「歴史小説」にも影響を与えたことは間違いないだろうし、その一端を『女の一生』に見ることが出来る。以上のように、『女の一生』と『坂の上の雲』という一見何の関係も無いように見える作品であっても、実質的な四つの共通点があり、深いところで繋がっていることがわかる。

三、長崎というトポス

拙稿⑧で指摘したが、遠藤文学において作品舞台は単なる場所ではなくその土地の歴史、風俗も含めた特別な文学空間であった。「長崎への恩返しのもりで書いた」⑨という『女の一生』においても長崎が単なる作品舞台だけではなく歴史、風物を含めたトポスとして描かれていることは明らかであろう。そこで、長崎の歴史と風物を作品で確認して行きたい。

まずは前者の長崎の歴史。『女の一生』は「浦上村の歴史」⑩を描いたという指摘があるように、浦上四番崩れが中心に描かれている。

作品は、浦上村馬込郷の農家に生まれた従姉妹のミツとキクが登場する所から始まる。ミツは五歳、キクは六歳であるが、後の記述から逆算すると、一八五五年頃の話となる。浦上三番崩れが一八五六年なので、おおよそ

このあたりから物語が始まる。一八七三年の明治六年二月に禁制高札が撤去され、清吉たちが配流の地・津和野から浦上へ戻り、浦上四番崩れの事件が収束を迎えるところで終わっている。エピソードでは大正二年の晩夏に清吉と伊藤清左衛門が津和野で再会し、キクの一生が語られるが、中心となるのはあくまでも浦上四番崩れをめぐる約二十年間であった。

そのほかにも長崎の殉教の歴史がところどころで語られる。例えば二十六聖人殉教の地として有名な西坂についてはミツとキクが浦上から長崎へ行く途上にあらわれている。

晴れた空に鳶が鳴いている。長いこと歩いて浜にそった街道が坂になった。その坂は西坂と言って、むかし仕置場だった場所である。この仕置場で聖徳寺の住職が嫌う切支丹邪宗の徒が何十人も処刑されたのだ。

（「長崎」／『女の一生』）

さらに、雲仙での拷問や殉教についてもフューレ神父を通して語られる。フューレ神父は長崎での切支丹探索をなかなか諦めないプチジャン神父をさすために雲仙に連れて行き、迫害の激しさについて語る。

「日本の切支丹たちのうち信仰を捨てぬ者は：ここで、この熱湯につけられた。足の肉は一瞬でなくなり、引きあげられた時は骨しか残っていなかった。ベルナルル。わかるかね。足は白い骨しか残っていなかったんだよ：」

／「ベルナルル。長崎の基督教信者たちはね、これほどの拷問まで受けたんだよ。火あぶり、水責め、そしてこの雲仙での熱湯づけ。：さあ、眼を大きくあけて君の足もとを見たまえ」

（「希望の日」／『女の一生』）

ここでプチジャン神父は日本での切支丹迫害の凄まじさを実感する。既に遠藤は雲仙の殉教の様子について、『雲仙』や『沈黙』で切支丹資料を使って描いたことがあるが、『女の一生』ではそうした資料の引用ではなく、フューレ神父が直接語るところに臨場感がある。また、読者にとっても迫害の残酷さをより実感しやすくなって

いる。こうして日本から切支丹がいなくなった理由を実感したプチジャン神父ではあったが、数日後に切支丹信徒を発見する奇跡の現場に立ち会うことになる。その感激を次のように伝えている。

(ごらんさい、この長崎に彼等はいたのです。存在したのです。なんとという素晴らしい街でしょう)

二百年以上のもので、すごい迫害とすさまじい圧迫とに日本人の基督教徒は豪雨のなかの一本の木のように耐え、生き残っていたのだ。

(傍線部引用者／「希望の日」／『女の一生』)

プチジャン神父にとって、先に雲仙での迫害の歴史を実感したからこそ、切支丹信徒を発見できた喜びは一層大きくなったことであろう。しかも、わざわざ「この長崎に彼等はいた」と長崎にいたことを強調している点に大きな意味がある。ここに長崎の歴史を描きたいという意思が如実にあらわれている。

そして、浦上四番崩れが始まると清吉たちが体験した拷問の数々が詳細に描かれる。これらの拷問の様子や役人側の伊藤清右衛門、本藤舜太郎らの心情を描くことは(第二部・サチ子の場合)でアウシュビッツのクルベ神父や囚人たちと、看守や所長らの心情を描くことへの伏線となっている。清吉たちは長崎では西役所で取調べと拷問を受け、津和野に流されたあとは三尺牢など烈しい拷問を受けて多数の棄教者や死者を出している。これもまた長崎の歴史なのである。

次に後者の長崎の風物。遠藤文学ではしばしば「弱者」と「日常性」が描かれる。『女の一生』でも「弱者」として棄教した熊蔵や、心に悩みを抱えつつキクの一生を見届けた伊藤清右衛門らが描かれた。そして、「日常性」は、当時の長崎の様々な風物が日常の風景として描かれている。そこで作品に登場する主な風物をまとめると次のようになる。

第一に正月の風物。最初に登場するのは長崎で正月に行われた踏絵である。「馬込郷でもこの踏絵は毎年、正月

十二日、庄屋の高谷家で行われた。」(「長崎」／『女の一生』)としている。キクはこの時初めて聖母マリアと対面することになる。『沈黙』でも、踏絵を踏んで棄教したロドリゴが正月に踏絵を踏むたびに過去の辛い記憶を蘇らせていた。どちらも同じ古賀二郎編『長崎市史 風俗編』(清文堂出版、一九三八・昭和十三年四月)を典拠としている。また、キクが働いていた丸山での正月の風物も描かれる。土竜打ちと柱餅である。土竜打ちについては、「正月が終って十四日になると丸山では土竜打ちといって、子供たちが五、六人一組となって注連縄をたばねた竹を持って家々の門石を叩きながら歌いまわる風習がある。」(「二つの愛」／『女の一生』)としている。柱餅については年末から正月にかけての様子として描かれる。

晦日前の丸山は華やかで忙しい。それぞれの楼では餅つきの支度をして男衆を待つ。(中略)最後の臼の餅はまるめて大黒柱にうちつけるのが長崎の習慣だった。柱餅といって、正月十五日の時、これをあぶって食べるのだ。

(「丸山」／『女の一生』)

第二に春先の風物。キクとミツは節分を過ぎた頃から五島屋での奉公をはじめますが、それに合わせて様々な風物が描かれる。まずは二月の節分の馬込郷の様子である。

この節分には、馬込郷の子供たちは大根で白ネズミを作り、それを盆にのせて明方から「白ネズミの参りました」と口々に叫びながら家々をまわって遊ぶ。長崎の子供たちの風習を真似たものらしいが、小さい時には、キクやミツも友だちとこれをやったものだった。

(「長崎」／『女の一生』)

キクとミツの子供時代を彷彿させる風物であった。この時は二人の門出を祝い、お婆が育った外海の唄であるめでたい豆まき歌を歌ってくれた。

二月の節分が過ぎてから、長崎で二人の奉公が始まると、長崎の春先の風物が描かれる。いずれもキクと清吉

の二人の關係に深く関わっている。まず、キクが清吉に再会したのは五島屋の旦那が「七高山巡り」に行く準備に追われた日であった。

この頃に長崎近辺の七つの山を遍路納札する行事で、商家の旦那衆にはこれに参加する者が多かった。

〔長崎〕／『女の一生』

次に、三月になると、街には黄砂が降り、桃の節句があり、凧合戦が行われる。そうした時間の移り変わりの中でキクと清吉の關係も変わって行くのである。二人の關係の変化の予兆として黄砂が降り、長崎に春を告げる。つちふる―。

大陸から吹いてくる黄塵のことだ。長崎ではその黄塵が春の訪れに少し先がけて襲ってくる。空が褐色ぼく曇って、外の風に巻きこまれると顔にも首にも小さな土埃が吹きつけてくる。だが、それが終ると春。

〔南蛮寺〕／『女の一生』

こうして冬が終わり、春になった。三月三日には桃の節句があり、ミツとキクが奉公を始めてから初めての外出の機会となる。

ミツもキクも待ち遠しかった。三月三日の節句の日である。その日は五島屋ではお米さんを除いて、特別にトメとキクとミツとに一日、暇が出る。もともと外で泊ることは許されない。

〔南蛮寺〕／『女の一生』

馬込に戻りたいというキクを説得してミツは南蛮寺見学を持ちかけ、市次郎に連れていってもらう。この大浦天主堂でキクは清吉を見かけるのである。キクは清吉に嘘を吐かれたことと、清吉が切支丹であるという秘密を知り苦悩する。その苦悩は凧合戦の少し後まで続くこととなる。

桃の節句が終ったと思うと、もう間近に三月十日の金比羅さまのお祭りが迫っていた。凧あげをやる日である。とかく長崎は遊ぶことと行事の多い街だった。

(傍線部引用者／「南蛮寺」／『女の一生』)

そんな浮かない日のなかで春の金比羅さまの祭りがやってきた。三月十日である。

金比羅さまの祭りはいつも長崎の七ヶ町が交代で当番をする。今はもう衰えたが、ミツやキクがいた頃は長崎の神社仏閣の祭りではもっとも賑わったものの一つだった。

(傍線部引用者／「南蛮寺」／『女の一生』)

桃の節句が三月三日なので、凧合戦が行われた三月十日まで一週間の開きがある。この一週間はキクにとって長い苦悩の日々であったと言えよう。そんなキクから愛の告白を受けて清吉はキクが自分を深く愛していることを知り、二人は「恋人」⑩の関係へ変わるのである。また、この時の凧合戦でプチジャン神父は出島のオランダ商館のオランダ人と対決をしたり、後には凧が浦上の信徒たちとの連絡手段となったりと重要な役割をしている。第三に五月の風物。ペーロン競漕と諏訪神社の祭りである。まずペーロン競漕は五月の最大の行事として紹介される。

長崎と長崎の近郊で五月の最大の行事といえばペーロンの日である。

この五月の五日と六日、端午の節句の日、馬込郷、竹の久保、稲佐、水ノ浦、鮑ノ浦、西浦、平戸小屋、瀬の脇などの海岸にちかい村々の若者が、向う鉢巻に三尺をきりっとしめ競漕を行う。おしてそれぞれの村や町の者たちはその日、浜に集まり声のかれるまで声援する。その応援は時には喧嘩をうみ血の雨をふらすことも多かったほどである。

(「勝負」／『女の一生』)

清吉たちは、長崎全体がペーロン競漕に夢中になることを利用し、見張りが手薄になることを狙ってプチジャン神父を浦上村に招き入れ、洗礼を授けてもらったり、オラショを唱えてもらったりした。この時にうまくいきすぎた結果、後の惨劇を招く要因となっている。

次に諏訪神社の祭りである。この祭りは梅雨の季節の到来を告げるものとなっている。

五月の爽やかな日、お諏訪さまのお祭りが始まって、しゃぎりの軽快な響きが街のあちこちで聞えてくる。鯉のぼりがみどりをふくんだ風に流され、粽やくわくわくやら餅を売り歩く男が寺町の土塀のかげで一休みをしている。そしてあのペーロン競漕が終ると、そろそろ雨がふりはじめる。梅雨の季節がはじまるのだった。

〔群像〕／『女の一生』

梅雨の季節の六月十三日に浦上四番崩れが始まる。キクは清吉が逮捕されたショックで五島屋を飛び出しプチジャン神父に助けてもらい、大浦天主堂で働くことになる。また、一人で五島屋に残されたミツのもとに熊蔵があらわれる。キクばかりではなく、ミツにとっても重要な転機であった。

熊蔵は清吉たちの仲間と一緒に牢に入れられたが、心が弱く棄教者となってしまった「弱者」である。村にも帰れず五島屋に駆け込み、ミツのおかげで働くことができた。だが、自分が仲間を裏切ったことや棄教者であることは誰にも打ち明けられず苦しみを抱えたまま暮さざるをえなかった。ミツはそうした「弱者」の熊蔵の悲しみに寄り添い、後には夫婦となり、切支丹となるのである。

第四に六月の風物。長崎の西役所から津和野へ派遣されている伊藤清左衛門が長崎を懐かしむ場面に登場する。

「ああ、早う長崎に戻りたか。長崎では今頃もう清水寺の祭りたい」

長崎には季節、季節で色々な行事がある。六月に入ると祇園入りと言って、清水寺

の千日参りがはじまる。参道にちかい新石灰、今石灰街の路すじは注連と榊できよめられ、家々では鱈や氷餅を作って客に出すのが習わしである。

伊藤清左衛門はそうした長崎の風物をひとつひとつ思いだしては泣きたい気持で懐かしんでいた。

〔「恵まれた者と恵まれぬ者」／『女の一生』〕

ここで長崎へ帰りたいたいと思っているのは伊藤清左衛門だけでなく、清吉たち全員の気持でもあるが、清吉たち

が帰りたいたいの浦上村であって長崎ではない。そのため、長崎出身の伊藤清左衛門を通して「清水寺の千日参り」を思い出させているのである。しかも、伊藤清左衛門は「清水寺の千日参り」以外にも色々な「長崎の風物」を思い出しており、結果的に作者の長崎への愛着の深さを物語っている。

第五に七月の風物。長崎の夏を代表する精霊流しが描かれる。

夏が来た。長崎の夏には凌ぎがたいほど暑い夕暮がある。まったくの無風状態で真夜中になっても寝つかれないくらいだ。

そんなむし暑い夏の夜、精霊舟を流す長崎名物の行事が行われる。七月十四日にあちこちの寺の墓地では筵をしいて酒宴をひらく家族がみえ、ペイシンとよばれる料理に皿の形にこしらえたところてんを食べ、墓前にもそなえるのだが、その翌日の真夜中から大波止のあたりは人の群れでぎっしりと埋まる。

それぞれの人が灯をともした精霊舟を海にながす。波にゆれ、波にかくれ、波にただよう無数の灯が何とも言えぬ美しい幻の世界を作りあげる。

（「恵まれた者と恵まれぬ者」／『女の一生』）

この時、皆が精霊流しを見に出かけた中、一人店に残ったキクの下に伊藤清左衛門が訪れる。伊藤清左衛門は清吉を助けるためと称しキクにお金を要求する。借金のあてのないキクは唐人相手に体を売ることになる。

以上のように、長崎の風物は、季節の変化だけではなく長崎が色々な行事のある豊かな文化に溢れる街であることを示している。しかも、季節ごとの風物が登場人物たちの心情や出来事と密接な関係を持っている。

藤田尚子氏が指摘^⑩するようにペーロン競漕と精霊流しという長崎を代表する二つの祭が作品で重要な役割を担っていることは確かである。だが、『女の一生』ではそれ以外にも季節ごとの様々な長崎の風物が描かれることで、登場人物たちの当時の日常生活を彷彿とさせるのである。

四、二項対立の図式

先に述べたように、『女の一生』の先行作品である『王国への道』や『侍』では二人の主人公を配し、それぞれの視点が交差することで話が進行していった。『女の一生』もこの流れにあり、前半ではキクを中心とした視点とプチジャン神父を中心とした視点とが交互にあらわれ話が進行した。後半では、プチジャン神父の視点がほとんどなくなる代わりに津和野に流された清吉たちを中心とした視点とキクを中心とした視点とが交差してストーリーが進行する。いずれも二項対立が作品構造の中心となっている。しかも、『女の一生』では小野功生氏が指摘するように視点だけではなく様々な二項対立の図式がある。

『女の一生』の構造のすみずみにまで浸透しているのは二項対立の図式である。例えば、第一部では、清吉と伊藤清左衛門、プチジャン神父と本藤舜太郎、配流の地津和野と山崎楼、キクとミツ、お陽とキク、仙右衛門と熊蔵、本藤と伊藤といった対比が象徴する、信仰とそれに対立する価値、強者と弱者、聖性と穢れなどの二項対立が錯綜して、この作品を重層的構造を持つテキストとしている。

（小野功生『女の一生』―そのテーマ構造―／『遠藤周作―その文学世界』国研出版、一九九七・平成九年十二月）

ここで小野氏が指摘するように、『女の一生』は二項対立の図式がすみずみにまで浸透しているテキストである。これを踏まえて本章では場所と人物の二項対立の図式を確認していきたい。

まずは場所における二項対立の図式。先に述べたように『女の一生』の作品舞台はトポスであるので、単なる場所ではなく登場人物とも密接な関係を持っている。これを前提にグローバルな視点から考えると、キリスト教をめぐる西洋諸国と日本の二項対立が作品の大きな背景となっている。キリスト教を受容した西洋諸国と拒絶し

ている日本とのたたかいである。フランス出身のプチジャン神父と岩倉使節団へ参加した本藤舜太郎に代表される。プチジャン神父はザビエル以来の日本宣教の歴史を学び、当時の西洋諸国が犯した植民地支配の罪悪とそれに加担した教会の過ちも認めており、そうした不幸な歴史を踏まえた上で日本宣教に情熱を燃やしている。本藤舜太郎は岩倉使節団に参加してアメリカに行き、日本の禁教令に対する反対運動の激しさを実感し、浦上の切支丹たちが条約改正の鍵であることを知る。こうしてキリスト教をめぐる西洋諸国と日本とのかけひきの渦中に浦上の切支丹たちが巻き込まれ翻弄されたのである。

日本の中では長崎と浦上村、津和野と長崎の二項対立がある。長崎と浦上村の違いは主にキクの眼を通して語られる。長崎は多くの外国人が行き交い、貿易をはじめとする商業が中心の街であり、浦上村は農業が中心の貧しい村である。馬込郷のキクたちにとって長崎は憧れの場所であるのに対し、長崎の人間にとって浦上村は家畜の臭いのせいで「言いようもなくさい村だと思われる」という。この差は明らかであろう。また、津和野と長崎は、清吉とキクに代表される。津和野は清吉たち浦上の信徒が配流され、三年間拷問を受けた地である。対する長崎の大浦天主堂ではプチジャン神父たちが清吉たちを助けようと奔走しており、丸山の山崎楼ではキクが清吉のために身を犠牲にしていた。そうした二つの地を伊藤清左衛門は往復し、清吉とキクを結び付ける頼りない連絡役となっていたのである。

同じ浦上村でも仏教を信仰する馬込郷と切支丹の中野郷、本原郷の対立がある。馬込郷の者は中野郷や本原郷の者をクロと呼び関わりを避けており、中野郷や本原郷の者も異教徒である馬込郷の者とは結婚することはない。異なる宗教を背景に持つ郷の対立は、ミツの兄市次郎が中野郷の清吉を忌み嫌い、キクに清吉とは結婚できないと告げるところに代表される。

長崎は大きな街だけに多層的な二項対立がある。日本人と外国人、五島屋と山崎楼、アチャさんと呼ばれる唐人と南蛮人、フランス人とオランダ人、大浦天主堂と山崎楼、大浦天主堂と西役所などである。

第一に日本人と外国人。長崎は鎖国下の日本にあって唯一外国人を受け入れた街であり、外国人を大事にする風習ができていた。だが風合戦に関しては例外であった。三月十日のお祭りの風合戦で、「この三年一人の若い異人がオランダ商館の屋根でアゴバタをあげ、日本人に戦いを挑んで」（『南蛮寺』／『女の一生』）きて、誰も勝てないことに長崎の街中の人が怒っていた。

第二に五島屋と山崎楼。五島屋は眼鏡橋の近くにある呉服屋でキクとミツが奉公した店である。店の者の大部分は五島出身者で占められており、キクとミツだけが浦上村出身であった。ここでミツは奉公を最後まで勤め熊蔵と結婚したが、キクは清吉が浦上四番崩れで捕まったショックで店を飛び出してしまい、しかも身を犠牲にして尽した清吉とは結婚できなかった。

商家の五島屋に対し、山崎楼は遊郭である。店は思案橋の近くの丸山にある。キクはこの店で下女として働いたが、清吉のためにお金の工面をするため、伊藤清左衛門や唐人相手に体を売ってしまう。対照的なのは山崎楼の売れっ子の芸子衆のお陽である。お陽は愛する本藤舜太郎に身受けされ、「後に舜太郎の妻となり鹿鳴館の花の一人」とまで言われた。キクが愛する清吉と結婚出来ずに亡くなったこととは明らかに異なる。

第三に唐人と南蛮人。唐人は「日本人たちがアチャさんと呼んでいる中国人たちの住居地区」（『道遠し』／『女の一生』）に住み、南蛮人でもオランダ人は出島のオランダ商館、フランス人のプチジャン神父は大浦天主堂とそれぞれ別の場所に住んでいる。

唐人相手の遊女を意味する「十善寺行き」という蔑称があるように、同じ外国人相手の遊女であってもオランダ人相手の遊女より格が下だったりもする。

第四にフランス人とオランダ人。三月十日の風合戦で出島のオランダ商館の若いオランダ人とフランス人のプチジャン神父は対決した。プチジャン神父は勝負に敗れたが、十字架の印の入った風を揚げられて満足した。

第五に大浦天主堂と山崎楼。大浦天主堂はいうまでもなく聖なる場所である。対する山崎楼は性に関連する場

所である。全く正反対の場所であるが、五島屋を飛び出したキクが最初に世話になったのが大浦天主堂であり、次に下女として働いたのが山崎楼であった。キクを通して二つの異なる空間が結びついていくのである。

第六に大浦天主堂と西役所。浦上の信徒をめぐる対立がある。大浦天主堂は信徒を保護する側であり、西役所は信徒を弾圧する側である。大浦天主堂を代表するのがプチジャン神父であり、信徒たちを解放するように大使にかけあったり、聖母にずっと祈りを捧げていた。対する西役所を代表するのが伊藤清左衛門と本藤舜太郎であった。大浦天主堂の動きに常に監視の目を光らせ、時には市次郎をスパイとして送り込ませたりした。浦上四番崩れが始まると拷問にかけ棄教させたり、死なせたりもしている。

このように場所は登場人物と密接な関係の中で多層的な二項対立の図式を構成して、「歴史群像」の世界を描き出しているのである。

次に登場人物の二項対立の図式。場所の関係とも重なるが、人物だけを見ても、様々な二項対立の図式が見られる。そこで、主な登場人物であるキク、プチジャン神父、清吉、伊藤清左衛門をめぐる二項対立をそれぞれ確認したい。

第一にキクをめぐる人々である。ミツとキク、お陽とキク、プチジャン神父とキクといった二項対立がある。まずミツとキク。二人は同じ浦上村馬込郷に生れた従姉妹で、キクの方が一歳上である。ミツには十歳違いの兄・市次郎がいる。子供の時は「ミツの甘ったれ、キクのお転婆」(『ミツとキク』)／『女の一生』と呼ばれていた。

ミツは、「年上の話すことを何でも素直に信じる」(『ミツとキク』)／『女の一生』)特徴があり、『わたしが・棄てた・女』のミツと同じように「気の毒な人、あわれな人間を見るとどうしようもない不憫さかられる」優しさを持っている。仲間を裏切り棄教した熊蔵の苦しみに寄り添い、後には熊蔵と結婚し切支丹となった。

対するキクは、子供の頃は「活発で、おしゃべりで、はしっこくて」、「自分が美しい女の子でありたいと思っていた」(『ミツとキク』／『女の一生』)。十六歳の時に清吉に恋をして身を犠牲にして頑張ったが清吉と結婚することはできなかった。清吉にメダイユをもらったり、大浦天主堂で下女として働いたり、聖母とは何度も向き合ったが切支丹となることもなかった。ミツとは明らかに対照的である。

次にお陽とキク。先にも述べたが、二人は同じ時期丸山の山崎楼で働いたが、全く正反対のことが起きている。お陽は山崎楼で芸子衆として働いていたが、本藤舜太郎の妻となり幸せを掴んだ。明治の新政府の中で出世する本藤舜太郎に伴われ、後には鹿鳴館の花と呼ばれている。対するキクは、山崎楼で下女として働いていたが、愛する清吉のためにお金を工面するため伊藤清左衛門や中国人相手に体を売り、無理がたたって結核で死んでしまふ。

最後にプチジャン神父とキク。『女の一生』では二回だけ大浦天主堂の聖母像が沈黙を破る。この時、聖母の声を聞くのがプチジャン神父とキクである。ただし聖母像の様子は対照的である。

前者のプチジャン神父は浦上の信徒を発見したのもつかの間、役所の監視の眼がすみずみに及んでいることを知り、困り果ててしまう。その時聖母が初めて沈黙を破る。

(ハタがあるではありませんか)

プチジャンは聖母の清らかな声を聞いたように思った。

「ハタ？」

(あなたは習ったでしょう、凧のあげかたを。今、長崎は凧あげの季節です。あなたが凧をあげても、奉行所はそれほど疑いませんよ。凧を：お使いなさい)

子供に教えさすような聖母の声をプチジャンはたしかに聴いた…。

(傍線部引用者／「暗闘」／『女の一生』)

プチジャン神父は、いわば啓示のように聖母の声を聞いて、浦上の信徒たちとの連絡手段として凧を利用することを思いつく。重要なのはプチジャン神父が聖母の声を「聞いたように思った」点にある。下手をするとプチジャン神父の思いすごしになるかもしれない危険性も孕んでいるからである。対するキクの場合は、プチジャン神父の時とは異なり聖母が激しい動きを見せる。

この時聖母の大きな眼にキクと同じように白い涙がいっぱいにあふれた。あふれた涙は頬を伝わりその衣をぬらした。彼女はうつ伏して動かなくなったキクのために、一人の男を愛し愛しぬいたこの女のために、おのれの体をよごしてまでも恋人に尽しきったキクのために今、泣いていた。／キクのその叫びを聖母は、はつきりと聞いた。

聖母像は大きな眼に涙をためたまま、強く強くうなずいた。／悲しみと辛さとをこめたキクの訴えには聖母は泣きながら烈しく首をふった。／（いらっしやい、安心して。わたくしと一緒に：）

（傍線部引用者／「雪。そして聖母」／『女の一生』）

病気が重く力尽きて動けなくなつたキクに対し、聖母は「白い涙」を流したり、キクの叫びを聞き、眼に涙をためたまま「強く強くうなず」いたり、キクの訴えに「烈しく首をふつた」りする。プチジャン神父の時とは明らかに異なる。

第二にプチジャン神父をめぐる人々である。ギラン中尉とプチジャン神父、フューレ神父とプチジャン神父、オランダ人とプチジャン神父といった二項対立がある。

まずギラン中尉とプチジャン神父。二人は同じ船に乗り長崎へやってくる。ギラン中尉は同僚の士官から聞いた長崎のゲイシャのことで頭がいっぱいだった。対するプチジャン神父は酔っ払いの中国人から聞いた日本にまだ信徒が残っているという不確定な情報をもとに信徒を捜し出すことで頭がいっぱいだった。二人が求めていたものは全く違っていたのである。

次にフューレ神父とプチジャン神父。フューレ神父は二百数十年に及ぶ徹底的な切支丹弾圧の結果日本にはもう一人も残っていないと諦めて、信徒を捜すことよりも教会建設に熱心だった。対するプチジャン神父は教会建設よりも信徒を捜し出すの方が熱心だった。フューレ神父が長崎を去った後、プチジャン神父は信徒発見の奇跡の現場に立ち会うことができた。プチジャン神父の方が正しかったのである。

最後にオランダ人とプチジャン神父。三月十日の凧合戦で対決をするが、新教の国であるオランダとカトリックのフランス、スペイン、ポルトガルは海外貿易をめぐって長い間争って来た歴史がある。オランダ人もプチジャン神父も互いに敵意は持っていないが、貿易をするために長崎へ来て出島のオランダ商館に住んでいるオランダ人と、宣教のために長崎へ来て大浦天主堂に住んでいるフランス人のプチジャン神父とは根本的に異なっている。凧合戦でもオランダ人の目的は勝負に勝つことだが、プチジャン神父は十字架のしるしをついた凧をあげることで教会の存在を人々に知らせることが目的であった。

第三に清吉をめぐる人々である。キクと清吉、仙右衛門と清吉、熊蔵と清吉、伊藤清左衛門と清吉といった二項対立がある。

キクと清吉。キクは清吉を一途に愛し、清吉もキクの愛情に応えようとしたが、二人の出身部落は対立する立場にあった。キクの馬込郷は仏教を信仰する部落で、清吉の中野郷は切支丹の部落であった。キクは清吉を愛することで清吉の信ずる切支丹の世界へ足を踏み入れていくのである。

仙右衛門と清吉。二人は浦上四番崩れの時に一緒に捕まったが、仙右衛門だけは棄教することなく信仰を守り通した。この時清吉は棄教してしまうが、信心戻しをした後は最後まで信仰を守り通した。

熊蔵と清吉。この二人も浦上四番崩れの時に一緒に捕まった。熊蔵は真っ先に棄教し、清吉も棄教するが、その後清吉は信心戻しをして津和野で最後まで耐え抜いた。先に逃げ出した熊蔵は部落に戻ることもできず五島屋に逃げるが、そこでミツに助けられ、大浦天主堂へも通うようになる。

伊藤清左衛門と清吉。清吉を含む浦上の信徒たちの一部は津和野に配流され、拷問を受け続けた。中心になって清吉たちに拷問を加えたのが西役所から派遣された伊藤清左衛門であった。伊藤清左衛門はキクが清吉を愛していることを知っているが故にひどい拷問を加えていくが、やがて西洋からの圧力で信徒たちへの拷問が問題になると上司から責任を全て押し付けられ絶望する。その後、清吉のために身を犠牲にしたキクの死を見たり、プチジャン神父やウツサン神父を通してキリスト教を知り、信徒となる。大正二年には津和野で清吉に全てを話し懺悔をする。二人には拷問の加害者と被害者、キクを愛した男とキクに愛された男という関係があった。

第四に伊藤清左衛門をめぐる人々である。清吉と伊藤清左衛門、本藤舜太郎と伊藤清左衛門という二項対立がある。

清吉と伊藤清左衛門については先に述べたので、本藤舜太郎と伊藤清左衛門の対立について考えたい。二人は同じ長崎の西役所で働いていたが、出世という点では対照的である。伊藤清左衛門は役目に忠実であったもの、下級役人であったので上層部に都合よく信徒たちへの拷問の責任をなすりつけられ、出世することなく終わった。対する本藤舜太郎は西市役所では通詞として働いていたが、さらに語学の才能を認められ、外務省の役人に昇進し岩倉使節団にも同行を命ぜられた。結婚に関しても、伊藤清左衛門は愛するキクと結ばれることはなかったのに、本藤舜太郎は愛するお陽と結婚できた。お陽は後に鹿鳴館の花とまで呼ばれている。こうした二人の間には「弱者」と「強者」をはじめとする様々な二項対立の図式がある。次の箇所を確認できる。

この世には運に恵まれた者と運の悪い者がいる。世に出るものと、世に出ることもできず、泥のなかをもがく連中がいる。

その二つの違いは伊藤清左衛門と本藤舜太郎との間にはっきりと出た。舜太郎が岩倉公に目をかけられ外務省の役人に昇進したのに、伊藤は津和野と長崎を往復せねばならぬ西役所の下級役人にすぎなかった。

「恵まれた者と恵まれぬ者」／『女の一生』

その日、一日、霧のような雨が長崎にふりつづいていた。その雨を見ながら伊藤はこの世には強い者と弱い者、幸運な者と不運な者、華やかな者とみじめな者とが厳としてあることを考えた。

（「恵まれた者と恵まれぬ者」／『女の一生』）

ここにあらわれただけでも「運に恵まれた者と運の悪い者」、「世に出るものと、世に出ることもできず、泥のなかをもがく」者、「強い者と弱い者」、「幸運な者と不運な者」、「華やかな者とみじめな者」と様々な対立がある。『女の一生』の二項対立の図式のなかでも際立っていることは明らかであろう。問題はプチジャンが語る神の視点である。

「だが神さまはそげん本藤さまよりもあなたさまのそのひがんだ心、傷ついた心に入りこもうとされます。神さまは今のような出世欲にもえた本藤さまには興味を持たれんとです。ばってん伊藤さまのその心のほうにひかれとられる」

（「三年目の冬」／『女の一生』）

プチジャン神父が語る神は、出世欲に燃えた本藤舜太郎よりも伊藤清左衛門の「ひがんだ心、傷ついた心」に興味を持つという。武田友寿は『沈黙』に「弱者の復権」という意図を見た^⑬が、『女の一生』でも「弱者の復権」をここに見ることができよう。『沈黙』のキチジローが何回も裏切った末に、最後には切支丹屋敷でロドリゴの下にいたように、伊藤清左衛門も後にはプチジャン神父やウツサン神父の説教を受け入れ信徒となっているのである。神が伊藤清左衛門に興味を持っているというプチジャン神父の言葉は正しかったのである。

以上のように『女の一生』の場所や登場人物は、様々な二項対立が複雑に絡み合い多層的な二項対立の構造を持っている。そして歴史を背景とすることで「歴史群像」を描き出していると言えよう。

- ① 拙稿「遠藤周作の「歴史小説」の一側面―松田毅一との関連をめぐって―」（『遠藤周作研究』第四号、二〇一
一・平成二十三年九月）
- ② 八木義徳・菅野昭正・岡松和夫「読書鼎談」（『文藝』、一九八二・昭和五十七年五月）
- ③ 注②に同じ。岡松和夫の発言。
- ④ 注②に同じ。
- ⑤ 遠藤周作「筆間雑話」『女の一生』
- ⑥ 司馬遼太郎は『坂の上の雲』の「あとがき 一」に小説執筆のきっかけと子規への関心について次のように述べている。

子規について、ふるくから関心があった。

ある年の夏、かれが生まれた伊予松山のかつての士族町をあるいていたとき、子規と秋山真之が小学校から大学予備門までおなじコースを歩いた仲間であったことに気づき、ただ子規好きのあまり調べてみる気になった。小説にかくつもりはなかった。調べるにつれて妙な気持になった。

（中略）

そういうことを、書く、どれほどの分量のものになるか、いま、予測しにくい。

昭和四十四年三月

（傍線部引用者／「あとがき 一」／『坂の上の雲』）

- ⑦ 遠藤周作は一九二三（大正十二）年三月二十七日生れ、一九九六（平成八）年九月二十九日没。司馬遼太郎は一九二三（大正十二年）八月七日生れ、一九九六（平成八）年二月十二日没。

⑧ 拙稿「遠藤周作論―(劇)を生成するトポス―」(『昭和文学研究』第七十二集、二〇一六・平成二十八年三月)

⑨ 注②に同じ。

⑩ 注②に同じ。

⑪ 「勝負」の章では、キクは清吉のことを「恋人の清吉」と呼んでいる。

威勢のいいその声を聞くとキクは箒を持って急いで店の前に走り出る。路を掃くのはキクの仕事だがもう冬の朝のように寒くはなく、しかも恋人の清吉とわずかの間だが話ができるのだ。

(傍線部引用者／「勝負」／『女の一生』)

⑫ 藤田尚子「遠藤周作『女の一生』一部・キクの場合」論―執筆背景と長崎風物の一典拠―(『遠藤周作研究』創刊号、二〇〇八・平成二十年九月)

⑬ 武田友寿『遠藤周作の世界』(中央出版社、一九六九・昭和四十四年十月)

第二章 「人間」を追求する歴史小説―山本周五郎『赤ひげ診療譚』と遠藤周作『王の挽歌』―

一、「人間」の追求

多かれ少なかれ作家は小説において「人間」を追求する。そのことは小説の舞台が現代であろうが過去であろうが変わらない。だが歴史小説は、過去を扱うことで時代を超えた普遍性を獲得するために、「人間」の追求はより純粹さを増す。その意味で、山本周五郎と遠藤周作が「人間」を追求した結果の一つとして歴史小説を創作したことは当然の帰結であったかもしれない。しかも両作家の「人間」追求は、聖書の熟読を通じたキリスト教的価値観にもとづくものであったことも忘れてはならない。山本周五郎は、『赤ひげ診療譚』（文藝春秋新社、一九五九・昭和三十四年二月）において「小石川養生所」の医師、赤ひげや保本登を描くと同時に、彼等を通して病のみならず様々な貧困や罪にあえぐ江戸下層民の姿を赤裸々に描いた。ここに現われた「庶民性」は佐藤俊夫氏①が指摘するように「人間性」に繋がるものであり、山本周五郎が初期作品から一貫して「人間」を追求して来た創作態度の中から生まれたものである。

一方、遠藤周作は、『王の挽歌』（新潮社、一九九二・平成四年五月、新潮社）においてキリシタン大名の大友宗麟をそれまで描かれてきた豊後の戦国大名として九州に君臨した英雄豪傑としてではなく、「神と人間との狭間に苦悩する」②一人の人間の姿を描いた。そこには単なる歴史小説としてだけではなく、人間不信という心の闇を抱えた心理小説、両親、妻、子という家族の問題を抱えた家庭小説、さらにはキリスト教の信仰を描いた宗教小説など現代にも繋がる様々な側面がある。そしてそれらは「弱さ」の問題に集約される。

そこで本稿では、両作家の「人間」追求の軌跡を『赤ひげ診療譚』における「人間性」の問題と『王の挽歌』における「弱さ」の問題を中心として見ていくこととする。

二、『赤ひげ診療譚』の主題について

『赤ひげ診療譚』は一九五八（昭和三十三年）三月から十二月にかけて「オール読物」に連載され、翌年二月に単行本として文藝春秋社より刊行された。初版刊行時の書評には否定的なものもあった③が、概ね好意的に受け取られている。一九六五（昭和四十一年）年に映画化された影響もあり、「赤ひげ」と言えば、「医は仁術」を体現する医者 の 代名詞として定着していることは周知のとおりである。

作品論としては管見のかぎり三本の書評を含む三十三本の論文や単行本所収の解説などが見つかった④。このうち主題に関しては、「保本登の感情教育」（荒正人）⑤、あるいは「保本登の感情教育や人生修業を描いた物語」（河盛好蔵）⑥として「小石川養生所」の保本登が赤ひげや病人たちとの出会いを通して一人の人間として成長する物語とする読みが荒正人、河盛好蔵、山田宗睦、尾崎秀樹といった評論家の側からなされて定説となつている。それに対して研究者の側からは水谷昭夫⑦が「罪」の問題を指摘することによって、新たな読みの可能性が広がった。上出恵子氏、岩佐壮四郎氏、野松盾子氏、大田正紀氏、中野新治氏などが続いて現在に至っている。本稿もこれらの先行研究に連なるものである。

そこで主題と大きく関わる「保本登の成長」について先に確認したい。次の場面にあらわれている。

「これはおれが成長したことだろうか」と登はまた呟いた、「そうだ、養生所で経験したことが、たぶん幾らかでもおれを成長させたのだろう、そうだ、おれにとってはこのほうがよかった」

各種各様な意味で、人間生活の表裏を見て来た。ことに不幸や貧困や病苦の面で、そこにあらわれる人間のはだかな姿を、現実には自分の眼で見て来たのである。その経験から、ちぐさとまさをとの差を見分けるだけの、判断力を持つようになったのだ。

(傍線部引用者／「鶯ばか」／『赤ひげ診療譚』)

作品で最初に登場した時の保本登は自暴自棄に陥っていた。長崎留学中に婚約者のちぐさが自分を裏切り別の男性と一緒になったことと、幕府の目見医にあがってやがては御番医から典薬頭にも出世しようと思っていたのに突然小石川養生所で勤務することになったためである。だが、保本は小石川養生所で赤ひげや多くの患者との出会いを通して人間的に成長した。ここはその自身の成長を本人が実感している場面である。また、保本は自己の成長を裏付けるものとして「判断力」を挙げている。小石川養生所での経験をを通して人間を見る目が養われてちぐさの妹まさをと一人の人間として向かい合うことが出来るようになったのである。

三、『赤ひげ診療譚』における「人間性」の問題

次に「新出去定の人間観」について考えたい。保本が人間的に成長したのは赤ひげと呼ばれる新出去定の生き方に共感したためである。最後に小石川養生所で勤務し続けることを決心した保本が将来赤ひげのような医師として生きるであろうことは容易に想像できる。では赤ひげの生き方とは何だろうか。結論から先に言うと「徒労に賭けた人生」とまとめることが出来る。例えば、次の箇所である。

…去定の生きかたも同様だ、見た眼に効果のあらわれることより、徒労とみえることに自分を賭ける、と去定は云った。

―温床でならどんな芽も育つ、氷の中でも、芽を育てる情熱があつてこそ、しんじつ生きがいがあるのではないか。

（傍線部引用者／「氷の下の芽」／『赤ひげ診療譚』）

「毒草はどう培つても毒草というわけか、ふん」と去定は云つた。「だが保本、人間は毒草から効力の高い薬を作りだしているぞ、あのおかねという女は悪い親だが、どなりつけたり卑しめたりすればいっそう悪くするばかりだ、毒草から薬を作りだしたように、悪い人間の中から善きものをひきだす努力をしなければならぬ、人間は人間なんだ」

（傍線部引用者／「氷の下の芽」／『赤ひげ診療譚』）

引用最後の部分の「人間は人間なんだ」というヒューマニズムが赤ひげの人間観を全て物語っている。人間の良い面ばかりでなく悪い面も含めた全てを赤ひげは引き受けようとしているのである。さらに言えば、赤ひげの人間観は時にキリスト教的な神への問いかけも要請するものである。その根底には水谷昭夫が指摘⑧するように根深い罪意識⑨が横たわっている。

そこで、赤ひげのキリスト教的言説を三箇所確認しておく。第一に赤ひげと保本が、母の情人と結婚し子供を持った悲劇の女性・おくにから夫への殺意とそこにいたる身の上話を聞いた場面である。赤ひげは次のように保本に語る。

「人生は教訓に満ちている、しかし万人にあてはまる教訓は一つもない、殺すな、盗むなという原則でさえ絶対ではないのだ」

（傍線部引用者／「駈込み訴え」／『赤ひげ診療譚』）

ここで「殺すな、盗むな」というのは原則論ではあるが、言うまでもなくモーセの十戒を意識して作られたセリフである。モーセの十戒は旧約聖書の「出エジプト記」二十章十三〜十五節にある。「口語訳聖書」では次のと

おりである。

あなたは殺してはならない。

あなたは姦淫してはならない。

あなたは盗んではならない。

「殺すな」にあたる「あなたは殺してはならない」は第六戒、「盗むな」にあたる「あなたは盗んではならない」は第八戒である。いずれも人間関係にかかわる重要な戒めであり、ユダヤ人にとって絶対的な原則である。だが、赤ひげはこれすら絶対ではないという。ある意味、モーセの十戒への大胆な挑戦ともとれる。

第二に幕府から小石川養生所の経費削減と通い療治の停止を申し渡された赤ひげが憤慨する場面である。

ほんの暫く独り言がとだえた。去定は大股の歩度をゆるめながら、片手で髯を「ごしごし」とこすった。「無法には無法を」と去定は呟いた、「残酷には、残酷をだ、――無力な人間に絶望や苦痛を押しつけるやつには、絶望や苦痛がどんなものか味わわせてやらなければならない、そうじゃないか」

（傍線部引用者／「むじな長屋」／『赤ひげ診療譚』）

幕府の政策に対して赤ひげは理解も示すが、それでも庶民を苦しめる無慈悲な政策に対して憤りを隠せない。そうした気持が「無法には無法を」「残酷には、残酷をだ」という呟きに込められている。ここでのセリフもまた聖書の有名な聖句が下敷きになったと考えられる。旧約聖書「出エジプト記」二十一章二十三〜二十五節で次のようにあらわれている。「口語訳聖書」から引用する。

しかし、ほかの害がある時は、命には命、目には目、歯には歯、手には手、足には足、焼き傷には焼き傷、傷には傷、打ち傷には打ち傷をもって償わなければならない。

「目には目」「歯には歯」という刑罰を記したものだ、元来の意味は、「目には目以上に復讐してはならない」という復讐のエスカレーターを制限するものである。山本周五郎がどこまでこの聖句の意味を理解していたかは不

明であるが、憤慨した赤ひげが次の場面ではすぐに反省したりと人間的な側面を垣間見せている。

第三に、赤ひげの人間観とも深く関連する場面である。赤ひげは性病に苦しむ遊女を無償で治療したが、徒労に終わっている。

—この世に悪人はない、この世界に悪人という者はいない。

養生所へ帰ってきた去定は、独りでしきりにそう呟いていたそうである。それは「悪人がいない」ことを認めたのではなく、悪人などいる筈がない、ということをも自分に云い聞かせているような調子だった、と森半太夫は語った。救いを求めて来た三人のうち、一人は死に二人は半年ばかり療養したうえ、ほぼ健康をとり戻し、一人は水戸在の実家へ帰ったが、残った一人は逃亡してしまった。

(傍線部引用者／「徒労に懸ける」／『赤ひげ診療譚』)

ここで大事なのは赤ひげが人間の罪や悪に目をつぶって無邪気にこの言葉を口にしていては、自分には言いかせるように言っている点である。赤ひげは誰よりも人間の罪や悪を知っており、それでも人間を信じたいという希望に賭けているのだ。自分のしたことが徒労に終わったとしても病人の治療にひたすら邁進する赤ひげの孤独な姿が浮かび上がるだろう。その姿は傍で見ていた保本に大きな影響を与える。さらに、「この世に悪人はない、この世界に悪人という者はいない。」という時、「ローマ人への手紙」三章十節の「義人はいない、ひとりもない。」という聖句が想起される。もちろん、赤ひげも悪人がいることはわかっている。だがそれでも、悪人はいても本当の悪人はいないことを信じたかたのではないだろうか。

以上三点について考えて見た。いずれも赤ひげの「神への問いかけ」であり、最後まで人間の可能性を信じようとする赤ひげの生き方が反映したものと見えよう。ただ時には単なる「問いかけ」というよりは、訴えに近い形で表れている。

四、『王の挽歌』の主題について

『王の挽歌』は「小説新潮」の一九九〇（平成二）年二月号から一九九二（平成四）年二月号まで約二年連載されたあと、一九九二（平成四）年五月に新潮社より刊行され、のち『遠藤周作歴史小説集』全七巻の内の第六巻として一九九六（平成八）年七月に講談社より刊行された。遠藤周作の晩年の作である。この作品の先行研究はほとんどなくわずかに数本を数えるのみであるが⑩、新たな資料⑪も見つかったので、それも合わせてタイトルの意味を中心として主題について確認してみたい。

タイトルには「王」と「挽歌」の二つのキーワードがある。前者の「王」は『侍』（新潮社、一九八〇・昭和五十五年四月）で描かれた「王」の意味とほぼ同じである。遠藤は『侍』について対談の中で次のように語っている。

「三浦 常長が日本を出るのは一六〇〇何年？」

遠藤 一六一三年。そういう興味で、ちよつと調べてみると、あの男は旅をして王様に会いに行く、スペイン国王に、ローマ法王に。ところが、その王たちは、心の中で偽使節と思いつながら、ただ儀礼的に面会するだけなんだ。（中略）結局、彼を偽使節と思わないで迎えてくれたのは、もう一人の王、惨めな王たるキリストだけなんだ。「王に会いに行った男」という題でもよかったと思うくらい。日本の一人の王のために行って、むこうの王に会い、それから彼の予期しなかった王にめぐりあつて帰ってくる。」

（傍線部引用者／遠藤周作・三浦朱門「対談」王“に会いに行った男―書下ろし長編『侍』をめぐって―」／『波』一九八〇・昭和五十五年四月号）

この対談は単行本の付録にもなっており、『侍』の自作解説でもある。注意したいのはここで「侍」ではなく「王に会いに行った男」という題でもよかったと語るように作品の中で「王」が重要な意味を持つことである。さらに「王」と呼ばれるのは、スペイン国王、ローマ法王、日本の一人の王（伊達政宗）といった地上の王だけではなく「もう一人の王」「惨めな王たるキリスト」もいることである。つまり、『王の挽歌』の「王」とは、豊後の王たる大友宗麟をはじめとする毛利元就、島津義弘、豊臣秀吉といった「地上の王」だけではなく、「惨めな王たるキリスト」も含まれていたのである。だからこそ、惨めな姿で宗麟の前に現われたフランシスコ・ザビエルが宗麟に大きな痕跡を残したのである。

次に「挽歌」についてである。戦国時代とは言え『王の挽歌』では実に多くの人物の臨終の様子が描かれる。宗麟の母を始めとしていわゆる「二階崩れの変」では宗麟の父義鑑、義母小少将、異母弟塩市丸、守役の入田親誠が一挙に亡くなる。「屋形」となってからも、叔父にあたる大内義隆、その叔父を殺した陶晴賢、実弟の大内義長が戦乱の中で殺される。さらには、宗麟の正室矢乃によって側室の服部右京亮の女が殺され、矢乃も宗麟に離縁を申し渡された後病気で孤独のうちに亡くなっていく。そして宗麟自身も「頼るものは神のほか、この世にあらうや」と最後の言葉を残して死に、宗麟の息子義統は死を前にしてようやく父の言葉を理解して作品が閉じられる。こうしてみると、様々な臨終の姿が描かれる中で最後に残した言葉が「挽歌」として宗麟に投げかけられ、それらを受け止めた宗麟の結論が「頼るものは神のほか、この世にあらうや」という信仰の言葉であり、義統はその父の言葉を再確認して死んでいったということになる。

つまり、「王」にも地上の王と「惨めな王たるキリスト」のダブルイメージがあり、「挽歌」にも多くの人々の臨終間際の言葉と宗麟の最後の言葉というダブルイメージがあった。どちらもキリスト教信仰と深い関わりがあり、「神と人間との狭間に苦悩する」大友宗麟の姿を描くために重要な役割を担っている。

五、『王の挽歌』における「弱さ」の問題

次に「弱さ」の問題を考えたい。『王の挽歌』では作品冒頭から「弱い」宗麟が登場する。

大坂城での秀吉と宗麟の会見である。宗麟は島津との戦いに敗れ、秀吉に助けを求めしか道はなかった。しかも五十七歳という高齢で精神的にも体力的にも疲れ果てていた。この場面について遠藤は「著者インタビュー」^⑫で次のように語っている。

冒頭から秀吉との会見の場面を出したのは、一つは、秀吉の望みとすると宗麟のそれとは次元が全く違う。一人は地上の王国をめざし、一人は精神の王国をめざしているのであって、その対比を明らかにすることで宗麟の人物を最初から見せようと思ったわけです。

(傍線部引用者)

この会見の場面では、宗麟は秀吉に成り上がり者の姿を見て、秀吉は宗麟に「悟りきらぬ坊主」の姿を見ている。二人の対比は明らかであるが、もう一つ大事な点は、秀吉、宗麟、さらに千利休も交えた三人が互いに相手の心を読み取ろうとする心理戦を巡らしていることであり、のちに作品全体で宗麟の心の問題が繰り返り広げられる伏線になっている。しかも、五十七歳の宗麟が自分の老いを自覚し体力的にも精神的にも弱々しい姿を冒頭で見せることで、英雄豪傑ではなく「苦悩する宗麟像」の提示ともなっている。また、何より大事な点が二人の対立点である。「一人は地上の王国をめざし、一人は精神の王国をめざしている」とはまさに、遠藤が『王国への道―山田長政―』(平凡社、一九八一・昭和五十六年四月)で描いた山田長政とへペドロ岐部)の二人と重なってくる。次の箇所である。

「私はこの二人(註…山田長政とペドロ岐部)を対比させた。一方は『地上の王国を築こうとする』者、他

方は『天上の王国をめざす』者―二人の対立はあまりにはつきりとしていたのである」

(傍線部引用者／「あとがき」『王国への道―山田長政』)

『王国への道―山田長政』は、「地上の王国」を目指した山田長政と、「天上の王国」を目指したヘペドロ岐部)の二人の異なる生き方がアユタヤで交差する物語であったが、『王の挽歌』も冒頭の部分では「地上の王国」を目指した秀吉と、「精神の王国」を目指した宗麟の異なる生き方が大坂城で交差したのである。注目すべきは宗麟の人物形象のモデルと言える(ヘペドロ岐部)である。(ちなみに、秀吉の人物形象のモデルと言える山田長政は『メナム河の日本人』では「アユタヤの秀吉」と呼ばれ、『王国への道』では秀吉のような奇抜な作戦で勝利を手にする。)拙稿⑬で論じたが、(ヘペドロ岐部)は『留学』のトマス荒木や『沈黙』のロドリゴ、フェレイラといった「弱者」に対する「強者」としての役割を担っていた。だが、『メナム河の日本人』以降は「地上の国」を目指す山田長政との対比の中で、「精神の王国」「神の王国」を目指す人物として登場するものの、「病弱」(『メナム河の日本人』)であったり、人生で二度「弱さ」を見せたり(『銃と十字架』)と必ずしも徹頭徹尾「強者」であったわけではない。「華々しい殉教者」というよりはむしろ「神と人間との狭間に苦悩する」⑭人間らしい人物であったのである。大友宗麟はそうした(ヘペドロ岐部)の「弱さ」であったり、信念を貫く「強さ」であったり、様々な側面を踏まえて造型されたと言える。

また、「弱さ」の問題は宗麟における「心の闇」に繰り返し現れる。宗麟の「心の闇」の中心には信頼していた守役の入田親誠に裏切られたことによる「人間不信の感情」が渦巻いている。次の場面である。

二階崩れの変以来、宗麟の心には人間不信の感情がうす黒い幕をはっている。信じていた腹心の家臣に父も殺されたが、それ以上に宗麟を教育してくれた入田親誠までがひそかに裏切工作をしていた事実が「誰も信じられぬ」という意識を胸中に作りあげたのだ。

(傍線部引用者／「謀反の怖れ」／『王の挽歌』)

ここで注目すべきは「誰も信じられぬ」という人間不信の言葉である。宗麟は他人を信用することはできないし、自分自身のことは一層信じられない。だが惨めな姿のザビエル神父だけは宗麟の心に深い痕跡を残し、やがて「心の同伴者」となる。そして最後には「頼るものは神のほか、この世にあらうや」という境地に到る。

いわば、『王の挽歌』は宗麟が「誰も信じられぬ」人間不信の感情を抱えた「心の闇」の中から、「頼るものは神のほか、この世にあらうや」という神への厚い信頼に到る回心の軌跡を描いた作品でもあるのだ。そこには、「神と人間との狭間に苦悩する」弱さを抱えた一人の人間としての宗麟の姿がある。

六、おわりに

山本周五郎が小石川養生所に関心を持つようになってから実際に『赤ひげ診療譚』を書くまで約三十年かかっている。同様に遠藤周作が大友宗麟に関心を持ち、『王の挽歌』を書くまでも約二十年かかっている。いずれも作品として結実するまで長い年月がかかっているのだ。とすれば、その間に両作家ともに様々な体験をしたり、人間や聖書に対して真摯に向き合ってきたはずである。それだけに作品には作家の人生観や人間観が如実にあらわれていると言えよう。特に『赤ひげ診療譚』では「新出去定の人間観」の中に、『王の挽歌』では大友宗麟の「弱さ」の中に如実にあらわれている。それこそ「人間」を追求し続けた作家としての大きな成果であったのかもしれない。

① 佐藤俊夫「『教養』の外―山本周五郎に見る庶民の倫理―」（『講座比較文学第4巻 近代日本の思想と芸術Ⅱ』東京大学出版会、一九七四・昭和四十九年六月、所収）で次のように指摘する。

彼はけっしていわゆる「庶民」などという特定のなにかを写そうとしたのではなく、いうならば武士という名の庶民、娼婦という名の庶民、職人という名の庶民、つまりは職業や身分や時代や年齢やは異なつても、一貫して変らない人間そのものをこそ描こうとしたにすぎない。いや、さらにいうならば、そのような人間模様とともにある自己みずからをこそ語ろうとしたにすぎない、といえるのではあるまいか。それゆえ、周五郎が庶民を描いたというのならば、描かれたものはじつは周五郎自身の庶民性なのである。このばあい、庶民性は人間性といいかえてもかまわない。（傍線部引用者）

② 遠藤周作・平松守彦「対談 宗麟の時代に学ぶ」（平松守彦『地方から日本を変える グローカルな19人のメッセージ』PHP研究所、一九九七・平成九年十二月）

③ 調査した結果、三本の書評が見つかったが、二本が否定的で一本が肯定的なものであった。否定的な二本の書評を取り上げておく。

趣向は一応面白いのだが、何分に、話がこしらえもので、療養所の経営にしても、貧乏と無知からの不幸にしても。インターンめいた書生のことにしても、現代のそれからの思いつきかと思われる。時代ものなら勝手がききやすいと考えたとすれば、あまりに安易で、いっそ現代ものとして書いたほうがよい。

（「週間図書館」／「週刊朝日」、一九五九・昭和三十四年三月八日号）

近刊『赤ひげ診療譚』などもねらいと意図はなかなかいいのだが、どうも感心できない。庶民の悲惨と困苦をじっくり描き出そうとする意図と、それをスリラーめいた味でおもしろく肉づけしようとする計算が、水と油のようにバラバラになっている。つまり時代小説を現代人の目で、風刺的に、しかもおもしろく描こうという計画が、未消化のまま放出されている。

（「食違った」意図」と「計算」 山本周五郎の『赤ひげ診療譚』／「読売新聞夕刊」、一九五九・昭和三十四年三月十日）

④今回収集できた『赤ひげ診療譚』の参考文献は次のとおり。

- 一、「煮え切らぬ時代小説 山本周五郎『赤ひげ診療譚』」（「週間図書館」／「週刊朝日」、一九五九・昭和三十四年三月八日号）
- 二、「食違った」意図」と「計算」 山本周五郎の『赤ひげ診療譚』（「読売新聞夕刊」、一九五九・昭和三十四年三月十日）
- 三、「健康で穏やかな小説 山本周五郎『赤ひげ診療譚』」（「書評」／「朝日新聞」、一九五九・昭和三十四年三月二十一日）
- 四、荒正人「解説」／『山本周五郎全集 第六卷』（講談社、一九六三・昭和三十八年九月）
- 五、中田耕治「解説」／『赤ひげ診療譚』（新潮文庫、一九六四・昭和三十九年十月）
- 六、河盛好蔵「解説」／『山本周五郎小説全集10 赤ひげ診療譚』（新潮社、一九六七・昭和四十二年七月）
- 七、水谷昭夫「大機里爾と脾臓癌：「赤ひげ診療譚」における死をみつめるもの」（「関西学院大学人文論究」30(1)、一九七〇・昭和四十五年六月）
- 八、山田宗睦『赤ひげ診療譚』／『山本周五郎 宿命と人間の絆』（芸術生活社、一九七四・昭和四十九年十二月）

- 九、荒井貢次郎「赤ひげ医長と小石川養生所―歴史と小説の広場からみた「救貧医療行政史」―」（「東洋」12—10、一九七五・昭和五十年十月）
- 十、尾崎秀樹「赤ひげの時代」／『評論 山本周五郎』（白川書院、一九七七・昭和五十二年七月）
- 十一、水谷昭夫『赤ひげ診療譚』をめぐって―山本周五郎文芸における「罪」の意義／「別冊新評」一九七七・昭和五十二年十二月、のち『永遠なるものとの対話 近代日本文芸の実存的諸問題』（新教出版社、一九八三・昭和五十八年三月）
- 十二、木村久邇典「附記」／『山本周五郎全集第十一卷 赤ひげ診療譚・五瓣の椿』（新潮社、一九八一・昭和五十六年十月）のち『山本周五郎はどう読まれてきたか』（新潮社、一九八六・昭和六十一年九月）所収
- 十三、木村久邇典「〔赤ひげ診療譚〕の新出去定・保本登」／『男としての人生』（グラフ社、一九八二・昭和五十七年九月）
- 十四、水谷昭夫『赤ひげ診療譚』／『山本周五郎の生涯』（人文書院、一九八四・昭和五十九年六月）
- 十五、水谷昭夫「山本周五郎とキリスト教」／伊東一夫編『近代思想・文学の伝統と変革』（明治書院、一九八六・昭和六十一年三月）
- 十六、木村久邇典「赤ひげ診療譚・五瓣の椿」／『山本周五郎はどう読まれてきたか』（新潮社、一九八六・昭和六十一年九月）
- 十七、赤祖父哲二『赤ひげ診療譚』山本周五郎 最後の人格者』／『現代小説を狩る』（中教出版、一九八六・昭和六十一年十一月）
- 十八、上出恵子『赤ひげ診療譚』覚書』（「活水論文集・日本文学科編」30、一九八七・昭和六十二年三月）
- 十九、岩佐壮四郎「赤ひげ診療譚」（「国文学解釈と鑑賞」53(4)、一九八八・昭和六十三年四月）
- 二十、野松盾子『赤ひげ診療譚』論―病むことの意味と生きること』（「燔祭」1、一九八九・平成元年三月）

- 二十一、大田正紀「山本周五郎『赤ひげ診療譚』研究」(『梅花国語国文』4、一九九二・平成四年十月)のち『高貴なる人間の姿形 近代文学と《神》』(彼方社、一九九五・平成七年三月)所収
- 二十二、水谷昭夫『『赤ひげ診療譚』をめぐって―山本周五郎文芸における「罪」の実存』／『別冊歴史読本 山本周五郎読本』(新人物往来社、一九九八・平成十年四月)
- 二十三、木村久邇典『赤ひげ診療譚』／『別冊歴史読本 山本周五郎読本』(新人物往来社、二〇〇〇・平成十二年四月)
- 二十四、近江博子「山本周五郎『赤ひげ診療譚』論…物語世界の時代性」(『光華日本文学』8、二〇〇〇・平成十二年八月)
- 二十五、木村久邇典『赤ひげ診療譚』／尾崎秀樹監修『歴史・時代小説事典』(実業之日本社、二〇〇〇・平成十二年九月)
- 二十六、高橋敏夫「殺すな、盗むなという原則さえ絶対ではない」／『周五郎流 激情が人を変える』(NHK出版、二〇〇三・平成十五年十一月)
- 二十七、長井苑子・泉孝英「文学にみる病いと老い(44)山本周五郎「赤ひげ診療譚」(「介護専門員」10(2))、二〇〇八・平成二十年三月)のち『続・生きつづけるということ 文学にみる病いと老い』(メデュカルレビュー社、二〇〇九・平成二十一年六月)
- 二十八、国松昭「赤ひげ診療譚」／『日本現代小説大事典 増補新版』(明治書院、二〇〇九・平成二十一年一月)
- 二十九、木村久邇典「『赤ひげ診療譚』の新出去定・保本登」／『山本周五郎が描いた男たち』(グラフ社、二〇一〇・平成二十二年八月)
- 三十、木村久邇典「赤ひげ診療譚」／歴史読本編『山本周五郎を読む』(新人物往来社、二〇一二・平成二十

四年一月)

三十一、北影雄幸『『赤ひげ診療譚』の佐八―これで二人が一緒になれる』／『男の風格―山本周五郎』を生きる』(勉誠出版、二〇一三・平成二十五年二月)

三十二、中野新治「解説 本当の幸せに出会うまでの物語」／『山本周五郎長篇小説全集 第七巻 赤ひげ診療譚 おたふく物語』(新潮社、二〇一三・平成二十五年十一月)

三十三、中安信夫「「診立て」とは成因を考慮した病名の暫定的付与であり、それは終わりのない動的なプロセスである.. 山本周五郎著『赤ひげ診療譚』を取り上げて」(『臨床精神医学』43(2)、二〇一四・平成二十六年三月)

⑤ 荒正人「解説」(『山本周五郎全集第六巻』講談社、一九六三・昭和三十八年九月)

『赤ひげ診療譚』は、保本登の感情教育であり、構成の点では、トーマス・マンの『魔の山』を連想させる。(『養生所』という『魔の山』をかりそめに訪れた登は、赤ひげという教師に案内されて、地獄から天界までを見て廻り、信念の更生に成功する。『魔の山』のハンス・カストルプは、足取りおぼつかなく、第一次大戦の始まった下界に降りてゆくが、保本登は、まさをと結婚し、赤ひげの片腕となり、養生所に身を埋める。

⑥ (河盛好蔵「解説」／『山本周五郎小説全集10 赤ひげ診療譚』(新潮社、一九六七・昭和四十二年七月／傍線部引用者)

八つの小話から成るこの長篇は、医は仁術の具現者である赤ひげ先生の言行録でもあれば、施薬院の窓を通して眺められた虐げられた江戸下層民の残酷物語でもある。しかし私はこの作品を保本登の感情教育や人生修業を描いた物語として理解したい。

⑦ 水谷昭夫『『赤ひげ診療譚』をめぐる―山本周五郎文芸における「罪」の実存』(『永遠なるものとの対話 近代日本文芸の実存的諸問題』新教出版社、一九八三・昭和五十八年三月)

周五郎が登の心のなかに聞かせた「罪」は、sin の意味に近く、それもキリスト教的「罪の意識」と共通するものを感じられる。／人間が真の成熟をとげるのは、このような「徒労とみえること」による。そのことによってはじめて可能となる。そこに作品の主題は根をおろしていることがあきらかにされたのだ。「狂気」「死」「莊嚴」「苦悩」、そして「罪の意識」。

⑧ 注⑦に同じ。

⑨ 作品中では、保本登が赤ひげの罪意識について言及する場面がある。この場面は「ヨハネ福音書八章一〜十一節」の姦淫の現場で捕らわれた女の話に通ずるものがある。

― 罪を知らぬ者だけが人を裁く。

登は心の中でそう云う声を聞いた。

― 罪を知った者は決して人を裁かない。

どういう事があったかは知らないが、先生は罪の暗さと重さを知っているのだ、と登は思った。

(「氷の下の芽」／『赤ひげ診療譚』)

⑩ 拙稿「遠藤周作『王の挽歌』論―キリシタン文学の可能性―」(『文学・語学』、二〇一三・平成二十四年三月)

⑪ 次の二点である。いずれも執筆にまつわるエピソードが披露されている。

- 一、「『王の挽歌』を書いた遠藤周作さん 著者インタビュー」(『This is 読売』、一九九二・平成四年九月)
- 二、遠藤周作・平松守彦「対談 宗麟の時代に学ぶ」(平松守彦『地方から日本を変える グローカルな19人のメッセージ』PHP研究所、一九九七・平成九年十二月)

⑫ 「『王の挽歌』を書いた遠藤周作さん 著者インタビュー」(『This is 読売』、一九九二・平成四年九月)

⑬ 次の二点である。

- 一、「遠藤文学における〈ペドロ岐部〉(一)―『留学』『沈黙』を中心として―」(『遠藤周作研究第八号』、

二〇一五・平成二十七年九月)

二、「遠藤文学における〈ペドロ岐部〉(二)——『メナム河の日本人』から『王国への道』まで——」(『京都外
国語大学研究論叢』第八十五号、二〇一五・平成二十七年七月)

⑭ 注②に同じ。

第三章 『王の挽歌』論―「キリシタン文学」の可能性―

一、問題の所在

『王の挽歌』は、一九九〇（平成二）年二月号から一九九二（平成四）年二月号までの約二年にわたって「小説新潮」に二十五回連載されたのち、一九九二（平成四）年五月、新潮社より上巻・下巻として刊行された。キリシタン大名・大友宗麟を主人公とした歴史小説である。遠藤周作はこの時期歴史小説を集中して書いており、『遠藤周作歴史小説集』全七巻（講談社）へと結実していくが、『王の挽歌』はそうした遠藤の歴史小説の成熟を示す作品でもある。このことは、「最後の殉教者」（「別冊文芸春秋」、一九五九・昭和三十四年二月）以来書き継がれていった遠藤の歴史小説の一つの到達点を示すのみならず、芥川龍之介から遠藤へと受け継がれた「キリシタン文学」の可能性を切り開いたものとも見ることが出来る。そこで本稿は「キリシタン文学」としての側面から『王の挽歌』を考察していきたい。

二、遠藤周作の「キリシタン文学」

はじめに「キリシタン文学」の定義から整理しておきたい。一般的なキリシタン文学の定義は「室町末期から江戸初期にかけて、キリシタンが日本文で書いたり、ヨーロッパ語から翻訳したりした宗教文学。広くは、キリシタンの日本語学習のための、物語類を含む。「伊曾保物語」「日葡辞書」など。南蛮文学。」①を意味するが、近

代文学においては「室町末期から明治初期にかけてのキリシタンを題材とした作品」と広義に捉えることができる。この定義は、遠藤の歴史小説にそのまま当てはまる。

拙稿②で整理を試みたが、遠藤の歴史小説は三つの時期に分けることが出来る。すなわち、『沈黙』（新潮社、一九六六・昭和四十一年三月）を代表とする第一期（一九五九～一九六九）「切支丹物」、『侍』（新潮社、一九八〇・昭和五十五年四月）を代表とする第二期（一九七〇～一九八〇）「評伝」、そして『遠藤周作歴史小説集』全七巻（講談社）を代表とする第三期（一九八〇～一九九六）「歴史群像」である。

これらの三つの時期は、芥川の「切支丹物」を遠藤がどのように受容し展開していったのかを示す過程として見ることもできる。第一期（一九五九～一九六九）「切支丹物」では、芥川の「切支丹物」を受容し、殉教や日本の精神風土の問題など芥川と共通する課題に取り組み、第二期（一九七〇～一九八〇）「評伝」では切支丹時代を背景に海外へ勇躍した日本人を主人公として、個人の内面を描くことで「日本人にあったキリスト教」を追求し、第三期（一九八〇～一九九六）「歴史群像」では主人公のみならず多くの「視点人物」を配置し、複数の視点を交錯させながら、「歴史」を物語っていく。つまり、遠藤は第一期「切支丹物」で芥川の「切支丹物」を受容し、第二期「評伝」、第三期「歴史群像」へとキリシタン文学を展開していったとも言える。

以上のことを示す例として「日本泥沼説」を取り上げたい。「日本泥沼説」とは、『沈黙』の次の箇所が登場する。フェレイラが日本の現状をロドリゴに語る場面である。

「この国は沼地だ。やがてお前にもわかるだろうな。この国は考えていたより、もっと怖ろしい沼地だった。どんな苗もその沼地に植えられれば、根が腐りはじめる。葉が黄ばみ枯れていく。我々はこの沼地に基督教という苗を植えてしまった」

「お前には何もわからぬ。澳門やゴアの修道院からこの国の布教を見物している連中には何も理解できぬ。

デウスと大日と混同した日本人はその時から我々の神を彼等流に屈折させ変化させ、そして別のものを作り

あげはじめるのだ。言葉の混乱がなくなったあと、この屈折と変化とはひそかに続けられ、お前がさつき口にだした布教がもつとも華やかな時でさえも日本人たちは基督教の神ではなく、彼等が屈折させたものを信じていたのだ」

（傍線部引用者／遠藤周作『沈黙』）
フェレイラは日本宣教に長年従事してきた結論として、基督教を「屈折させ変化させ」る日本の精神風土を「沼地」と呼んでいる。芥川の「神神の微笑」における「造り変える力」③に通ずる考え方である。ただし、「神神の微笑」ではあくまでも大日靈貴をはじめとする日本古代の神々が持つ力のことを「造り変える力」と呼んでいるのに対し、『沈黙』では日本人が「変化させ屈折させ」ているのだ。このあたりに遠藤の芥川受容の問題が潜んでいる。

さて、こうした「神神の微笑」と『沈黙』の類似性は佐古純一郎④をはじめ多くの研究者が既に指摘してきたところだが、問題は、『王の挽歌』でも「日本泥沼説」が登場するところにある。しかも今度は、フェレイラではなく日本に最初に基督教を伝えたフランシスコ・ザビエルが語っているのである。

「この国は私がゴアで想像していたような国ではなかった。この国には我々が考えもつかなかった泥沼があるような気さえます。我々が植える苗の根をいつか腐らせてしまう沼が：」／それから彼は言葉を切つて苦しそうに、／「あるいは本来の苗とは似ても似つかぬ植物に変えてしまうような：」

「時折、私は思うのですが：、ひよつとすると我らのただ一つの神をいつの間にか大日如来にすり替え、天国を浄土に変えるような何か怖い不気味な力がこの日本人の心の奥にかくれているではありませんか。日本人のそんな屈折力は、これから基督教布教の上で大きな障害になるように思います」

（傍線部引用者／「家形とパードレ」『王の挽歌』）

フランシスコ・ザビエルが二年三カ月の日本滞在を終えインドへ去るにあたって日本宣教の問題を語る場面である。『沈黙』で日本宣教に何十年も取り組んできたフェレイラが語る「日本泥沼説」に比べると、日本語もほと

んどわからないザビエルがどこまで日本人や日本の精神風土を理解していたか説得力に欠けることは否めない。ただし、ここで「神神の微笑」や『沈黙』とも異なるのは、「造り変える力」が「日本人の心の奥にかくれている」とする心の問題に言及されている点である。遠藤は「第三のディメンション」として「魂」の問題を初期作品から追求し続けており、『スキヤンダル』（新潮社、一九八六・昭和六十一年三月）で一つの到達点を示す。『王の挽歌』では主人公の大友宗麟の内面の変化が克明に描かれるが、ここでのザビエルの「日本泥沼説」にも反映したと見ることが出来る。そこに芥川の「神神の微笑」における日本の精神風土の問題を受容し、『沈黙』から『王の挽歌』へと展開した遠藤の軌跡がある。

三、『王の挽歌』成立をめぐる問題

繰り返すが『王の挽歌』の主人公は大友宗麟である。だが、大友宗麟を描いた歴史小説⑤は意外に少なく、遠藤がいつ頃から大友宗麟に関心を持ったのかはよくわからない。遠藤の父遠藤常久が白水甲二のペンネームで書いた『きりしたん大名 大友宗麟』（春秋社、一九七〇・昭和四十五年九月）⑥なども大友宗麟に関心を寄せる一つのきっかけとなったであろうが、執筆時期に差がありすぎて確定はできない。おそらくヘペドロ岐部への関心が先にあつて、出身地である国東半島や「天正少年使節」を派遣した一人とされる大友宗麟を調べているうちに興味が湧いたということであろう。ヘペドロ岐部を主人公にした『銃と十字架』（初出…「中央公論」、一九七八・昭和五十三年一月号〜十二月号）の「あとがき」によると、遠藤がヘペドロ岐部に興味を持ち始めたきっかけは、「十数年前にふと読んだチースリック教授の論文」⑦であるという。この言葉をそのまま信じるなら、チースリック教授の論文が発表された一九六二年か、遠藤がチースリック教授に師事した一九六五年頃か

らペドロ岐部に関心を持ち始めたことになる。そこから十年以上をかけて現地取材⑧などを経て『銃と十字架』を書きあげたのだ。同様に、『銃と十字架』発表から十年以上かけて現地取材⑨や歴史研究⑩を重ねて『王の挽歌』を書き上げたことになる。

以上のような経過で『王の挽歌』は成立したのだが、「小説新潮」に連載された初出と新潮社より刊行された初版本には異同があるので一つだけ指摘しておきたい。初出と新潮社本を比べると、宗麟の義兄田原紹忍を田原親賢にするなど、読みやすくするための推敲がなされてはいるが、本文中で大きく変更されたところはない。問題となるのは、「二階崩れの変」と呼ばれる事件を描いたところである。初出の「小説新潮」では「第二回 父殺し(一)」「第三回 父殺し(二)」という章題であったが、新潮社版では「父の血によって」に変更されている。この理由について考えたい。

「二階崩れの変」はいわゆるお家騒動である。父義鑑が宗麟を廃嫡し、義母弟の塩市丸に家督を譲ろうとしたことが原因となり、宗麟の父義鑑と義母小少将、塩市丸が家臣に殺され、さらには謀反者として宗麟の守役だった入田親誠も殺され、結果として宗麟が家督を継ぐことになった事件である。ただし、「二階崩れの変」の原因については諸説がある。外山幹夫氏は『大友宗麟 人物叢書』（吉川弘文館、一九七五・昭和五十年二月）で、塩市丸の実母が入田親誠と提携し、義鑑に塩市丸の家督相続を働きかけたことは疑問の余地がないとしている。また、芥川龍男氏⑪は塩市丸擁立の背景として、宗麟の母の出自である大内氏の勢力を排除しようとする義鑑の配慮と義鑑の忠臣入田親誠の陰謀という近年の二つの説を紹介している。『王の挽歌』では宗麟の母の出自である大内氏の勢力を排除しようとする動きと、宗麟の叔父菊池義武の陰謀に入田親誠が協力したとしている点からも概ね芥川龍男氏が紹介した近年の説を踏襲したものとと言える。一方、事件の結果一番得をした人物、すなわち宗麟が「父殺し」の首謀者ではないかという疑惑もある。海音寺潮五郎⑫や渡辺澄夫氏⑬などは宗麟の事件処理があまり水際立っているのかえって怪しいと臆測されている。遠藤も当然この宗麟黒幕説を知っていたので、

「小説新潮」連載の際には、「第二回 父殺し(一)」という章題をつけ、章題の左に父を殺したオイディプスについてのギリシャ悲劇の言葉を引用したのである。この回では事件の前提である、大内氏の血をひく宗麟廢嫡の動きと、塩市丸の実母の陰謀のみが暗示されるところまでが描かれている。そして次の「第三回 父殺し(二)」で「二階崩れの変」が描かれるのであるが、ここに到りそれまで「弱者」^⑭として描いてきた宗麟像と「父殺し」を犯すほどの乱暴者の宗麟^⑮では齟齬が生じるため、宗麟黒幕説を排除したのではないだろうか。要するに、「第二回 父殺し(一)」と「第三回 父殺し(二)」の間の内容変更に伴い、新潮社版の章題が「父の血によって」に変更されたと考えられるのである。

四、死をめぐる問題

『王の挽歌』はタイトルが示す通り人間の死に様が通底音として作品全体に響いている。前半（初出では第一部、新潮社本では上巻）では大友宗麟が様々な人間の死に直面し、死への恐怖や死を迎える心境に思い悩み、後半（初出では第二部、新潮社本では下巻）では、基督教の信仰のもとで死を静かに迎え入れる。

宗麟が会う最初の大きな衝撃は幼い頃の母の死である。母は海の記憶ともつながり、宗麟にとって幸福を感じることできた唯一の相手であった。だが、母の死によって何もかもが変ってしまう。そして「二階崩れの変」により父と守役の入田親誠が死ぬ。特に教育をしてくれた入田親誠の裏切には衝撃を受け、宗麟を人間不信に陥れる。こうした三人の死は、宗麟の人格形成に大きな影響を与え、心の闇を形成する。

父の死によって、大友家の「家形」となった宗麟の前には戦国武将の多くの死が報告される。最初に知らされたのは大内義隆の死である。宗麟は、叔父であり自分と同じ文雅を愛し、多彩な才能を持った大内義隆に自分と

似たものを感じていたが、その叔父が家臣の謀叛にあつて死んだ。大内義隆の臨終の言葉は、「臨終の間には無念無想に住すべきことこそ肝要にて候やらん」であつた。次にその叔父を殺した陶晴賢の死を知り、世の無常を知る。

（覇者は次々と死んでいく。この下剋上の世、余とても何時：）

宗麟は陶晴賢が死の瞬間、何を思ったのか、それが知りたかつた。まさに自決せんとする晴賢の心をおのれのそれに重ねあわせ考えて秋の空気のなかで彼はじつと坐っていた。

（傍線部引用者／「宗麟対元就」『王の挽歌』）

宗麟はここでも死を迎える境地が気にかかっている。続いて実の弟である大内義長の死を知る。毛利元就との駆け引きのため宗麟が見捨てたために死んだのだが、この二人の辞世の句は「陰徳太平記」から引用されている。まさに挽歌である。

また、宗麟の正室矢乃によつて側室の服部右京亮の女が殺される。嫉妬した矢乃が家臣に火をつけさせたのだ。服部右京亮の女は火の中で次のように言う。

「これにて：恥多き生涯を終え、亡き右京亮さまに：お詫び申しあげる、と」

（「女の死」『王の挽歌』）

夫を殺した宗麟の慰み者になっている苦しみが読みとれる。その服部右京亮の女を殺した矢乃も宗麟に離別され、孤独の内に死んでいった。二人とも宗麟に苦しめられて死んだのである。宗麟は二人の死後を気にしていたがラグーナ神父は次のように答える。

「神のもとに還りし者はみな愛の光に包まれます。その御女性も、国主さまを今は許しておられます」

宗麟の痩せこけた頬に涙がゆっくりと流れおちた。あの苦しんだ女が、今、愛の光に包まれている。

「パードレ、亡くなった矢乃もその愛の光に包まれるであろうか」

ラグーナ神父は、

「私一人の考えでございませうが：そう、思うております」

（「臨終の頃」『王の挽歌』）

ラグーナ神父の語る、宗麟を恨んで死んだ二人とも神のもとに還り「愛の光に包まれ」、宗麟を赦しているというのはカトリックの教義から外れた特異な死生観である。キリシタンではない服部右京亮の女と矢乃が果たして神のもとに行けるかどうかも疑問である。だが、この話を聞いた宗麟が慰めを受けたことは確かである。こうして宗麟は静かな死を迎えることができたわけだが、『王の挽歌』はさらに宗麟の長男・大友吉統の死も描く。吉統は基督教の禁教令や朝鮮侵攻などで秀吉に翻弄され続けた末、関ヶ原の合戦では敗軍の将となり、最後には秋田で幽閉されて死ぬのだが、最後に信仰が復活し、「頼るものは神のほか、この世にあらうや」という父の言葉を理解したとある。つまり、宗麟の死を迎える心境を吉統の視点で描いているのである。

五、魂のドラマ

先に述べたように、『王の挽歌』には『スキヤンダル』以来の無意識の問題が追求されている。いわば心理小説としての側面があるのだ。そのことは、最初の宗麟と秀吉の謁見の場面だけを見てもわかる。宗麟、秀吉、千利休それぞれの心の動きが克明に描かれているからである。中でも宗麟は直感に鋭く、成り上がり者の秀吉にどう合わせたらよいのかを直ぐに理解し、千利休のうす笑いの意味を直ぐに悟る。しかも、この宗麟の鋭敏さは他人ばかりではなく自分自身にも向けられる。そこから「心の奥の奥底」に入っていく。

宗麟は「暗い思い出」を抱えている。「二階崩れの変」で自分を教育してくれた入田親誠の裏切りを知ったこと

と、父の死にほっとしながら家臣の前では沈痛な表情を装っている自分の偽りの姿に、他人ばかりか自分さえも信じられなくなった体験である。「誰も信じられない」という人間不信は宗麟の心の奥底に暗い闇を形成する。そうした宗麟の心の闇を象徴する場面が、無明の闇である。

(余にさえも：この余が：わからぬ) / 臼杵の闇は府内のそれより深く濃い。遠くで海の音がする。海鳴りを聞きながらまるで自分の心は闇そのものだ」と宗麟は思う。心の闇、無明の闇、一灯も見えぬ路を彼は供と共に馬で城に戻る。

(傍線部引用者 / 「無明の闇」『王の挽歌』)

宗麟はこの闇を自分が殺した謀反人服部右京亮の女を慰み者にした帰り道に見るが、「無明の闇」に「心の闇」が重ねられていることは明らかであろう。

しかし、宗麟の「心の闇」に働きかける人物がいた。ザビエル神父である。ザビエル神父は「みじめな裸の姿にて磔となった」イエスの姿に重なるように痩せたみすばらしい姿をしているが、「誰も信じられない」宗麟にとって唯一信じられる人物であった。しかも、ザビエル神父は宗麟の母と共に心の同伴者として常に宗麟の傍にいて。それを象徴するのが「眼ざし」である。

青年の時、壮年の折、彼は自分が何者か自身でもわからず、時には肉慾にふけり、時には冷酷な仕打を行ったがそんな時、遠くからザビエルの哀しげな眼が彼を見ているような気がした。それは彼を責めるのではなく、むしろ宗麟の苦しみを共にわかち合おうとするような眼ざしだった。あの眼ざしは亡き母のそれと重なりあい、彼は現在の妻、露のなかにもそれを見出した。その眼ざしと同じものをヴァリニャーノ神父も持っていた。

(下「ヴァリニャーノ神父の野望」)

この「眼ざし」によって、ザビエル神父、宗麟の母、現在の妻露、ヴァリニャーノ神父が繋がりに、宗麟の「心

の同伴者」が明らかにされる。しかもこの連鎖の先には神の「眼ざし」があることは確かである。そこに宗麟の信仰も見てとれる。以上のように『王の挽歌』には宗麟の「心の闇」が神へと向かう魂のドラマがあり、宗麟の心の軌跡が見事に描かれた作品となっている。ここにキリシタン文学としての新局面を見てとれよう。

① 『日本国語大辞典第二版』（小学館、二〇〇一・平成十三年四月）

② 拙稿「遠藤周作の「歴史小説」の一側面」（「遠藤周作研究」第四号、二〇一一・平成二十三年九月）

③ 芥川龍之介「神神の微笑」（「新小説」、一九二二・大正十一年一月）でもあらゆるものを屈折させ変化させる力について次のように述べられている。

「（略）しかし我々の力と云うのは、破壊する力ではありません。造り変える力なのです。」

「事によると泥烏須自身も、この国の土人に変るでしょう。支那や印度も変ったのです。西洋も変らなければなりません。我々は木々の中にもいます。浅い水の流れにもいます。薔薇の花を渡る風にもいます。寺の壁に残る夕明りにもいます。どこにでも、またいつでもいます。御気をつけなさい。御気をつけなさい。…」

（傍線部引用者）

④ 佐古純一郎「芥川竜之介の『神神の微笑』と遠藤周作の『沈黙』」（「聖心女子大学論叢」、一九六六・昭和四十一年十二月）

⑤ 『王の挽歌』以前に大友宗麟を主人公にした作品は管見のかぎり次の五冊だけである。

一、白石一郎『火炎城』（講談社、一九七四・昭和四十九年）

二、赤瀬川隼『王国燃ゆ 小説 大友宗麟』（講談社、一九八七・昭和六十二年八月）

三、御手洗一而『大友宗麟 二階崩れの巻』（新人物往来社、一九八九・平成元年八月）

四、高山由紀子『国東物語 ドン・フランシスコ・大友宗麟』（八重岳書房、一九八九・平成元年九月）

五、風早恵介『大友宗麟』（青樹社、一九八九・平成元年十月）

だが、『王の挽歌』以後には次の九冊があり、徐々に注目を浴びるようになったことが分かる。

- 一、御手洗一而『大友宗麟 戦国求道の巻』（新人物往来社、一九九〇・平成二年九月）
- 二、御手洗一而『大友宗麟 毛利合戦の巻』（新人物往来社、一九九三・平成五年一月）
- 三、高山由紀子『ドン・フランシスコ・大友宗麟』（八重岳書房、一九九四・平成二年五月）
- 四、小石房子『豊後の王妃イザベル…キリシタン大名大友宗麟の妻』（作品社、一九九五・平成七年三月）
- 五、御手洗一而『大友宗麟 王道幻想の巻』（新人物往来社、一九九五・平成七年三月）
- 六、高橋直樹『大友二階崩れ』（文芸春秋、一九九八・平成十年八月）
- 七、水上あや『花の反逆大友宗麟の妻』（叢文社、二〇〇〇・平成十二年一月）
- 八、櫻田啓『幻のジパング…大友宗麟の生涯』（文芸社、二〇〇五・平成十七年十二月）
- 九、米田一雄『さまよえる戦国大々名大友宗麟』（文芸社、二〇一一・平成二十三年二月）
- ⑥『王の挽歌』と『きりしたん大名 大友宗麟』の関連については、山田都与「遠藤周作『王の挽歌』と白水甲二『きりしたん大名 大友宗麟』」（『金城日本語日本文化』、二〇〇八・平成二十年三月）で論じられている。
- ⑦H・チースリック「世界を歩いた伴天連―岐部神父の生涯」（『上智史学』、一九六二・昭和三十七年六月）
- ⑧取材日記とも言うべきエッセイの一つに「石仏の里 国東」（初出「太陽」、一九七七・昭和五十二年七月号）がある。この中では、国東半島の研究書として和歌森太郎編『くにさき 西日本民俗・文化における地位』（吉川弘文館、一九六〇・昭和三十五年）と中野幡能『古代国東文化の謎 宇佐神道と国東文化』（新人物往来社、一九七四・昭和四十九年）の二冊を挙げている。
- ⑨『王の挽歌』の取材日記として、大友宗麟がキリスト教の理想王国建設を夢見た地を調査する会社員の話である短篇小説「無鹿」（『別冊文芸春秋』、一九九一・平成三年春号）がある。また、大分にある数々の古城を訪れたことは、『王の挽歌』本文中でも数多く言及されている。

⑩ 『王の挽歌』に関連する歴史資料は次のようなものがある。

- 一、ジアン・クラセ著『日本西教史』（太陽堂書店、一九三一・昭和六年五月）
- 二、松田毅一『きりしたん大名 大友宗麟』（中央出版社、一九四七・昭和二十二年八月）
- 三、ミカエル・シュタイン著、吉田小五郎訳『キリシタン大名』（乾元社、一九五三・昭和二十八年五月）
- 四、和歌森太郎編『くにさき 西日本民俗・文化における地位』（吉川弘文館、一九六〇・昭和三十五年）
- 五、レオン・パジェス著、吉田小五郎訳『日本切支丹宗門史（上）（中）（下）』（岩波書店、一九六〇・昭和三十五〜一九六二・昭和三十七年）
- 六、松田毅一『天正少年使節』（角川新書、一九六五・昭和四十年八月）
- 七、海音寺潮五郎「大友宗麟」／『武將列伝 中』（文芸春秋、一九六六・昭和四十一年十一月）
- 八、白水甲二（遠藤常久）『きりしたん大名 大友宗麟』（春秋社、一九七〇・昭和四十五年九月）
- 九、中野幡能『古代国東文化の謎 宇佐神道と国東文化』（新人物往来社、一九七四・昭和四十九年）
- 十、中村真一郎「大友宗麟」／『日本史探訪 第十一集』（角川書店、一九七四・昭和四十九年七月）
- 十一、田中千禾夫「大友宗麟」／『人物日本の歴史9 戦国の群雄』（小学館、一九七五・昭和五十年一月）
- 十二、外山幹夫『大友宗麟 人物叢書』（吉川弘文館、一九七五・昭和五十年二月）
- 十三、渡辺澄夫『大分の歴史第四卷 キリシタン大名 大友宗麟』（大分合同新聞社、一九七八・昭和五十二年八月）
- 十四、ルイス・フロイス著 松田毅一・川崎桃太訳『日本史6…豊後篇1』（中央公論社、一九七八・昭和五十三年八月）
- 十五、ルイス・フロイス著 松田毅一・川崎桃太訳『日本史7…豊後篇2』（中央公論社、一九七八・昭和

五十三年十月)

十六、ルイス・フロイス著 松田毅一・川崎桃太訳『日本史8…豊後篇3』(中央公論社、一九七八・昭和五十三年十二月)

十七、芥川龍男編『大友宗麟のすべて』(新人物往来社、一九八六・昭和六十一年四月)

十八、『武功夜話 前野家文書 全四巻・補巻』(新人物往来社、一九八七昭和六十二年～一九八八・昭和六十三年)

十九、外山幹夫『大友宗麟 人物叢書新装版』(吉川弘文館、一九八八・昭和六十三年十二月)

二十、桑田忠親「大友宗麟」／『新編日本武將列伝5』(秋田書店、一九八九・平成元年十月)

⑪ 「宗麟の生涯―その転機―」／芥川龍男編『大友宗麟のすべて』(新人物往来社、一九八六・昭和六十一年四月) 所収

⑫ 海音寺潮五郎「大友宗麟」／『武將列伝 中』(文芸春秋、一九六六・昭和四十一年十一月)

⑬ 『大分の歴史第四巻 キリシタン大名 大友宗麟』(大分合同新聞社、一九七八・昭和五十三年八月)

⑭ 『王の挽歌』の大友宗麟は、病弱で「武辺に生れるよりは都の公卿に生れたかった」と考える少年として描かれている。

⑮ 宗麟が少年時代から粗暴と乱行に明け暮れていたとする説は多い。前出の芥川龍男氏(注⑩に同じ)によれば、『大友興廃記』に終始手のつけられない粗暴な若者として描かれてあり、『信長公記』に述べられている若き日の織田信長とそっくりだとしている。

第四章 遠藤文学における〈ヘペドロ岐部〉(三) — 『女』を中心として —

一、〈ヘペドロ岐部〉の問題

本稿は、「遠藤文学における〈ヘペドロ岐部〉(一) — 『留学』『沈黙』を中心として —」(「遠藤周作研究」第八号、二〇一五・平成二十七年九月)と「遠藤文学における〈ヘペドロ岐部〉(二) — 『メナム河の日本人』から『王国への道』まで —」(「京都外国語大学研究紀要」、二〇一五・平成二十七年七月)に続く論考である。

拙稿では、従来見過ごされて来た遠藤文学における〈ヘペドロ岐部〉の役割を見直すため、様々な作品を取り上げて来た。「遠藤文学における〈ヘペドロ岐部〉(一) — 『留学』『沈黙』を中心として —」では遠藤の「歴史小説」の第一期を対象とした。遠藤文学で〈ヘペドロ岐部〉の名前が初めて登場する『留学』と、名前は登場しないが間接的に大きな影響を与えている『沈黙』を中心に考察した。その結果、『留学』では、「弱者」の荒木トマスとは対照的な「強者」として〈ヘペドロ岐部〉が登場していること、『沈黙』では、ロドリゴのポルトガルから日本へ渡る苦難の旅がH・チースリック『キリシタン人物の研究』(吉川弘文館、一九六三・昭和三十八年十二月)にある〈ヘペドロ岐部〉がポルトガルから日本へ帰国した時の記録を参考にして描かれていることや作品の時代背景である一六三九年が〈ヘペドロ岐部〉と関連して設定された年であることが明らかとなった。

続いて「遠藤文学における〈ヘペドロ岐部〉(二) — 『メナム河の日本人』から『王国への道』まで —」では遠藤の「歴史小説」の第二期を対象とした。〈ヘペドロ岐部〉が初めて登場人物として描かれた『メナム河の日本人』、〈ヘペドロ岐部〉の出身地である国東半島や捕まった東北の水沢などの取材旅行の記録とも呼べる数編のエッセイ、さらに初めて主人公として描かれた『銃と十字架』、山田長政と対照的な生き方をしたもう一人の主人公として描

かれた『王国への道―山田長政―』（平凡社、一九八一・昭和五十六年四月）などである。この期の特徴は、ヘペドロ岐部が主に山田長政と対照的な人物として描かれたことにある。山田長政が「地上の王国」を目指したのに対し、（ヘペドロ岐部）は「神の王国」を目指して、それぞれが自己の信念に殉じたとしている。史実としては、二人が交流したという記録は残されていないが、同じ時期にタイのアユタヤにいたことがあるという状況証拠から遠藤は作家の想像力を働かせて、二人が同質の人間であり、目指す方向だけが違っていたとし、全く異なる生き方をした二人の人生がアユタヤの地で交錯したという一点にドラマを見ている。

以上のように遠藤文学における（ヘペドロ岐部）を追って来たわけだが、遠藤の「歴史小説」の第三期だけが残った。第三期で（ヘペドロ岐部）が関連するのは『王の挽歌』と『女』の二作品だけである。『王の挽歌』は（ヘペドロ岐部）が間接的に登場し、『女』には（ヘペドロ岐部）が直接登場する。『王の挽歌』における（ヘペドロ岐部）については拙稿①で述べたが、「神の王国」を目指した大友宗麟の姿に反映したものであった。そこで本稿では、『女』における（ヘペドロ岐部）の役割を考察していくこととする。

二、『女』における「歴史小説」の問題

『女』は（ヘペドロ岐部）が登場する最後の「歴史小説」である。と同時に遠藤周作の完結した最後の小説でもある。いずれにせよ最後の作品であるだけに、「歴史小説」の集大成という意味を持っており、作品冒頭と終結部には作者の「歴史小説」への愛着が吐露されている。また、『女』は遠藤の「歴史小説」の中で最も長い時代を背景として最も多くの主人公が登場し、「歴史群像」が繰り広げられる。そこで、『女』を遠藤の「歴史小説」の重要な要素である時代背景、トポス、キリスト教の三つの観点から考察し、その中の（ヘペドロ岐部）の位置を確認

したい。

第一に時代背景の問題。『女』は、豊臣秀吉が織田信長に仕えた一五五〇年頃から始まり、大奥での女のたたかいに加代が敗れた一八五〇年頃に終わっている。約三百年にわたる女たちのたたかいの歴史が描かれた長篇小説である。このうち吉乃、お市、淀などの戦国時代の女性を描いた前半と、春日局に始まる大奥での女の戦いを描いた後半の二つに大別できる。〈ペドロ岐部〉が登場する「切支丹弾圧」の章は、前半と後半の境目に位置する。この時は三代將軍徳川家光の時代で、乳母であり家光の絶対的信頼を抛り所に春日局は権勢をふるい、「女のたたかい」の舞台である大奥を整備し始めていた頃であった。家光にとって最大の戦いであった島原の乱が終結し、切支丹弾圧を強化した中で捕まったのが〈ペドロ岐部〉であったのだ。結局〈ペドロ岐部〉は殉教するが、その十数年後には春日局も家光も亡くなる。重要なのは「家光の死とともに戦国時代が終った」ことである。小西行長の遺臣が活躍した島原の乱も終わり、戦の世の中が終わったことで前半が終り、春日局が「女の戦い」の場所である大奥の礎を作り後半が始まったその境目に〈ペドロ岐部〉のエピソードが位置しているのである。

また、『女』の時代背景である約三百年は遠藤周作がこれまで描いてきた「歴史小説」とほぼ重なる時代でもあった。列举すると、「武功夜話」を史料として生み出された戦国三部作『反逆』、『決戦の時』、『男の一生』。織田信長にまつわるエピソードを描いた『黒ん坊』と『二条城の決闘』。小西行長を描いた『鉄の首枷―小西行長伝―』と『宿敵』。大友宗麟を描いた『王の挽歌』と「無鹿」。支倉常長を描いた『侍』。〈ペドロ岐部〉を描いた『メナム河の日本人』、『銃と十字架』、『王国への道―山田長政伝―』。フェレイラを描いた『沈黙』。長助とおはるを描いた『召使たち』などである。

基本的に遠藤の「歴史小説」の時代背景は、一五四九年のキリスト教伝来から、一八七三年キリシタン禁制が廃止されるまでの「切支丹時代」となっていることを考えると、「浦上四番崩れ」を描いた『最後の殉教者』『女の一生 第一部・キクの場合』を除くほぼ全ての「歴史小説」の時代背景と重なることになる。ちなみに、「浦上

四番崩れ」の時代は描かれませんが、「浦上四番崩れ」が起った場所として長崎の浦上村は紹介されている。その意味でも『女』は遠藤の「歴史小説」全てに関わる、まさに集大成と呼ぶことができる。

第二にトポスの問題。拙稿②で論じたように、元来遠藤文学における作品舞台は単なる地理的空間ではなく人間の〈劇〉が生成される文学空間としてのトポスであった。とりわけ『女』はトポスとしての意味が大きい。作中の〈私〉も次のように語っている。長くなるが引用したい。

歴史の好きな私は小説を書くために取材するのではなく、歴史的人物の生涯に好奇心があるから色々な土地を歩きまわった。

この小説のなかで、何度もたずねたのは、やはり信長の妹、お市が新婚生活を送った清水谷である。

(中略)

更にたびたび足を運んだのは愛知県江南市の生駒屋敷の跡である。

(中略)

「武功夜話」のすべてを信ずるわけにはいかないが、もしこれが事実とするならば、信長も秀吉も家康もこの風景を見た筈である。

彼等の見た同じ風景を自分もまた眺めているという快感は、私のような歴史好きには言いようのない悦びである。

そうした快感の上に成立したのがこの「女」なのだ。はじめに小説があったのではなく、私の好奇心の上にこの小説が成立したのである。

(「終曲」／『女』)

ここでは〈私〉を通して作品成立の由来が語られている。お市が新婚時代を過ごした清水谷や信長、秀吉、家康が若い時代を過ごした生駒屋敷の跡など歴史舞台としてのトポスに対する遠藤の好奇心が先にあり、そこから

「歴史小説」が生まれたのだという。しかも、「信長の子供たち」で生駒屋敷のあった愛知県江南市小折町と、「お市の結婚」でお市が新婚時代を過ごした北琵琶の滋賀県湖北町の小谷城、清水谷の二つの場所から物語が始まっていることからこの二箇所の重要性は明らかであろう。

また、後半の重要な作品舞台である大奥に關しても（私）は似たような発言をしている。

大奥は今存在しない。私は何度か東御苑（江戸城本丸跡）を散策したが、躑躅の咲き誇る庭園から、かつての大奥を含めた巨大な建物を想像することは不可能だった。

しかし、その場所で、女の烈しい闘いがくり展げられた事は記録を見ても確かであり、そこに一生をかけて勢力を強めようとした女たちが生きていた事も確かである。

そこがもはや存在しないだけに、私の想像力は刺激された。

（「終曲」／『女』）

つまり、『女』における作品舞台は、（私）の好奇心を満たし、想像力を刺激する特別な文学空間としてのトポスであったのだ。そのため（私）は歴史の舞台となった場所である清水谷、生駒屋敷の跡、東御苑を何度も訪れ、その時に感じたことも作品で繰り返し述べている。他にも、幼い石田三成が小僧をしていた観音寺（滋賀県坂田郡山東町）荒木村重の家族や豊臣秀次の家族、小西行長、石田三成らが処刑された京都・賀茂川の三条河原や六条河原、小西行長がつかまつた伊吹山中の糟賀部村、豊臣秀頼の首が埋葬された京都嵯峨の清涼寺、シドツチの幽閉された切支丹屋敷（東京都文京区小日向一丁目）、加代が遠島となった三宅島なども実際に訪れている。また、作中で（私）が訪れたとは語っていないが、支倉常長の取材で訪れた支倉村、（ペドロ岐部）が捕まった東北の水沢、淀の方が壮絶な最後を遂げた大坂城、島原の乱の中心地である原城の跡なども当然繰り返し訪れており、その場所でも多くの刺激を受けたことは間違いない。

第三にキリスト教の問題。一瞥すると明らかであるが、『女』ではキリスト教に関する出来事は極力避けられる

傾向がある。このことは同じ「武功夜話」を典拠とした戦国三部作でも同様であった。例えば、『男の一生』の主人公である前野将右衛門は実際はキリシタンであるにもかかわらず、作品ではキリスト教を勧められたけど断つたとか出てこなかった。おそらく話の主眼が織田信長、豊臣秀吉、徳川家康という戦国大名を描くことにあつたせいかもしれない。が、そもそも作品冒頭部の「信長の子どもたち」と同じ頃の一五四九年にはフランシスコ・ザビエルによるキリスト教伝来があつた。「終曲」で加代が失墜したのと同じ頃の一八四二年には浦上二番崩れが、一八五六年には浦上三番崩れが起きた。いずれもキリスト教だけではなく日本の歴史としても重要な事件であるのに、作品で触れることはなかった。他にも信長や秀吉とも面識のあつたルイス・フロイスやヴァリニャーノも作中人物として登場することはなかったし、信長を倒した明智光秀の娘である細川ガラシャや信長と秀吉に仕えた高山右近、徳川家康に侍女として仕えたジュリアおたあとといった有名な切支丹も登場することはなかった。こうした中で、「島原の乱」「切支丹弾圧」「大奥」「長助とおはる」の四つの章が切支丹を描いているのは注目される。とりわけ「切支丹弾圧」で〈ペドロ岐部〉を中心に描いているのはキリスト教を避けていた『女』の中では特異なことと言えよう。

三、「弱者」の問題―山田右衛門作

次にキリスト教と関連する「島原の乱」「切支丹弾圧」「大奥」「長助とおはる」の四つの章を取り上げる。これらの章では、『沈黙』以来の文学的課題である「弱者」と「強者」の問題が如実にあらわれている。島原の乱で仲間を裏切り棄教した「弱者」の山田右衛門作と殉教を遂げた「強者」の〈ペドロ岐部〉、シドッチ、長助とおはるである。そこで「弱者」の山田右衛門作の問題から考えていきたい。

『女』の中で、山田右衛門作は「島原の乱」「切支丹弾圧」「大奥」の三章にわたって登場する。戦国大名でもなく将軍でもない人物が複数回登場するのは異例であり、それだけ作者の思い入れが強かったと言える。また、右衛門作は島原の乱の唯一の生き残りであり、遠藤の先輩作家である堀田善衛が『海鳴りの底から』で重要人物として描いたこともある。島原の乱では仲間を裏切り敵に情報を流したことから「日本のユダ」③とも呼ばれることもある。遠藤は島原の乱やイスカリオテのユダに深い関心を寄せていたことから右衛門作はいつ小説化してもおかしくない人物であった。ところが、『女』にいたるまで右衛門作についてエッセイも書かれたことがないし、島原の乱を舞台とした小説もほとんど見当たらない。恐らく堀田善衛が『海鳴りの底から』のような大作を先に発表してしまったため、遠慮をしたのかあるいは書く自信を失ってしまったのかもしれない。そのため、『女』は遠藤文学において島原の乱を描いた唯一の小説となっている。

では「島原の乱」の章を見よう。三代将軍家光の時代、最大の政策が切支丹弾圧であり、最大の戦いが島原の乱であった。寛永十四（一六三七）年十月、九州・天草で領主松倉勝家が重税を強いる圧政に耐えきれず一揆が勃発した。天草四郎を総大将とする一揆軍は島原城を攻撃し、総数三万七千人が原城に立て籠もる。一揆軍には実戦経験のある小西行長の残党も参加しており、制圧を負かされた幕府軍も敗戦を続け、総大将の板倉重昌も討ち死にをしてしまう。と途中まで島原の乱の経緯が語られたところで、突然「一揆勢に加わった一人の男について書こう。」と山田右衛門作の話へと変わる。以降、右衛門作をとおして乱の経過が語られる。

山田右衛門作は有馬神学校で西洋画の技術を習得した絵師でインテリであった。一揆に巻き込まれ、「総大将天草四郎の下で二千の兵の部隊長にさせられた」ものの、制圧軍が兵糧攻めを開始すると、一揆軍の敗北と全滅を予感して裏切ることを決意する。「絵師というインテリだけに彼は殺されるのが怖ろしかった」からである。右衛門作は矢文を通じて内部情報を流すが、すぐに発覚し縛られて籠に押しこめられる。オランダ船の砲撃、一揆軍の奇襲攻撃に続き、幕府軍の総攻撃が始まった。右衛門作は妻が処刑されたことを知り、「かくなる上は、いかな

る恥を忍んでも、生きて生き抜こう」と決意する。弾丸が胸に当たるが矢文のお陰で助かり、敵に切られそうな時も矢文のお陰で生き延びる。このあと、右衛門作は三万数千人が全滅する凄惨な光景の目撃者となる。結局、天草四郎も首をはねられ、島原の乱は終結する。生き残った右衛門作は切支丹信徒探索の目明かしを命ぜられ、禁固されたまま江戸で画業を続けた。晩年、老齢を理由にやっと許され長崎に戻り、小川町で死去している。

「切支丹弾圧」には山田右衛門作が二箇所登場する。一つ目は、(ペドロ岐部)の取調べの場面である。逮捕された(ペドロ岐部)の取調べに立ち会い、心の中で何度も「転べ。」と叫ぶ。

彼(引用者注…山田右衛門作)も自分に引きくらべ、頑固に棄教を拒む三人の神父、とりわけペドロ岐部の信念の強さに羨望を感じ、そうなれなかった自分の弱さを恥じていた。

(転べ。転べ。転べ)

と彼は心のなかで、岐部に呼びかけた。

(転べ。転べ)

(「切支丹弾圧」／『女』)

ここには棄教者として生きなければいけない「弱者」としての右衛門作の苦悩が明確にあらわれている。自分にはなかった信念の強さを持つ「強者」としての(ペドロ岐部)に羨望を感じるとともに、自分と同じ棄教者に落ちて共犯者となって欲しいという願望が「転べ」という心の叫びに込められている。

二つ目は右衛門作が信徒探索の目明かしとして活躍する日常のエピソードが語られる場面である。ある日、右衛門作は鎌倉河岸の古道具屋で小さな子育て観音に気がつく。この子育て観音はかくれ切支丹たちがキリストの母、マリアに見たてて拝んでいることを進言し、監視が始まる。そしてこの観音を買って持ち帰った男を見つめる。神田の吉兵衛という呉服屋であった。結局、吉兵衛は取調べをされ、鞭叩きの拷問を受けた。右衛門作の切支丹に関する知識が役に立ったのである。しかもこの時、家光は吉兵衛の取調べを見学し、拷問の光景も見たと

記述されている。切支丹に対する家光の関心の深さを物語っている。

「大奥」でも右衛門作が信徒探索の目明かしとして活躍する様子が描かれる。「大奥」では春日局の死が描かれるが、右衛門作のエピソードは春日局の死去以後、大奥の雰囲気が弛緩したことを示すものであった。

右衛門作の話は、月一回の吉原通いから始まる。右衛門作は棄教した後、自暴自棄になり吉原に通うようになる。馴染みの店もでき、馴染みの女もできるが、ある時女の言葉に九州なまりのあるのを感じ聞いてみると、加津佐の出身だった。加津佐は信徒が多かった村であるので、女が切支丹の可能性がある事に気がつく。探りを入れると女の馴染みの客に「医者のごとき風体」の男がいた。役人と一緒に見張っていると、男は切支丹の祈りの言葉を口にすが、右衛門作は役人には言わなかった。右衛門作はかくれ切支丹たちが吉原のような裏の裏にまで秘密の連絡をとっていることに驚いた。役人には黙ったまま、右衛門作が探りを進めると、男の正体が松井玄庵という町医者で、大奥のお犬とよばれる女たちを診察するため大奥にも出入りをしていたことがわかった。この時の気持を次のように描いている。

ほかならぬ江戸城の大奥に「めあ、くるぱ」を口ずさむ切支丹の医師が出入りをしている。

裏づけの確証はないが、山田右衛門作はそう想像して、言いようのない快感を覚えた。大奥のなかにも切支丹の女性がかくれているのだ。

それを知りながら、見て見ぬふりをしている快感。右衛門作は自分が多くの信徒を裏切った悔恨と後ろめたさゆえに、その快感を誰にも話さなかった。

(「大奥」／『女』)

右衛門作の屈折した複雑な心情が窺えるエピソードであった。また、ここに登場した吉原や大奥に暗躍するかくれキリシタンとそれを探索する者たちという題材は遠藤の先輩作家である柴田錬三郎の『眠狂四郎無頼控』や『赤い影法師』などでも用いられている。特に眠狂四郎は転びバテレンの子であるという自分の宿命とからんで

かくれ切支丹の組織と深い因縁があり、時には刀で闘ったり、時には役人の追求から匿ったりもしている。おそらく遠藤は眠狂四郎を念頭に入れて時代小説風のエピソードをここに挿入したと考えられる。

四、「強者」の問題―ヘペドロ岐部とシドツチ

拙稿③で述べたようにヘペドロ岐部は、個人としてよりも対照的な人物と対比されながら描かれて来た。ヘペドロ岐部の名前が初めて登場した『留学』では、荒木トマスと対照的に描かれた。同じようにローマで学び、宣教のために再び日本へ戻って来ながら、荒木トマスは棄教し、ヘペドロ岐部は殉教した。また、『メナム河の日本人』『銃と十字架』『王国への道』では山田長政との対比で描かれた。二人とも海外へ勇躍した日本人でありながら、「地上の王国」を目指した山田長政はタイの王宮の権謀術数に巻き込まれて敗れ、ヘペドロ岐部は「神の王国」を目指して日本へ戻り「華々しい殉教」を遂げた。

『女』でヘペドロ岐部が登場するのは「切支丹弾圧」の章だけであるが、ここでも棄教者の山田右衛門作とフェレイラ、さらには穴吊りの拷問に耐えきれず棄教したポウロ神父と式見神父といった様々な「弱者」が登場する。その中で唯一の「強者」がヘペドロ岐部であった。その意味で、「切支丹弾圧」の章は、「弱者」と「強者」の対比が最も明確にあらわれたものと言えよう。

ヘペドロ岐部は東北・水沢で式見神父やポルロ神父と共に捕まり取調べを受けるところから登場する。取り調べをするのは踏絵を考案した宗門改役の井上筑後守政重であった。一回目には將軍家光も立ち会っている。続いて、ヘペドロ岐部の略歴が語られる。山田右衛門作や式見神父と同じ有馬神学校を卒業し、徳川家康の伴天連追放令でマカオへ行き、インドのゴアから砂漠を渡り、「日本人でエルサレムに行った最初の男」となった。さら

にローマへ行き、ローマ・コレジオで学び神父となった。日本宣教の使命を果たすため、ポルトガルリスボアへ行き、印度洋艦隊に乗り組みインドのゴアへ行った。そこからシヤムのアユタヤ、フィリピン、ルパンダ島と渡り、松田神父と共に鹿児島へ上陸した。すぐに長崎へわたり宣教活動を開始した。二年半後、フェレイラ神父の棄教を契機として、東北へ向かい、奥州水沢で捕まった。ここまで『銃と十字架』とほぼ同じ内容である。ただし、『銃と十字架』での〈ペドロ岐部〉は殉教をためらったりして弱さを見せたこともあったが、『女』では、そうした心情は描かれることなく事実が淡々と述べられている。

四回目の訊問の時、フェレイラ神父も棄教を勧めるが、〈ペドロ岐部〉はフェレイラ神父を烈しい非難を浴びせた。一方、フェレイラ神父と一緒に立ち会っていた山田右衛門作は心の中で「転べ」と呼びかけていた。頑固に棄教を拒む三人に井上筑後守はついに穴吊るしの拷問を命じる。年老いたポルロ神父が棄教し、続いて式見神父も棄教するが、〈ペドロ岐部〉だけは屈しなかった。最後まで「転ぶ」と言わなかった〈ペドロ岐部〉は火刑となり殉教した。こうした〈ペドロ岐部〉の殉教の様子も、『銃と十字架』とほぼ同じであった。ただ異なるのは、〈ペドロ岐部〉の殉教の報告を受けた將軍家光や春日局、千姫がそれぞれの感想をもらすところである。

井上筑後守からこの報告をきいた家光は

「島原の乱といい、この男といい、切支丹は手強い」と感想を洩らした。

家光の口から春日局も千姫もペドロ岐部の話をきいた。

「切支丹ながら、みごとな男」

というのが春日局の感想であり、千姫は

「死ぬとわかって、日本に戻るとは」

と当惑したように呟いた。

この事件があくまでも家光の時代に起った出来事であったことを物語っている。さらに、最大の敵として切支丹を認識していた家光、大奥を支配していた「戦国の女」である春日局、大阪の陣で夫を失い世の儚さを思い知らされた千姫、それぞれの心情がうかがえる場面でもあった。

『女』ではへペドロ岐部への他にも「強者」が描かれている。シドッチ、長助、おはるの三人である。「長助とおはる」の章は「幕府最後の切支丹」といわれるシドッチの事件を描いている。宝永五年八月、屋久島へシドッチが上陸して捕まった。鹿児島から長崎へ送られるがオランダ語の通詞ではイタリア人のシドッチと言葉が通じないため江戸へ送られ、小石川の牢屋に入れられ、新井白石の取り調べを受けた。さまざまな訊問が終ったあと、白石は上策、中策、下策の三つの案を出す。中策が採用され、シドッチは切支丹屋敷に入れられた。白石は切支丹に寛大だったので、屋敷内でシドッチが信仰生活を送ることを許した。やがてシドッチの感化を受けた召使の夫婦が洗礼を受け、切支丹であることを白状し騒動になる。結局、三人は狭い牢舎に入れられ、その年の十月、三人とも死んだ。

へペドロ岐部への殉教が家光や春日局、千姫に感銘を与えたように今度は吉宗に感銘を与えているのだ。

家光以後、天下は武の時代ではなく、金がすべての時代になっている。今の日本と同じように一種の拝金主義の人生観が広がり、財政逼迫した武士や大名が江戸、大坂の豪商に金を借りるようになっていた。泰平が続く時代の当然の結果である。

吉宗はこうした世相——世相というよりは「金がすべて」という人々の考えを憎んだ。

だからこそ、白石を通して見た南蛮人シドッチや長助、おはるの取調べ書を見て、その生き方に感心したのであろう。

シドッチのエピソードは家光以後の「金がすべて」の時代に対するアンチテーゼとして吉宗の感銘を呼んでいる。ここでは「強者」のシドッチ、長助、おはるに対比されるような「弱者」は登場しないが、拝金主義の世相そのものが三人の生き方と対比されるのである。

五、『女』における『沈黙』

拙稿④で論じたが、〈ペドロ岐部〉は『沈黙』と様々な形で深い関連がある。それらを踏まえて『女』を見ると、共通の問題がある。最後にこれについて考えたい。

『女』と『沈黙』が関連するのは「切支丹弾圧」と「長助とおはる」の章である。順に追ってみよう。

「切支丹弾圧」の章は、「島原の乱」に続く章である。そのため、「島原の乱を契機として、幕府は切支丹にたいする徹底的弾圧に乗りだした」という記述から始まる。『沈黙』ではフェレイラ棄教の真偽を確かめるためにロドリゴたちが日本へ向かうためマカオに到着するが、ここで島原の乱以後切支丹弾圧が激化して日本宣教がより困難な状況にあることを聞いている。また、作品時間も島原の乱直後の一六三九年に設定されており、〈ペドロ岐部〉が意識されている。

次に踏絵と井上筑後守が登場する。井上筑後守については「井上筑後守はいわば官僚の元祖ともいうべき男で、切支丹の心理について詳細な覚書を書いている。彼自身かつては切支丹だったが、その後、棄教したからである。」と説明されている。元来、『沈黙』は遠藤が長崎で踏絵を見た感動から生み出された作品であったし、井上筑後守は『沈黙』の姉妹作『黄金の国』にも登場する重要人物であった。

へペドロ岐部は松田神父と共に「白蟻の食った船をようやく手に入れた二人はひそかに集めた切支丹の日本人船員たちと共にやっと日本に向けて出航した」とある。『沈黙』のロドリゴもガルペと共に「白蟻の食った船」で日本へ来たのである。ここの箇所は拙稿⑤で論じたが、H・チースリク『キリシタン人物の研究』の「ペドロ岐部」が参照されている。

日本に上陸したへペドロ岐部は鹿児島からすぐに長崎へ行ったが、事件が起る。

長崎に留まることは二年半、岐部はかつて有馬神学校の恩師だったフェレイラ神父が逮捕され、穴吊るしという拷問によって棄教したことから、自分への危険が切迫したことを感じ、ここを逃げて奥州水沢に潜伏する決心をした。

（「切支丹弾圧」／『女』）

『沈黙』のロドリゴもかつての「恩師だったフェレイラ神父が逮捕され、穴吊るしという拷問によって棄教した」という知らせを受け、真偽を確かめるために日本宣教を決心した。しかも、ロドリゴのモデルであるイタリア人のジュゼッペ・キヤラとポルトガル人のフェレイラとの間に師弟関係はなかったのに、『沈黙』ではロドリゴもポルトガル人に変更され、ポルトガルの神学校でフェレイラの生徒だったというように設定されている。ここにもへペドロ岐部の影がある。

「切支丹弾圧」の章には『沈黙』の名前が二回登場する。

フェレイラ神父のことは拙作「沈黙」で詳しく記述したが、後に捕えられた彼は井上筑後守に棄教を要求され、拒絶したため穴吊るしの刑を受けて遂に信仰を棄てた神父である。

（「切支丹弾圧」／『女』）

私の「沈黙」の舞台になった長崎県の外海町黒崎を初めて訪れた頃、驚くような事実を知った。

即ち住民の半分は改宗した基督教であり、そのなかに少数だが古いかくれ切支丹の家族が住んでいたこと

である。

(「切支丹弾圧」／『女』)

フェレイラ神父と黒崎のかくれ切支丹。いずれも『女』と『沈黙』との深い関連を意味している。

また、捕まったへペドロ岐部〜に棄教を勧めるのもフェレイラであった。

フェレイラはうつむいたまま、日本における布教のむなしさを語ったが、レオン・パジェスの報告によると岐部はそんな彼を烈しく非難したという。

かつての弟子にきびしい反駁と批判を受けたフェレイラはおどおどとして沈黙するより仕方がなかった。彼は自分のうしろめたさを味わわねばならなかった。

(「切支丹弾圧」／『女』)

『沈黙』のロドリゴもフェレイラに棄教を勧められ、最初はフェレイラを「烈しく非難した」。だが、その後は異なる。

棄教を拒んだへペドロ岐部〜たちに井上筑後守は穴吊るしの拷問を命じる。

穴吊るしとは先にも書いたように汚物を入れた穴に逆さに吊るす拷問である。

一気に気を失ったり、即死しないように、こめかみに傷をつけ、時には食べものを与えて、苦痛が長びくようにして、少しでも棄教の意志を見せれば、穴から引きずりあげた。

最も残酷で、最も辛い拷問を岐部たちは受けることになったのである。

(「切支丹弾圧」／『女』)

拙稿⑥でも論じたが、『沈黙』において穴吊るしの拷問は重要な意味を持っている。切支丹の歴史でも穴吊るしで最初に転んだのがフェレイラで、最後まで耐え抜いたのがへペドロ岐部〜であった。ロドリゴのモデルであるジュゼッペ・キャラも穴吊るしの拷問を受けた末に棄教している。唯一ロドリゴだけが穴吊るしの拷問を受けな

かった。代わりに踏絵を踏んでいる。

（ペドロ岐部）と一緒に捕まった式見神父とポルロ神父は穴吊るしの拷問に耐えられず棄教する。その後切支丹牢に入れられる。

この切支丹牢は後にキャラ神父やシドッチ神父も入れられた獄舎である。シドッチ神父は新井白石と対談した有名な神父で、牢屋にあってもなお、そこに働く長助夫婦を改宗させている。

（「切支丹弾圧」／『女』）

この切支丹牢は切支丹屋敷のことであるが、『沈黙』のロドリゴのモデルであるキャラ神父の名前があり、シドッチが長助夫婦を改宗させたという記述がある。この部分は『沈黙』の「切支丹屋敷役人日記」に対応する。「切支丹屋敷役人日記」ではキャラ神父がロドリゴへと変更され、長助夫婦の代わりにキチジローが中間としてロドリゴのもとに仕え、改宗したという記述がある。

もう一つ「長助とおはる」の章も『沈黙』と関連する。拙稿⑦では次のように述べた。

＜章で捕まったロドリゴに深い印象を残すのは「片眼の男」の長吉と「白瓜をくれた女」の春の二人であるが、≧章で長吉は役人に刀で惨殺され殉教をし、≨章で女は薦に入れられて海に沈められてしまう。≪章では二人がそれぞれ「久保浦、長吉」「久保浦、春」と呼ばれることで名前が判明するが、この名前は切支丹屋敷でジュゼッペ・キャラやシドッチに仕えた下人夫婦の名前がヒントとなっている。

以上のように『女』の「切支丹弾圧」と「長助とおはる」の章は様々な形で『沈黙』と関連し、（ペドロ岐部）が『沈黙』に与えた影響を傍証しているのである。

- ① 拙稿「「人間」を追求する歴史小説―山本周五郎『赤ひげ診療譚』と遠藤周作『王の挽歌』」(「キリスト教文藝」第三十一号、二〇一五・平成二十七年七月)
- ② 拙稿「遠藤周作論―(劇)を生成するトポス―」(「昭和文学研究」第七十二集、二〇一六・平成二十八年三月)
- ③ 榊山潤「日本のユダ」(一九六一・昭和三十六年)
- ④ 拙稿「遠藤文学における〈ペドロ岐部〉(一)―『留学』『沈黙』を中心として―」(「遠藤周作研究」第八号、二〇一五・平成二十七年九月)
- ⑤ 注④に同じ。
- ⑥ 注④に同じ。
- ⑦ 拙稿『『沈黙』論―引用の織物―』(本博士論文、第二部第三章)

結論

一

以上「歴史小説」を視座として遠藤文学全体を見直してきた。本稿を通して「歴史小説」が遠藤文学においていかに重要な役割を担っているかその一端を証明できたように思える。結論を述べる前に補足として遠藤が「歴史小説」を書き続けるのに関わった人たちについて一言触れておきたい。

まずは遠藤が文学観を形成する根幹に関わった堀辰雄と永井荷風がいる。堀辰雄は遠藤にとって初めて出会った作家である。遠藤は堀の文学から直接影響を受けなかったと言うが、文学者として真摯に研鑽を重ねる姿勢や「日本人とキリスト教」という生涯の文学的課題を与えられた。遠藤の初期作品における「手記」形式には堀辰雄の深刻な影響がみられる。

永井荷風は、作家として遠藤が多くのことを学んだ『三田文学』を創刊した人物であり、フランス留学の先輩でもある。永井荷風には江戸の戯作趣味と『断腸亭日乗』という膨大な日記があり、遠藤に大きな影響を与えている。江戸の戯作趣味は『狐狸庵閑話』を始めとする狐狸庵先生シリーズとなり、江戸時代への関心を深めるきっかけともなっている。また、荷風の日記の存在は『作家の日記』を始めとする創作日記の数々となったと言えるだろう。

次に『三田文学』の先輩作家たちがいる。山本健吉、柴田錬三郎、堀田善衛などである。長崎出身の山本健吉は作家ではないが文芸評論家として古典にも造詣が深く日本文化や日本の風土、さらには切支丹を考えていく上で様々な刺激を与えられている。『海と毒薬』や『沈黙』刊行直後に山本が書いた書評は、文学、宗教、風土、文化全般にわたる遠藤の問題意識を的確に指摘し、遠藤のいわんとする文学的課題をあぶり出している。一方で、

山本は『きりしたん事始』（芸術社、一九五六・昭和三十一年）でフランシスコ・ザビエルを描く際、遠藤から切支丹関係の資料を提供してもらったこともあった。互いに協力関係にあったと言える。

柴田錬三郎は『三田文学』の編集を勤めていたこともあり、遠藤が小説を書き始めた時には、作品に添削を加え親切に指導してくれた先輩でもある。また、柴田錬三郎と言えば「眠狂四郎」で剣豪小説ブームを切り開いた時代小説の旗手であるが、幼少時代チャンバラが好きだった遠藤に大きな刺激を与えたことは言うまでもない。しかも眠狂四郎の転びバテレンと日本人の間に生まれた混血児という設定には遠藤も深く関わっており①、逆に「眠狂四郎」が転びバテレンの子であるという設定が『沈黙』に影響を与えた可能性もある。

堀田善衛は島原の乱を描いた大作『海鳴りの底から』（初出…「朝日ジャーナル」、一九六〇・昭和三十五年九月十八日～翌年九月二十四日）を描いている。作品冒頭の「プロムナード 1 神神の微笑」では芥川龍之介『神神の微笑』の「造り変える力」に言及して日本文化の本質に迫っている。このあたりの問題は遠藤が『沈黙』を執筆する際にも少なからぬ影響を与えたと考えられる。というのも、佐古純一郎が指摘②するように『神神の微笑』と『沈黙』には密接な関わりがあるからである。

さらに、「第三の新人」と呼ばれた同世代の作家たちとの交流もある。「日常性」と「弱者」を文学的課題とするきっかけとなったという。それ以外で「歴史小説」と関わるのは小島信夫と三浦朱門である。小島信夫は「殉教」（「新潮」、一九五四・昭和二十九年六月）で切支丹をめぐる信仰の問題を扱った。三浦朱門は遠藤と共に切支丹研究をした仲間であり、二人は一九六五年四月に上智大学のチースリク教授に師事したり、長崎・島原などの取材旅行にも同行している。二人の研究成果は『キリシタン時代の智識人 背教と殉教』（日経新書、一九六七・昭和四十二年）という共著に結実している。

同世代の作家には「第三の新人」ではないが司馬遼太郎もいる。一九七〇年代の半ば頃には毎年正月を京都で過ごし、歴史について様々な刺激を受けた。遠藤と司馬遼太郎は同じ一九二三年生まれということもあり、歴史

趣味を通じた深い交流が生まれたのである。特に、『女の一生』や『女』には「語り」の問題や歴史認識の方法などに明確な影響の痕跡を確認することが出来る。

さらに、遠藤の「歴史研究」を支えた歴史研究者との交流も忘れてはいけなだろう。遠藤はテーマを深めていく中でそれぞれの分野の第一人者に師事を仰いだという経緯があるからだ。中でも上智大学のH・チースリクと「切支丹勉強の師」である松田毅一の二人は遠藤が歴史研究を進めるにあたって重要な指針を与えられたと言えよう。具体的な作品を見ると、H・チースリクの『キリシタン人物の研究』と『沈黙』『銃と十字架』、松田毅一『慶長使節』と『侍』、松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』と『鉄の首枷』『銃と十字架』『宿敵』『反逆』『決戦の時』『王の挽歌』『男の一生』『女』といった一連の作品の重要な参考文献となっている。

二人以外では『フロイス日本史』を松田毅一と共に翻訳をした川崎桃太氏、『メナム河の日本人』『王国への道』などで描いた山田長政に関しては岩生成一氏の『鎖国』『南洋日本人町の研究』を参考にしていた。『鉄の首枷』小西行長伝』では、豊田武氏の『堺』を参考にした。『侍』のメキシコでの調査は、メキシコ在住の支倉常長の研究者である大泉光一氏に助けられた。その他にも、それぞれの課題に取り組む際に大きな手助けがあった。遠藤の「歴史小説」はこれらの研究者に支えられていたのである。

他にも遠藤が「歴史小説」を書く刺激を与えられた人がいる。大分県知事・平松守彦氏は大分県の誇るキリシタン大名・大友宗麟を主人公にした作品を書くように遠藤に依頼した人物であった。依頼を受けた遠藤は、『キリシタン大名大友宗麟』で大友宗麟を描いた父・遠藤常久の蔵書をあさったという。これらのことがきっかけとなり『王の挽歌』へと結実する。この二人もまた遠藤に刺激を与えたのである。

では次に、結論を述べたい。本稿では「歴史小説」を視座として遠藤文学全体を見直してきた。そのために、遠藤周作の文学を四つの時期に分け考察を加えたのである。

第一部は「歴史小説」への序章―「トポス」をめぐる「手記」―として初期作品を「手記」と「トポス」の両面から分析した。これまで初期作品と「歴史小説」との関連を指摘した論考はなく、試論と呼んだ方がいいかも知れない。だが、「処女作にその作家の全てがある」という言葉があるように、初期作品には遠藤の「歴史小説」ばかりか遠藤文学の全てのエッセンスがつまっている。その代表的なものが「手記」と「トポス」であった。

まず一つ目の「手記」については第一章の「遠藤周作初期作品のエクリチュール」で検討した。評論家として出発した遠藤には、書簡体の体裁を取った初期評論があり、堀辰雄の影響を受けていることが明らかとなった。さらに日記にも堀辰雄やフランソワ・モーリヤックの影響が見られた。とりわけフランス留学時には様々な日記を残しており、『作家の日記』（作品社、一九八〇・昭和五十五年九月）や、遠藤周作の死後に発表された『作家の日記』未収録の一九五二・昭和二十七年九月から一九五三・昭和二十八年一月の日記を収めた『ルーアンの丘』（PHP研究所、一九九八・平成十年）を含めるとフランス留学時代の全容が見えてくるほどであった。

そして、「アデンまで」で小説を書き始めると、多くの作品が「手記」形式であった。例えば、〈拷問者の歴史〉を記録した手記である「白い人」（『近代文学』一九五五・昭和三十年五、六月号）や、「海と毒薬」（『文学界』一九五七・昭和三十二年六、八、十月号）における〈上田看護婦の手記〉と〈戸田の手記〉、「パロディ」（『群像』一九五七・昭和三十二年十月号）における妻の不満を述べる夫の手記、「わたしが・棄てた・女」（『主婦の友』一九六三・昭和三十八年一〇十二月号）における〈吉岡の手記〉などがある。他にも、書簡体の小説として、「コウリッジ館」（『新潮』一九五五・昭和三十年十月号）、「黄色い人」（『群像』一九五五・昭和三十年十一月号）、「月光のドミナ」（『別冊文芸春秋』一九五七・昭和三十二年十月）、「従軍司祭」（『世界』一九五九・昭和三十四年九

月号)などがある。また、書簡体ではないが、「おバカさん」(「朝日新聞夕刊」一九五九・昭和三十四年三月二十六日)八月十五日)、「わたしが・棄てた・女」(「主婦の友」一九六三・昭和三十八年一十二月号)といった軽小説では、手紙が登場人物の行動を左右する重要な役割を果たしている。さらに、日記体としては、「アデンまで」と、「黄色い人」における(ヘデュランの日記)、(青い小さな葡萄)における(ヘモンドンの日記)などがある。「青い小さな葡萄」では伊原の(青いちいさなノート)が重要な役割を果たしていた。

二つ目のトポスについては第二章で論じた。遠藤文学全体の傾向として、印象的な作品舞台が多く、それらは単なる場所ではなく、作品を創造していく際の刺激が与えられる特別な作品空間としてのトポスであった。遠藤はそこに「神と悪魔、人間と社会、肉欲と霊の血みどろな闘い」が繰り広げられる人間の(劇)を追求していたのである。特に作家以前の遠藤にとって最も重要な体験であるフランス留学で学んだ三つのトポス、すなわち(悪)というトポス、(ヘテレーズ)というトポス、(留学)というトポスに関わる問題と、新人作家時代に「第三の新人」から影響を受けた二つのトポス、すなわち(日常性)というトポス、(弱者)というトポスと、同時期に発見した(廃墟)というトポスをめぐる問題を取り上げた。

第三章では「手記」の問題を中心に『黄色い人』を論じた。

『黄色い人』は、戦時中、高槻の收容所に拘留されているプロウ神父に宛てた医学生千葉の手紙と背教神父デュランの日記が交互に組み合わされ構成されている。全七章のうち、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴが千葉の手紙、Ⅵ・Ⅶがデュランの日記となっていて、日記を書いている時点でのデュランの視点と、デュランの日記を読んだ上で自分の経験を照らし合わせる千葉の視点、さらに双方と関わり最終的に千葉の手紙を読む立場にあるプロウ神父の視点、以上三つの視点が重なり、交錯して乱反射しながら、人間内部の深層をかいま見せる構図となっている。そこに展開するのは「神と悪魔、人間と社会、肉欲と霊の血みどろな闘い」が繰り広げられる人間の(劇)であった。ここに『黄色い人』の主題も存在しよう。

また、補足としてエピグラフの問題も論じた。

第四章では『海と毒薬』を「トポス」と「手記」の両面から論じた。

『海と毒薬』は、「日本文化や風土の問題」、「神なき人間の悲惨」、「日本人の罪意識の欠如」の三つを主題として、複数の視点人物、時間、場所が複合的にからまりあいながら「悪の行われた場所」であるF医大における「悪」の様相、「悪の行為」の実態、「場所」が持つ意味を浮かび上がらせた作品であると結論付けられる。また、作品舞台である西松原住宅地、F市、F医大病院はそれぞれ色彩のイメージを持つ「トポス」である。さらに、文学的空間としての「トポス」をめぐる三つの「手記」が含まれており、「手記」形式が果す意味は大きい。

三

第二部は遠藤周作の第一期（一九五九・昭和三十四年～一九六九・昭和四十四年）の「歴史小説」を対象とした。作品で言うと、「最後の殉教者」から「学生」までである。この時期の作品は長与善郎や芥川龍之介の影響が見られる作品が多く「切支丹物」と呼ぶことが出来る。主題となるのは信仰をめぐる「弱者」と「強者」の対立である。簡単に定義すると、「弱者」は心の弱さ故に拷問に耐えきれず仲間を裏切ってしまった棄教者のことであり、「強者」は信念を貫き拷問にも耐え抜いた殉教者のことである。

第一章では遠藤文学で「弱者」がどのように形象されていったのかを検討した。「弱者」と「強者」の問題が明確にあらわれているのは『沈黙』であるが、そのモチーフは遠藤が長崎で見た踏絵にあった。次のように述べている。

この二つの疑問はそれをその後、噛みしめているうちに次第に私には切実なものになりはじめた。なぜな

らば、それは強者と弱者、——つまりいかなる拷問や死の恐怖をもはねかえして踏絵を決して踏まなかった強い人と、肉体の弱さに負けてそれを踏んでしまった弱虫とを対比することだったからである。

(傍線部引用者／「一枚の踏絵から」／『切支丹の里』人文書院、一九七一・昭和四十六年一月)

ここに「弱者」と「強者」の問題があるのだ。だが、この問題は『沈黙』において突然出て来たわけではなく、初期作品とも繋がっている。というのも、遠藤の初期作品には既に弱者的な主人公像が繰り返して登場しており、それに加えて、「第三の新人」との交流、「切支丹時代」の発見、ヘルツォーグ神父の棄教という三つの出来事により深められ、明確な形で「弱者」が形成されたからである。また、『沈黙』に登場した「弱者」をよく見ると二種類に分けられる。キチジローを代表とする貧しい信徒とロドリゴを代表とする智識人である。さらに智識人は通辞、井上筑後守といった日本人とフェレイラ、ロドリゴの外国人司祭に分けられる。キチジローのような貧しい信徒の中には拷問の末に殉教する「強者」もいれば、キチジローのように拷問が怖くて棄教する「弱者」もいる。信徒側の問題は拷問に耐えられるかどうかにあると言ってよい。対する知識人は、日本人側には幕府の政策の変化や「西洋のキリスト教」に対する不満が根底にあり、拷問とは無関係である。そして西洋人側は、拷問を受けた上に、数多くの殉教者に対して神が沈黙しているという信仰的な煩悶と、「西洋のキリスト教」に対する不満もあつた。このように棄教した「弱者」もそれぞれ異なる理由により棄教しており、単純に切支丹弾圧のせいだけとは言えない。

第二章は、「遠藤文学における〈ヘパドロ岐部〉(一)——『留学』『沈黙』を中心として——」。遠藤の「歴史小説」の第一期を対象とした。遠藤文学で〈ヘパドロ岐部〉の名前が初めて登場する『留学』と、名前は登場しないが間接的に大きな影響を与えている『沈黙』を中心に考察した。その結果、『留学』では、「弱者」の荒木トマスとは対照的な「強者」として〈ヘパドロ岐部〉が登場していること、『沈黙』では、ロドリゴのポルトガルから日本へ渡る苦難の旅がH・チースリック『キリシタン人物の研究』(吉川弘文館、一九六三・昭和三十八年十二月)にある

（ペドロ岐部）がポルトガルから日本へ帰国した時の記録を参考にして描かれていることや作品の時代背景である一六三九年が（ペドロ岐部）と関連して設定された年であることが明らかとなった。

第三章は『沈黙』論―引用の織物―。遠藤が『沈黙』を構想した際に依拠した資料を考察し、『沈黙』成立の秘密に迫った。『沈黙』は「まえがき」「I」～「X」の書簡「V」～「IX」「切支丹屋敷役人日記」の四つから構成される。

「まえがき」には二つの重要な資料が本文中に引用される。フェレイラ書簡とロドリゴ書簡である。前者のフェレイラ書簡は、レオン。パジェス『日本切支丹宗門史（上・中・下）』（岩波文庫、一九三八・昭和十三年）やH・チースリク『キリシタン人物の研究―邦人司祭の巻―』（吉川弘文館、一九七三・昭和三十八年十二月）以下『キリシタン人物の研究』と呼ぶ）に記載されている。後者のロドリゴ書簡は架空のものであり、ポルトガルの「海外領土史研究所」そのものも実在しない。他にもロドリゴたちがリスボンからインドのゴアに向う苦難の旅は『キリシタン人物の研究』を参照している。

「I」～「X」セバスチアン・ロドリゴの書簡」では「まえがき」に引き続き

「V」～「IX」

「切支丹屋敷役人日記」

遠藤が『沈黙』を書いた動機の一つが、教会の歴史が「沈黙」している背教者たちに光を当てるということであつた。『沈黙』では、フェレイラとロドリゴという二人の背教者に光を当て、信仰に生き信仰に殉じた人生を復活させたのである。そのために、実在の史料や架空の史料を様々な形で引用し、歴史の中の一場面として印象付けられている。特に最後の「切支丹屋敷役人日記」はロドリゴの半生を歴史の中に位置付けようとしているのである。ここに引用の織物としての『沈黙』の真骨頂を見ることが出来る。

第三部は遠藤周作の第二期（一九七〇・昭和四十五年～一九八〇・昭和五十五年）の「歴史小説」を対象とした。作品で言うと『黒ん坊』から「日本の聖女」までである。この時期は、主として「海外に勇躍した日本人」の評伝が描かれている。第二部での「弱者」と「強者」という問題も完全に消えたわけではないが、「海外に勇躍した日本人」を描くことで遠藤の生涯の文学的課題である「西洋と日本」や「日本人とキリスト教」という問題に正面から取り組むことが出来たのである。

第一章は「遠藤文学における（ペドロ岐部）（二）——『メナム河の日本人』から『王国への道』まで」。遠藤の「歴史小説」の第二期を対象とした。（ペドロ岐部）が初めて登場人物として描かれた『メナム河の日本人』、（ペドロ岐部）の出身地である国東半島や捕まった東北の水沢などの取材旅行の記録とも呼べる数編のエッセイ、さらに初めて主人公として描かれた『銃と十字架』、山田長政と対照的な生き方をしたもう一人の主人公として描かれた『王国への道——山田長政——』（平凡社、一九八一・昭和五十六年四月）などである。この期の特徴は、（ペドロ岐部）が主に山田長政と対照的な人物として描かれたことにある。山田長政が「地上の王国」を目指したのに対し、（ペドロ岐部）は「神の王国」を目指して、それぞれが自己の信念に殉じたとしている。史実としては、二人が交流したという記録は残されていないが、同じ時期にタイのアユタヤにいたことがあるという状況証拠から遠藤は作家の想像力を働かせて、二人が同質の人間であり、目指す方向だけが違っていたとし、全く異なる生き方をした二人の人生がアユタヤの地で交錯したという一点にドラマを見ている。

第二章と第三章では『侍』を取り上げた。まず第二章では「『侍』論——フィクションの内実——」。『侍』は支倉常長をモデルとした歴史小説であるが、かなりの部分には、史実とは異なるフィクションが盛り込まれている。

年代の変更や架空の人物設定などである。その上、作者自身が、支倉常長に自己の姿を投影した「一種の私小説」であるとさえ明言している。そこで『侍』執筆時に遠藤が参考にした松田毅一の『慶長使節―日本人初の太平洋横断―』（新人物往来社、一九六九年四月／以下『慶長使節』と呼ぶ）を元に『侍』の作品背景、慶長遣欧使節、長谷倉とベラスコの造型の三つの視点からフィクションの内実に迫った。

様々な違いがあるが、最後の長谷倉とベラスコの結末の場面は特に重要である。長谷倉は処刑される前にベラスコの日本潜入と捕縛を知り、ベラスコも処刑される前に長谷倉と西の処刑を知らされる。史実では、長谷倉の死とベラスコの殉教には二年の差があるので、二人が互いの情報を知りえた可能性はほとんどない。しかも『侍』では長谷倉の死をキシタンとなったために処刑されたとしている。支倉常長の死については謎が多く『慶長使節』でも明言を避けているのに大胆なフィクションと言わざるを得ない。おそらく遠藤は長谷倉を殉教者のように設定するため、あえて処刑としたのであろう。そのために、長谷倉とベラスコの死が同時期に変えられ、二人の殉教者のイメージが補完されたと言える。そして殉教を遂げた先には、「私も彼らと同じところに行ける」というベラスコの叫びが示す天国への道が示されている。ここに最後のフィクションがある。

次に第三章では「『侍』論―ベラスコの視点を中心として―」。比喻やキーワードなど作品の具体的な分析から、『侍』の新たな読みの可能性を探った。第一に二元的視点では、二人の主人公、長谷倉とベラスコのそれぞれの視点がどのくらいの割合であるのかを調べた。その結果、わずかにベラスコの方が上回った。第二に日本人像。江戸時代の身分制度である「士農工商」があり、そうした日本人像と深い関係を持つのは、小動物の比喻であった。蟻が最も多く八回、蜂が二回、蜥蜴が二回、かたつむりの殻が二回といった具合である。第三に、「侍」像。『侍』は前半部で「侍」「ベラスコ」の両視点から「日本人像」を、後半部では長谷倉とベラスコの心の中に生きているキリストの「仕える」姿、「侍」像を描いた作品だと言える。そして、その中

心となるのが「日本人とキリスト教」の問題であったのだ。

五

第四部は遠藤周作の第三期（一九八〇・昭和五十五年～一九九四・平成六年）の「歴史小説」を対象とした。『女の一生 第一部・キクの場合』から『女』までである。この時期は第二期に見られた二項対立の図式から発展してより複雑な人物相関を展開し「歴史群像」が繰り広げられる。

第一章は『女の一生』論―多層的な二項対立の世界―。『女の一生』は司馬遼太郎『坂の上の雲』と比較すると、「新聞小説」、「グローバルな視点」、「多元的な視点」、「歴史」愛好者としての「語り」という四つの共通点があり、影響関係が明らかとなった。これは『女の一生』だけではなく第三期の「歴史小説」は全般的に司馬遼太郎の影響を受けていると考えてよい。その上で作品を分析すると、長崎というトポスの問題と二項対立の図式の問題が浮かび上がった。元々『女の一生』は長崎という土地への愛着から生まれたものであり、長崎の歴史と風物がふんだんに盛り込まれている。しかも、場所と登場人物の二項対立の図式が見られた。場所と人物が複雑にからみあつて、「歴史群像」を形成しているのである。

第二章は「人間」を追求する歴史小説―『赤ひげ診療譚』と『王の挽歌』―。

山本周五郎と遠藤周作の「歴史小説」における「人間」追求を『赤ひげ診療譚』と『王の挽歌』に見た。山本周五郎は、『赤ひげ診療譚』（文藝春秋新社、一九五九・昭和三十四年二月）において「小石川養生所」の医師、赤ひげや保本登を描くと同時に、彼等を通して病のみならず様々な貧困や罪にあえぐ江戸下層民の姿を赤裸々に描いた。ここに現われた「庶民性」は佐藤俊夫氏が指摘するように「人間性」に繋がるものであった。一方、遠

藤周作は、『王の挽歌』（新潮社、一九九二・平成四年五月、新潮社）においてキリシタン大名の大友宗麟をそれまで描かれてきた豊後の戦国大名として九州に君臨した英雄豪傑としてではなく、「神と人間との狭間に苦悩する」一人の人間の姿を描いた。そこには単なる歴史小説としてだけでなく、人間不信という心の闇を抱えた心理小説、両親、妻、子という家族の問題を抱えた家庭小説、さらにはキリスト教の信仰を描いた宗教小説など現代にも繋がる様々な側面がある。そしてそれらは「弱さ」の問題に集約される。

第三章は「『王の挽歌』論―キリシタン文学の可能性―」。遠藤は第一期「切支丹物」で芥川の「切支丹物」を受容し、第二期「評伝」、第三期「歴史群像」へとキリシタン文学を展開していったとも言える。このことを示すものとして『王の挽歌』ではザビエルが「日本泥沼説」を説く。芥川「神神の微笑」―『沈黙』―『王の挽歌』と三つの作品を結ぶ縦糸となっている。また、『王の挽歌』は「挽歌」というタイトルが示す通り人間の死に様相通底音として作品全体に響いている。前半では大友宗麟が様々な人間の死に直面し、死への恐怖や死を迎える心境に思い悩み、後半では、基督教の信仰のもとで死を静かに迎え入れる。そのため、宗麟に「心の闇」が形成される。だが、そこに働きかけた人物がいた。ザビエル神父であった。ザビエル神父は「みじめな裸の姿にて磔となった」イエスの姿に重なるように痩せたみずぼらしい姿をしているが、「誰も信じられない」宗麟にとって唯一信じられる人物であった。しかも、ザビエル神父は宗麟の母と共に心の同伴者として常に宗麟の傍にいる。それを象徴するのが「眼ざし」であった。

この「眼ざし」によって、ザビエル神父、宗麟の母、現在の妻露、ヴァリニャーノ神父が繋がり、宗麟の「心の同伴者」が明らかにされる。しかもこの連鎖の先には神の「眼ざし」があることは確かである。そこに宗麟の信仰も見てとれる。以上のように『王の挽歌』には宗麟の「心の闇」が神へと向かう魂のドラマがあり、宗麟の心の軌跡が見事に描かれた作品となっている。ここにキリシタン文学としての新局面を見てとれよう。

第四章は「遠藤文学におけるヘペドロ岐部」(三)―『女』を中心として―。『女』はヘペドロ岐部が登場す

最後の「歴史小説」である。と同時に遠藤周作の完結した最後の小説でもある。いずれにせよ最後の作品であるだけに、「歴史小説」の集大成という意味を持っており、作品冒頭と終結部には作者の「歴史小説」への愛着が吐露されている。また、『女』は遠藤の「歴史小説」の中で最も長い時代を背景として最も多くの主人公が登場し、「歴史群像」が繰り広げられる。そこで、『女』を遠藤の「歴史小説」の重要な要素である時代背景、トポス、キリスト教の三つの観点から考察し、その中の〈ヘドロ岐部〉の位置を確認した。次に「弱者」の問題を「島原の乱」「切支丹弾圧」「大奥」の三章にわたって登場する山田右衛門作に見た。「弱者」に対立する「強者」の問題は「切支丹弾圧」の〈ヘドロ岐部〉と「長助とおはる」のシドッチ、長助、おはるに見た。そして最後に『女』と『沈黙』の共通する場面を取り上げ、〈ヘドロ岐部〉と『沈黙』との深い関連を傍証した。

結論をまとめたい。第一部では遠藤周作の「歴史小説」が初期作品における「手記」と「トポス」を根幹としていることが明らかになった。第二部の「切支丹物」では棄教者である「弱者」と殉教者である「強者」の二項対立の問題が浮かび上がった。第三部では「海外に飛躍した日本人」の「評伝」を描くことで、「西洋と日本」、「日本人とキリスト教」という問題に真摯に向かい合ったことがわかった。第四部では、二項対立の図式が様々な登場人物や土地、時代背景に複雑にからまりあって多層的な「歴史群像」を形成していることが明らかになった。このように遠藤文学は「歴史小説」を視座として見ても様々な面を見せる多面体構造を取っているのである。角度を変えることでまた違った一面を見せるはずである。そこに多様な読みを可能とする遠藤文学の深さや魅力も存在するかもしれない。

最後に「キリシタン文学」の可能性について考えたい。本稿を通じて遠藤周作の「歴史小説」が初期作品の「手記」と「トポス」という準備段階を経て「切支丹物」に始まり「評伝」、「歴史群像」と発展していったことが明らかになった。そこで、近代文学におけるキリシタン文学の流れから遠藤周作の位置を考え、さらには「切支丹文学」の可能性を探っていきたい。

《参考資料一》をもとにすると、近代文学で最初にキリシタンを題材としたのはいわゆる耽美派の木下杢太郎や北原白秋たちである。彼等を含めた五人が九州へ出かけキリシタンの足跡をたどった紀行文『五足の靴』（初出：『東京二六新聞』、一九〇七・明治四十年八月九月）が発点であった。この時の旅をきっかけとして木下杢太郎は『南蛮寺前』（初出：『スバル』、一九〇九・明治四十二年二月）を始めとする戯曲や切支丹研究を進めて行った。北原白秋は詩集の『邪宗門』（易風社、一九〇九・明治四十二年三月）で異国趣味を表現した。

次に耽美派の影響を受けて芥川龍之介が切支丹物を描いた。列挙すると次のとおりである。

「煙草と悪魔」（初出：『新思潮』、一九一六・大正五年十一月）、「尾形了齋覚え書」（『新潮』、一九一七・大正六年一月）、「さまよへる猶太人」（『新潮』、一九一七・大正六年六月）、「奉教人の死」（『三田文学』、一九一八・大正七年九月）、「邪宗門」（『大阪毎日新聞』、一九一八・大正七年十月二十三日～十二月十三日）、「るしへる」（『雄弁』、一九一八・大正七年十一月）、「きりしとほろ上人伝」（『新小説』、一九一九・大正八年三月、五月）、「じゆりあの・吉助」（『新小説』、一九一九・大正八年九月）、「黒衣聖母」（『文章俱樂部』、一九二〇・大正九年五月）、「南京の基督」（『中央公論』、一九二〇・大正九年七月）、「神神の微笑」（『新小説』、一九二二・大正十一年一月）、「報恩記」（『中央公論』、一九二二・大正十一年四月）、「おぎん」（『中央公論』、一九二二・大正十一年九月）、「おしの」（『中央公論』、一九二三・大正十二年四月）、「糸女覚え書」（『中央公論』、一九二四・大正十三年一月）、「西方の人」（『改造』、一九二七・

昭和二年八月)、「続西方の人」(「改造」、一九二七・昭和二年九月)。

これだけ多くの作品があるとひとまとめにするのは難しいが、最初の方は耽美派の影響を受けて異国趣味の題材としてあつたことは確かである。そして「殉教者の心理」に関心が移るとともに作品も信仰の問題へと移行していったといえるだろう。

芥川とは反対に、耽美派への反発から長与善郎は切支丹物である『青銅の基督』を描いた。というのも、長与善郎は両親が長崎出身であり、母親は実際に踏絵を踏んだ経験があるという背景があり、耽美派の異国趣味に彩られた長崎や切支丹の姿には違和感を覚えたからであるという。さらに戦後には、『青銅の基督』の続編とも言うべき『切支丹屋敷―ある後日物語』(講談社、一九五六・昭和三十一年)も描いている。

そして戦前になると、一九三五年頃に太宰治「地球図」、坂口安吾「イノチガケーヨワン・シローテの殉教―」(「文学界」、一九四〇・昭和十五年七、九月)と「切支丹物」を数篇書くが、この時期だけで終わっている。

戦後は遠藤周作の評論「神々と神と」を皮切りにして次々と作品が生み出された。列举すると、中山義秀「切支丹屋敷」(「文芸春秋」、一九五一・昭和二十六年五月)、井伏鱒二「かるさん屋敷」(「毎日新聞」、一九五三・昭和二十八年七月十一月)と「安土セミナリオ」(「別冊文芸春秋」、一九五三・昭和二十八年十二月)、小島信夫「殉教」(「新潮」、一九五四・昭和二十九年六月)、劉寒吉「風雪」(「九州文学」、一九五五・昭和三十年三、四月)長与善郎『切支丹屋敷 或る後日物語』(講談社、一九五六・昭和三十一年十一月)、堀田善衛「海鳴りの底から」(「朝日ジャーナル」、一九六〇・昭和三十五年九・十八)翌年九・二四)、遠藤周作『沈黙』(新潮社、一九六六・昭和四十一年三月)、辻邦生「安土往還記」(「展望」、一九六八・昭和四十二年一、二、五月)、城山三郎『望郷のとき 侍・イン・メキシコ』(文芸春秋、一九六八・昭和四十二年十二月)、三浦綾子『細川ガラシャ夫人』(主婦の友社、一九七五・昭和五十年八月)、遠藤周作『鉄の首枷 小西行長伝』(「歴史と人物」、一九七六・昭和五十一年一月号)と『銃と十字架』(「中央公論」、一九七八・

昭和五十三年一月号（十二月号）。

多すぎて、枚挙にいとまがないが、一つだけ指摘するなら「キリシタン文学」を書いている作家の大半がキリスト教作家ではないことである。その意味で遠藤周作のようなカトリック作家は特異な位置にある。

さらに、《参考資料二》を見ると、ジュゼッペ・キャラや小西行長、（ペドロ岐部）など遠藤が初めて取り上げた人物や、フェレイラや大友宗麟など遠藤が取り上げること注目された人物も多い。前述の通り遠藤の「歴史小説」には「切支丹物」「評伝」「歴史群像」という多様なジャンルがあり、題材やジャンルも含めて遠藤は「キリシタン文学」の可能性を拡げているのである。ここにもまた遠藤の「歴史小説」を見直す意味があるだろう。

① 『三田文学』を通じて遠藤周作は柴田錬三郎と親しく交流していたという。柴田錬三郎が新しい主人公の造型に悩んでいる時に、遠藤は黒ミサによって生まれた主人公を勧めたというエピソードがある。この遠藤のアドバースにより生れたのが眠狂四郎であった。

柴田 ありましたよ。で、キミがそそのかしたんだよ、黒ミサで生まれた子にしろって。

遠藤 そうそう。あのころ、僕は黒ミサの本など読みふけていたから、その話をしたことがあります。

柴田 オレもキリシタンというものは読んでたし、バテレンと日本人の合いの子というので、ちやうどうまく結びついちゃったわけだ。

遠藤 それじゃア僕は、日本大衆小説史に残る「眠狂四郎」の助産婦みたいなものですなア。

(初出：「週刊読売」一九七四・昭和四十九年六月二十二日号／『ぐうたら会話集 第2集』角川文庫、一九七八・昭和五十三年十月、所収)

② 佐古純一郎「芥川龍之介の『神神の微笑』と遠藤周作の『沈黙』」(「聖心女子大学論叢」二八、一九六六・昭和四十一年十二月)

《参考資料一》『近代文学における主な「キリシタン文学」作品』

【明治期（一八六八～一九一一）】

〈紀行文〉与謝野鉄幹・木下杢太郎・北原白秋・平野万里・吉井勇「五足の靴」（「東京二六新聞」、一九〇七・明治四十年八月～九月）

〈戯曲〉木下杢太郎「南蛮寺前」（「スバル」、一九〇九・明治四十二年二月）

〈詩集〉北原白秋『邪宗門』（易風社、一九〇九・明治四十二年三月）

【大正期（一九一二～一九二六）】

〈歌舞伎〉岡本綺堂「切支丹屋敷」（一九一三・大正二年三月作）

〈戯曲〉木下杢太郎「絵踏長崎殉教奇談」（「」、一九一三・大正二年）

〈戯曲〉木下杢太郎「天草四郎」（「」、一九一四・大正三年）

芥川龍之介「煙草と悪魔」（「新思潮」、一九一六・大正五年十一月）

芥川龍之介「奉教人の死」（「三田文学」、一九一八・大正七年十一月）

芥川龍之介「神神の微笑」（「新小説」、一九二二・大正十一年一月）

〈戯曲〉松居松葉「聖母（サンタ・マリア）」（一九二三・大正十二年五月、明治座）

長与善郎「青銅の基督 一名南蛮鋳物師の死」（「改造」、一九二三・大正十二年一月）

芥川龍之介「糸女覚え書」（「中央公論」、一九二四・大正十三年一月）

〈戯曲〉木下杢太郎「増補 天草四郎」（「中央公論」、一九一四・大正三年七月）

〈戯曲〉小山内薫「吉利支丹信長」（一九二六・大正十五年）

【昭和戦前期（一九二七～一九四五）】

芥川龍之介「西方の人」（「改造」、一九二七・昭和二年八月）

芥川龍之介「続西方の人」（「改造」、一九二七・昭和二年九月）

〈戯曲〉長田秀雄「沢野忠庵」（一九二七・昭和二年）

〈戯曲〉木下柰太郎「常長」（「女性」、一九二八・昭和三年四月）

太宰治「地球図」（「新潮」、一九三七・昭和十二年十二月）

坂口安吾「イノチガケーヨワン・シローテの殉教」（「文学界」、一九四〇・昭和十五年七、九月）

榊山潤『天草』（河出書房、一九四一・昭和十六年）

【昭和戦後期（一九四五～一九八九）】

〈評論〉遠藤周作「神々と神と」（「四季」、一九四七・昭和二十二年十二月）

中山義秀「切支丹屋敷」（「文芸春秋」、一九五一・昭和二十六年五月）

井伏鱒二「かるさん屋敷」（「毎日新聞」、一九五三・昭和二十八年七、十一月）

井伏鱒二「安土セミナリオ」（「別冊文芸春秋」、一九五三・昭和二十八年十二月）

小島信夫「殉教」（「新潮」、一九五四・昭和二十九年六月）

劉寒吉「風雪」（「九州文学」、一九五五・昭和三十年三、四月）

長与善郎『切支丹屋敷 或る後日物語』（講談社、一九五六・昭和三十一年十一月）

〈舞踏劇〉石川潭月「切支丹道成寺」（一九五九・昭和三十四年六月、第三回公演）

堀田善衛「海鳴りの底から」（「朝日ジャーナル」、一九六〇・昭和三十五年九、十八、翌年九、二四）

遠藤周作『沈黙』（新潮社、一九六六・昭和四十一年三月）

辻邦生「安土往還記」(「展望」、一九六八・昭和四十三年一、二、五月)
城山三郎『望郷のとき 侍・イン・メキシコ』(文芸春秋、一九六八・昭和四十三年十二月)
三浦綾子『細川ガラシャ夫人』(主婦の友社、一九七五・昭和五十年八月)
遠藤周作『鉄の首枷 小西行長伝』(「歴史と人物」、一九七六・昭和五十一年一月号～翌年一月号)
遠藤周作『銃と十字架』(「中央公論」、一九七八・昭和五十三年一月号～十二月号)
遠藤周作『王国への道―山田長政』(「太陽」、一九七九・昭和五十四年七月～翌々年二月号)
遠藤周作『侍』(新潮社、一九八〇・昭和五十五年四月)
遠藤周作『女の一生(一部・キクの場合)』(「朝日新聞」、一九八〇・昭和五十五年十一月一日～一九八一・昭和五十六年七月一日)

【平成期(一九八九～)】

遠藤周作『王の挽歌』(「小説新潮」一九九〇・平成二年二月号～一九九二・平成四年二月号)
遠藤周作『女』(「朝日新聞」一九九四・平成六年一月一日～十月三十日)
井上ひさし『わが友フロイス』(ネスコ、一九九九・平成十一年十二月)
加賀乙彦「ザビエルとその弟子」(「群像」、二〇〇四・平成十六年四月)
飯嶋和一『出星前夜』(小学館、二〇〇八・平成二十年八月)
山本兼一『ジパング島発見記』(集英社、二〇〇九・平成二十一年七月)

《参考資料二》「キリシタン文学」 作品の分類

【フランシスコ・ザビエル】

山本健吉「きりしたん事始」(「群像」、一九五四・昭和二十九年十月)

栗栖ひろみ『小説・フランシスコ・ザビエル』(中央出版、一九九二・平成四年四月)

古川薫『ザビエルの謎』(文藝春秋、一九九四・平成六年二月)

矢代静一『生きた、愛したフランシスコ・ザビエルの冒険』(角川春樹事務所、一九九六・平成八年七月)

甲山堅『ザビエルコード 炎上する大坂城から金瓢箪を持ち出した切支丹 上笠五兵衛』(ブックランド社、二〇〇四・平成十六年四月)

加賀乙彦『ザビエルとその弟子』(講談社、二〇〇四・平成十六年七月)

山本兼一『ジパング島発見記』(集英社、二〇〇九・平成二十一年七月)

【ルイス・フロイス】

〈戯曲〉小山内薫「切支丹信長」(一九二六・大正十五年一月)

辻邦生「安土往還記」(「展望」、一九六八・昭和四十三年一、二、五月)

井上ひさし『わが友フロイス』(ネスコ、一九九九・平成十一年十二月)

山本兼一『ジパング島発見記』(集英社、二〇〇九・平成二十一年七月)

【大村純忠】

橘正武『大村純忠 上・下』(葦書房、一九九九・平成十一年十月)

杉山三袖『高山右近 細川三斎忠興の追憶』（日本文学館、二〇〇五・平成十七年二月）
川道岩見『長崎燃ゆ 大村純忠』（叢文社、二〇〇一・平成十三年五月）

【高山右近】

吉川英治『高山右近』（読売新聞社、一九四九・昭和二十四年六月）

〈児童文学〉神戸淳吉『少年少女伝記読みもの 高山右近』（さ・え・ら書房、一九八二・昭和五十七年六月）

長部日出雄『まだ見ぬ故郷 高山右近の生涯 上・下』（毎日新聞社、一九九一・平成三年八月）

鷺山千恵『高山右近 上・下 あるキリシタン大名の生涯』（同朋舎出版、一九九二・平成四年四月）

加賀乙彦『高山右近』（講談社、一九九九・平成十一年九月）

杉山三袖『高山右近 細川三斎忠興の追憶』（日本文学館、二〇〇五・平成十七年二月）

【細川ガラシャ】

〈戯曲〉藤沢古雪『がらしあ 史劇』（大日本統計協会、一九〇七年・明治四〇年）

芥川龍之介「糸女覚え書」（「中央公論」、一九二四・大正十三年一月）

〈戯曲〉H・ホイヴェルス「細川ガラシア夫人」（中央出版社、一九三九・昭和十四年九月）

吉川英治『細川ガラシャ夫人』（読売新聞社、一九四九・昭和二十四年六月）

森田草平「細川ガラシャ夫人」（「日本評論」、一九四九・昭和二十四年一〇月）

加藤恭亮『永遠への序曲―ガラシア日記―』（創文社、一九五九・昭和三十四年）

〈戯曲〉田中澄江『がらしあ・細川夫人』（「新劇」、一九五九・昭和三十四年三月号）

- 司馬遼太郎「胡桃に酒」（「小説新潮」一九六八・昭和四十三年十月号）
- 永井路子『朱なる十字架』（文芸春秋、一九七一・昭和四十六年五月）
- 三浦綾子『細川ガラシヤ夫人』（主婦の友社、一九七五・昭和五十年八月）
- 若城希伊子『ガラシヤにつづく人々』（女子パウロ会、一九七八・昭和五十三年五月）
- 遠藤周作「日本の聖女」（「新潮」、一九八〇・昭和五十五年二月号）
- 生方たつゑ『細川ガラシヤ』（淡交社、一九八一・昭和五十六年六月）
- 藤井まさみ『天に舞う蝶 細川ガラシヤ夫人』（教学研究社、一九八三・昭和五十八年十二月）
- 家村耕『明智の娘ガラシア』（文藝社、二〇〇六・平成十八年十月）
- 宮木あや子『ガラシヤ』（新潮社、二〇一〇・平成二十二年十一月）

【蒲生氏郷】

- 幸田露伴「蒲生氏郷」（「改造」、一九二五・大正十一年一月）
- 童門冬二『近江商人魂―蒲生氏郷と西野仁右衛門』（学陽書房、一九八七・昭和六十二年）
- 小野孝二『火の兜蒲生氏郷』（叢文社、一九八六・昭和六十一年六月）
- 佐竹申伍『蒲生氏郷―信長の愛弟子とよばれた名将』（青樹社、一九八七・昭和六十二年五月）
- 大路和子『蒲生氏郷の妻』（成美堂出版、一九九七・平成九年）
- 童門冬二『蒲生氏郷』（人物文庫、二〇〇八・平成二十年）
- 安部龍太郎『レオン氏郷』（PHP研究所、二〇一二・平成二十四年九月）

【黒田官兵衛】

- 長谷川伸「黒田如水軒」（『講談倶楽部』、一九三〇・昭和五年十二月）
- 武者小路実篤「黒田如水」（『キング』、一九三五・昭和十年五月）
- 菊池寛「黒田如水」（『日本武将譚』黎明社、一九三六・昭和十一年一月、収録）
- 鷺尾雨工『黒田如水』（アカツキ、一九四〇・昭和十五年九月）
- 吉川英治『黒田如水』（朝日新聞社、一九四三・昭和十八年十一月）
- 坂口安吾『二流の人』（九州書房、一九四七・昭和二十二年一月）
- 松本清張「軍師の境遇」（『高校コース』一九五六・昭和三十一年四月～一九五七・昭和三十二年三月）
- 池波正太郎「智謀の人」（『武士の紋章』芸文社、一九六八・昭和四十三年十一月 収録）
- 司馬遼太郎『播磨灘物語』（講談社、一九七五・昭和五十年六月～八月）
- 童門冬二『小説 黒田如水』（富士見書房、一九九四・平成六年六月）
- 高橋和島『新史黒田官兵衛』（PHP研究所、一九九七・平成九年六月）
- 岳宏一郎『乱世が好き』（毎日新聞社、一九九七年十月 ※講談社文庫収録時に『軍師官兵衛』、光文社文庫収録時に『群雲、賤ヶ岳へ』と改題）
- 安部龍太郎『風の如く 水の如く』（集英社、一九九九・平成十一年三月）
- 葉室麟『風渡る』（講談社、二〇〇八・平成二十年六月）
- 葉室麟『風の王国 官兵衛異聞』（講談社、二〇〇九・平成二十一年九月）
- 火坂雅志『軍師の門』（角川学芸出版、二〇〇八・平成二十年十一月）
- 上田秀人『日輪にあらず 軍師黒田官兵衛』（徳間書店、二〇一二・平成二十四年九月 ※徳間文庫刊の『月の武将 黒田官兵衛』『鏡の武将 黒田官兵衛』を改稿）

高橋直樹『軍師黒田官兵衛』（潮出版社、二〇一三・平成二十五年十一月）

【小西行長】

遠藤周作『鉄の首枷 小西行長伝』（「歴史と人物」、一九七六・昭和五十一年一月号〜翌年一月号）

遠藤周作『宿敵（上・下）』（角川書店、一九八五・昭和六十年十二月）

白石一郎『海将の海司令官・小西行長』（新潮社、一九九三・平成五年七月）

金聲翰『秀吉朝鮮の乱 上・下』（光文社、一九九四・平成六年四月）

麻倉一矢『小西行長』（光文社文庫、一九九七・平成九年四月）

江宮隆之『小西行長 後悔しない生き方』（PHP文庫、一九九七・平成九年七月）

荒山徹『高麗秘帖…朝鮮出兵異聞…李舜臣將軍を暗殺せよ』（祥伝社、一九九九・平成十一年七月）

荒山徹『魔風海峡…死闘！真田忍法団対高麗七忍衆』（祥伝社、二〇〇〇・平成十二年十二月）

園田信行『アゴスチノ小西撰津守行長回想帖 十六世紀の自由人』（中央公論、二〇〇三・平成十五年七月）

木村紀八郎『小西行長伝』（鳥影社、二〇〇五・平成十七年十一月）

森本繁『小西行長』（学研M文庫、二〇一〇・平成二十二年四月）

永田ガラ『秀吉の交渉人・キリシタン大名小西行長』（メディアワークス文庫、二〇一一・平成二十三年八月）

【ペトロ・カスイ岐部】

〈戯曲〉『メナム河の日本人』（新潮社、一九七三・昭和四十八年九月）

遠藤周作『銃と十字架』（「中央公論」、一九七八・昭和五十二年一月号～十二月号）
遠藤周作『王国への道―山田長政』（「太陽」、一九七九・昭和五十四年七月～翌々年二月号）
松永伍一『旅びと ペトロ岐部の一生』（講談社、一九八四・昭和五十九年十一月）

【大友宗麟】

白石一郎『火炎城』（講談社、一九七四・昭和四十九年）
赤瀬川隼『王国燃ゆ 小説 大友宗麟』（講談社、一九八七・昭和六十二年八月）
御手洗一而『大友宗麟 二階崩れの巻』（新人物往来社、一九八九・平成元年八月）
高山由紀子『国東物語 ドン・フランシスコ・大友宗麟』（八重岳書房、一九八九・平成元年九月）
風早恵介『大友宗麟』（青樹社、一九八九・平成元年十月）
遠藤周作『王の挽歌』（「小説新潮」一九九〇・平成二年二月号～一九九二・平成四年二月号）
御手洗一而『大友宗麟 戦国求道の巻』（新人物往来社、一九九〇・平成二年九月）
御手洗一而『大友宗麟 毛利合戦の巻』（新人物往来社、一九九三・平成五年一月）
高山由紀子『ドン・フランシスコ・大友宗麟』（八重岳書房、一九九四・平成二年五月）
小石房子『豊後の王妃イザベル.. キリシタン大名大友宗麟の妻』（作品社、一九九五・平成七年三月）
御手洗一而『大友宗麟 王道幻想の巻』（新人物往来社、一九九五・平成七年三月）
高橋直樹『大友二階崩れ』（文芸春秋、一九九八・平成十年八月）
水上あや『花の反逆大友宗麟の妻』（叢文社、二〇〇〇・平成十二年一月）
櫻田啓『幻のジパング.. 大友宗麟の生涯』（文芸社、二〇〇五・平成十七年十二月）

【南蛮寺】

- 〈戯曲〉木下杢太郎「南蛮寺前」(「スバル」、一九〇九・明治四十二年二月)
芥川龍之介「神神の微笑」(「新小説」、一九二二・大正十一年一月)
辻邦生「安土往還記」(「展望」、一黒く八・昭和四十三年一、二、五月)

【天正遣欧使節】

- 増田五良『天正遣欧使節異聞…狂言』(五典書院、一九五六・昭和三十一年六月)
遠藤周作「学生」(「新潮」、一九六九・昭和四十四年十月号)
〈児童文学〉谷真介『ローマへいった少年使節』(女子パウロ会、一九八二・昭和五十七年二月)
〈児童文学〉福田清人『天正少年使節』(講談社、一九八三・昭和五十八年二月)
青山敦夫『千々石ミゲル 天正遣欧使節』(朝文社、二〇〇七・平成十九年十一月)
村木嵐『マルガリータ』(文藝春秋、二〇一〇・平成二十二年六月)

【慶長遣欧使節】

- 〈戯曲〉木下杢太郎「常長」(「女性」、一九二八・昭和三年四月)
今東光『はげくら』(中央公論社、一九六一・昭和三十六年四月)
城山三郎『望郷のとき 侍・イン・メキシコ』(文芸春秋、一九六八・昭和四十三年十二月)
遠藤周作『侍』(新潮社、一九八〇・昭和五十五年四月)
長部日出雄『密使 支倉常長』(読売新聞社、一九八五・昭和六十年五月)
高橋睦郎『遠い帆 オペラ支倉常長』(小沢書店、一九九五・平成七年二月)

【島原の乱】

〈紀行文〉与謝野鉄幹・木下杢太郎・北原白秋・平野万里・吉井勇「五足の靴」(「東京二六新聞」、一九〇七・明治四十年八〜九月)

〈戯曲〉木下杢太郎「増補 天草四郎」(「中央公論」、一九一四・大正三年七月)

榊山潤『天草』(河出書房、一九四一・昭和十六年)

坂口安吾「わが血を追う人々」(「近代文学」、一九四六・昭和二十一年一月)

榊山潤「島原の乱」(一九五一・昭和二十六年)

劉寒吉『天草四郎』(宝文館、一九五八・昭和三十三年三月)

堀田善衛「海鳴りの底から」(「朝日ジャーナル」、一九六〇・昭和三十五年九・十八〜翌年九・二四)

榊山潤「日本のユダ」(一九六一・昭和三十六年)

飯嶋和一『出星前夜』(小学館、二〇〇八・平成二十年八月)

【踏絵】

〈戯曲〉木下杢太郎「絵踏長崎殉教奇談」(一九一三・大正二年七月)

長与善郎「青銅の基督 一名南蛮鋳物師の死」(「改造」、一九二三・大正十二年一月)

遠藤周作『満潮の午後』(「潮」、一九六五・昭和四十年一〜十二月号)

遠藤周作『沈黙』(新潮社、一九六六・昭和四十一年三月)

【クリストヴァン・フェレイラ／沢野忠庵】

長与善郎「青銅の基督 一名南蛮鋳物師の死」(「改造」、一九二三・大正十二年一月)

〈戯曲〉長田秀雄「沢野忠庵」(一九二七・昭和二年十一月)

遠藤周作『沈黙』(新潮社、一九六六・昭和四十一年三月)

【切支丹屋敷／シドッチ】

〈歌舞伎〉岡本綺堂「切支丹屋敷」(一九一三・大正二年三月作／『綺堂脚本集第一卷』春陽堂、大正十三年五月、所収)

田中貢太郎「異説切支丹屋敷」(玄文社、一九一八・大正七年)

高木卓「獄門片影」(「意識」、一九三六・昭和十一年一月)

太宰治「地球図」(「新潮」、一九三七・昭和十二年十二月)

坂口安吾「イノチガケーヨワン・シローテの殉教者」(「文学界」、一九四〇・昭和十五年七、九月)

〈戯曲〉クロドヴェオ・タシナリ『殉教者シドッチ』(ドン・ボスコ社、一九四一・昭和十六年八月)

中山義秀「切支丹屋敷」(「文芸春秋」、一九五一・昭和二十六年五月)

長与善郎『切支丹屋敷 或る後日物語』(講談社、一九五六・昭和三十一年十一月)

柴田錬三郎「切支丹坂」／『眠狂四郎無頼控第二卷』(新潮社、昭和三十二年一月)

遠藤周作『沈黙』(新潮社、一九六六・昭和四十一年三月)

遠藤周作「召使たち」(「文芸春秋」、一九七二・昭和四十七年一月号)

〈児童文学〉谷真介『江戸のキリシタン屋敷』(女子パウロ会、一九八四・昭和五十九年)

【浦上四番崩れ】

劉寒吉「復活」(「自由」、一九四六・昭和二十一年五月)

劉寒吉「風雪」(九州文学、一九五五・昭和三十年三〜四月)

遠藤周作「最後の殉教者」(別冊文芸春秋、一九五九・昭和三十四年二月)

遠藤周作「その前日」(新潮、一九六三・昭和三十八年一月号)

〈児童文学〉今西佑行『浦上の旅人たち』(実業之日本社、一九六九・昭和四十四年六月)

遠藤周作『女の一生(一部・キクの場合)』(朝日新聞、一九八〇・昭和五十五年十一月一日〜一九八一・昭和五十六年七月一日)

【その他】

小島信夫「殉教」(新潮、一九五四・昭和二十九年六月)

遠藤寛子『きりしたん算用記』(PHP研究所、一九七六・昭和五十一年)

辻邦生『天草の雅歌』(新潮社、一九七一・昭和四十六年一月)

〈児童文学〉福田清人『長崎キリシタン物語』(講談社、一九七八・昭和五十三年七月)

森禮子『五島崩れ』(主婦の友社、一九八〇・昭和五十五年三月)

佐藤三治郎『十字の石』(無明舎出版、一九九一・平成三年九月) 秋田県南部に伝わるキリシタン伝説

中井勉『隠れキリシタン佐々木小次郎』(叢文社、二〇〇三・平成十五年八月)

藤井邦夫『乾蔵人 隠密秘録(三) 隠れ切支丹』(光文社文庫、二〇一三・平成二十五年六月)

初出一覧

序論

遠藤周作の「歴史小説」の一側面／松田毅一との関連をめぐって／
（初出：『遠藤周作研究』第四号、二〇一一・平成二十三年九月）

第一部

「歴史小説」への序章―「記録」としての「手記」

第一章

遠藤周作初期作品のエクリチュール―「手記」をめぐって―

（初出：『国文論叢』第四十七号、二〇一三・平成二十五年九月）

第二章

遠藤周作論―〈劇〉を生成するトポス―

（初出：『昭和文学研究』第七十二集、二〇一六・平成二十八年三月）

第三章

「黄色い人」論―逆説的な「恩寵の世界」の提示―

（初出：『作品論 遠藤周作』双文社出版、二〇〇〇・平成十二年一月）

第四章

『海と毒薬』論―「トポス」をめぐる「手記」―

（初出：京都外国語大学日本語学科『無差』、二〇一六・平成二十八年三月）

第二部

「歴史小説」―「切支丹物」の世界―

第一章

「弱者」の形象―二つの「弱者」の系譜―（書き下ろし）

第二章

遠藤文学における〈ペドロ岐部〉（一）―『留学』『沈黙』を中心として―

第三章 (初出…『遠藤周作研究』第八号、二〇一五・平成二十七年九月)
『沈黙』論―引用の織物―(書き下ろし)

第三部 「歴史小説」―「評伝」の世界―

第一章 遠藤文学における「ペドロ岐部」(二)―「メナム河の日本人」から『王国への道』まで―

(初出…『京都外国語大学研究論叢』八十五号、二〇一五・平成二十七年七月)

第二章 『侍』論―フィクションの内実―

(初出…『キリスト教文藝』二十四号、二〇〇八・平成二十年七月)

第三章 『侍』論―ベラスコの視点を中心として―

(初出…『キリスト教文学研究』第二十四号、二〇〇七・平成十九年五月)

第四部 「歴史小説」―「歴史群像」の世界―

第一章 『女の一生』論―多層的な二元論の展開―(書き下ろし)

第二章 「人間」を追求する歴史小説―『赤ひげ診療譚』と『王の挽歌』―

(初出…『キリスト教文藝』三十一号、二〇一五・平成二十七年七月)

第三章 『王の挽歌』論―キリシタン文学の可能性―

(初出…全国大学国語国文学会『語学・文学』第二〇二号、二〇一二・平成二十四年三月)

第四章 遠藤文学における「ペドロ岐部」(三)―『女』を中心として―(書き下ろし)

結論

主要参考文献一覧

【歴史小説】

- 岩上順一『歴史文学論』（中央公論社、一九四二・昭和十七年三月）
- 亀井勝一郎編『歴史小説の旅』（人物往来社、一九六二・昭和三十七年）
- 亀井勝一郎編『歴史小説の旅 続』（人物往来社、一九六三・昭和三十八年）
- 水谷昭夫『近代日本文芸史の構成』（桜楓社、一九六八・昭和四十三年）
- 井上靖『歴史小説の周圀』（講談社、一九七三・昭和四十八年）
- 大岡昇平『歴史小説の問題』（文芸春秋、一九七四・昭和四十九年）
- 尾崎秀樹『歴史文学論 変革期の視座』（勁草書房、一九七六・昭和五十一年）
- 志村有弘『近代作家と古典 歴史文学の展開』（笠間書院、一九七七・昭和五十二年）
- 菊池昌典『歴史小説とは何か』（筑摩書房、一九七九・昭和五十四年十月）
- 尾崎秀樹・菊池昌典『歴史文学読本 人間学としての歴史学』（平凡社、一九八〇・昭和五十五年三月）
- 勝倉寿一『芥川龍之介の歴史小説』（教育出版センター、一九八三・昭和五十八年六月）
- 尾崎秀樹監修『歴史小説・時代小説総解説』（自由国民社、一九八四・昭和五十九年）
- 尾崎秀樹『歴史文学夜話 鷗外からの180篇を読む』（講談社、一九九〇・平成二年七月）
- 尾崎秀樹監修『歴史・時代小説事典』（実業之日本社、二〇〇〇・平成十二年九月）
- 宮坂覺編『芥川龍之介と切支丹物 多声・交差・越境』（翰林書房、二〇一四・平成二十六年四月）

【切支丹関係】

- 山本秀煌『日本基督教史 上巻・下巻』（洛陽堂、一九一八・大正七年）
- 山本秀煌『西教史談』（洛陽堂、一九一九・大正八年）
- 山本秀煌『江戸切支丹屋敷の史蹟』（イデア書院、一九二四・大正十三年六月）
- 姉崎正治『切支丹宗門の迫害と潜伏』（同文館、一九二五・大正十四年）
- 松崎実『考注切支丹鮮血遺書』（改造社、一九二六・昭和元年二月）
- 姉崎正治『切支丹禁制の終末』（同文館、一九二六昭和元年）
- 姉崎正治『切支丹伝道の興廃』（同文館、一九三〇・昭和五年六月）
- シュタイシエン『切支丹大名記』（大岡山書店、一九三〇・昭和五年十一月）
- レオン・パジェス『日本切支丹宗門史 上・中・下』（岩波書店、一九三八・昭和十三年）
- 海老沢有道『切支丹典籍叢考』（拓文堂、一九四三・昭和十八年五月）
- 浦川和三郎『浦上切支丹史』（全国書房、一九四三・昭和十八年九月）
- 岡田章雄『キリシタン・バテレン』（至文堂、一九五五・昭和三十年）
- 山本健吉『きりしたん事始』（芸術社、一九五六・昭和三十一年）
- 長与善郎『切支丹屋敷 ある後日物語』（講談社、一九五六・昭和三十一年十一月）
- 古野清人『隠れキリシタン 日本歴史新書』（至文堂、一九五九・昭和三十四年）
- 村上直次郎監修・編集『切支丹風土記』五冊（宝文館、一九六〇・昭和三十五年）
- 土井忠生『切支丹文献考』（三省堂、一九六三・昭和三十八年）
- 松田毅一『日葡交渉史』（教文館、一九六三・昭和三十八年）
- H・チースリック『キリシタン人物の研究―邦人司祭の巻―』（吉川弘文館、一九六三・昭和三十八年十二月）

月)

- 松田毅一『南蛮史料の発見―よみがえる信長時代』(中央公論社、一九六四・昭和三十九年)
- 松田毅一『天正少年使節』(角川書店、一九六五・昭和四十年)
- 海老沢有道『日本キリシタン史』(塙書房、一九六六・昭和四十一年)
- 遠藤周作・三浦朱門共著『キリシタン時代の知識人―背教と殉教』(日本経済新聞社、一九六七・昭和四十二年)
- 片岡弥吉『かくれキリシタン―歴史と民俗』(NHKブックス、一九六七・昭和四十二年六月)
- 松田毅一『慶長使節―日本人初の太平洋横断』(新人物往来社、一九六九・昭和四十四年)
- 窪田明治『切支丹屋敷物語』(雄山閣、一九七〇・昭和四十五年)
- H・チースリック『世界を歩いた切支丹』(春秋社、一九七一・昭和四十六年六月)
- 外山幹夫『人物叢書 大友宗麟』(吉川弘文館、一九七五・昭和四十年)
- 高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』(岩波書店、一九七七・昭和五十二年九月)
- 片岡弥吉『日本キリシタン殉教史』(時事通信社、一九七九・昭和五十四年十二月)
- 皆川達夫『対談と随想 オラショ紀行』(日本基督教団出版局、一九八一・昭和五十六年)
- 松田毅一『キリシタン時代を歩く』(中央公論社、一九八一・昭和五十六年七月)
- 山田野理夫『東京きりしたん巡礼』(東京新聞出版局、一九八二・昭和五十七年三月)
- 古野清人『隠れキリシタン』(至文堂、一九八四・昭和五十九年)
- 結城了悟『キリシタンになった大名』(キリシタン文化研究会、一九八六・昭和六十一年七月)
- 岡本良知『キリシタンの時代 その文化と貿易』(八木書店、一九八七・昭和六十二年五月)
- 五野井隆史『日本キリスト教史』(吉川弘文館、一九九〇・平成二年)

- 海老沢有道『キリシタン南蛮文学入門』（教文館、一九九一・平成三年）
- 高瀬弘一郎『キリシタンの世紀 ザビエル渡日から「鎖国」まで』（岩波書店、一九九三・平成五年六月）
- 大泉光一『慶長遣欧使節の研究』（文真堂、一九九四・平成六年）
- 高瀬弘一郎『キリシタン時代対外関係の研究』（吉川弘文館、一九九四・平成六年）
- 宮崎賢太郎『カクレキリシタンの信仰世界』（東京大学出版会、一九九七・平成九年十一月）
- 米井力也『キリシタンの文学 殉教をうながす声』（平凡社、一九九八・平成十年九月）
- H・チースリク監修『日本史小百科 キリシタン』（東京堂出版、一九九九・平成十一年九月）
- 宮崎賢太郎『カクレキリシタン オラショ―魂の通奏低音』（長崎新聞新書、二〇〇一・平成十三年十月）
- H・チースリク『キリシタン時代の日本人司祭』（教文館、二〇〇四・平成十六年十二月）
- 神田千里『島原の乱』（中公新書、二〇〇五・平成十七年十月）
- 森禮子『キリシタン史の謎を歩く』（教文館、二〇〇五・平成十七年十一月）
- 尾原悟『きりしたんの殉教と潜伏』（教文館、二〇〇六・平成十八年十二月）
- 山本博文『殉教 日本人は何を信仰したか』（光文社新書、二〇〇九・平成二十一年十一月）
- 大泉光一『キリシタン将軍 伊達正宗』（柏書房、二〇一三・平成二十五年十月）
- 宮崎賢太郎『カクレキリシタンの実像 日本人のキリスト教理解と受容』（吉川弘文館、二〇一四・平成二十六年二月）
- 大橋幸泰『潜伏キリシタン 江戸時代の禁教政策と民衆』（講談社、二〇一四・平成二十六年五月）
- 安野眞幸『教会領長崎 イエズス会と日本』（講談社、二〇一四・平成二十六年六月）
- 坂東省次『日本とスペイン文化交流の歴史 南蛮・キリシタン時代から現代まで』（原書房、二〇一五・平成二十七年五月）

【遠藤周作】

- 武田友寿『遠藤周作の世界』（中央出版社、一九六九・昭和四十四年十月）
- 『別冊新評 遠藤周作の世界』（新評社、一九七三・昭和四十八年五月）
- 武田友寿『遠藤周作の文学』（聖文社、一九七五・昭和五十年九月）
- 『日本人を語る―遠藤周作対話集―』（小学館、一九七四・昭和四十九年十二月）
- 『続日本人を語る―遠藤周作対話集―』（小学館、一九七五・昭和五十年七月）
- 佐古純一郎『椎名麟三と遠藤周作』（日本基督教団出版局、一九七七・昭和五十二年二月）
- 上総英郎『十字架を背負ったピエロー―狐狸庵先生と遠藤周作―』（主婦の友社、一九八〇・昭和五十五年十月）
- 佐藤泰正編『鑑賞日本現代文学二五 椎名麟三・遠藤周作』（角川書店、一九八三・昭和五十八年二月）
- 武田友寿『「沈黙」以後 遠藤周作の世界』（女子パウロ会、一九八五・昭和六十年六月）
- 笠井秋生『遠藤周作論』（双文社出版、一九八七・昭和六十二年十一月）
- 上総英郎『遠藤周作論』（春秋社、一九八七・昭和六十二年十一月）
- 『遠藤周作と語る 日本人とキリスト教』（女子パウロ会、一九八八・昭和六十三年二月）
- 広石廉二『遠藤周作のすべて』（朝文社、一九九一・平成三年四月）
- 広石廉二『遠藤周作の縦糸』（朝文社、一九九一・平成三年十月）
- 遠藤周作・佐藤泰正『人生の同伴者』（春秋社、一九九一・平成三年十月）
- 川島秀一『遠藤周作 愛の同伴者』（和泉書院、一九九三・平成五年六月）
- 三木サニア『遠藤・辻の作品世界 愛と信と美のドラマ』（双文社出版、一九九三・平成五年十一月）
- 佐藤泰正『佐藤泰正著作集7 遠藤周作と椎名麟三』（翰林書房、一九九四・平成六年十月）

- 『「遠藤周作」の Shusaku Endo』（春秋社、一九九四・平成六年十一月）
- 山形和美編『遠藤周作―その文学世界』（国研出版、一九九七・平成九年十二月）
- 川島秀一『遠藤周作〈和解〉の物語』（和泉書院、二〇〇〇・平成十二年九月）
- 笠井秋生・玉置邦雄編『作品論 遠藤周作』（双文社出版、二〇〇一・平成十三年一月）
- 佐藤泰正編『遠藤周作を読む』（笠間書院、二〇〇四・平成十六年五月）
- 山根道公『遠藤周作 その人生と「沈黙」の真実』（朝文社、二〇〇五・平成十七年三月）
- 上総英郎『遠藤周作へのワールド・トリップ』（パピルスあい、二〇〇五・平成十七年四月）
- 加藤宗哉『遠藤周作』（慶應義塾大学出版会、二〇〇六・平成十八年十月）
- 兼子盾夫『遠藤周作の世界 シンボルとメタファー』（教文館、二〇〇七・平成十九年八月）
- 濱崎史朗『遠藤周作私論』（青山社、二〇〇七・平成十九年九月）
- 柘植光彦編『遠藤周作 挑発する作家』（至文堂、二〇〇八・平成二十年十月）
- 辛承姫『遠藤周作論 母なるイエス』（専修大学出版会、二〇〇九・平成二十一年二月）
- 山根道公『遠藤周作「深い河」を読む―マザー・テレサ、宮沢賢治と響きあう世界』（朝文社、二〇一〇・平成二十二年九月）
- 小嶋洋輔『遠藤周作論―「救い」の位置―』（双文社出版、二〇一二・平成二十四年十二月）
- 久保田暁一『遠藤周作の文学 その視点と道程』（だるま新書、二〇一三・平成二十五年五月）
- 今井真理『それでも神はいる 遠藤周作と悪』（慶應義塾大学出版会、二〇一五・平成二十七年八月）